

千葉大学
アカデミック・リンク・センター
評価委員会報告書



2014 年 2 月
Academic Link

はじめに

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、2012年度に引き続き、今年度も評価を実施した。それは当センターの活動がプロジェクトをベースとしたものであり、年度ごとにその活動の進捗についての確認作業を行い、必要な修正を行い、そして今後の活動の方向性を明確にしていく必要があるからである。また、センターは、学習におけるコンテンツの利用を重視したアクティブ・ラーニングのための新しい学習環境として日本では類を見ない先駆的な概念フレームワークの下で活動が続けてきたわけであるが、いわゆるラーニングコモンズ設置の動きが日本国内の各大学に広がりつつある状況で、常に実験的な精神を維持しつつ新しいことにチャレンジしてきたセンターの活動を可能な限り広い視野で評価することは、センターの独自性と将来の方向性を考える上で極めて重要であると考えている。

昨年度は最初の評価ということもあり、特に評価の指標を決めることをせずに、センターの活動状況を説明した上で、評価委員会の先生方から様々なご助言をいただく形をとった。今年度は、センターの活動も3年目に入ってきたことから、一般的な評価指標を設定してセンター教職員の協議によって自己評価をした上で委員の先生方の評価をあおぐ形をとった。センターの現状を踏まえると一部の指標が必ずしも妥当ではないといったご意見をいただいたが、これはセンターが未だ発展の途上にあることの証左であろう。また、一部には厳しい評点もいただいたが、「十分できているが、これで満足してはいけない」という趣旨での辛い採点であるとの説明をいただいた。評価委員を引き続きお引き受けいただいている鈴木典比古先生（国際教養大学長）、田村俊作先生（慶應義塾大学メディアセンター所長、文学部教授）、山田礼子先生（同志社大学高等教育・学生教育センター長、学習支援・教育開発センター所長、社会学部教授）、山内祐平先生（東京大学情報学環准教授）におかれては、ご多忙であるにもかかわらず多大な時間を評価のために割いてくださり、それぞれのご経験、ご見識をもとに有益なご助言をくださるとともに、我々を叱咤激励してくださった。記して改めてお礼を申し上げる。

センターの活動について、引き続き学内外から注目していただいている。大変に光栄なことである。特に平成25年11月に文部科学省によって発表された「国立大学改革プラン」において、人材育成強化の事例として取り上げられたことは大きな励みとなった。これもまた、決して立ち止まらず、前進し続けよとの声と認識している。

平成26年2月

千葉大学 アカデミック・リンク・センター長
竹内 比呂也

千葉大学アカデミック・リンク・センター評価委員会報告書目次

はじめに

目次

第1部 評価委員会報告

- 1. 開催日時・次第..... 1
- 2. 委員名簿
- 3. 議事要旨
- 4. 総評
- 5. 質疑応答要旨
- 6. 評価結果

第2部 評価委員会資料

- 1. アカデミック・リンクの概要 17
 - 1. 1 はじめに
 - 1. 2 アカデミック・リンクの三機能
 - 1. 3 空間設計の基本的考え方
 - 1. 4 コンテンツ提供の基本的考え方
 - 1. 5 人的支援の基本的考え方
 - 1. 6 組織
 - 1. 7 予算
 - 1. 8 広報
 - 1. 9 評価
- 2. プロジェクトの進捗状況
 - 2. 1 レガシーコンテンツ再生プロジェクト26
 - 2. 1. 1 児童文学事典の電子的再生
 - 2. 1. 2 授業資料ナビゲータ掲載資料の電子化
 - 2. 1. 3 次世代授業資料ナビシステムの開発と運用
 - 2. 2 オンラインクラスルームプロジェクト33
 - 2. 2. 1 授業および授業紹介動画の収録および配信
 - 2. 2. 2 授業以外の動画の収録および配信
 - 2. 2. 3 ALSA-TT の運営
 - 2. 2. 4 現状と今後の課題
 - 2. 3 デジタルコースパックプロジェクト40
 - 2. 3. 1 デジタルコースパックのための著作権処理
 - 2. 3. 2 物理演習問題集の電子化
 - 2. 3. 3 デジタルコースパックの POD による提供の実験的試行

2. 4	「参加する学習」プロジェクト	49
2. 4. 1	学習支援担当スチューデント・アシスタント (ALSA-LS)	
2. 4. 2	分野別学習相談の実施	
2. 4. 3	改善のための継続的活動	
2. 4. 4	セミナー型学習支援企画の実施と改善	
2. 4. 5	今後の課題	
2. 5	「教育力」「学習力」向上プロジェクト	57
2. 5. 1	アカデミック・リンク・セミナー	
2. 5. 2	「1210 あかりんアワー」	
2. 5. 3	ALSA-GS	
2. 5. 4	全学および各部局の FD の e ラーニング化の検討状況	
2. 5. 5	図書館ポッドキャストの YouTube への移行	
2. 6	情報利用行動定点観測プロジェクト	66
2. 6. 1	2012 年度 千葉大学学習状況・情報利用環境調査	
2. 6. 2	赤外線センサーによる館内動態調査	
2. 6. 3	アイ・カメラを用いた情報探索行動の推定調査	
2. 6. 4	画像検索を用いた図書館内での自己位置推定調査	
2. 6. 5	学生に対するフォーカス・グループ・インタビュー調査	
2. 6. 6	定点カメラ映像を用いたアクティブ・ラーニング・スペース利用状況調査	
2. 6. 7	学生撮影写真および個人インタビューの併用によるフォトボイス調査	
2. 6. 8	ブックトラックを用いた図書利用状況調査	
2. 6. 9	ID を共通記号化したうえでの各種調査の結果と学生成績情報の連動分析	
2. 7	「新しい図書館員」プロジェクト	84
2. 7. 1	情報リテラシースキル養成活動	
2. 7. 2	アクティブ・ラーニング・スペースにおける学習支援活動	
2. 7. 3	分館におけるアクティブ・ラーニング支援環境の整備	
2. 7. 4	ALSA-GS によるアカデミック・リンク及び附属図書館の各種業務支援	
2. 7. 5	今後の課題	
2. 8	補遺	96
3.	評価と将来計画	97
4.	参考資料	
4. 1	組織	
(1)	アカデミック・リンク・センター規程	100
(2)	アカデミック・リンク・センター教員会議規程	

(3) アカデミック・リンク・センター評価委員会規程	
(4) アカデミック・リンク・センター教員選考内規	
(5) アカデミック・リンク・センター兼務教員選考申し合わせ	
(6) 教員会議, 評価委員会名簿	
(7) アカデミック・リンク・スチューデント・アシスタント実施要項	
(8) アカデミック・リンク・スチューデント・アシスタントの選考基準及び方法	
(9) アカデミック・リンク・センター組織図	
4. 2 プロジェクトの活動計画	
(10) 活動年次計画 (roadmap)	114
4. 3 諸統計	
(11) 本館入館者数	123
(12) 本館貸出冊数	
(13) 館内貸出機器, 施設利用状況	
(14) I 棟教育支援施設利用状況 (コンテンツスタジオ・セミナールーム・プレゼンテーションスペース, 展示スペース)	
(15) 授業資料ナビゲータ作成状況	
(16) アカデミック・リンク・セミナー実施状況	
(17) 1210 あかりんアワー実施状況	
(18) 分野別学習相談実施記録	
(19) ガイダンス実施状況	
(20) レファレンス実施状況	
(21) 研究業績	
(22) アカデミック・リンク見学記録	
5. 追加資料	
(1) 授業資料ナビゲータ資料の蔵書回転率	
(2) Moodle 作成率	
(3) オフィスアワー@アカデミックリンク 担当者アンケート	

第 1 部 評価委員会報告

1. 開催日時・次第

日時 平成25年9月5日(木) 13:30～

場所 アカデミック・リンク・センターI棟3階セミナールーム

議事次第

- ① 開会(13:30～)
- ② 委員長及び副委員長選出
- ③ アカデミック・リンク・センター報告(13:45～14:40)
- ④ 質疑応答・意見交換(第1部:14:40～15:30)
- ⑤ 委員による評価についての意見交換(15:45～16:30)
- ⑥ 質疑応答・意見交換(第2部:16:30～17:00)
- ⑦ 閉会

配布資料

1. アカデミック・リンク・センター評価委員会出席者名簿
2. 評価シート
3. 自己評価結果
4. プロジェクト自己評価
5. アカデミック・リンク・センター評価委員会資料
6. 概要, コンセプトブック, 利用案内

2. 委員名簿

鈴木 典比古	国際教養大学学長
田村 俊作	慶應義塾大学メディアセンター所長, 文学部教授
山田 礼子	同志社高等教育・学生教育センター長, 学習支援・教育開発センター 所長, 社会学部教授
山内 祐平	東京大学情報学環准教授

その他出席者

竹内 比呂也	アカデミック・リンク・センター長
岡本 一志	アカデミック・リンク・センター特任助教

國本 千裕	アカデミック・リンク・センター特任助教
藤本 茂雄	アカデミック・リンク・センター特任助教
栃木 博子	アカデミック・リンク・センター客員研究員
能登谷 泰見	アカデミック・リンク・センター外部機関共同研究員
島 文子	附属図書館利用支援企画課長
杉田 茂樹	附属図書館学術コンテンツ課長
木下 直	附属図書館利用支援企画課副課長
庄司 三千子	附属図書館学術コンテンツ課副課長
八木 二郎	附属図書館利用支援企画課総務係長
綾田 陽子	附属図書館利用支援企画課アカデミック・リンクグループ専門職員
丸茂 里江	附属図書館学術コンテンツ課学術コンテンツグループ専門職員
上原 陽子	アカデミック・リンク・センター職員

3. 議事要旨

竹内比呂也アカデミック・リンク・センター長より開会の挨拶が行われ、互選により、委員長に鈴木典比古先生、副委員長に田村俊作先生を選出、鈴木委員長を議長として審議に入った。

竹内センター長から資料に基づき、アカデミック・リンク・センターについて報告があり、質疑応答が行われた。

続いて千葉大学関係者はいったん退席し、委員のみによる評価についての意見交換が行われた。意見交換後、千葉大学関係者が席に戻り、鈴木委員長による総評と意見交換が行われた。 詳細は4 総評と5 質疑応答要旨にまとめている。

4 アカデミック・リンク・センター評価委員会総評

アカデミック・リンク・センターの活動は、7つのプロジェクトを中心に活発に行われており、短期間に素晴らしい成果を上げ、当面の目的を十分達成している。アカデミック・リンク・センターは学生が集まる場所としてのラーニング・コモンズとしては十分なものであり、ベーシックな図書館の機能との統合もよくできている。また、コンテンツ、空間、人的サポートを何らかの形で組み合わせていくという基本コンセプトは、日本国内だけでなく世界的に見てもラーニング・コモンズあるいは新しい学習環境の主要なモデルのひとつと考えられる。

アカデミック・リンク・センターの試みは、千葉大学の学習環境を整備し、教育の質を考えていく点で不可欠なものである。アカデミック・リンク・センターの機能が徐々に学生、教員に影響を与えていることが明らかになっている。このセンターで繰り広げられる活動が実施されれば、千葉大学における学びの広さ、深さが変わっていくであろう。

また、アカデミック・リンク・センターが行っている調査研究面での取り組みは我が国における今後の学習環境のあり方について、各大学へ判断材料を提供するモデルとなっている点も高く評価できる。

他方、一部の委員からは、学習・教育支援活動に関して厳しい評価が出された。しかし、これは、当該の活動ができてないということではなく、アカデミック・リンク・センターの潜在力を考えるともっとできるのではないかということであり、日本を代表するラーニング・コモンズのモデルとして志を高く持ってほしいという期待のあらわれである。委員会としては、現状に満足することなく、これまでの成果を生かして、日本の学習環境構築の先導的なモデルとしてさらに発展することを強く期待する。

特に今後の取り組みへの期待として、委員からは以下のような意見が出された。

- ・ MOOCs（大規模無料オンライン授業）に見られるように、世界的な規模で高等教育のあり方が変わりつつあるなかで、日本の大学のモデルとして先導的な展開ができるのがアカデミック・リンク・センターである。そのためにはコンテンツとラーニング・コモンズの機能の有機的統合などが今後の課題として挙げられる。これは今までの日本のラーニング・コモンズが取り組んできていないことであり、また、アカデミック・リンク・センターのこれまでの活動があるからこそ見えてくる発展的な課題である。その課題を解決できるモデルとなりうるのが、アカデミック・リンク・センターであり、現在進捗中のプロジェクトの継続的な活動が望まれる。
- ・ 今後は教学としての質の保証、教育の効果を検証していくことが必要になる。千葉大学の中では、高等教育研究機構との連携の中で教育の効果をどう重視していくかが課題になってくるだろう。その連携が千葉大学の教学マネジメントに生かす体制の構築を目指すべきである。国立大学法人評価の特別な取り組みの項目などに、大学としてどのように積極的にアカデミック・リンク・センターを取り上げるかが重要で、大学のガバナンスに反映させる必要がある。

- ・ 学習相談と全学的なラーニング・コモンズという観点からすると、学習相談は科目別だけでなく、全体の初年次教育というフレームワークで考える必要があるのではないかと。ラーニング・コモンズという考え方でも学習支援という考え方でも、初年次教育との連携が重要なポイントである。
- ・ 学生の学習の中では、正課外の取り組みが非常に大きな意味を占めていて、それを合わせてトータルな大学機能やサービスが、人間関係の成長にも必要である。そのため、トータルな大学の学習環境としてラーニング・コモンズを見ることも重要で、継続して行っている学習状況調査の結果などが今後活かされると考える。
- ・ 現今の日本の大学においては、ラーニング・コモンズが使われていることだけに満足しているというのが現状であるが、アカデミック・リンク・センターはさらに上を目指してほしい。施設が使われるというだけでなく、どう使われているかの調査を進めて、行われている学習の質も調べる必要がある。
- ・ 研究開発活動に関してはこれからであるが、調査研究を通じて明らかになることが次の課題であり、今後の発展に期待したい。アカデミック・リンク・センターは、段階的に発達していくモデルとしては、基本段階は高く評価できるが、次の段階に展開していったこそアカデミック・リンク・センターの「学習教育環境を変えていく」という効果が出てくると考える。今までの達成を基にして、研究開発の成果はこれから出てくる。次の段階でアカデミック・リンク・センターの効果や性質が変わっていくだろう。

なお、千葉大学アカデミック・リンク・センターの多岐にわたる活動全体を、大学の評価で使われている一般的な5つの指標で評価するのが適切かどうかという意見があった。特に研究開発についてはこれから緒につくものもあり、その成果が挙げられているかを評価するのは時期尚早と考える。

また、ラーニング・マネジメント・システムを使っている科目の割合がどのくらいかなど、数値的な指標で他の大学に比べて優れているということを示すことができればよいという意見があった。アカデミック・リンク・センターが発足して以来、その割合が他大学に比べて高くなったといった結果を示せば、今後の千葉大学の教育を改革する鍵になる。また、アカデミック・リンク・センターの成功が全国の大学へ波及していくことが考えられる。これをなお高めていくのが千葉大学において重要で、各大学に対しても先導的な指標になるであろう。

アカデミック・リンク・センターの活動が全学に対して広く行われている中で、予算が必ずしも潤沢ではないという状況はたいへん厳しいと言わざるを得ない。また、年限のついた特別経費によってアカデミック・リンク・センターの活動を行っていくというのは非常にふさわしくない。これだけの規模、意義のあるプロジェクトを予算の年限で終わりにできないという意見で委員全員が一致しており、継続性、安定性のある運営体制に変え

る必要がある。アカデミック・リンク・センターは、日本の大学を代表する新しい学習環境モデル、指標であり、その活動については、国際的な競争の状況においても重要な意義があると訴えたい。

2013 年 9 月 5 日

評価委員会委員

鈴木典比古（委員長，国際教養大学学長）

田村俊作（副委員長，慶應義塾大学メディアセンター所長，文学部教授）

山田礼子（同志社大学高等教育・学生教育センター長，学習支援・教育
開発センター所長，社会学部教授）

山内祐平（東京大学情報学環准教授）

5 質疑応答要旨

委員長：このプレゼンテーション資料および配布資料について質疑応答および意見交換をいたしたいと思います。

委員：プレゼンテーション資料にあった授業資料ナビの図書貸出回数の推移だけでなく、平均の回転率や一般図書の回転率との比較が分かるとよい。

センター長：回転率については早急に報告できるようにしたい。授業資料ナビの図書には RFID がついているので、手にとられた回数もモニターできる仕組みになっている。2012 年度はシステム移行や周波数帯の変更に伴う調整に手間どり、その数値を取得できなかったが、2013 年度は数値を明示できる予定である。

委員：授業動画の公開を千葉大学内に制限しているが、授業コンテンツのオープンソース化は検討しないのか。

センター長：オープンエデュケーションの観点からオープンにできる方が望ましいと考えるが、オープンを義務化とすると、授業の収録に対して学内の教員の協力が得られない可能性がある。

コンテンツ提供の方法としては二通りを考えている。ラーニング・マネジメント・システム (LMS) の Moodle に掲載して完全に内部でしか見られないようにすることと、YouTube に掲載することである。YouTube の場合は外部からの検索の対象とならないようにしているが、URL が流出するとオープンになってしまうことはあらかじめ説明した上で掲載しているので、潜在的にはオープン化の納得はいただいていると考えられる。

委員：先生方の中にはオープンにしたい方がいらっしゃるのでは。

センター長：積極的にオープンにしたい人がいるか、という問いかけはまだしていない。千葉大学では MOOCs などの対応については全学的なポリシーがまだ決まっていない。Open Course Ware に関しては、かつて一部の教員が JCOW には参加していたが、やめてしまったという経緯がある。

委員：組織の安定化についてお聞きしたい。素晴らしい取り組みをしているので一般経費化が実現すればよいと思う。アカデミック・リンク・センターで行っているプロジェクトは多岐にわたり規模も大きいので、運営費が削られていく中で、これだけの規模を一般経費化していくのは厳しいものがあるのではと思う。プロジェクトの中身を精選されたとしたら、どこに焦点を当てるか。

センター長：そういう点は全く考えてこなかった。これまでの活動についてはすべてを継続していくことを考えていた。コンテンツや空間の整備はプロジェクト経費にはなじみにくく、このような基盤の整備を安定的に行えるようにした上で、それ以外の活動については、別途プロ

ジェクト的な経費を要求する戦略をとるという考えである。

委員：東大はCourseraに登録していて、東大の学生を超える人数 39,000 人が登録し、講義を聴講している。国別学生の比率ではアメリカ 22%、インド 10%、ブラジル 5%などになっている。英語の授業なので、日本は 1.2%となっている。これだけの人に認知ができる。

Moodle を通して行うことも必要だが、オープンエデュケーションでやることを求められている。図書館がどのような役割を果たすかということが世界的な議論になっている。例えば British Library の FutureLearn といった活動などが参考になる。

LMS は日本は遅れていて、導入は 1－2 割くらい。千葉大学 LMS 利用の全教員、授業日数に対するパーセンテージはどのようにになっているのか。

センター員：Moodle を使用しているのは 600 科目である。割合はまだ出していない。

委員：Moodle をやってるやってないというゼロかイチかという問題ではなく、今ではどのくらいの先生がそれを使っているのか、普及率が前回 20%だったのが 30%になったなどの観点でまとめるのがよいと思う。

センター長：Moodle の普及率は 10～20%と思われる。MOOCs は大学の方針という問題がある。アカデミック・リンク・センターが行ってきた授業動画配信は、授業動画に対して最小限の手しかかけておらず、学生の授業の予習、復習での利用という観点が大きい。MOOCs では授業そのものを変える必要があり、動画作成などのサポートはアカデミック・リンク・センターで行えるが、その方針については本学の高等教育研究機構が検討すべきと考える。アクティブラーニングを推進する新しいスタイルの授業推進は当初アカデミック・リンク・センターで実行しようと考えていたが、本学では高等教育研究機構が始動したので、機構の枠組みで行うほうがよいという判断をした。

委員長：アカデミック・リンク・センターの機能が徐々に学生、教員に影響を与えていると思う。このペース、広さで活動をやっていけば、学びの広さ深さが変わっていくと思う。全学に対して広く行っている中、予算が限定されているというのは厳しい。

学生の気質、学び方が変わっていく中、学びの姿勢が積極的・自律的になっているか。いたれりつくせりで基本的に受け身の勉強にならないかと思う。小テストなどの科目の標準化は学習成果という点ではよいが、学びの姿勢に対する振り返りをし、より学生を野放しにして、不便を与えて向こう岸に自分で渡れというファクターも大切ではないか。

MOOCs の動きはもう対岸のものではなく、教育の質の保証のためにどういう仕掛けをつくっていくのかを学んでいく必要がある。自立的な学びに、Moodle、MOOCs などどのような役割を持ち、問題を持っているのかといった問題意識が重要である。

センター長：自立的学習と学生に対するケアについてはアカデミック・リンク・センターを開始したときから考えてきたことである。川に投げ込むだけだと学生は流れていってしまう。教師に助けてもらわなくても向こう岸にたどりつけるようになるため、アカデミック・リンク・

センターではさまざまなものが提供されていることを知ってもらいたい。アカデミック・リンク・センターで聞いたり調べたりして身に着けたことを活かして次に進むというように、段階的に考えることが必要である。

空間の使い方などは、説明文書を示すだけで、ホワイトボードの使い方なども一切学生に指導していない。比喩的に言えば荒波に出る前のプールのようなもので、助けを求められたら助けるが、学生が溺れながらも好きにやればよいというスタイルをとっている。

MOOCsの対応は難しい。大学そのものが脅かされる中、各大学が何をよりどころに存在するのかを考えなければならず、図書館も対応を求められる。学習に必要なコンテンツを電子的に提供できるようにするというのは重要な課題であり、国会図書館のサービスと重複しない範囲で、学生が必要とするリソースを大学図書館が提供していくことが考えられる。残念ながら著作権保護期間が切れていない資料の利用に関する関係者間のコンセンサスが得られておらず、大学学習資源利用モデル研究会がその環境を創り出そうと活動を行っている。

著作権者に対しては段階的にアプローチする必要がある。教育学習の目的のためなど、一定の条件を定めた上で、個々の著作物の利用ごとに許諾を得なくても使えるような環境が整備されればと考えている。

委員：評価シートで学習教育支援活動に関する評価には、辛めの点をつけている。現時点でできてないという話ではなく、もっとできるのではないかと、日本を代表するラーニング・コモンズのモデルとして志を高く持ってほしいという評価である。施設が使われるというだけでなく、どう使われているか、調査をさらに進めて、行われている学習の質も調べてほしい。人がいっぱいいることに安心してはいけない。例えばMOOCsでスタンフォードの授業をグループで助け合いながら受けてみるなど、学習プロジェクトのふるさとみたいなものになってほしい。

MOOCsそのものは学習を保証するものではなく、やる気のある人がやればよいというもので、修了率は10%くらい。学習の質の保証自体は反転授業や、アメリカのラーニングコモンズで始まっているMOOCsのための学習サポートなど、いろんなやり方がある。MOOCsの関わり方はコンテンツ提供のみではないので、逆に学びたい人がスチューデントアシスタント（SA）の支援を受けながら学ぶというラーニングサポートの関わり方など考える価値はある。

センター長：ラーニング・コモンズの利用者の数字が多いというのは、対外的には使えるデータではあるが、それだけで評価すべきではないという指摘は理解する。学習の質に関してだが、アカデミック・リンク・センターはあえて学生を縛らないという方針でやっている。例えば課外活動を排除するというのは難しい判断を迫られる。学生は授業に関することは勉強、そうでないものは学習であっても趣味と呼んでたりする。制約を強くすると学生の自発的学習を排除する可能性があるため、これまでこの点については意図的に曖昧にしている。ただし空間が混雑してきているので、来年以降の対応は検討したい。

委員：サークル活動の横で、プロジェクト学習をやっているところを見せるなど、積極的な学習のモデルを見せることによって、そちらに学生を誘導することが大事である。そうすると自然とサークルは別のところでやるようになると思う。学びたい人が来たとき学べないというのは施設設備としてまずいのではないかと思います、評価シートではあえて評価を厳しくした。誰がどう利

用するかはラーニング・コモンズの基盤なので、慎重に戦略を立てる必要がある。

委員：ラーニング・コモンズのアクティブな部分を使って授業外の学習時間がどれくらい伸びてきたのか、プロジェクト学習のための準備をそこでどうしているかなど、正課の中に正課外の自主的な活動がどう生きてきたかという学びの効果を、高等教育研究機構と連携の上、どのように測定し調査するのか。

もう一つは日本では中間的な専門職が位置づかず、継続的なものを作っていくのは難しい。自分の大学では IR をできる人材を育て、データを分析して大学の経営に役立てようとしている。今までにない学習支援の中間的な専門職をどのように考えていくか。

センター長：前半は、千葉大学としての教育に関する IR をどういうポリシーで考えていくのかということに関わるもので、本学の高等教育研究機構の大きな課題と考えている。学生の学習・情報利用行動に関する調査結果を成績とリンクさせて分析することを検討している。その中で学生のパフォーマンスと学習時間、図書館の利用状況との関連をみていく。また学習行動に関する調査は、同じ時期に同じ条件の調査を継続的に行って変化を見ていきたい。

専門職については、広い意味での図書館が持つ専門的な職員というものを考えたい。University Research Administrator の制度設計などと同種として考える可能性がある。図書館内でそういった仕事を提供して、図書館間の異動などでキャリア形成できるのではないかと考える。人材を作っても従来のキャリアと切り離されると運用が難しくなる可能性があるもので、いわゆる図書館業務を行う職種と行き来できるような形で、まず制度設計から考える必要があると思っている。

委員：アカデミック・リンク・センターは、ふたつの方向性があると考えている。まずは学生生活のジェネラルサポートの場と思っている。広い意味での学習をサポートする場は今までなかったと思う。ラーニング・コモンズだけではだめで、絶えず学生のケア、彼らの動向を見て意欲を高めるような人がいることに意味がある。その上でさらに教育の改善に向かっていろんな仕掛けを作っていくことを考える。そのための調査が必要で、学習相談という言い方をしているが、進路などいろいろな相談があるのではないかと伺いたい。

第一段階のジェネラルサポートのための基盤は成功しつつあるし、評価すべきと思う。その上で教育の改善に向かってどういう貢献をするかという課題で、さらにやっていく必要があると思う。

スペース配分はよくデザインされていると思うが、スペースとスペースの間が離れているのが気になっている。ブックツリーのところに読書空間がない。静かな空間と分ける必要もあるが、まぜ合わせる必要もあるのでは。あかりんアワーは本から離れているので、本の横で教員が話すというのもよいのではないかという気がする。

センター員：場所が離れているという問題だが、学生を対象とした調査結果から N 棟 2F は学生がとりあえず集まる部分で、そこへブックツリー、K 棟などから本を持ってくるという行動が見られることが分かっている。学習空間にやってきて、ついでにあれもこれもと複数タスクを持ち込み、ミックスされた形になっている。

どんな質問が学習相談に寄せられるかというと、授業で出された課題についてだけでなく、なぜ「レポートを書くのか」という問いや教科書の読み方など様々な質問がある。

委員長：センター長より、アカデミック・リンク・センターの機能を拡大していく中で安定的な経費の確保という難しいことをやらねばいけないというのを伺った。大学全体として、プロジェクトとして終わるのはもったいないという認識にあるというのは心強い。

大学行政のスタンスをもう一度確認したい。また、センターでは経費の安定化に向かって、どういうところを主要なプロジェクトとして、あるいは評価すべきポイントと考えているか。

センター長：通常はプロジェクトは5年間で成果が上がれば経費の安定化を計るものだが、アカデミック・リンク・センターについてはスタートして2年目くらいから大学の行政本部からは一般経費化についての話があった。活動そのものを4年で終わりにしないという大学の意思表示であると理解している。

アカデミック・リンクは千葉大学のためだけでないと考えている。学習を取り巻く環境が変わる中で、図書館が提供する学習環境モデルとなると思う。

すべての大学が同じスタイルでやるものとは思っていないが、コンテンツ、空間、人的サポートを組み合わせしていくというのは、日本国内だけでなく世界で見ても必要なモデルのひとつと考えている。アカデミック・リンク・センターの試みは千葉大学の学習環境を整備し、教育の質を考えていく点で不可欠であり、またこのプロジェクトの中で行われている調査研究は我が国における今後の学習環境の在り方について、各大学へ判断材料を提供するテストベッドのようなものになると思うので、継続的に国からの支援を得たいと考えている。

6. 評価結果

ALC評価委員会 評価シート

- 評価指標
- 4: 優れた活動や計画が実施, 立案されている
- 3: 活動や計画は概ね妥当なものである
- 2: 活動や計画に不十分な点が見られる
- 1: 活動や計画が全く不十分である

1	センターの理念・目的に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
1-1	理念・目的が適切に設定されているか	4	4
1-2	教職員・学生への周知が適切になされているか	3	3
1-3	社会への公表が適切になされているか	4	4

2	管理運営および組織・機構に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
2-1	基本的な組織構成が理念・目的に照らし適切なものであるか	4	4
2-2	教員会議が教育研究活動にかかる重要事項を審議するための必要な活動を行っているか	3	3. 5

(プロジェクト会議を毎週開催)

3	学習・教育支援活動に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
3-1	学習・教育支援活動を実施する上で必要な施設・設備が整備され、有効に活用されているか	3	3
3-2	学習支援に関する学生のニーズが適切に把握され、支援が適切に行われているか	4	4
3-3	教育支援に関する教員のニーズが適切に把握され、支援が適切に行われているか	4	4

(試験期の席の奪い合い、立って利用している学生有り)

4	研究開発活動に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
4-1	研究開発活動が活発に行われているか	4	4
4-2	研究の質が確保されているか	3	3
4-3	成果が上がっているか	4	4

(評価記述が少し不明瞭)

5	学内外との連携に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
5-1	連携の目的を達成するにふさわしい計画や具体的方針が定められているか	4	4
5-2	連携活動が適切に行われているか	4	4
5-3	活動の成果があがっているか	3	3. 5

(成果が上がっている。DNP,丸善、千葉大の3者共同研究部門は立ち上げて日が浅い)

自由なご意見をお願いいたします

- ・アカデミック・リンクの本来の、本質的目的は十分に果たしている。
- ・教職員・学生の認知度が低い実態の原因分析、対応策が必要。
- ・N棟アクティブ・ラーニング・スペースの盛況(試験時等)への対応を考えるべき。
- ・SAの利用、科目明示型学習支援は期待出来る。
- ・リエゾンライブラリアンとして「学部担当の職員を固定する」とあるが、メリット、デメリットは？
- ・DNP、丸善等との共同研究のメリット、デメリットは？
- ・「大学学習資源利用モデル研究会」の成果と将来について説明してください。

ALC評価委員会 評価シート

- 評価指標 4: 優れた活動や計画が実施, 立案されている
 3: 活動や計画は概ね妥当なものである
 2: 活動や計画に不十分な点が見られる
 1: 活動や計画が全く不十分である

1	センターの理念・目的に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
1-1	理念・目的が適切に設定されているか	4	4
1-2	教職員・学生への周知が適切になされているか	3	4
1-3	社会への公表が適切になされているか	4	4

2	管理運営および組織・機構に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
2-1	基本的な組織構成が理念・目的に照らし適切なものであるか	4	4
2-2	教員会議が教育研究活動にかかる重要事項を審議するための必要な活動を行っているか	3	3

3	学習・教育支援活動に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
3-1	学習・教育支援活動を実施する上で必要な施設・設備が整備され, 有効に活用されているか	3	3
3-2	学習支援に関する学生のニーズが適切に把握され, 支援が適切に行われているか	4	4
3-3	教育支援に関する教員のニーズが適切に把握され, 支援が適切に行われているか	4	4

4	研究開発活動に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
4-1	研究開発活動が活発に行われているか	4	4
4-2	研究の質が確保されているか	3	4
4-3	成果が上がっているか	4	4

5	学内外との連携に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
5-1	連携の目的を達成するにふさわしい計画や具体的方針が定められているか	4	4
5-2	連携活動が適切に行われているか	4	4
5-3	活動の成果があがっているか	3	4

自由なご意見をお願いいたします

周到な準備の下に, 期待以上に, 教育改革の実践と, 体系的かつ継続的な研究開発の成果を上げておられることに敬服いたします。また, ALSAとして学生たちの積極的な参加を実現しているだけでなく, ALCの展開にしっかりと組み入れつつ, その自律的な活動を促している点も評価できます。研究開発については, 成果が本格的に期待されるのはこれからであり, 期待しています。今後は, 研究開発と実践との関係の一層の緊密化, および, 教員・職員・学生への広報や, 関係機関との連携の強化による, 学内外での基盤強化に努められると良いと考えます。

ALC評価委員会 評価シート

- 評価指標 4: 優れた活動や計画が実施, 立案されている
 3: 活動や計画は概ね妥当なものである
 2: 活動や計画に不十分な点が見られる
 1: 活動や計画が全く不十分である

1	センターの理念・目的に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
1-1	理念・目的が適切に設定されているか	4	4
1-2	教職員・学生への周知が適切になされているか	3	3
1-3	社会への公表が適切になされているか	4	4

2	管理運営および組織・機構に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
2-1	基本的な組織構成が理念・目的に照らし適切なものであるか	4	4
2-2	教員会議が教育研究活動にかかる重要事項を審議するための必要な活動を行っているか	3	3

3	学習・教育支援活動に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
3-1	学習・教育支援活動を実施する上で必要な施設・設備が整備され、有効に活用されているか	3	3
3-2	学習支援に関する学生のニーズが適切に把握され、支援が適切に行われているか	4	4
3-3	教育支援に関する教員のニーズが適切に把握され、支援が適切に行われているか	4	4

4	研究開発活動に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
4-1	研究開発活動が活発に行われているか	4	4
4-2	研究の質が確保されているか	3	3
4-3	成果が上がっているか	4	4

5	学内外との連携に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
5-1	連携の目的を達成するにふさわしい計画や具体的方針が定められているか	4	4
5-2	連携活動が適切に行われているか	4	4
5-3	活動の成果があがっているか	3	3

自由なご意見をお願いいたします

実際に動いているプロジェクトと自己評価書の両方を読み評価したところ、やはり自己評価と同じ評点になった。全般的に、設定したセンターの理念、目的にあわせて、よく運営し、かつ教育・学習支援活動を実践していると評価する。積極的に研究活動にも携わっている。研究成果が目に見える形で浮上することは時間がかかったとしても、着実な成果が生まれ、かつ教育・学習支援活動にも反映されると期待する。

ALC評価委員会 評価シート

- 評価指標 4: 優れた活動や計画が実施, 立案されている
 3: 活動や計画は概ね妥当なものである
 2: 活動や計画に不十分な点が見られる
 1: 活動や計画が全く不十分である

1	センターの理念・目的に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
1-1	理念・目的が適切に設定されているか	4	4
1-2	教職員・学生への周知が適切になされているか	3	3
1-3	社会への公表が適切になされているか	4	4

2	管理運営および組織・機構に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
2-1	基本的な組織構成が理念・目的に照らし適切なものであるか	4	4
2-2	教員会議が教育研究活動にかかる重要事項を審議するための必要な活動を行っているか	3	4

3	学習・教育支援活動に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
3-1	学習・教育支援活動を実施する上で必要な施設・設備が整備され, 有効に活用されているか	3	2
3-2	学習支援に関する学生のニーズが適切に把握され, 支援が適切に行われているか	4	3
3-3	教育支援に関する教員のニーズが適切に把握され, 支援が適切に行われているか	4	3

4	研究開発活動に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
4-1	研究開発活動が活発に行われているか	4	4
4-2	研究の質が確保されているか	3	3
4-3	成果が上がっているか	4	4

5	学内外との連携に関すること	センター自己評価	評価委員の評価
5-1	連携の目的を達成するにふさわしい計画や具体的方針が定められているか	4	4
5-2	連携活動が適切に行われているか	4	4
5-3	活動の成果があがっているか	3	4

自由なご意見をお願いいたします

第 2 部 評価委員会資料

執筆者一覧

評価委員会資料

1. アカデミック・リンクの概要 竹内比呂也（センター長）
2. プロジェクト実施状況
 - 2.1 レガシーコンテンツ再生プロジェクト 川本一彦（兼務教員）
 - 2.2 オンラインクラスルームプロジェクト 岡本一志（特任助教）
 - 2.3 デジタルコースパックプロジェクト
 - 2.3.1 デジタルコースパックのための著作権処理 姉川雄大（特任助教）
 - 2.3.2 物理演習問題集の電子化 藤本茂雄（特任助教）
 - 2.3.3 デジタルコースパックの POD による提供の実験的試行 川本一彦
 - 2.4 「参加する学習」プロジェクト 姉川雄大
 - 2.5 「教育力」「学習力」向上プロジェクト（前書き部分） 白川優治（兼務教員）
 - 2.5.1 アカデミック・リンク・セミナー 國本千裕（特任助教）
 - 2.5.2 「1210 あかりんアワー」 谷奈穂（学術コンテンツ課）
 - 2.5.3 ALSA-GS 白川優治
 - 2.5.4 全学および各部局の FD の e ラーニング化の検討状況 白川優治
 - 2.5.5 図書館ポッドキャストの YouTube への移行 白川優治
 - 2.6 情報利用行動定点観測プロジェクト
 - 2.6.1 2012 年度 千葉大学学習状況・情報利用環境調査 白川優治
 - 2.6.2 赤外線センサーによる館内動態調査 國本千裕
 - 2.6.3 アイ・カメラを用いた情報探索行動の推定調査 川本・岡本・國本
 - 2.6.4 画像検索を用いた図書館内での自己位置推定調査 川本・岡本・國本
 - 2.6.5 学生に対するフォーカス・グループ・インタビュー調査 國本千裕
 - 2.6.6 定点カメラ映像を用いたアクティブ・ラーニング・スペース利用状況調査 國本千裕
 - 2.6.7 学生撮影写真および個人インタビューの併用によるフォトボイス調査 國本千裕
 - 2.6.8 ブックトラックを用いた図書利用状況調査 岡本・庄司三千子（学術コンテンツ課）
 - 2.6.9 ID を共通記号化したうえでの各種調査の結果と学生成績情報の連動分析 國本・岡本
 - 2.7 「新しい図書館員」プロジェクト 池尻亮子，竹内茉莉子（アカデミック・リンクグループ）
 - 2.8 補遺 竹内比呂也
3. 評価と将来計画 竹内比呂也

1. アカデミック・リンクの概要

1. 1 はじめに

千葉大学におけるアカデミック・リンクは、2011年4月のアカデミック・リンク・センターの設置、および2012年3月のN棟の供用開始によって具体化した。

今日の大学には、知識基盤社会-知識や情報が社会の様々な活動において重視され、意思決定等において十分に活用される社会-を生きる力を持つ人材を送り出すことが求められている。2008年12月に発表された中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて』は、学士力として、自らが専攻する学問分野の基本的な知識の体系的な理解とその意味の理解だけではなく、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力などの、知的活動でも、職業活動や社会生活でも必要な汎用的技能をもち、さらに、社会的責任、倫理といった態度を身につけ、これらを総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力を持つことを求めている。

千葉大学はその「憲章」において、「自由・自立の精神を堅持して、地球規模的な視点から常に社会とかかわりあいを持ち、普遍的な教養（真善美）、専門的な知識・技術・技能および高い問題解決能力をそなえた人材の育成」を掲げている。アカデミック・リンクは、この憲章に内在する精神を踏まえ、千葉大学が出した一つの対応策である。

アカデミック・リンクは、知識基盤社会を生き抜く力を持つ「考える学生の創造」を目的として掲げ、これを実現するために「コンテンツと学習の近接による能動的学習の促進」を実行しようとしている。快適な学習空間、学習のための多様な資料群（コンテンツ）、そしてこれらの利用や学習を支える多様な人材で構成される図書館を中心にこの活動は展開される。機能的には「アクティブ・ラーニング・スペース」、「コンテンツ・ラボ」、「ティーチング・ハブ」という主要三機能の実現によって新しい学習環境を提供し、その目標を達成しようとしている。

1. 2 アカデミック・リンクの三機能

上において述べたように、アカデミック・リンクは「学習とコンテンツの近接による能動的学習の推進」のために、三つの機能を準備している。

（1）アクティブ・ラーニング・スペース

学生が、さまざまな資料、コンテンツ、情報通信技術、あるいは学習を支援する人々（教員、図書館員、学生）を最大限活用しながら、グループや個人で学習を行うのにふさわしい場、自らの学習の成果を公表する場を提供する。

（2）コンテンツ・ラボ

授業の事前事後学習やさらにその主題について掘り下げて学習するために有益な図書類やwebサイトを案内する『授業資料ナビゲータ』を強化するとともに、『授業資料ナビゲータ』で提供される資料や授業で使う教材の電子化、授業そのものの録画などを行い、これらの学習に資するコンテンツを、ラーニング・マネージメント・システムを介して円滑に提供する。

(3) ティーチング・ハブ

ラーニング・マネージメント・システム（千葉大学においては Moodle）の運用を支援するとともに、教材の電子化や情報通信技術の教育への応用等のためのファカルティ・ディベロップメント（FD）の実施、アクティブ・ラーニング・スペースで活動するスチューデント・アシスタント（SA）の育成を行う。

これらの機能の具体化にむけて、7つのプロジェクトを実施している。2012年4月から2013年5月に至る間の活動の詳細については第2章において記述する。

また、利用者の視点からは、「自由度の高い学習空間」「学習のためのコンテンツ」「人的支援」の3つが有機的に結合されたものとして見えるはずであり、次節以降、その観点から基本的な考え方を示す。

1. 3 空間設計の基本的考え方

「場所としての図書館」の重要度は、電子情報環境下において低下したと言われているが、アカデミック・リンクは、図書館の伝統的な機能を再構築しようとしているのではなく、新たな学習環境の構築をめざすものであり、学生の多様な学習スタイルに応えられる学習空間を提供することが重要であると考えている。

アカデミック・リンクの中核をなす附属図書館は、増改築によって、4つの建物で構成されることになった（この建物にはアカデミック・リンク・センターも含む）。アカデミック・リンクは、従来の図書館では今日の学生の学習環境に関するニーズに対応することは困難であるという認識にたちながらも、図書館的な良さを否定しているわけではない。それゆえ、これらの4つの建物は、それぞれの役割・個性を明確にしながら相互補完的に存在している。

L 棟	Learning	黙考する図書館
I 棟	Investigation	研究・発信する図書館
N 棟	Networking	対話する図書館
K 棟	Knowledge	知識が眠る図書館

1. 3. 1 既存部分：L 棟と K 棟

L 棟と K 棟は、古くからの図書館の建物で、広さはおよそ 9,100 平方メートルである。

1) L 棟

L 棟は、1 階に電動集密書架を配置し雑誌のバックナンバーを収納するとともに、2 階から 4 階にかけては、一般書が排架され、多くの閲覧席が設置されている。学習空間としては、静かに読書をしたり、一人静かに思考する場所と位置づけられる。換言すれば伝統的な図書館の良さを徹底して残すことを意識した棟であり、キーボードの打鍵音の出る機器の使用も認めていない。

2) K 棟

K 棟は今回の改修で耐震化が図られ、施設面では一新された。伝統的な書庫としての機能を中心に考えられた棟であり、参考書、一般書のほか貴重書室、コレクション室、マイ

クロ資料室、雑誌のバックナンバーを収納する電動集密書庫などを備えた知識集積拠点である。

1. 3. 2 新築部分：N棟とI棟

N棟とI棟は、アカデミック・リンク構想に沿って新築された部分で、広さはおよそ6,150平方メートルである。この空間の設計の基本コンセプトは、この中で展開される様々な活動の「見る」(see)「見られる」(be seen)化である。これは、英国のJISC (Joint Information Systems Committee) の「図書館の未来」プロジェクトにおいて作成されたビデオの中で、サラ・トーマス氏（オックスフォード大学図書館長）が、「人々が語り合っている姿等を見ること、見られることによって、刺激を受ける」という趣旨のことを語っていることにヒントを得ている。そのような「見る」「見られる」環境を実現するために、N棟においては、空間を極力細切れにしないようにするとともに、グループ学習室、研究個室のしきりは透明ガラスにした。I棟においても、廊下側のしきりは研究室を除いてすべて透明とし、1階のセミナー室、コンテンツスタジオについては、外部からも中での活動がよく見えるようにした。様々なセミナー、プレゼンテーション、あるいは講演がこれらの空間で行われるだろうが、それらがすべて「見られる」状況におかれ、それを目にする学生たちが様々な知的な刺激を受けることを期待している。また、学生自身がこのスペースにおいて展開される活動の企画に参加し、自ら考え、何かを作り上げていくことこそは、まさにアクティブ・ラーニングといえる。

1) N棟

N棟は、アカデミック・リンクの主たる機能であるアクティブ・ラーニング・スペースである。この棟は学生が複数で学習するシーンを中心に考えられており、静寂を維持することを求めている。また、学習に役立つコンテンツを学生に使いやすい形で提供することと、また学生の活動を必要に応じて支える人材も提供することが、空間の提供と組み合わせられている点に特徴がある。また、貸し出し用の iPad, PC(Windows, Mac), アンドロイド端末、プロジェクターを使いながら、ディスカッションを行うことができる。N棟全域には無線 LAN が配備されている。各階には以下のスペース、設備が設置されている。以下にスペースごとに機能と特徴を示す。

- a. プレゼンテーションスペース（1階）は、学習や研究の成果を発信するための開放空間である。このスペースでは、現在、毎週火曜日と金曜日に「1210 あかりんアワー」が開催されており、それを学生たちが、座ってじっくり聞いたり、あるいは通りがかりに様子を覗くこともできる。ガラスの仕切りを開くことができるので、セミナー開催時はこれを開き、「かたらいの森」との一体感を醸成するとともに、外部にいる学生を呼び込む効果を生む。
- b. コミュニケーションエリアおよびグループワークエリア（2階、3階）は、自由度を高めるために、窓に面した席を除き、配置される机や椅子はすべてキャスター付きで、学生が勝手に動かすことができる。実際に、大きいテーブルを作ったり、少人数に分かれたりして利用している。また多くのホワイトボード（可動式）が配置されており、自由に使うことができる。3階には、統合情報センターが提供する学生

用端末が 50 台配置されているが、そのうち 2 台は大型ディスプレイを設置し、1 台の端末を複数人で利用できるようにした。また、2 階には、学習支援デスク（チューデント・アシスタント、図書館職員、教員によるサポート）を設置した。

- c. グループ学習室（4 階、大 2 室、小 2 室）は、ガラスで囲われた部屋で、2,3 階に比較するとある程度独立した空間となっているが、中での活動はすべて見える。また、研究個室（8 室）は、ゆとりのある広さを確保しており、大学院生以上が個人で大量の資料を持ち込んで学習できるようにしている。
- d. 個人閲覧席（2 階～4 階）は、窓際に設置されており、従来の図書館よりはゆとりのある座席配置となっている。この席は、窓に向かう形となっており、学習している姿が外から見えるようになっている。
- e. ブックツリーは、アカデミック・リンクの象徴的な書棚である。N 棟を支える構造体（柱）の外側をとりかこむ形で設置されており、各フロアの左右に高さ 3 メートル、幅 9 メートルの大きな書棚が四面ずつある。N 棟は附属図書館の前にある「かたらいの森」に面していることから、「木」のイメージをそのまま建物の中にとりこみ、ブックツリーと名付けられている。この書棚も「見られる」ことを意識しており、従来書庫の奥にあってなかなか人目につかなかったコレクションを排架（4 階）するとともに、学生による「テーマ展示」（3 階）、「1210 あかりんアワー」と連携した展示（3 階）、授業資料ナビゲータ掲載資料の配置（2 階）などを実施する。特に外からよく見え、図書館の入館制限エリア外にある 1 階東側のブックツリーは、全学のギャラリー的な場所として活用される。

2) I 棟

I 棟には、アカデミック・リンク・センターが置かれているが、この建物においても「見られる」という概念が徹底されているのは前述のとおりである。主要な部屋の機能と設置意図は以下の通りである。

- a. セミナー室「まなび」（1 階）は、新しいタイプの授業を行うことを想定しており、椅子、机はすべて可動式とし、机も様々な形のものを準備した。前後の壁も一面のホワイトボードとした。特に後ろの壁は、プロジェクタースクリーン兼用となっており、プロジェクターを使いながらのグループ学習などに活用できる。40 名程度での利用を想定している。
- b. コンテンツスタジオ「ひかり」（1 階）は、授業を収録するための講義室であり、収録用の機器があらかじめ設置されていて、比較的簡便に授業のコンテンツ化ができるようにしてある。90 名程度での利用を想定している。
- c. コンテンツ制作室（2 階）は、コンテンツ制作を主要な用途とした高性能の PC がゆったりした空間に配置されている。この横にテクニカルスタッフの居室が設定されており、必要に応じて技術的支援を行えるようにしている。
- d. ティーチング・コモンズ（3 階）は、教材作成支援の窓口業務を行う場所であり、アカデミック・リンク・センターの事務室も兼ねる。特に、著作物の教材としての使用における権利処理のための窓口として機能する。

- e. セミナー室「きわみ」（3階）は、センターが実施する諸活動に関連するセミナー等を実施するための講義室である。50名程度の利用を想定している。

1. 4 コンテンツ提供の基本的考え方

アカデミック・リンクでは、授業と関連するコンテンツの製作・提供が最重要課題の一つと考えている。既に述べたように「授業資料ナビゲータ」を一つの手がかりとして、学習の幅を広げる、あるいはより深めるために必要な本などを案内するとともに、これらなるべく利用しやすいように、多様な形態—紙の資料だけではなく、電子化できるものは電子化して—で提供することを計画している。電子的に提供する資料のタイプに分けて考えると以下のようなになる。

- (1) 既刊で現在入手不能となっている図書の電子化による再生（「レガシーコンテンツ再生」）
- (2) 従来教室内で紙の形で配られるだけで終わってしまっていた教材の電子的提供あるいは共有（「デジタルコースパック」）
 - 様々な著作物から集められた資料
 - 教員がオリジナル作成する教材の授業間共有
- (3) 授業そのものの録画・配信によるコンテンツ化（「オンラインクラスルーム」）

これらの取り組みの詳細については、第2章において詳述する。

ここで意図しているような、コンテンツの多様な形態での提供を実現する上で隘路となるのが、権利処理の問題である。残念ながら、日本においては電子情報環境下における教育あるいは学習のために著作物を利用するための適切なルールが確立しているとはいいがたく、各教員はどのような使い方なら許容されるのかという不安を持ちながら著作物を授業で使っているのが実情であろう。1. 3. 2で言及したように、I棟の「ティーチング・コモンズ」においては権利処理に関わるサポートを提供する予定であり、2013年7月に発足した大日本印刷株式会社、丸善株式会社との共同研究部門の実践的活動の一環として実施される予定である。

1. 5 人的支援の基本的考え方

これまでの図書館サービスにおける人的な支援といえば、レファレンスサービスである。レファレンスサービスにおいて行われてきた、図書館における質問回答サービスや、様々な情報リテラシースキルを涵養するための、データベースの利用法、文献管理ソフトの使い方などの講習会については学習環境を変革する観点からこれを強化する。しかし、学生のスキルの多様性を考慮し、集合型の講習会は極力減らし、その一方で個別的な人的支援にリソースを傾注する。アカデミック・リンクでは、学生の学習活動を支援する人々がN棟2階に集中して活動することになっているが、ここで学習を支援する人々は、必ずしも図書館員だけではない。ここには学生もいるし、教員もいる。すなわち、大学における多様な人的資源を学習支援に活用するという考え方をとっている。

1. 5. 1 学生による支援

千葉大学においては、2012 年度からスチューデント・アシスタント制度をスタートさせており、この制度の中で、Academic Link Student Assistant (ALSA／アルサ)をスタートさせた。ALSA の活動は、学習支援 (ALSA-LS)、技術支援 (ALSA-TT)、図書館サービス業務への学生の参加 (ALSA-GS) の3種類である。

1. 5. 2 教員による支援

教員によるサポートは「オフィスアワー@アカデミック・リンク」という形で実施された。オフィスアワーは千葉大学においても広く普及していると考えられるが、学生の中には、教員の研究室を訪ねていって質問することは躊躇するという者もいるだろう。それゆえ、N 棟の開放的な環境の中で、教員と学生をリンクできるようにするという考えに基づいている。これについては、センター兼務および特任助教によって試行的に実施されたが、必ずしも多くの相談が寄せられたわけではない、その存在が知られていないなど、再検討すべき事項が多い。

1. 5. 3 図書館員による支援

2010 年 12 月に科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会が審議のまとめとして公表した『大学図書館の整備について：変革する大学にあって求められる大学図書館像』においては、大学図書館が「学習支援および教育活動への直接の関与」を行うことを提言している。具体的には、学修支援として、ラーニング・コモンズ、図書館員による自学自習の支援、院生や学部上級生による指導体制の組織化、ライティング・センター、学生や教職員の知的交流活動の活性化といったことが挙げられており、また、教育活動への直接の関与としては、情報リテラシー教育、メディアリテラシー教育、情報リテラシー教育のためのカリキュラムの共同開発、図書館職員の教員兼務、チュートリアルシステムの開発、教材作成への関与、教材の整理・提供が挙げられている。

アカデミック・リンクで活躍する図書館員のイメージは、まさに、ここに描かれるような業務を行う専門的職員である。しかし、これを実現していくための具体的な方法が何かあるわけではない。アカデミック・リンクはスタッフに関しては、「新たな専門職」の設置を提案していく。これまでの教員／事務員という二分法に当てはまらない、中間的な専門職の創出である。学習支援、コンテンツ作成にかかる技術支援、著作権に係る権利処理など、専門的な業務内容を持ちながらも適切な雇用制度がない業務がアカデミック・リンクにはたくさんある。当面は、情報リテラシー教育とレファレンスサービスに重点を置きつつ、アカデミック・リンクにおける実践的な活動の実施を通じて、「新しい図書館員」へとアプローチしていく。

これら人的支援の詳細については、第 2 章で詳述する。

1. 6 組織

アカデミック・リンクを支える学内組織として、2011 年 4 月にアカデミック・リンク・センターが設置された。これは、附属図書館、ネットワーク基盤を提供する統合情報センター（当時は総合メディア基盤センター）、そして初年次教育を担当する普遍教育センター

が、アカデミック・リンクの理念の実現に向けて必要な研究開発を行う拠点として大学に対して設置を提案したものである。附属図書館、統合情報センター、普遍教育センターはアカデミック・リンクの企画立案段階からこの企画に参加している。コンテンツ基盤と情報ネットワーク基盤は、高等教育・学習を支える根幹であり、図書館、情報ネットワーク、そして教育実施組織の組み合わせは、高等教育・学習の改革を推進する上で普遍性を持つと考えられる。なお、アカデミック・リンク・センターは 2014 年度末までの時限設置となっている。

アカデミック・リンク・センターは、研究開発部門とアクティブ・ラーニング推進部門、および 2013 年 7 月に発足した共同研究部門からなる。

1. 6. 1 研究開発部門

研究開発部門には、この構想の母体となった附属図書館、統合情報センター、普遍教育センターから、各 1 名の教員が兼務教員として配置されている（附属図書館はもともと教員定数を持たないため、附属図書館ライブラリーイノベーションセンター室員（兼務）が、アカデミック・リンク・センター教員をも兼務することになった。なお、ライブラリーイノベーションセンターは、現在実質的活動を休止している）。2011 年度に認められた運営費交付金特別経費により、アカデミック・リンクの活動の推進のために特任助教を採用し、2011 年度にはフルタイム 2 名、パートタイム 1 名、2012 年度にはフルタイム 4 名の体制とした。この体制は 2013 年度も続いている。また実務的な業務をも行う研究員（非常勤）を 2012 年度は 2 名、2013 年度は 1 名雇用した。第 2 章において詳説されるように、アカデミック・リンクの枠内で実施される活動の多くは実践的開発の側面が強いものであるが、2. 6 にあるように、情報利用行動定点観測プロジェクトは、独立の研究としても価値の高いものであり、部門全体として推進してきた。

1. 6. 2 アクティブ・ラーニング推進部門

アクティブ・ラーニング推進部門は、センター長の統括の下、図書館職員（2012 年度からは附属図書館事務部利用支援企画課、学術コンテンツ課所属）が所属する形をとり、アクティブ・ラーニング・スペースの活用を中心とした、実践的活動を行うことを想定してきた。しかしながら、1. 2 において述べたように、アカデミック・リンクの 3 機能の実現に向けて、現在 7 つのプロジェクトを推進しており、その実施においては、部門を超えて、教員、職員混成のチームを形成してこれにあたっている。

なお、アカデミック・リンク・センターの事務については、発足当時は情報部学術情報課が、2012 年 4 月からは附属図書館事務部利用支援企画課が担当している。事務職員（フルタイム）の増強はアカデミック・リンクの活動が始まって以降行われておらず、職員は図書館業務を行いながらの兼務となっている。

1. 6. 3 「電子教材の開発および活用に関する共同研究部門」

「電子教材の開発および活用に関する共同研究部門」は、大日本印刷株式会社、丸善株式会社、および千葉大学の三者の合意に基づき、2013 年 7 月にアカデミック・リンク・センターに設置された。この共同研究部門の目的は、新たな教材開発および教材の利用を

促進するモデルの構築にあり、教員の教材利用の実態、支援ニーズの調査を実施する。またこれと並行して、個別教員の教材作成支援におけるコンサルティング、著作権処理支援を行う予定である。

1. 7 予算

アカデミック・リンクの活動にかかる予算は、文部科学省による運営費交付金（特別経費、プロジェクト分、2011年度から2014年度）が主たる財源であり、これに大学から措置される経費を加えたものとなっている。2012年度は、特別経費 36,000,000 円、2013年度は 40,000,000 円が措置されている。大学から措置されているのは、主としてラーニング・マネジメント・システム（LMS）の Moodle を維持するための経費であり、2012年度から年額 10,000,000 円が措置されている。不足分については、図書館経費によってまかなわれている。

1. 8 広報

アカデミック・リンクの理念を学内外のステークホルダーに周知することが重要であると考え、そのために、ロゴマークを策定するとともに、コンセプトビデオ、コンセプトブック、利用案内（『千葉大学附属図書館本館利用案内』）、建物概要資料を作成、配布／公開した。学内掲示物については、ロゴマークを用いてデザインを統一し、アカデミック・リンクというブランドの確立に努めた。これに関しては今のところ成功したと考えている。

また、アカデミック・リンク・セミナーは、様々な観点からアカデミック・リンクに関連する活動を紹介するという側面も持っており、2012年度には番外編とも言える図書館総合展でのフォーラムも含め、6回のセミナーを開催した。2013年度は第1回セミナーを6月に開催している。セミナーの詳細については第2章に詳述する。

1. 9 評価

アカデミック・リンクの活動は、学習環境整備の先進的な事例と認識され、各方面から高く評価されている。具体的には以下の通りである。

- 中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ』（答申、2012年8月28日）において図書館の機能強化の事例として取り上げられた。
- 産業競争力会議における文部科学大臣大学説明資料「人材力強化のための教育戦略」（2013年3月15日）において大学教育の質的変換のための取り組みの事例として取り上げられた。
- 文部科学省による「国立大学法人・大学共同利用機関法人の2011年度に係る業務の実績に関する評価」において、「戦略的・意欲的な取り組み」の一つとして評価された。
- 科学技術・学術審議会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会（第54回、2012年10月19日）において、センター長が招へいされ、学習環境充実のための学術情報基盤の整備という観点でアカデミック・リンクの取り組みについて報告を行った。

- 千葉大学大学評価対応室中期目標対応部会による「平成 24 年度計画の実施状況に基づく自己点検・評価書」において、アカデミック・リンクにかかる事項については「年度計画を上回って実施している」と評価された。

建築面では、2012 年度のグッドデザイン賞および千葉市都市文化賞に選定された。また、文部科学省による、「国立大学等の特色ある施設 2012」に取り上げられた。

2. プロジェクトの進捗状況

2. 1 レガシーコンテンツ再生プロジェクト

レガシーコンテンツ再生とは、すでに刊行されているパッケージ型メディア（図書やビデオ教材など）を電子的に再生させ、それらを学習において利活用するための環境を整備するプロジェクトである。学術的な刊行物を電子的な形式でアーカイブすることにより、電子書籍端末やPOD（Print On Demand：オンデマンド印刷）を通じた提供が可能になり、学生や教員が多様な形態で学術的刊行物を永続的に入手できるようになる。さらに、大学図書館には少部数の冊子しかなく閲覧者が限られていた刊行物に対して、同時に多数の学生がアクセスできるようになり、授業の予習や復習により活用されることが期待できる。一方で、教員側も同時アクセスできることを前提としてレポートなどを課すことができるようになり、授業計画そのものも変わることが期待される。

このような試みは、グーグル社や国立国会図書館等において精力的に進められているものの、公共性や著作権の観点から解決すべき課題も多く、完全な実現には至っていない。特に、日本の学術的刊行物の電子化の動きは海外に比べて遅いと言われている。本プロジェクトでは、千葉大学において実際に授業で利用されている学術的な刊行物を中心に、これらの電子的な再生を部分的に先行させ、授業において利活用できるように整備する。

以下、2. 1. 1ではレガシーコンテンツ再生の先行事例として進めている児童文学事典の再生の進捗状況を報告し、2. 1. 2では児童文学事典以外の刊行物の電子化についての進捗を報告し、2. 1. 3では電子化する刊行物へのポータルサイトの一つとして開発している授業資料ナビゲータシステムについて報告する。

2. 1. 1 児童文学事典の電子的再生

1) 背景

この活動では、レガシーコンテンツ再生の一つの先行事例として『児童文学事典』（日本児童文学学会編、東京書籍、1988年）の電子的な再生を進めている。一般に、事典は授業の予習や復習のための基礎資料として、多くの学生が頻繁に参照するものであり、その電子的な提供は利用価値が高い。さらに、頻繁に参照されることから、紙媒体での閲覧では経年劣化が進行しやすい問題もある。事実、千葉大学附属図書館に配架されていた本事典は、図2-1-1左に示すように、多くのページが失われ傷みも激しい。また、事典は執筆者が多く存在しており、電子化に向けての改訂作業や著作権処理ではさまざまな課題が生じる可能性が高いが、そのような課題を浮き彫りにすることも本プロジェクトの目的の一つである。このプロジェクトでは、本事典を授業教材としても活用しておられる本学教育学部の佐藤宗子教授、日本児童文学学会、および大日本印刷株式会社の協力のもと、本事典の電子化を進めている。

図 2-1-1 児童文学事典の経年劣化（左：元蔵書。右：新規購入したもの。）



2) 2012 年度の実施状況

初版から 15 年経過していることもあり、本事典の電子化とあわせて改訂作業も進めている。ただし、全面改訂ではなく、人名項目（生没年月日など）の更新等に留め、電子化を先に進めることにしている。その準備のために、出版社である東京書籍と日本児童文学学会の間で、本事典の電子化について覚書を取り交わし、学会側の判断で電子化を進めることが可能となる合意を得ている。

この合意を受け、2012 年度には、項目執筆者、連絡先、事典項目、および人名項目の一覧を日本児童文学学会が作成した。同時に、電子化を承認するかどうかについて執筆者に意思確認する作業も実施した（2 名が拒否）。

3) 2013 年度（5 月末まで）の実施状況

昨年度の準備を踏まえて、本年度では除外項目を除き、事典をスキャンし電子化まで実施している。検索機能を持たせることを想定し、スキャンするだけでなく、光学文字認識（OCR）も適用している。今後は、インターネット上での公開の詳細について検討を進め、本年度中には一般に公開する予定である。

2. 1. 2 授業資料ナビゲータ掲載資料の電子化

1) 背景

この活動では、日本児童文学事典以外にも授業の参考図書として教員が推薦している刊行物を中心に電子化を進めている。電子化する図書は、本学附属図書館が、図 2-1-2（左）に示すように Web 公開している「授業資料ナビゲータ」に掲載されている図書リストから選定している。授業資料ナビゲータは、図 2-1-2（右）に示すように、授業に関連するさまざまな資料のリストからなり、図書館員と授業担当教員が協力し作成している。授業資料ナビゲータは、Web 公開だけでなく、印刷した冊子を各授業開始時に配布しており、学生への認知度は高い。したがって、授業資料ナビゲータに掲載されている図書を電子化することにより、学生がそれらにアクセスし活用することが期待できる。また、授業資料ナビゲータに掲載されている図書は、図 2-1-3 に示すように、本学附属図書館内に専用のコーナーを設け配架しており、電子版が利用できるようになれば、このコー

ナーに配架している紙媒体と合わせて学生に提供できるようになる。

図 2-1-2 授業資料ナビゲータ

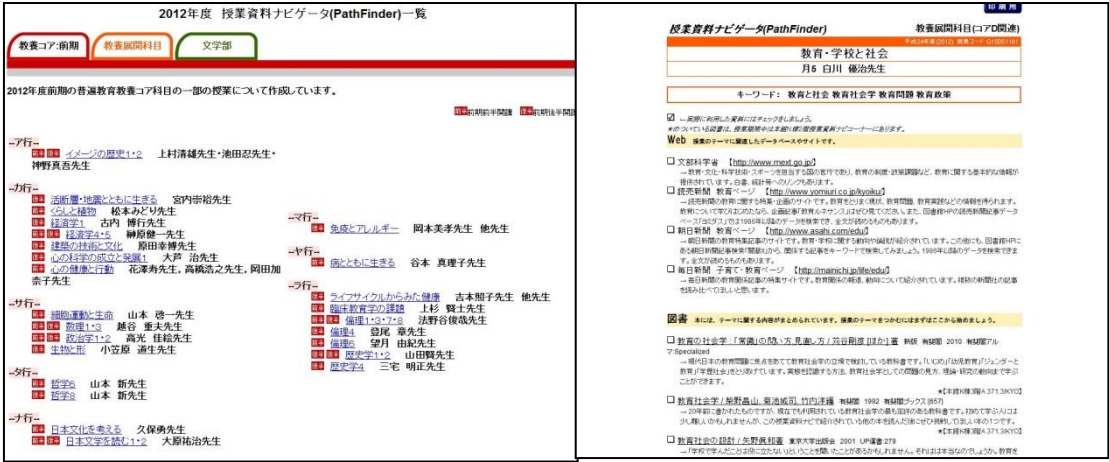


図 2-1-3 授業資料ナビゲータコーナー



2) 授業資料ナビゲータの利用状況

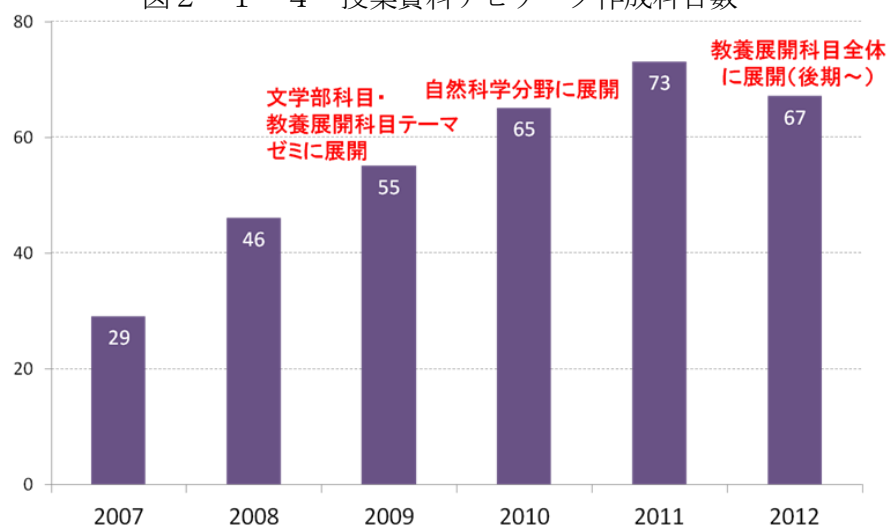
電子化について報告する前に、ここでは授業資料ナビゲータの利用状況について報告する。

図 2-1-4 に 2012 年度までの掲載科目数を示す。ここ数年は、70 科目前後で推移しているが、これは、授業資料ナビゲータに掲載した図書は、図 2-1-3 に示す通り館内に配架するため、その手間と配架場所の限界の問題があるためである。表 2-1-1 は、2012 年度の配架タイトル数と配架冊数である。

表 2-1-1 授業資料ナビゲータ掲載資料の配架タイトル数と配架冊数（2012 年度）

	2012 年度前期	2012 年度後期	合計
配架タイトル数	499	397	896
配架冊数	911	707	1618

図 2-1-4 授業資料ナビゲータ作成科目数



次に、授業資料ナビゲータコーナーに配架している図書の貸し出し状況について報告する。表 2-1-2 は、2012 年度において、配架されていた図書の貸出の状況を示している。なお、このコーナーには、原則、同じタイトルの図書が 2 冊配架されており、1 冊は閲覧用、もう 1 冊は貸出用としている。

配架タイトル数が 896、貸出タイトル数が 393 あることから、配架していた図書のうちおよそ 44%の図書が貸し出されていることが分かった。

表 2-1-2 授業資料ナビゲータ掲載資料の貸出タイトル数と貸出回数（2012 年度）

	2012 年度前期	2012 年度後期	合計
貸出タイトル数	203	190	393
貸出回数	371	431	802

貸出状況について、授業期間内の週ごとの貸出回数の推移をグラフにしたものが図 2-1-5 である。このグラフを見ると、冬期休業や試験補講期間を除いて、授業期間中は貸出数が一定の水準を保って推移しており、常に利用があることが分かる。冬季休業期間明けの 1/7-1/13 や試験期間・最終課題提出期限の前にあたる 1/28-2/3 のピークは、課題や試験への対策として利用されていると考えられる。

さらに、貸出状況について、身分別の内訳についても調査した。図2-1-6が調査結果である。全体の貸出回数に対して、学部1年生が35.7%、学部2年生が18.8%を占め、貸出の半数以上が両者によるものであることが分かった。同時期の本館全体の貸出数における学部1年生の貸出数は、全体の約10%であったことから、学部1年生のこのコーナーの利用率は高いといえる。授業資料ナビゲータは主題知識の乏しい初学者である学部1、2年生をターゲットとしているが、実際に授業資料ナビゲータが初学者へのナビゲーションツールとして機能しているといえる。

以上は、貸出に関する調査であるが、閲覧についての利用状況はRFIDタグを用いた方法を試行している。2012年度は機材の調整を進めた。

図2-1-5 授業資料ナビゲータコーナーの貸出回数の推移

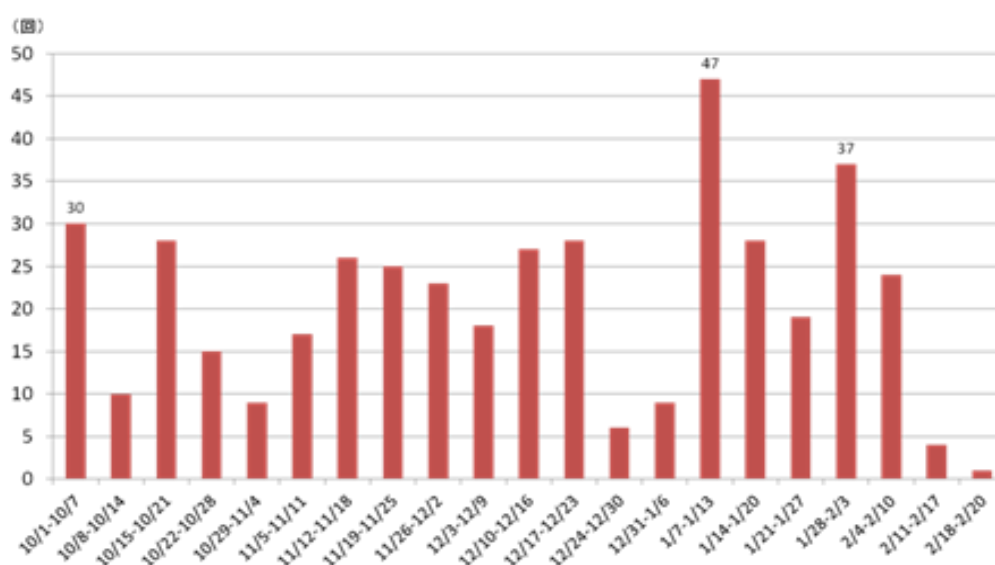
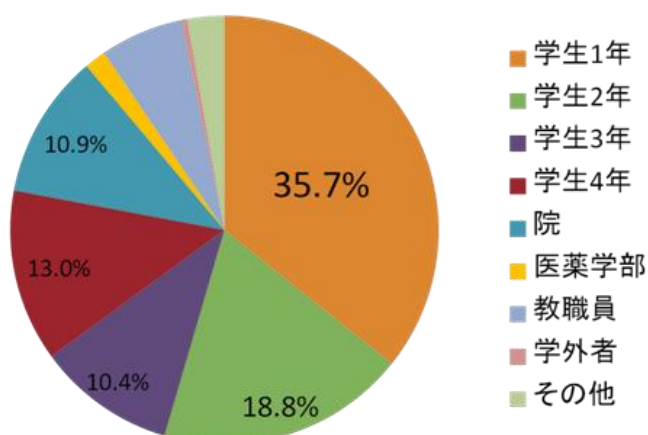


図2-1-6 授業資料ナビゲータコーナーの身分別貸出回数



3) 電子化の実施状況

2012 年度の授業資料ナビゲータに掲載されている 8 科目 87 タイトルの参考図書について、個別に各出版社と交渉を進めた。この交渉は、大日本印刷株式会社と共同して進めている。各出版社との交渉の結果、87 タイトル中 18 タイトル（約 20%）に関して電子化へ向けて前向きな回答を得ている。一方、これら以外の授業資料ナビゲータに掲載された 19 タイトルについては、その電子版を 2012 年度に 10 タイトル、2013 年度前期に 9 タイトルを購入しており、電子的に利用可能な環境を整備している。

4) 今後の計画と課題

電子化に対して慎重な対応を取る出版社も多いため、図書の電子版の利用は必ずしも予定どおりに進んでいるわけではない。この問題に対しては、アカデミック・リンク・センタの一部教員が「大学学習資源利用モデル研究会」という組織の運営・企画に参画し、より包括的な権利処理の可能性や流通について検討を始めている。

2. 1. 3 次世代授業資料ナビシステムの開発と運用

1) 背景

2. 1. 2 の活動で進めている図書の電子版へのアクセスのポータルサイトの一つとして、Web で公開している授業資料ナビゲータのサイトを想定している。授業資料ナビゲータの Web サイトは、手作業で作成されていたため、煩雑な作業が必要であり改善が望まれていた。さらに、授業開始前の時期に作成する必要があるため、各科目に対する作業日程が集中してしまう状況でもあった。また、作成の際に発生する授業担当教員と図書館員の間のやりとりが電子メールで行われていたため、その作業ログは担当者だけに留まり、システムティックに残せなかった。そこで、この活動では、授業資料ナビゲータ作成のためのシステムを構築し、資料リスト作成の省力化を進めている。

2) 2012 年度までの実施状況

授業資料ナビシステムの仕様策定と開発を実施した。仕様策定にあたり、本学にすでにある関連システム（OPAC や CURATOR など）との連携を強化しつつ、電子書籍へのアクセスのためのポータルサイトとしての機能を持ち、そして、教員と図書館員の共同作業ログをシステムティックに残せるように、以下の点を必須項目として整理した。

- ・ OPAC と連携した書誌データの取得と蔵書有無の出力のための機能
- ・ 公開用 HTML ファイルと配布用 PDF ファイルの自動生成機能
- ・ 機関リポジトリシステム CURATOR への登録のためのメタデータの自動生成機能
- ・ 電子書籍へのアクセスのための URL 入力機能
- ・ 電子掲示板方式による教員と図書館員の間の作業ログの記録機能

これらの要点をもとに仕様を策定し、システムの開発を実施した。あわせて、操作マニュアルも整備した。図 2-1-7 に、開発した本システムのスナップショットを示している。2012 年 1 月より、実際に運用を開始し、前期に 45 科目、そして後期に 22 科目の運

用実績があった。

さらに、この運用実績に基づいて、より使いやすいシステムにするために、インターフェースの変更や検索機能の追加を中心に、マイナーバージョンアップを 2012 年度末に実施した。

3) 2013 年度（5 月末まで）の実施状況

図 2-1-7 授業資料ナビシステムのスナップショット

The screenshot shows a web browser window with the URL http://pathfinder.alc.chiba-u.jp/teacher/navi/navi_edit.php. The page title is "千葉大学 授業資料ナビゲーター (教員向け)". The main content area is titled "■授業資料ナビ作成" and includes a "キャンセル" button. Below this, there is a section for "入カデモ科目" (Input Demo Subject) with the text "平成24年度(2012) 授業コード:PAMI2012". The main title of the course is "パターン認識と機械学習" (Pattern Recognition and Machine Learning), and the instructor is "水1 岡本一志先生" (Water 1 Mr. Okamoto Ichishi). There are two main input sections: "●キーワード:" (Keywords) with five text input fields, and "●資料:" (Materials) with a list of items: "プレ" (Preview), "ビュー" (View), and "対象" (Target). Below the materials list, there is a link "プレビュー対象: 全てOn 全てOff". To the right of the materials list, there are two buttons: "カテゴリ・テーマ追加" (Add Category/Theme) and "資料追加" (Add Material). At the bottom of the page, there are two buttons: "HTMLプレビュー" (HTML Preview) and "PDFプレビュー" (PDF Preview).

すでにシステム開発は完了し、2013 年度は運用を継続している。2013 年度前期の運用実績は、44 科目である。

2. 2 オンラインクラスルームプロジェクト

オンラインクラスルームプロジェクトでは、授業そのものを学習資源として活用するために、授業の動画配信を中心としたeラーニング環境を整備する。

2011年度は、動画配信設備の導入と試行的運用を行う期間と位置付け、授業動画を配信するためのプラットフォームとしてコンテンツスタジオおよびコンテンツ制作室を設置した。コンテンツスタジオは授業収録を目的とした教室であり、ここで行われる授業は天井備え付けのHDカメラと集音マイクで記録され、コンテンツ制作室にコンピュータネットワークを介して送られる。また、スクリーンに投影されるプレゼンテーション資料とHDカメラで撮影した映像を合成する装置も導入している。コンテンツ制作室には、コンテンツスタジオから受信した授業の映像・音声を編集するための機材が配備されており、収録から編集までシームレスに作業できる設計を行っている。

2011年度から2012年度前半にかけて設備を導入し、環境を整え、2012年度以降は、コンテンツスタジオおよびコンテンツ制作室を拠点に、学生スタッフ ALSA-TT (Academic Link Student Assistant-Technical Team) を雇用し、授業やセミナー等の収録から編集・配信作業までを実施している。

2. 2. 1 授業および授業紹介動画の収録および配信

1) 2012年度前期の実施状況

2012年度前期に開講されている授業から理系2科目および文系3科目について、ALSA-TTの研修が終了した7月から前期終了までの1ヶ月間、試行的に収録・編集・配信作業を実施した。

理系2科目については、板書のための授業であるため、許諾処理が必要な著作物が授業動画に記録されておらず、迅速な編集作業が可能であった。そのため、これらの授業については、7月末の試験期間までに編集作業を終了させ、ラーニング・マネジメント・システム(LMS)、Moodle上での公開・配信を行っている。なお、一部の授業については、コンテンツスタジオの収容人数を超えていたため、撮影機材一式を他の教室に持ち込み収録を実施した。コンテンツスタジオで収録した授業動画の一部を図2-2-1(左)に、撮影機材一式を他の教室に持ち込み収録した授業動画の一部を図2-2-1(右)に示す。

一方、文系3科目については、プレゼンテーション資料や書画カメラなどを用いた授業形式であり、図2-2-2に示すような、HDカメラのみの動画とカメラ映像とプレゼンテーション資料を合成した動画の2種類を収録している。これらの授業では、Moodleで動画配信するにあたり、許諾処理が必要な著作物が記録される可能性があることから、2012年度前期でのMoodle上での公開は行わないこととした。そのため、当該3授業については、授業期間終了後の夏季休業期間で授業動画の分析および担当教員への聞き取り調査を行い、授業で用いられた写真や資料などの情報提供を受け、許諾処理が必要な著作物の数について検証した。どのように許諾処理を進めていくかは今後の課題である。

図 2-2-1 授業収録の様子

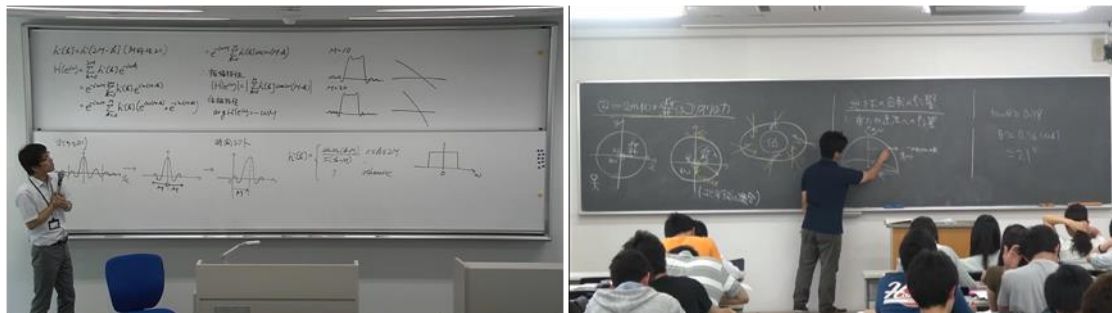


図 2-2-2 プレゼンテーション資料を使用した授業の様子



2) 2012 年度後期の実施状況

2012 年度後期では、反復学習による学習効果が期待でき、さらに板書を中心とした授業のため許諾処理を必要とせずに公開できる科目として、理工系の専門基礎科目（数学および物理学）5 科目の試験等を除いた計 69 回の授業収録および配信を実施した。収録した授業動画は、2 週間程度で配信することを基本にスケジュールを組み、コンテンツ制作室にて編集した。

配信の仕組みとしては、Moodle 上に動画配信用の専用コースを作成し、そのコース上で YouTube で限定公開設定とした動画をストリーミングにより閲覧できるようにした。Moodle の認証機能と YouTube の限定公開を連携させることで、本学の構成員のみがアクセスできるように設定した。

3) 2013 年度前期（5 月末まで）の実施状況

昨年度後期に続き、理工系の専門基礎科目 1 科目の授業収録を実施している。昨年度は授業単位で動画を編集・配信してきたが、今年度は授業担当教員の協力により内容のトピックごとの動画を作成している。編集作業および配信については、昨年度の実績によりマニュアルやワークフローがほぼ確定しており、その手順にしたがった作業が可能となった。

さらに、理工系の専門基礎科目 1 科目において、授業そのものではなく、授業で出題した演習の解説や授業で扱わない応用的な内容に関する動画の収録も実施している。配信は、授業担当教員の協力により Moodle の当該授業科目のコース上で、授業動画と同様に

YouTube で限定公開設定とした動画をストリーミングにより閲覧できるようにしている。

理工系科目の授業動画に加えて、初修外国語科目（英語以外）と教養展開科目と呼ばれる科目群の担当教員による授業紹介の動画の収録と配信を普遍教育センターと連携して実施した。初修外国語科目および教養展開科目は、全学部・全学年の学生を対象とする授業科目群であり、幅広い学問への興味関心を喚起させるための役割を担う千葉大学の普遍教育の重要な授業科目として位置付けられている。初修外国語は 12 言語からなり、教養展開科目は 200 科目以上が開講されていることから、学生にとっては、シラバスの情報から個々の授業内容・授業方法を受講前に知るだけでなく、動画による授業紹介を併用することで学生と授業のマッチングを支援できることが期待できる。

初修外国語に関しては 4 言語と全体のガイダンス、教養展開科目に関しては 11 科目を収録し配信した。なお、2013 年度前期の履修登録期間前に配信するために、収録と編集は前年度末に実施した。配信は、アカデミック・リンク・センターのホームページ上で、YouTube のストリーミング機能を用いて、アクセス制限はかけずに一般公開した。その理由は、入学したばかりの学部 1 年生の学生に多く視聴してもらいたいため、どこからでも容易にアクセスができることを配慮したためである。図 2-2-3（左）は、公開動画の一覧を掲載したホームページである。インターネット上での配信に加えて、附属図書館で館内貸出をしているタブレット端末にも動画をインストールし、インターネットが利用できなくても視聴できるようにした。図 2-2-3（右）は、タブレット端末上の動画一覧のスクリーンショットである。

図 2-2-3 授業紹介動画の公開



2. 2. 2 授業以外の動画の収録および配信

1) 2012 年度の実施状況

アカデミック・リンク・センターが主催しているセミナーの収録・配信を実施した。2012 年度に実施した 6 回のセミナーおよび 2011 年度に実施していた 8 回のセミナーも含めて、アカデミック・リンク・センターのホームページ上で、YouTube のストリーミング機能を

用いて、アクセス制限はかけずに一般公開した（アカデミック・リンク・セミナーについては、「教育力」・「学習力」向上プロジェクトを参照）。さらに、従来附属図書館のポッドキャストで配信していた動画・音声コンテンツ 35 件を YouTube に移行し一般公開している（ポッドキャストによるコンテンツ配信については、「教育力」・「学習力」向上プロジェクトを参照）。これら以外にも、FD (Faculty Development) やSD (Staff Development) のための学内研修会 4 件の収録支援も実施した。

2) 2013 年度（5 月末まで）の実施状況

前年度に引き続き、アカデミック・リンク・センター主催セミナーやFD・SD研修会の収録や配信を同様に実施している。さらに 2013 年度からは、アカデミック・リンク・センター主催の「1210 あかりんアワー」の企画のひとつである「教員が研究の楽しさを語る」についても、収録を実施している（1210 あかりんアワーについては、「教育力」・「学習力」向上プロジェクトを参照）。収録動画は、講演者に気軽に話をしてもらうことを重視し、一般公開をせずに館内貸出用のタブレット端末上での視聴のみにしている。

2. 2. 3 ALSA-TT の運営

1) 趣旨

オンラインクラスルームプロジェクトの遂行には、授業動画の収録・編集作業は欠かせず、さらに、収録した動画を配信するための Moodle の運用・更新、本プロジェクトやデジタルコースパックプロジェクトなどで開発したコンテンツの閲覧・活用を目的に附属図書館が貸出している端末の保守管理などの技術的支援が必須となる。しかしながら、業務が多岐にわたり継続的に発生するため、教職員だけでこれらの業務に対応することは不可能である。そこで、授業動画の収録から配信までの作業を行い、かつ、ICT (Information and Communication Technology) を活用した学習環境の整備を技術面で支援する学生スタッフとして ALSA-TT を雇用し、その運営体制を整備した。

2) 運営体制および業務

担当教員 2 名および担当職員 2 名の統括のもと、2012 年度は 11 名（大学院生 9 名，学部生 2 名），2013 年度は 17 名（大学院生 11 名，学部生 6 名）の体制で運営している。採用に関しては、学内で公募し、書類審査および面接を通して決定している。ALSA-TT の主な業務は次の通りである。

(1) 授業およびセミナーの収録・編集

コンテンツスタジオで行われる授業、授業紹介、およびアカデミック・リンク・センターが主催するセミナーを収録し、コンテンツ制作室において、配信用に動画を編集する。コンテンツスタジオでの収録が困難な場合は、撮影機材一式を他の教室に持ち込み収録を実施する。また、収録・編集に関するマニュアルを整備する。

(2) 貸出用ノートパソコン・タブレット端末の保守管理

附属図書館で学生用に貸出しているノートパソコン（15 台）とタブレット型端末（10 台）について、各端末 2 週間に 1 回程度のペースで、セキュリティスキャンやソフトウェアアップデートを実施する。

また、2012 年度に千葉大学において数年間の稼働実績がある Moodle について、セキュリティや利便性向上のためのバージョンアップを行った。バージョンの変更にとともに、新たにマニュアルなどの整備が必要となることから、ALSA-TT がそのマニュアル作成の補助業務を行った。

3) 研修活動

ALSA-TT による業務を円滑に進めるために、雇用後に各業務について研修を実施している。研修は On-the-Job Training を基本とし、短期間で業務に従事できる体制を取っている。

授業収録・編集業務については、模擬授業および実際の授業・セミナーの収録と編集を通して研修を実施している。

第一期 ALSA-TT には、アカデミック・リンク・セミナー（2012 年度第 1 回）の収録作業を行い、コンテンツスタジオでの授業収録についての導入教育を実施し、その後約 1 ヶ月をかけてコンテンツスタジオでの授業収録からコンテンツ制作室での動画編集までの一連の流れを習得するための研修を行った。具体的には、プレゼンテーション資料だけの授

図 2-2-4 授業収録研修における模擬授業の様子



図 2-2-5 端末の保守管理作業の様子



業、ホワイトボードだけの授業、両者を併用する授業の 3 パターンの収録を想定し、各 SA による 5～10 分程度の、各自が持参したプレゼンテーション資料（写真があるスライド、数式があるスライド、文字だけのスライドなど）とホワイトボードを用いた模擬授業を計

11 回実施した。模擬授業の様子を図 2-2-4（左）に示す。また、模擬授業を自身で編集することも行った。編集作業の研修の過程では、映像編集技術を持ったメンバーがコアとなりメンバー同士で教え合い情報共有を行う様子も見受けられた。この授業収録・編集業務の研修では、コンテンツスタジオおよびコンテンツ制作室に設置された設備の使い方について習熟し、作業のマニュアル化を図るとともに、収録・編集パラメータの最適化についても分析している。

第二期 ALSA-TT にも同様に、アカデミック・リンク・セミナー（2012 年度第 5 回）の収録作業を行い、コンテンツスタジオでの導入教育を実施した。さらに、授業紹介動画の収録のために、SA 自身で教員役、インタビュー役、および収録班を分担し、模擬収録を実施した。模擬収録の様子を図 2-2-4（右）に示す。編集作業については、第一期のメンバーがチュータ役となり、第二期メンバーの研修を実施した。

貸出用ノートパソコン・タブレット端末の保守管理業務については、基本的な作業の流れを教職員が作成し、その流れに従った保守管理業務の研修を実施した。その後、保守管理業務を遂行する中で得られた気づきなどを SA が充実させる形で、端末の種類やオペレーティングシステム毎に、セキュリティスキャンやソフトウェアアップデートなどの作業手順のマニュアル化を行った。この保守管理業務は、週に 1 回実施しており、1 回の作業で 10 台の端末を 2 時間かけて保守している。保守管理の作業自体は、授業収録・編集研修の際と同様に、図 2-2-5 に示すような SA 同士で教え合い情報共有できる形で行なっている。

2. 2. 4 現状と今後の課題

コンテンツスタジオやコンテンツ制作室等の動画を収録・編集するハード面の整備がほぼ完了し、学生スタッフ ALSA-TT による技術支援体制も整い、動画を収録・編集するためのソフト面の整備も進んでいる。2013 年度前半までに、アカデミック・リンク・センターの YouTube アカウントで配信している動画コンテンツの総数は、174 件（非公開も含む）になっている。このように動画コンテンツを収録・編集する体制が整う一方で、動画コンテンツの許諾処理とアクティブラーニングに向けてのその効果的な活用方法について課題が残されている。

1) 許諾処理について

権利処理については、一つ一つの著作物に対して許諾を交渉する試行を 2011 年度および 2012 年度（デジタルコースパックプロジェクトを参照）に進めてみたものの、非常に手間がかかるうえに結局許諾を得られないことも多いことが判明している。さらに、2012 年度前期に収録した 5 科目については、映像中に現れた著作物の数え上げにより、70 点の著作物を確認している。このことから、許諾処理の件数も非常に多くなることが判明している。この課題に対しては、個別交渉の方法も進めつつも、より包括的な権利処理の可能性について検討を始めている。そのために、レガシーコンテンツ再生プロジェクトと同様に、アカデミック・リンク・センターの一部教員が「大学学習資源利用モデル研究会」の運営・企画に参画している。この研究会は、複数の大学や出版社等のメンバーから構成され、アカデミック分野における教材コンテンツの利活用のための著作権についてのガイドラインの策定を目指している。

2) アクティブラーニングのためのコンテンツの利活用

公開している授業関連の動画コンテンツのアクセス数や視聴時間を調査すると、一部の学生しか利用していないことが分かった。そこでは、いわゆる「2:8の法則」、すなわち2割の学生が全体の8割のアクセス数や視聴時間数を稼いでいることが観察されることが多い。逆に言えば、8割の学生はほとんど動画にアクセスしてない状況になっている。また、動画へのアクセス日を調査すると、試験前などに集中することが多い。すなわち、単位取得が、動画アクセスの主な動機になっていると思われる。

以上のことより、授業をそのまま録画して配信することよりも、授業の中にいかに効果的にコンテンツの利用を組み込むかが課題であるといえる。この課題に対して、本学に本年度組織化された高等教育研究機構と連携をしつつ、「ICTを活用した新しい授業」を全学的に公募し、アカデミック・リンク・センターの資源を有効に活用することを検討している。

2. 3 デジタルコースパックプロジェクト

デジタルコースパックとは、刊行物の一部、教員の自作教材、あるいは学術論文の一部などを組み合わせて電子的にパッケージ化し、新たな授業教材を作成するための支援を行うプロジェクトである。レガシーコンテンツ再生プロジェクトでは、刊行物全体を電子教材として提供することが目的であったが、本プロジェクトでは、教員に対して、さまざまな資料を組み合わせたお手製の電子教材の作成支援を行うところに特徴がある。

このような支援のために、2013 年度前半までに、次のサブプロジェクトを進めている。まず、デジタルコースパックを作成するために欠かせない著作権処理について、実際に開講されている歴史学の授業を対象に試行している。歴史学の授業では、刊行物の一部や論文などの資料を参照することが多く、デジタルコースパックの作成にふさわしい授業として選定している。次に、物理学を対象に、演習問題集を e ラーニング向けに電子化する試みを進めている。物理学をはじめとする理系の基礎科目では、演習問題集は基礎学力のトレーニング教材として必須であり、これを電子化し共有することによって、授業資料の一部として容易に組み込むことができるようになる。最後に、デジタルコースパックを多様な形式で学生に提供するための実験として、3つの授業で実際に利用されている自作教材を POD (Print On Demand) で印刷した事例を報告する。

2. 3. 1 デジタルコースパックのための著作権処理

1) 背景

オンラインでの教材提供にかかる著作権処理の事例蓄積を目的として、LMS を通じた授業外学習教材の提供のための使用許諾取得を行っている。オンラインでの教材提供は、その過程におけるサーバでの複製・送信可能化が著作権法第 35 条による権利制限の範囲内であるかどうかが不分明であり、現状では権利者の許諾が必要である。このため、授業外学習を促進するための教材提供を可能にすること、すなわち、教育目的による使用許諾の取得（著作権処理）を試み、デジタル教材提供の条件整備の事例を蓄積するために、以下のように著作権処理を実施した。

2) LMS を通じた教材提供のための著作権処理

この活動において取り上げた事例は以下のような授業における教材提供である。この授業は受講者数が十数名程度の少人数で、演習形式で開講されており、受講者は主たるテキストとは別に毎回授業前に 1～2 点の論文等をダウンロードして読む必要がある。ここで授業前学習のための主たるテキストとは別の論文等を、千葉大学において運用している LMS, Moodle を通じて受講者に提供することにより、授業外学習を促進することを目的として、著作権処理を行った。

3) 著作権処理の方法と手順

この活動に際しては、文学部・秋葉淳准教授の協力を得て、授業開講時期以前に副教材論文リストを提供してもらい、このリストに沿ってアカデミック・リンク・センター教員および図書館員が参考資料の通り当該論文収録雑誌・図書の発行者（学会、出版社等）に許諾願いを発送した。許諾可否の返送があり次第、当該の授業開講教員に通知した。

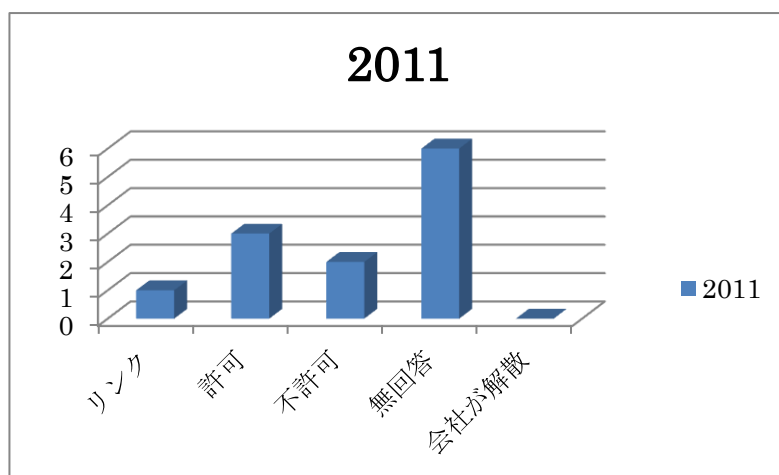
許諾を得た場合、授業担当者またはアカデミック・リンク・センター担当者によって当該論文のコピー（電子ファイル）を作成しサーバへアップロード、受講者は当該論文のコピーを閲覧またはダウンロード・プリントアウトし、当該授業の予習・復習のための補助・参考教材として使用した。

また許諾の条件としては、特定の論文、特定の授業に限ったうえで、受講者への配布方法を「授業担当者および受講者にアクセスが限定された環境における複製・サーバ蓄積・ダウンロード配布・印刷」（許諾申請書面より）に限った。

4) 著作権処理状況

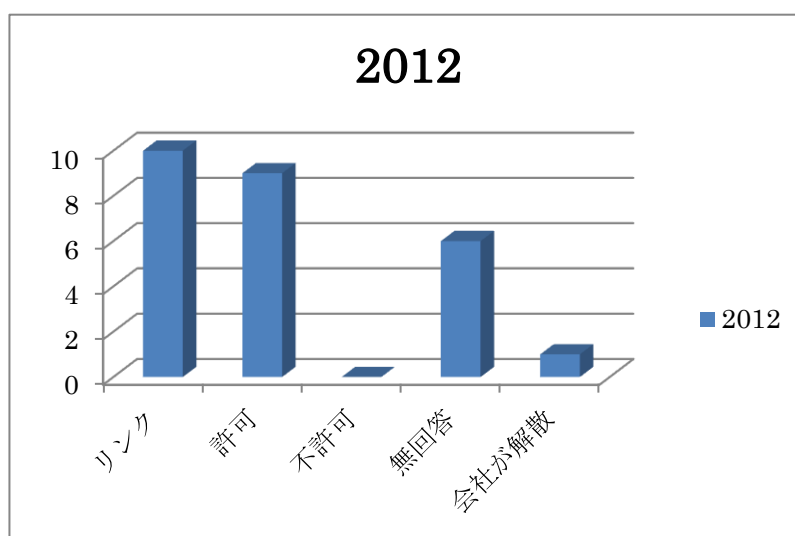
2011 年度には、文学部後期専門科目「歴史社会学演習 b」（秋葉淳・文学部史学科准教授）の予習用副教材として計 11 点の論文の使用許諾申請をした。11 点のうち雑誌論文は 6 点、図書の一部である論文が 5 点。前者については、あらかじめ PDF データとして公開済みの 1 点は受講者にリンクを示して取得させ、その他使用許諾が得られた 2 点を電子化の上、Moodle 上で取得可能にした。雑誌論文のうち 2 点については無回答、著作権が著者にあるため、著者に直接問い合わせるものが 1 点だった。後者については、5 点（3 社）について不許可回答が得られたものが 1 社 2 点、無回答が 2 社 3 点だった。

図 2－3－1 論文の使用許諾状況（2011 年度）



2012 年度前期には、文学部開講科目「地中海地域史 b」（秋葉淳・文学部史学科准教授）の予習用副教材として計 26 点の論文の使用許諾申請をした。26 点のうち雑誌論文は 16 点、図書の一部である論文が 10 点。前者のうち、あらかじめ PDF データとして公開済みの 10 点は受講者にリンクを示して取得させ、その他使用許諾が学校あるいは著者から得られたものが 6 点だった。後者については、許可回答（著者許諾が必要なものを含む）が 3 点、無回答が 7 点（出版社の「解散」によるものを含む）だった。

図 2－3－2 論文の使用許諾状況（2012 年度）



5) 今後の課題と計画

この活動を通じ、著作権処理にあたって、あらかじめアクセス可能な教材をより多く使用するなどの工夫がある程度可能ではあったが、限界もあった。さしあたって現時点までに、以下のような作業上の問題点が明らかとなった。

第一に、学会・出版社によってはこのような使用を許諾することができる権利者が著者と学会・出版社の間で不分明であり、許諾申請者（この場合千葉大学）の問い合わせに対して明確な対処をできない場合があること。第二に、権利の所在が明らかになっている場合であっても、それが著者であるときに連絡の手段がなく、許諾が得られることが期待されるにもかかわらず実際には不可能である場合があること。第三に、一つの授業あたりの、上記のような使用許諾申請の作業量が非常に大きなものとなること、の3点である。

大学教育における単位の実質化が求められる中で LMS の活用は不可欠となりつつある。したがってここで目指しているのは、教育目的で授業において使用し、著作権者の権利を害することなく、限られたアクセスによって受講者のみを使用するという場合に複製・送信可能化を行う条件の整備であり、この活動はその予備作業としての事例蓄積を目的としていた。現時点までに予習用教材としての論文を対象とした使用許諾取得の事例蓄積を行ったが、さらに多様な形態の教材に関してこれを行うことが当面の課題である。

2. 3. 2 物理演習問題集の電子化

1) 背景

多様な形態での教材の提供というコンセプトのもと、LMS を通じた物理演習問題の電子化を行っている。大学教育における単位の実質化が求められる中、対面授業に加えての LMS の導入は、授業外学習の促進において不可欠となりつつある。すなわち、LMS で事前に提示された授業資料を利用した予習、対面授業における板書内容や LMS で提示された電子教材を利用した自宅での復習、LMS を通じた宿題の提示と受領というように、

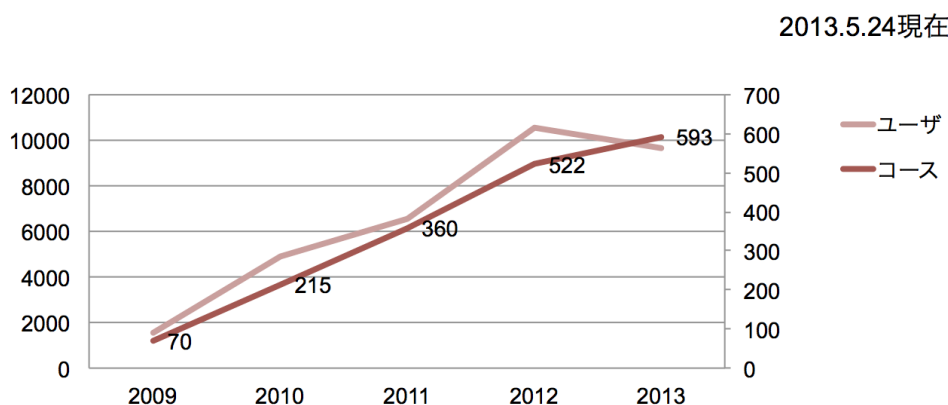
授業と授業外学習をリンクさせる手段として LMS が存在することになる。このような状況において、LMS の一つであり、現在本学で利用している Moodle を通じた授業外学習で利用可能なコンテンツとして物理演習問題の電子化を進めている。

2) 千葉大学 Moodle

ここでは、物理演習問題集を提供するプラットフォームである千葉大学 Moodle について説明する。Moodle はインターネット上に授業用ページや Web サイトを作成するためのオープンソースのソフトウェアである。Moodle 上に開講された授業用ページ (Moodle では「コース」と呼ぶ) にアクセスすることで、授業時間以外でも授業教材や関連資料の閲覧、小テストの受験等を通して予習・復習が可能となる。その他主な機能として、オンラインでのレポートの提出・受領、フォーラムへの投稿による授業参加メンバーでの意見交換、授業情報の一斉連絡などが挙げられる。

千葉大学 Moodle は 2009 年度に普遍教育センターにて導入・試行、2010 年度より本格運用を開始した。また 2012 年度からは、普遍教育センターとアカデミック・リンク・センターとの協力体制のもと運用している。導入後着実にコース数、利用者数を伸ばしており、2013 年度 (5/24 現在) は、コース数 593、利用者数 9630 である (図 2-3-3)。

図 2-3-3 千葉大学 Moodle の利用状況



3) Moodle を通じての物理演習問題集

本活動は、理工系学部 of 1, 2 年生が受講することになる千葉大学普遍教育 (一般教養教育に相当) における共通専門基礎科目 (物理) を対象としている。具体的内容として「力学」「電磁気学」「熱統計力学」「量子力学」などを含むが、まずは大半の理工系学生が受講することになる「力学」「電磁気学」に関する問題集の電子化を進めている。

出題、解答および採点は Moodle を通じてオンラインで行われるため、学生は瞬時に結果を受け取ることができ、理解していない部分をすぐに正すことが可能となると同時に教員にとっても採点業務の省力化を図ることができる。このように、課題通知、課題の受領、採点、返却といった一連のプロセスをオンライン化することでの効率化に加えて、教員は学生の小テスト履歴を随時確認できるため、学生の理解不足の項目については翌週の授業にて解説を行うというフィードバックも期待できる (解説自体を Moodle 上で行うことも

考えられる)。また Moodle での問題作成は一般に手間がかかるが、一度作成してしまえば問題のデータベース化が可能であるため、複数の教員で問題を共有することが可能となる。

4) 問題の作成方法

現在問題集作成を予定しているのは「力学」「電磁気学」「数学基礎 (物理数学)」である。力学、電磁気学は 2 セメスタ分の授業を念頭においており、それぞれ力学 1, 2, 電磁気学 1, 2 (数学基礎と合わせて計 5 科目) を作成予定である。2012 年度は、「力学 2」「電磁気学 1」「数学基礎」の問題作成を行った。なお、問題の作成にあたっては、大日本印刷株式会社および丸善出版株式会社の支援のもと進めている。

問題の電子化では、Moodle の小テストモジュールを利用した。小テストモジュールで作成可能な問題の種類は「数値問題」「多肢選択問題」「穴埋め問題」「組み合わせ問題」「記述問題」など多数存在するが、証明問題や解の形が複数ある場合など、表現が一意に定まらない従来タイプの問題は電子コンテンツとして扱いにくいという問題がある。たとえば、同じ内容を表す解の形が複数ある場合として、次のようなものが考えられる。

$$\frac{1}{4\pi\epsilon_0 r^2} e_r, \quad \frac{1}{4\pi\epsilon_0 r^2} \frac{\mathbf{r}}{r}, \quad \text{大きさ} \frac{1}{4\pi\epsilon_0 r^2} \text{で動径方向を向いたベクトル}$$

これらはいずれも同じことを表しているがそれぞれ表現は異なっており、記述問題として扱う場合には、これらのすべての表現を正解として列挙しなければならない。ここでは、数値問題や多肢選択問題といった自動採点が可能な方式での問題作成を進める。

現在、基本問題の形式として 2 種類を考えている。一つは問題解説をベースとした穴埋めの選択問題 (図 2-3-4 の問題 1) で、解説を読みながら理解を確認するための問題である。もう一つは先の穴埋め選択問題で確認した内容を問題解説に頼らずに解くことで理解を定着させるための問題である (図 2-3-4 の問題 2)。また、問題には簡単な解説を付け、受験後に確認できるようにしている (図 2-3-5)。

図 2-3-4 サンプル問題 (基本問題 1 および基本問題 2)

1: 解説をベースとした練習問題

1 点
得点: 0/5

半径 a の球体に一様な密度で電荷 q が分布するときの電場を、ガウスの法則により求めてみよう。電荷分布の対称性より、電場の向きは球の中心から放射状である。電場の大きさ E は、球の中心からの距離 r の関数 $E(r)$ となる。したがって、電荷が分布する球と同心の半径 r の球面 S に対して、

$$\int_S \mathbf{E} \cdot d\mathbf{S} = (\quad)$$

となる。

一方、 S の内部に含まれる電荷 $Q = \int_V \rho dV$ は、 $r > a$ のとき、

$$Q = (\quad)$$

2: 基本的問題

2 点
得点: 0/1

一様な線密度 λ で (無限に長い) 直線上に電荷が分布するとき、直線から距離 r の点に現れる電場の大きさ E をガウスの法則を用いて求めよ。ただし、真空の誘電率を ϵ_0 とする。

選択肢

① $E = \frac{\lambda}{2\epsilon_0}$
② $E = \frac{\lambda}{2\pi\epsilon_0}$
③ $E = \frac{\lambda}{2\pi\epsilon_0 r}$
④ $E = \frac{\lambda}{2\pi\epsilon_0 r^2}$

解答欄

送信

図 2-3-5 問題解説

解答後には解説で確認

2 問題
得点: 1/1

一様な線密度 λ で（無限に長い）直線上に電荷が分布するときに、直線から距離 r の点に現れる電場の大きさ E をガウスの法則を用いて求めよ。ただし、真空の誘電率を ε_0 とする。

選択肢

① $E = \frac{\lambda}{2\varepsilon_0}$ ② $E = \frac{\lambda}{2\pi\varepsilon_0}$ ③ $E = \frac{\lambda}{2\pi\varepsilon_0 r}$ ④ $E = \frac{\lambda}{2\pi\varepsilon_0 r^2}$

解答欄
④ 正解 ✖

送信

解説
直線を軸とする半径 r 、長さ l の円筒の表面 S を考える。電荷分布の対称性より、電場は側面のみを垂直に一様な大きさ E で貫くので、

$$\int_S \mathbf{E} \cdot d\mathbf{S} = E \times (\text{側面積}) = E \cdot 2\pi r l$$

となる。一方、 S の内部に含まれる電荷は $\lambda \cdot l$ なので、ガウスの法則より

$$E \cdot 2\pi r l = \frac{\lambda \cdot l}{\varepsilon_0}$$

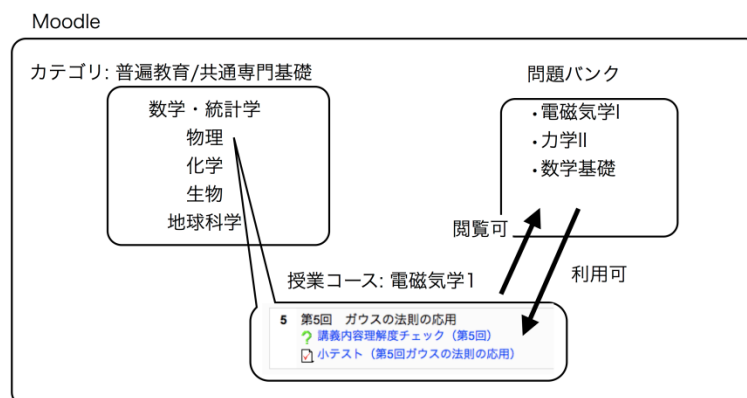
$$\therefore E = \frac{\lambda}{2\pi\varepsilon_0 r}$$

不正解
この解答の評点: 0/1 この解答のペナルティ: 0.1

5) 問題バンク

個々の教員が毎回の授業向けに複数の問題を用意し Moodle の小テストとして用意するのは大変であるため、問題を共有できる仕組みが望まれる。ここでは複数の教員が Moodle 上で小テスト問題を共有化する方法として、Moodle の標準機能である「問題バンク」を利用する。問題バンクの利用申請をした教員であれば、自身の担当するコースの小テストに問題バンクで公開される問題を活用することができるため、問題を作成しなくても小テストの実施が可能となる。現在、当方で用意した「力学2」「電磁気学1」「数学基礎」に関する問題、計 245 題を掲載している。

図 2-3-6 問題バンクの利用



6) 2012 年度後期試行状況

2012 年度前期に作成した物理問題集「電磁気学1」について、本学融合科学研究科山本和貫准教授の協力のもと、山本准教授担当授業「物理学 CI 電磁気学入門1」にて試行を

行った。

6-1) 実施方法

対象学科：工学部ナノサイエンス学科

科目：物理学 CI 電磁気学入門 1 (1 年後期)

実施方法：(1) 小テストの位置付け：毎回講義後の宿題とした。また小テストは出席を兼ねるものとし、小テストを受験しなかった場合はその回の授業を欠席扱いとした。(2) 解答期間：次の授業までの 1 週間とした。(3) 出題方法：全員に同じ問題を出題。ただし、1 回の宿題に含まれる複数の問題を Moodle 側で自動的にシャッフルして出題するようにした。また受験回数は 1 回とした。

6-2) 試行結果、学生の反応

受験率は 93%、平均点は 73.2 点/100 点であった。大半の学生が 70 点以上であり、講義の復習という意味では問題の難易度は適当と思われる。当初、解答を Moodle で行うということもあり、紙ベースでの実施と比べて受験率の低下が懸念されたが、出席確認と組み合わせる運用ということもあって高い受験率を維持することができた。しかし、出席確認と組み合わせるといった積極的な利用の促進を行わない場合は受験率の低下が予想されるため、授業と密接に関係させつつ運用するといった工夫が必要であろう。

小テストには簡単な解説が付いており、受験後に解説を閲覧しながら解答を確認することができるようになっているが、授業での解説を望む声があった。このことは現在付属している解説に改善の余地があることを示している。また、小テストの受験を 1 回と制限し、その後閲覧できない設定としていたが、学生からは復習のために繰り返し利用したいとの要望もあった。

7) 今後の課題

今回の試行を通して下記に示す課題が明らかとなった。運用方法の検討を行うとともに、新たな実施計画のもと再度学生の反応を調べ、問題集自体の改善および運用方法の改善に努めたい。

・受験回数の検討

今回の試行では 1 回のみの受験としたが、授業の復習という意味では受験回数に制限を設けず全問正解するまで解答させるという方法も考えられる。ただしその場合は、端からクリックするようなことを回避するため、受験回数を制限するなどの方策が必要である。

・難易度及び問題数の拡充

授業内容の確認という目的からすると、現在の扱っている問題の難易度は適切だったと言えるが、問題数の拡充という点からは、現状より難しい問題も同数程度必要と考える(ただし、物理を専門としない学科への展開を考える場合には易しい問題も必要)。

・問題のタイプの拡充

現在作成している問題は、多肢選択形式の問題のみであるが、Moodle の数値問題では

問題のパラメータをランダムに設定できるため、数値問題とすることで異なる計算問題を提供することが可能となる。また、易しめの問題としては○×問題の利用も考えられる。

- Moodle 運用上の問題

- ア) 問題の表示

問題を Moodle 化するにあたり、多くの問題をシステマティックに作成する都合上、問題の名称は「CM2-011-01」のような管理上の名称となっている。そのため、実際の内容が問題名を見ても把握できず、問題の中身を表示して確かめる必要がある。今後問題の選択を効率的に行うためには、逐一問題を選択しなくても内容を判別できる仕組みが必要である。

- イ) 選択した問題の履歴表示

問題バンクから問題を選択した際、使用履歴が表示された方が問題の使用状況が一目瞭然となり使い易いといったように、利用者の利便性を考えた問題の表示方法の工夫が望まれる。

- ウ) 問題バンクの管理・運用の方法

現在こちらで用意した問題のみを掲載しているが、今後、教員が新規に作成した問題の掲載等についての検討とともに、問題バンクを利用する際のユーザ権限の検討が必要である。

2. 3. 3 デジタルコースパックの POD による提供の実験的試行

1) 背景

電子化された授業教材は、パソコンやタブレット端末を通してアクセスできるが、一方で、紙媒体での教材の入手も、一覧性の優位さや書き込みが容易であることから、少なからず要求があると考えられる。そこで、我々は多様な形態での教材提供というコンセプトのもと、POD により電子化された教材を紙媒体で提供する実験的な試行を実施した。

2) POD マシンによるデジタルコースパックの印刷

実際の授業の配布資料を対象に POD による冊子体を試作した。この試行で対象とした授業は、将来的には幅広い分野の授業でデジタルコースパックの仕組みを実現することを念頭に、異なる分野から選定している。図 2-3-7 に、試作した冊子体を示す。

表 2-3-1 冊子体を試作した科目名

科目名	分野
教育・学校と社会	教育学
歴史社会学演習 b	歴史学
ディジタル信号処理	工学

図 2-3-7 POD によるコースパックの試作例



3) 2013 年度の現状報告

本プロジェクトの実現には、POD システムを大学に導入し維持していくことが前提である。POD システム自体は、大手書店ですでに導入されている事例が存在するが、大学において同じビジネスモデルがふさわしいのかという議論も含めて、POD システムの導入に関して検討し、その結果、館内に設置されている大学生協の書籍部に導入され、運用を開始している。

2. 3. 4 教員に対する相談体制と新しい授業の実験的構築

1) 相談体制

デジタルコンテンツを授業に活用したい教員のために、コンテンツ制作室において技術支援を 2013 年度後期より開始する。コンテンツ制作室には、PC や動画編集ソフトウェアが設置されており、おもに動画コンテンツについての相談を受け付ける体制について、現在検討している。技術相談には、ALSA-TT の学生スタッフ（ALSA-TT については、オンラインクラスルームプロジェクトを参照）を、技術補佐としてコンテンツ制作室に配置する予定である。

2) 新しい授業の実験的構築

アカデミック・リンク・センターの機能を活用した新しい授業を構築するために、数科目程度の授業を対象に実験的に取り組むことを検討している。このような取り組みは、当センターだけの活動に留まらず、他部局の機能も活用し、全学的に取り組むべきことであることから、高等教育研究機構（2013 年度に設置）のプロジェクトとして位置付けることが検討されている。今後、全学的に公募を実施し、協力教員を募集することが予定されている。

2. 4 「参加する学習」プロジェクト

本プロジェクトは、アカデミック・リンクが提供する人的支援の取り組みの一環であると同時に、この取り組みに参加することによる支援者としての学生自身の自律的成長を促す取り組みでもある。具体的には、(1)学生による学生のための学習相談（「分野別学習相談」）を中心にセミナー型学習支援企画を組み合わせた学習支援が取り組みの核となり、そのほか(2)学習相談・学習支援企画の改善、(3)これらを通じた支援者としての学生自身の自律的成長の促進に取り組んでいる。

このうち分野別学習相談は、N棟2階のラーニング・コモンズに位置づけられるスペースにおいて、図書館員によるレファレンスサービス、教員によるオフィスアワーと同一空間内で組み合わされたハイブリッドな学習支援デスクの一環として本格実施を開始した。

2. 4. 1 学習支援担当スチューデント・アシスタント (ALSA-LS)

分野別学習相談を中心とする学習支援は、ALSA-LS と呼ばれるスチューデント・アシスタント (SA) を支援者として行っている。2011 年度中に整備された学内規程によれば、千葉大学の SA は「千葉大学に在学する優秀な学生に対し、教育的配慮の下に授業等に係る学習相談業務等を行わせ、これに対する手当を支給することにより、学生への経済的支援に資するとともに、学生の学習に対する意識向上の機会を提供し、もって、学生支援の充実を図る」(千葉大学スチューデント・アシスタント実施要項より)ものと位置付けられた。

アカデミック・リンクによる SA を Academic Link Student Assistant (ALSA/アルサ)、中でも学習支援を担当する ALSA を ALSA-LS (Learning Support) と呼び、彼らによる分野別学習相談等の学習支援を実施している。ALSA-LS は各分野を研究する千葉大学の大学院生であり、2011 年度の分野別学習相談試行期（2012 年 1～2 月）には、学内各分野の専門教員の推薦によって、2012 年度本格実施以降に補充の必要があった場合には、適宜分野別に公募して採用している。

2. 4. 2 分野別学習相談の実施

1) ALSA-LS による分野別学習相談の基本方針

アカデミック・リンクにおける学習相談では、(1) 教室や学習室などの個室ではなく図書館施設内のオープンな場所で行う、(2) 相談分野は数学・物理・化学の自然科学領域と「レポートの書き方」を含む文系全般の、計 4 分野を置く、(3) 各分野を専門とする大学院生が ALSA-LS として学習相談を受ける、(4) 学生相談室等との協力体制を整備し、学習相談を超えた学生支援を可能とする、(5) 学習相談の記録用紙、利用者アンケート、業務日誌等を整備して情報を蓄積することでシステムの改善を図る、(6) ALSA-LS は事前研修・事後研修（振り返り）に参加し、支援者としての気づきやシステムの課題と改善を全体で共有する、を基本的な実施方針として取り組むこととした。

これらのうち (5) と (6) は、ALSA-LS を学習相談を受けて質問に対応する受動的存在ではなく、相談者の学習過程を共有する支援者であり、そのことを通じて自分自身の成長とシステムの運営と改善にも参加する役割をもつ自律的な存在と位置づけたために実施したことである。なお実際には、振り返りは事後だけでなく、学習相談期間中にさらに 1 回行っている（「中間振り返り」）。

2) 2012 年度前期分野別学習相談

①概要

2012 年度前期分野別学習相談は 2012 年 4 月 23 日に開始, 8 月 7 日まで実施した。2011 年度末の試行期に担当した ALSA-LS に, 2012 年 3 月の公募による採用者を加え, 数学 4 名, 物理 5 名, 化学 4 名, 文系 4 名の計 17 名の ALSA-LS によって行った。

昼休みを含む休み時間の相談に対応することを想定し, 授業時間とずらした時間割によって実施した。また, 1 コマにつき ALSA 2 名で担当しているが, 実験的に専門分野の異なる院生の組み合わせによるコマ (以下, 混合コマ) を設置した (数学・物理)。

表 2-4-1 2012 年度前期学習相談時間割

	月	火	水	木	金
11:30-13:00	物理	-	数学・物理	物理	数学
13:00-14:30	文系	-	文系	数学	文系
14:30-16:00	化学	化学	-	数学	化学
16:00-17:30	化学	化学	-	物理	物理

②結果

2012 年度前期学習相談の相談件数と人数は以下のとおりである。

表 2-4-2 2012 年度前期学習相談

2012 年度前期相談件数(科目・月別)

	数学	物理	化学	文系	計
4 月	0	1	1	2	4
5 月	11	19	4	5	39
6 月	14	17	3	1	35
7 月	28	21	6	0	55
前期計	53	58	14	8	133

2012 年度前期相談人数(科目・月別)

	数学	物理	化学	文系	計
4 月	0	2	1	2	5
5 月	14	24	7	7	52
6 月	14	19	3	2	38
7 月	29	26	8	0	63
前期計	57	71	19	11	158

(「7 月」には 8 月第 1 週を含む。人数の記録がない場合, 1 件 1 人として計算。)

3) 2012 年度後期分野別学習相談

① 概要

2012 年度後期分野別学習相談は 2012 年 10 月 9 日に開始, 2013 年 2 月 13 日まで実施した。9 月の公募による採用者を加え, 数学 4 名, 物理 5 名, 化学 4 名, 文系 6 名の計 19 名の ALSA-LS によって開始した。11 月にさらに追加公募し, 12 月からは数学担当を 1 名追加して計 20 名となった。

前期の相談者の状況に関する ALSA-LS からの報告に基づき, 午後のみの開設, 授業時間と同じで 6 限を含む時間割に変更して実施した。また混合コマも増設した (数学・物理, 数学・化学)。

表 2－4－3 2012 年度後期学習相談時間割

	月	火	水	木	金
12:50-14:20	-	物理	-	文系	-
14:30-16:00	-	-	物理	化学	数学・物理
16:10-17:40	物理	文系	文系	数学	数学・物理
17:50-19:20	化学	-	数学・化学	数学	-

② 結果

2012 年度後期学習相談の相談件数と人数は以下のとおりである。

表 2－4－4 2012 年度後期学習相談

2012 年度後期相談件数(科目・月別)

	数学	物理	化学	文系	計
10 月	4	9	2	1	16
11 月	8	6	8	2	24
12 月	1	3	3	3	10
1 月	25	16	6	2	49
後期計	38	34	19	8	99

2012 年度後期相談人数(科目・月別)

	数学	物理	化学	文系	計
10 月	5	13	3	1	22
11 月	9	6	10	2	27
12 月	1	3	8	3	15
1 月	28	17	8	2	55
後期計	43	39	29	8	119

(「1 月」には 2 月第 1 週を含む。人数の記録がない場合、1 件 1 人として計算。)

2012 年度を通して、分野別学習相談において次のような傾向が見られた(参考資料参照)。

(1)文系学習相談の場合を含め相談者の理系学部への偏りがややみられる、(2)相談者は 1 年生が多かったが、それ以外には前期にはおそらく院試の関連で 4 年生の割合が大きく、後期に 2、3 年生の割合が増えた、(3)相談対応時間については、前期に比べ後期には短時間化するものの 3 割前後が 40 分以上かかっていること、などである。ただし、振り返りによって件数・人数・その他の情報に関して「記録漏れ」があることが明らかになっている。

4) 2013 年度前期分野別学習相談 (4～6 月)

① 概要

2013 年度前期分野別学習相談は 2013 年 4 月 22 日に開始された。ただし、事前研修中の 4 月 19 日に相談者が来たため、急遽その場で数学担当 ALSA-LS が対応した。2012 年度 ALSA-LS のうち 2013 年度も継続できる院生のほか、2013 年 3 月の公募による採用者を加え、数学 3 名、物理 4 名、化学 3 名、文系 6 名の計 16 名となった。これに後述の ALSA-LS Advisor (数学) が 1 名加わる。

時間割については、時間帯は同じだが、学習相談対応における複数分野担当者の同時対応の利点が ALSA によって確認されたため、理系分野同士の混合コマを大幅に増設することになった。またそれとは別に、各分野に対する相談者のアクセス可能性の拡大のため、文系と理系の混合コマも設置してある。

表 2-4-5 2013 年度前期学習相談時間割

	月	火	水	木	金
12:50-14:20	物理			数学 文系	物理 文系
14:30-16:00	物理	文系	物理 化学	化学 文系	物理
16:10-17:40	数学 化学	数学	数学 化学	物理 化学	物理 数学
17:50-19:20	数学 化学	数学 文系	数学 化学	物理 文系	物理 数学

② 結果

2013 年度 4 月から 6 月までの相談件数および人数は以下のとおりである。

表 2-4-6 2013 年度前期学習相談

2013 年度前期相談件数(科目・月別)

	数学	物理	化学	文系	計
4月	4	3	3	4	14
5月	21	16	9	1	47
6月	13	15	15	3	46

2013 年度前期相談人数(科目・月別)

	数学	物理	化学	文系	計
4月	4	4	4	4	16
5月	23	17	10	1	51
6月	15	16	23	3	57

2. 4. 3 改善のための継続的活動

1) 振り返りの実施

2012 年度 4 月の分野別学習相談の本格実施開始以降、事前研修のほか、中間期および事後の研修として ALSA-LS による「振り返り」を各期 2 回行っている。「振り返り」は、個別の相談・対応事例の ALSA-LS 間における共有を通じて、分野別学習相談のシステム全体の課題を明らかにし改善の提案を行うとともに、個別相談対応方針における ALSA-LS 個々の改善活動を意識化・明確化する機会となっている。

振り返りは、2012 年度前期については 6 月 28 日、7 月 3 日（中間）、8 月 9 日（事後）、2012 年度後期については 12 月 6 日（中間）、2 月 13 日、14 日（事後）に行った（参考資料の各回の記録を参照）。

2) システム全体の改善

分野別学習相談の改善は主に、分野構成・時間割等のシステム全体と個別相談対応方法の 2 つの面で行われた。分野別学習相談におけるシステムの全体（分野構成・時間割等）については、2011 年度試行期以来の実際の学習相談業務の経験から、振り返りの際に ALSA-LS によって報告・提案がなされたことを踏まえて改善してきた。

①時間割は、担当院生確保の目的から、また、考える力を育むという方針のために相談対応が長時間化する傾向にあることから、相談者の便宜のため授業時間割と一致させることとした。また相談者の学年構成や複数人による相談への対応の経験から、6 時間目の開

設が必要との意見があり、これにも対応した（いずれも 2012 年度前期中間振り返りにおける報告・提案から）。

②混合コマについて、試行的導入の結果、1 件の相談に対する多面的な対応が可能になる点と、学生の特定分野へのアクセス可能性が向上する点が ALSA・LS から報告されたことにより、順次拡大した（各回の振り返り）。ただし前者については同じ分野内でも専門の異なる者同士で協力して対応することがあるなど、必ずしも混合コマに限った効果ではない点も指摘されている（2012 年度後期中間振り返り）。

③ALSA・LS 全体における専門分野の構成について、各分野内での専門の配置（例えば「化学」における、物理化学・無機化学・有機化学・生化学など）をどの程度充実させるべきかをめぐり、振り返りにおいて議論があった。専門分野が異なり、かつ高度な内容の質問に対して、対応に苦慮することから充実の必要性も指摘されるが、他方で「アカデミック・リンクと ALSA の趣旨は、自分で考えることができるようになること。…答えを教える方が楽ではあるが、…それは無意味で、答えそのものは教えない、答えの出し方の方向性を教えるのがよいのでは。調べ方は分かるので、専門分野をすべてそろえるという必要はないのでは」と、アカデミック・リンクの趣旨に立ち返ることによって発想の転換を提案する意見も出されている（2012 年度前期中間振り返り）。各分野による違いなどにも考慮する必要があるため、課題と位置付けて検討を続けている。

④事前予約・メール等での学習相談受付の導入について、振り返りにおいて議論があった。事前に対応の準備ができ、高度な質問や分野のあいまいな質問に対する対応能力・効率の向上が見込めることから ALSA・LS によって提案されたものである。他方で、「答えだけを求めようとする」「丸投げ」が助長され「学生の自律的学習における ALSA の意味がなくなる」可能性や、「答えてしまっただけは授業を担当する先生の意図にも反する」など（2012 年度後期中間振り返り）、授業の尊重・自律的学習の支援という方針と矛盾する可能性も指摘され、慎重に検討をすすめることになった。

⑤文系学習相談が潜在的な需要を十分に捉えられていないことについて文系担当 ALSA・LS から、レポート執筆について相談するという発想が乏しく広報の工夫やセミナーと相談の組み合わせが必要である点や、やはりセミナー型企画によって幅広い教養の修得を啓発するという学習支援を行う必要性の指摘が、教員や図書館員に伝えられており、2013 年度の課題と位置づけている。

3) 個別相談対応における特徴、課題、改善

個別の学習相談に対する対応方法について、ALSA・LS 自身による日常的な改善の努力がなされており、これが振り返り等を通じて報告・共有されることによって学習相談対応方針全体の改善につながっている。

①ALSA・LS は相談対応の際に必要な応じて「一緒に本を探しに行く」「まず本を探して来させる」ということを通じて、図書館という場を活かしてコンテンツ利用と結びつけた学習相談対応を行っていることが、振り返り等における報告から分かった（2012 年度前期中間、2013 年度前期中間振り返り）。相談者が自分で考えるということを支援するという方針に沿った対応であるため、コンテンツ利用のより有効な活用について検討を継続している。

②質問を受けた ALSA の専門外あるいは複数の専門分野をまたぐような高度な内容の質問への対応方法が課題として ALSA-LS によって指摘されていた。これについて、より近い専門の ALSA-LS との協力（2012 年度前期中間、後期中間振り返り）や複数分野の担当者間の協力（各回振り返り）による対応と、その有効性が振り返り等で報告されるようになっており、一定の改善が確認できた。

③システム全体の改善をめぐる提案などから、自律的学習の支援という方針の ALSA-LS による共有・定着の進行が確認できるが（2. 4. 3. 2-③④を参照）、そのことにより学習相談の具体的な場面における同方針の実現が課題となってきた（2012 年度後期事後振り返りなど）。これに対して ALSA-LS は、「一緒に取り組む」という姿勢で対応する（2012 年度前期中間振り返り）、「自分では話さずに相談者に考えてもらう時間が長い」（2013 年度前期中間振り返り）などの試行錯誤をしている。さらに 2013 年度に入ると、個別の質問の背景にある相談者の知識・理解を踏まえた相談対応をするため、授業の内容や相談者の理解の状況を把握することに努めていることが明らかになった（2013 年度前期中間振り返り）。また相談者の理解度や持参したノート等から判断して必要に応じ、ノートをとり理解する努力をすることなど、授業を受講する基本的な態度に関するアドバイスも行うようになった（2013 年度前期中間振り返り）。

④このような自律的学習の支援を基本方針とした学習相談において、1 件当たりの対応の長時間化は必然であり、そのために相談者を待たせたり相談対応ができないというケースが多いことが報告されてきた（2012 年度後期中間、事後振り返り）。これに対して、説明の工夫等の調整を行うほか、数回に分け段階化して対応する（2012 年度前期中間、2013 年度前期中間振り返り）等の工夫をしている。なお、段階化・複数回対応をより効果的にするため、「相談者カルテ」方式の提案もされたが（2012 年度後期事後振り返り）、原則として匿名相談のため、慎重な検討が必要だと判断した。また複数の相談者により効果的・効率的に対応するため、相談者を待たせる際に相談内容等を書かせる「問診票」方式が ALSA-LS から提案され（2013 年度前期中間振り返り）、これを導入した。

4) 分野別学習支援システムの改善と ALSA-LS の自律的成長

以上のようにシステム全体と個別の取り組みの両面において、ALSA-LS による記録の集積と共有、また振り返りを通じた提案や改善の実践報告がなされ、これを全体の改善に結びつけている。その結果として学習相談を自らの成長の契機とするばかりでなく、中間振り返りにおけるディスカッションに見られるように、意識的に相談者の自律的学習者としての成長を促そうとする創意工夫に踏み出している。

このような ALSA-LS 自身の自律的成長と、学生の自律的成長を促すためのシステム全体の成長は、事前研修、相談担当、中間・事後研修というサイクルによって学習相談の取り組み全体に主体的に参加する回路が確保されていること、教員・図書館員による日常的なモニタリングを通じた PDCA サイクルが機能することによって、可能となっている。

これらの改善の前提として、「自律的学習の支援」と「授業」を学習の中心に位置付けるという基本方針が絶えず参照されており、現在は ALSA-LS によるこの方針の共有と定着が進むことによって、各相談への対応にいかにか活かしていくかという点で工夫が重ねられている。その結果、相談対応にあたって、授業における理解など相談者の質問の背景にあ

る知識の状況を把握し、各専門分野の ALSA-LS による協力や役割分担をすすめようとしている点が確認されている。

したがって分野別学習相談を中心とする学習支援およびその改善は、ALSA-LS が専門分野における学習・研究を深めようとする態度と経験によって自身の知識を体系的なものとして組織化することによってはじめて可能となっており、教員・図書館員のこれに対する十分な理解を必要としている。このことをシステムとしていかに確保していくかが、2013 年度以降の課題である。

2. 4. 4 セミナー型学習支援企画の実施と改善

1) ALSA カフェ

ALSA-LS による学習支援は、学習相談のほかに、N 棟 1 階プレゼンテーションスペースにおける学生向けセミナー企画「1210 あかりんアワー」においても行った。ここでは、ALSA-LS の大学院生が学生向けに、学習を中心とした大学生活について、自らの体験を活かしつつアドバイスをするというもので、シリーズ名を「ALSA カフェ」と題したプレゼンテーションを昼休みに行った。

2012 年 4 月から 6 月までに計 4 回開催し、それぞれの内容は、第 1 回「大学 4 年間の中で「今」すべきこと」（4 月 19 日）、第 2 回「教育学部以外で教員免許を取るかどうか迷っている人へのアドバイス」（4 月 20 日）、第 3 回「研究のための留学」（4 月 26 日）、第 4 回「レポートの書き方（理系編）」（6 月 8 日）である。2013 年度には、第 5 回「はじめてレポートを書くひとのために」（5 月 31 日）、第 6 回「教養としての映画の見方、あるいは映像に込めた花束」（6 月 14 日）を開催した。

2) レポートセミナー

「ALSA カフェ」のほか、2012 年 12 月から 2013 年 1 月にかけて行われた、アカデミック・リンク・センターおよび附属図書館主催のレポート作成セミナーにおいても、そのうち 2 回（1 月 15 日の講習会の「作成編」、1 月 17 日のワークショップ）を、ALSA-LS を講師として開催した。2013 年 5 月 31 日の第 5 回「ALSA カフェ」も、講習会「作成編」の内容を改良し ALSA-LS を講師として開催したものである。

3) セミナー型学習支援企画の改善

2012 年度のレポート作成セミナーには、講師役以外の ALSA-LS も同席し、ワークショップにおける補助のほか、観察とレポートによるモニタリングを行った。2013 年度の第 5 回「ALSA カフェ」の内容・スライド・配布物は、その結果を踏まえて教員の監修のもと ALSA-LS 自身が改良したものである。

このモニタリングによる改良によって改善の効果が認められたことから、「ALSA カフェ」およびレポート作成セミナーについて、「開催→モニタリング→改良や新規企画の提案」というサイクルによって絶えず改善を可能とするシステムを確立することが、セミナー型学習支援企画の改善における 2013 年度の課題と位置づけている。

2. 4. 5 今後の課題

1) 学習相談対応の改善にかかわる課題

振り返り等で ALSA-LS から指摘・提案された内容のうち、継続して検討すべき点が2点挙げられる。第一に、広報の強化の必要性が指摘されている。また相談可能な内容をより分かりやすく可視化し、相談者の利便性をより高める必要がある点も指摘されており、広報活動全体の中での適切な位置付けとあわせて、2013 年度に検討し、取り組むべき課題となっている。第二に、予約制の導入や、ALSA-LS 間の情報共有や協力のための基盤整備(ALSA-LS の提案では ICT の活用などが想定されている)の必要が指摘されているが、まだ未着手である。その担当者の確保とあわせて 2013 年度の検討課題となっている。

2) 自律的システムとしての学習支援体制の確立にかかわる課題

分野別学習相談を中心とした ALSA-LS による学習支援を、自律的システムとして確立するためには、以下のように多岐にわたる検討課題がある。第一に、学習支援担当 ALSA-LS の各分野における安定供給が課題となる。雇用のための方針や方法も視野に入れて見直しに着手する必要がある。2013 年度においては、各分野の ALSA-LS からのヒアリング等によって検討を開始する。

第二に、ALSA リーダーの導入と教員・図書館員との役割分担の見直しを検討する必要がある、具体的には2-4-3-4)に挙げた課題と一体のものとして検討していかなければならない。ALSA リーダーについては、その役割について ALSA-LS とも議論を深める必要がある。また 2012 年度末に ALSA-LS から、学位取得後も大学に籍を置く ALSA-LS 経験者の経験と知識を活用したい旨提案があり、2013 年度からこれを「ALSA-LS アドバイザー」として導入したが、「ALSA-LS アドバイザー」が十分に学習支援活動に貢献できる条件とは何かを整理し、必要に応じて整備していく。

3) その他の課題

セミナー型企画の運営・改善体制についても、2013 年度に検討・試行すべき課題として位置付けられる。コンテンツの利用と学習支援の組み合わせについては、改善されてきているが、さらなる充実に向けて引き続きすすめる必要がある。

2. 5 「教育力」「学習力」向上プロジェクト

「教育力」「学習力」向上プロジェクトは、学生、教職員によるアカデミック・リンク機能についての理解と活用を促し、学習、教育にかかるスキルの向上を実現するものである。このプロジェクトの企画実施の具体的実務は、白川・國本・姉川・谷が担当している。

本プロジェクトは、「アカデミック・リンク・センター プロジェクトロードマップ」において、「教育／学習の情報化の研修機会の提供、ALC の活動成果の発信、ALC 各プロジェクトのシンポジウム等の企画の全体調整、アカデミック・リンク・セミナーの継続的实施、全学 FD・部局 FD への技術的貢献」を実施するものとして位置付けられている。2012 年度、2013 年度の具体的な活動内容は以下のとおりである。

2012 年度

- ①アカデミック・リンク・センター主催のセミナー、各プロジェクトのシンポジウム等の企画調整による年次計画の策定と運営
- ②上記年次計画に基づくアカデミック・リンク・センター主催セミナーの継続実施（教員対象、図書館・出版等関係者対象企画をそれぞれ一定割合で立案、隔月開催）
- ③プレゼンテーションスペースにおける学生対象企画の立案と実施
- ④ALSA-GS による学生対象活動の実施支援
- ⑤全学 FD 企画室・各部局と連携し、全学および各部局の FD の e ラーニング化（コンテンツ・ラボ完成後）の検討
- ⑥図書館ポッドキャストの YouTube への移行

2013 年度

- ①隔月 1 回のアカデミック・リンク・センター主催のセミナーの継続(FD の一環として)
- ②プレゼンテーションスペースにおける学生対象企画の立案と実施（「1210 あかりんアワー」の継続）
- ③高等教育研究機構・各部局と連携し、FD におけるコンテンツスタジオの提供など e ラーニング化に向けた技術支援を行う。

本章は、これらの計画に対して、本報告書の対象期間である 2012 年 4 月から 2013 年 5 月末までの活動内容として、1) アカデミック・リンク・セミナー、2) 1210 あかりんアワー、3) ALSA-GS の位置付けの見直し（担当プロジェクトの変更）、4) 全学および各部局の FD の e ラーニング化への技術的支援のあり方、5) 図書館ポッドキャストの YouTube への移行について、その実施状況を報告するとともに、その課題を示す。

2. 5. 1 アカデミック・リンク・セミナー

1) 背景

アカデミック・リンク・セミナーは、千葉大学全学に対して、教育・学習の情報化の研修機会を提供するとともに、本センターの活動成果を広く社会全体に発信することを目的とした事業である。当セミナーは 2010 年度に、千葉大学情報部主催で実施されていた「情報化月例セミナー」を拡張し、2011 年度よりアカデミック・リンク・センターの独自事業として実施したものである。2012 年度からは、教員を対象とした企画と、図書館・出版等

関係者を対象とした企画をそれぞれ一定の割合で立案し、隔月開催としている。

2012 年度のアカデミック・リンク・セミナーでは、2011 年に引き続き海外からの研究者を招いた国際セミナーを実施し、さらに、国立大学図書館協会との共催によるシンポジウムを実施した。昨年度同様、セミナー番外編として図書館関係の全国的フォーラム（第 14 回図書館総合展）へも参加し、学内外向けの情報発信にも努めている。

本節では、2012 年度に実施した、アカデミック・リンク・セミナー第 1 回（2012 年 5 月実施）から第 5 回（2013 年 2 月実施）、および、前述の番外編を含めた取り組み状況を記載する。

2) 実施状況

①実施状況

アカデミック・リンク・セミナーは、2012 年度同様、アカデミック・リンク・センター教員会議において、年間計画および各回の内容を審議、決定の上、開催している。2012 年度は隔月 1 回の頻度で、合計 6 回、実施した。現在までのアカデミック・リンク・セミナーの開催実績は、参考資料（16）-1 のとおりである。

アカデミック・リンク・セミナーは、前述のとおり、千葉大学全学に対する研修機会の提供と社会全体に対する本センターの活動成果の発信を目的とした事業である。このため、各回ごとに、千葉大学教職員、千葉大学在学生、出版社・図書館関係者等、主な対象を設定したうえで、テーマを企画・実施している。

2012 年度は、学内向け FD を意識したテーマ設定としつつも、より学外への報知や連携を重視した企画構成で事業を実施した。第 1 回セミナーでは、2011 年度の各プロジェクトにおける成果や課題を学内外へ向けて報告し、第 2 回セミナーでは、ネイチャー・ジャパン株式会社の遠藤昌克氏と、大日本印刷株式会社の盛田宏久氏を迎えて、電子的コンテンツについての講演を開催した。第 3 回セミナーでは、米国アラバマ大学図書館情報学大学院院長である Heidi Julien 博士を招いた国際セミナーを実施した。また、番外編である第 14 回図書館総合展では、学外向けに各プロジェクトの進捗状況を報告し、当日は 170 名近い参加者があった。第 4 回セミナーは、国立大学図書館協会との共催によって行い、「ラーニング・コモンズ再考」のタイトルの元、山田礼子同志社大学教授、小山憲司日本大学准教授、野末俊比古青山学院大学教授の 3 名を招いたシンポジウム形式で実施した。第 5 回セミナーでは、土屋俊大学評価・学位授与機構教授を迎えて、MOOCs（Massive Open Online Courses, 大規模オープン・オンライン・コース）の話題を軸にデジタル・メディアによる大学の「変容と消滅」の可能性をめぐる講演を開催した。

②実施後の公開

2012 年度も引き続きセミナー参加者に対するアンケートを実施し、「当該セミナーでの発見点」「よくわからなかったこと」「期待する企画・テーマ」「自由な感想」の記載を求めている（参考資料（16）-2）。また、アカデミック・リンク・セミナーは録画し、報告者の許諾を得たうえで YouTube に掲載し、アカデミック・リンク・センターのホームページで当日配布資料、アンケート結果とともに公開している。

3) 現状と課題

アカデミック・リンク・セミナーは、ロードマップの計画に沿って開催されており、その実施状況は昨年度に引き続き順調である。2012 年度は、学内外に対するセンターの事業実施状況の報告や、研究開発活動の紹介、さらに、学外との連携開催などに関して一定の成果を上げたといえる。また、2011 年度の評価報告書において、参加人数が低減傾向にあることを本事業の今後の課題として指摘した。今年度からは隔月開催となったため単純な比較はできないものの、番外編の学外向けフォーラムも含めると、各回の参加人数の平均に関しては改善の傾向がみられる。しかしながら、今年度も依然として学内からの参加者が少ないという傾向は続いており、千葉大学全学に対する研修機会の提供（FD）を意識した企画構成や、学内向けの広報などに、より一層の工夫が求められる。

2. 5. 2 「1210 あかりんアワー」

1) 背景

2012 年度事業計画において「プレゼンテーションスペースにおける学生対象企画の立案と実施」とされた事業として、2012 年 4 月より、「1210 あかりんアワー」（以下、あかりんアワー）を実施している。あかりんアワーは、附属図書館 N 棟 1 階に新設されたプレゼンテーションスペースを活用して、千葉大学の学生と教職員の距離を縮めることを目的に実施しているショートセミナーである。12 時 10 分から 40 分までの 30 分間を利用して開催している。この名称は、開始時間とアカデミック・リンク・センターのマスコットキャラクターである「あかりん」に由来する。

2) 実施状況

①実施状況

あかりんアワーは、新入生を対象としたガイダンス的情報提供を主眼に置くとともに、新設されたプレゼンテーションスペースの広報としての意味も含めて 2012 年 4 月より実施できるように、2011 年度中にその企画及び運営体制の準備を行った。

2012 年度の実施状況としては、2012 年 4 月は月曜から金曜日のあいだ原則毎日開催し、5 月以降は火曜日と金曜日の週 2 回の実施を原則としつつ、登壇者との日程調整のなかで別曜日にも振り替えるなど柔軟に対応することとした。

5 月以降の各回の内容としては、火曜日は「教員が研究の楽しさを語る」として、教員が自らの研究を学生に伝えることで、専門分野以外の研究活動を知る機会を提供する企画を実施した（図 2-5-1 参照）。この企画では、登壇教員に紹介する研究に関する図書・資料を 3～5 点ほど推薦してもらい、資料の推薦文とあわせて掲載したブックガイド（A4 サイズ 1 枚）を作成して参加者に配布している。また、推薦された資料とブックガイドは、登壇教員の簡単な経歴と当日の写真とあわせて、附属図書館 N 棟 3 階ブックツリーに専用コーナーを設け、展示している（図 2-5-2 参照）。

金曜日は、主に次の 3 つの企画を週替わりで実施した。1 つ目は、「千葉大人の意外な一面を知る」として、教職員の趣味や特技を披露することで、多様で豊かな社会的活動が存在することを伝える企画である。2 つ目は、「ブックトーク 働くオトナが学生に薦める 1 冊の本」として、教職員が心に残った 1 冊の本を学生に紹介することで、読書を通じた気

づきや学生生活へアドバイス伝える企画である。2013 年 1 月には特別版として、学生から登壇者を募り、「ブックトーク 学生版」を実施した。3 つ目は、「ALSA カフェ」として大学院生である ALSA（ALSA については「参加する学習」プロジェクト、「新しい図書館員」プロジェクト、及び 2. 5. 3. ALSA-GS を参照）のメンバーが 1 年生をはじめとする学士課程在学学生に大学生活の中でのアドバイスを伝える企画である。以上が 2012 年度の実施状況である。

2013 年度の実施状況としては、開催頻度は 2012 年度と同じである。ただし、2013 年 4 月には「アカデミック・リンクウィーク」と称して、特に新入生に対してアカデミック・リンクの活動についての関心を喚起するとともに、学内的に「学習活動を支える」アカデミック・リンクの役割のビジビリティを高めるための期間を設定し、あかりんアワーもこの期間は連日企画を開催した。

各回の企画内容は、基本的に 2012 年度の企画を継続して実施している。ただし、「千葉大人の意外な一面を知る」については、これを「外国に暮らす」として発展させ、特に海外に暮らした経験のある教職員に登壇を依頼している。「千葉大人の意外な一面を知る」では、多様で豊かな社会的活動が存在することを学生に伝えることを目的としていたが、2012 年に千葉大学が全学型のグローバル人材育成プログラムに採択されたことを受け、教職員の社会的活動の中でも、特に海外勤務や留学、海外研修・サバティカルなどを通じて経験した海外での生活経験について話をしてもらうことで、学生の海外留学や外国への関心を喚起することを目的としている。以上が 2013 年 5 月末までの実施状況である。

あかりんアワーは、2012 年 4 月から 2013 年 5 月までに 81 回（2012 年度に 66 回、2013 年度に 15 回）開催した。その開催実績は、参考資料（17）のとおりである。なお、2012 年 6 月に学生公募型企画として企画した「千葉大生の主張」は、応募者数が最少催行件数として設定していた 4 件を満たさなかったことから流会とした。それ以外は、すべて計画どおりに実施できている。

図 2-5-1 「教員が研究の楽しさを語る」の様子



図 2-5-2 「教員が研究の楽しさを語る コーナー」(N 棟 3 階)



②登壇者の決定手順

各回の具体的な内容、登壇者の決定は、プロジェクト担当者間で原案を作成したうえで、アカデミック・リンク・センター長の承認の下、アカデミック・リンク・センター教員会議に報告している。決定したプログラムは、月ごとに役員打ち合わせ、教育研究評議会、部局長連絡会、事務協議会等、全学の会議・連絡会において広報を含めて報告している。

なお、2012 年 7 月以降、あかりんアワー内の企画である、「千葉大人の意外な一面を知る」、「ブックトーク 働くオトナが学生に薦める 1 冊の本」、「外国に暮らす」の登壇者については、利用支援企画課長を通じて、職員課の協力を得ながら、各事務部局に登壇候補職員の推薦を依頼しており、全学的協力を得ている。

3) 現状と課題

「プレゼンテーションスペースにおける学生対象企画の立案と実施」として企画されたあかりんアワーは、2012 年 4 月から 81 回の開催を経て、学生対象の企画として定着しつつあるといえるだろう。その企画立案・運営の体制、方法もほぼ確立されている。2012 年度から 2013 年度にかけての実施状況から、現状として、企画の特徴を 3 点指摘できる。

第一に、「教員が研究の楽しさを語る」は、その特徴として、研究者としての教員の活動内容を学生に見せること、総合大学としての学問の多様性や他分野の研究内容や方法を伝える機能を有していることが挙げられる。このことは、学生に対して授業以外での多様な学習の契機を提供する意味を持っている。具体的には、この企画を通じて、所属する学部以外の教員の専門領域の学問に触れることができ、そのことは、自分の興味・関心範囲を広げる意味を持つためである。登壇教員に図書・資料の紹介を依頼していることもこのことにつながる。また、登壇教員は、単に研究の紹介をするだけではなく、学生に対するメッセージを含めた報告を行うことが多く、そのことは、学生の方向性に有益な示唆を与え

ているものと思われる。また、本プロジェクトでは、各学問領域だけでなく年齢層も多様な教員に登壇を計画的に依頼しており、それが実現している。加えて、登壇したことでプレゼンテーションスペースを知った教員が、後日、授業やイベントをプレゼンテーションスペースで実施する例もあり、図書館が持つスペースの活用にもつながっている。

第二に、職員参加企画である「千葉大人の意外な一面を知る」、「ブックトーク 働くオトナが学生に薦める1冊の本」、「外国に暮らす」では、登壇候補者の選定に全学的な協力を得ていることが重要である。職員の多様な活動や経験を可視化し、学内関係者に伝えることは日常業務の中では難しい。これらの企画は、学生と職員、教員と職員、職員同士の相互理解の促進の契機となるものであり、そのことを全学的な協力の中で実現しつつある。なお、このことは、職員にとってプレゼンテーション能力の向上につながる機会として、SD (Staff Development) の機会にもなっている。2013 年度から実施している「外国に暮らす」は、学生の海外留学や外国への関心を喚起すると同時に、学生の長期・短期の留学を促進するひとつの方法として機能していると考えられる。

第三に、教員、職員のほかに、ALSA として学習相談を担当する大学院生が学部生に助言をするプログラム (ALSA カフェ)、結果的に流会となったものもあるが、学生自身が話をするプログラム (千葉大生の主張、ブックトーク学生版) のように、学生が登壇者となる企画も実施している。教職員だけでなく、学生が学生に対して発信していく機会の一つを提供していることは重要である。2013 年度から、ALSA カフェについては、企画段階から ALSA が関わり、学生の目線が加わることで、更に充実したプログラムとなることを目指している。

以上、2012 年度から 2013 年度にかけての実施状況より、学生に対して授業以外での多様な学習の契機となっていること、実施において全学的な協力を得ていること、教職員に加え、学生が学生に対して発信していく機会となっていること等が特徴として挙げられ、いずれも積極的に評価されるべき点と考えられる。

他方、あかりんアワーの課題として、2013 年 3 月の評価委員会報告書では、参加者数の現状と、それを改善するための広報の工夫を指摘していた。2012 年度は広報として、月別のイベントカレンダーと各回のポスター (図 2-5-3 参照) を作成し、アカデミック・リンク・センターの web ページ、ツイッター、フェイスブック、デジタルサイネージへの掲載、附属図書館の web ページ、学内各所へのポスター掲示、立て看板の設置をおこなった。このような広報をおこない、2012 年度の参加人数としては、企画やテーマによる増減はみられるものの、ほぼ 30 名程度 (あかりんアワーへの参加には事前の申し込みは不要であり、且つ出入りは自由であるため、この人数は当日の記録写真を参照した概数である。) であった。2013 年度は、前年度からの方法に加えて、千葉大学の web ページ、大学生協のデジタルサイネージへの掲載もおこない、広報の幅を拡大した。現在、各回の参加人数は 2012 年度と同じくほぼ 30 名程度であるものの、回によっては満席となることもあり、また、リピーターと思われる学生もみられる。このことから、参加者数の安定とあかりんアワーの認知度の上昇が推測できる。とはいえ、参加人数が極端に少ない回もあることや、千葉大学の学生規模を考慮すると、引き続き参加者数の改善を課題とし、学生に向けた広報や企画内容に一層の工夫が求められる。

図 2-5-3 「月別カレンダーと各回ポスター」

お申し込みは不要です。学外・学内問わずどなたでもご自由にご参加ください。

1210 あかりんアワー
 @附属図書館 N 棟 1 階
 プレゼンテーションスペース
 12:10-12:40
6 月スケジュール

6/4(火)	教員が研究の楽しさを語る 第 38 回 治間厚志先生(医学研究科) 『IPS 細胞ができて明らかになった生命の神秘』
6/7(金)	ボランティア活動支援センター企画
6/11(火)	教員が研究の楽しさを語る 第 39 回 宮内崇裕先生(理学研究科) 『憂慮される原発敷地周辺の活断層と海岸部を襲う直下型大地震』
6/14(金)	ALSA カフェ 第 6 回(仮)
6/18(火)	教員が研究の楽しさを語る 第 40 回 鈴木宏子先生(教育学部)『古今和歌集の想像力』
6/21(金)	外国に暮らす 第 3 回『アメリカ NJ 州での留学生活』 小室信喜先生(融合科学研究科)
6/25(火)	教員が研究の楽しさを語る 第 41 回 西川恵子先生(融合科学研究科)
6/28(金)	ブックトーク 第 9 回 荒井陽一さん(施設環境部設備環境課) 伊原一成さん(武蔵地区事務部薬学部) 小倉吉輝さん(財務部契約課)

※お申し込みは不要です。どなたでもご自由にご参加ください※

1210あかりんアワー 6/11
附属図書館N棟1階
プレゼンテーションスペース(火)
12:10-12:40

先生が研究について、ちょっと本気で語ります。授業とは一味違う30分間。

教員が研究の楽しさを語る 第39回



宮内崇裕先生
 (理学研究科
 専門分野:
 変動地形学)

テーマ:
**憂慮される原発敷地
 周辺の活断層と海岸部
 を襲う直下型大地震**

2. 5. 3 ALSA-GS

1) 背景

ALSA (Academic Link Student Assistant) とは、「千葉大学スチューデント・アシスタント実施要項」(2012 年 4 月実施) に則って、アカデミック・リンク・センター教員会議の議を経て策定された「アカデミック・リンク・スチューデント・アシスタント実施要項」(以下、ALSA 実施要項) に基づいて、アカデミック・リンク・センターが雇用、運用する千葉大学在学学生である。

ALSA 実施要項は、第 2 条において ALSA の業務を規定しており、その規程に基づいて、ALSA は、同条 1 号の規定する「授業等に係る学習相談業務」を担当する ALSA-LS (Learning Support)、2 号の規定する「教材作成等に係る技術支援業務」を担当する ALSA-TT (Technical Team)、3 号の規定する「その他の学生支援等に関する業務」を担当する ALSA-GS (General Support) に区分されている。本プロジェクトは、2012 年度の年次計画において「ALSA-GS による学生対象活動の実施支援」を担当することとされていた。本節は ALSA-GS に関する検討と、担当プロジェクトの移管について記載する。

2) 検討と担当プロジェクトの移管

本プロジェクトでは、ALSA-GS の担当業務、募集方法その他、本事業に取り組むための必要事項について、2012 年 8 月以降、その具体化を検討してきた。しかし、制度設計の完了をもって、本事業は、本プロジェクトから『新しい図書館員』プロジェクトに移管された。

2. 5. 4 全学および各部局の FD の e ラーニング化の検討状況

1) 背景

千葉大学における FD(Faculty Development)活動は、全学 FD 企画室の主催する全学 FD と各部局等が行う FD の二本立てで取り組まれている。2010 年度の大学設置基準の改訂によって、大学が組織的に FD 活動に取り組むことが義務化されたこともあり、全学及び各部局の FD 活動は積極的に企画され、実施されている。他方、組織的な取り組みとしての FD が企画、実施されているとはいえない。この背景には、各教員の時間的な制約に加え、千葉大学が 4 つのキャンパスを有するマルチキャンパス大学であることによる物理的制約など、複数の課題が存在する。このことから、アカデミック・リンク・センターが全学的な貢献を行うために、「全学および各部局の FD の e ラーニング化の検討」が本プロジェクトの事業として設定されている。

2) 現状

全学および各部局の FD の e ラーニング化については、具体化は進んでいない。全学及び各部局の FD の録画等による e ラーニング化をアカデミック・リンク・センターとして進めていくためには、物理的環境としてのコンテンツスタジオとコンテンツ制作室の完成と運用の開始、人的サポート環境としての ALSA-TT の整備が必要だったためである。2012 年 4 月、コンテンツスタジオ、コンテンツ制作室が物理的に完成し、ALSA-TT が運用を開始したとはいえ、それらは、デジタルコースパックプロジェクトによる授業録画の試行的取組みに取り組んでおり、本事業を並行的に実施する状況にならなかった。

3) 課題と今後のあり方

全学および各部局の FD の e ラーニング化による技術的支援については、アカデミック・リンク・センターとしてのコンテンツスタジオ、コンテンツ制作室の運用の状況等を踏まえて、本事業の展開可能性を検討している。特に、大学全体の動きとして、2013 年 4 月に、千葉大学全体の教育のあり方を検討・審議する研究機能を有する組織として高等教育研究機構が設置され、その部門として、学士課程教育及び大学院教育の ICT 化推進に関する業務を行う ICT 推進部門、FD に関する業務を行う FD 推進部門がおかれたことから、これらの全学的組織との連携の上、アカデミック・リンク・センター全体で取り組んでいくことが必要となっている。また、アカデミック・リンク・センターにおいても、2013 年度には、N 棟プレゼンテーションスペース、I 棟 1 階セミナー室、3 階セミナー室に、コンテンツスタジオと同等の録画カメラ設備を設置する計画があり、それらの設置後の運営体制のあり方とともに、本事業について検討していくことが必要である。

2. 5. 5 図書館ポッドキャストの YouTube への移行

1) 背景

千葉大学附属図書館では、アカデミック・リンク・センターの発足以前より、リエゾン・ライブラリアンプロジェクトにより、各種の教育・学習支援活動を行ってきた。その取組

みのひとつに、2008年4月より行っている図書館ポッドキャストがある¹⁾。図書館ポッドキャストとは、①図書館内の各閲覧室・コーナーや資料、利用方法を案内するコンテンツを配信し、これを利用して図書館セルフツアーを提供してきたライブラリーツアー、②ポッドキャストによる各教員や司法試験合格者等へのインタビュー配信の2つの内容を、利用者に提供してきた取組みである（<http://libcast-chibau.seesaa.net/> 参照）。このポッドキャストプログラムについては、図書館の新增設改修の完了とアカデミック・リンク・センターの発足を受けて、掲載コンテンツをYouTubeに移行することにより公開範囲を広げることが課題とされていた。

2) YouTube への移行

2012年10月以降、附属図書館及びアカデミック・リンク・センター内での内容の検討を行い、図書館ポッドキャスト掲載コンテンツのうち、YouTubeでの公開に意義があるものについて移行を行った（2013年2月にアカデミック・リンク・センター・ウェブサイトにより公開）。それによって、①ライブラリーツアープログラムは削除し、②各教員や司法試験合格者等へのインタビュープログラムのみを提供することとなった。

3) 現状と課題

図書館改修にともない、ライブラリーツアープログラムが削除されたことから、ライブラリーツアープログラムについては、その扱いをどうするのか早急な結論が必要である。

註

1) 千葉大学附属図書館による図書館ポッドキャストについては、下記の文献に詳しい。

鈴木宏子,米田奈穂,岩井愛子,中村澄子,斎藤友理「「ポッドキャスト@千葉大図書館」の構築:ポッドキャストによる図書館セルフガイドの作成」『情報の科学と技術』Vol. 59 no. 1,2008,pp. 34-40。

(http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/irwg12/09133801_59_34.pdf)

鈴木宏子,斎藤友理,武内八重子,竹内茉莉子,岩井愛子,中村澄子,米田奈穂「千葉大学におけるポッドキャストによる教育研究成果の発信：教員連携の実践例として」『大学図書館研究』Vol. 85,2009, pp. 23-33。

(http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/irwg12/03860507_85_23.pdf)

2. 6 情報利用行動定点観測プロジェクト

本プロジェクトの目的は、学生による情報利用行動の分析、および、学習・生活空間の利用状況の分析を通じて、アカデミック・リンクが学生の情報利用行動・学習行動・学習成果に与える影響と効果を継続的・横断的に検証することにある。本プロジェクトの成果は「アカデミック・リンク・センタープロジェクトロードマップ」において“千葉大学アカデミック・リンクにおける活動計画の基礎となるデータを収集するとともに、アウトカム評価を実現する”ものとして位置付けられており、2012 年度および 2013 年度の具体的な活動計画は以下のとおりである。現在、本プロジェクトは、教員 4 名（國本、白川、川本、岡本）および職員 1 名（庄司）によって遂行されている。

2012 年度

【前半】

- ①第 1 回質問紙調査の学内向け結果報告会の開催
- ②第 1 回質問紙調査の結果を基にした第 2 回質問紙調査の手法および調査項目の見直し
- ③赤外線センサーによる館内動態調査の実施
- ④アイ・カメラを用いた学習空間・情報利用行動調査の実施と分析
- ⑤インタビュー/日記法/観察の併用による学習空間・情報利用行動調査の実施

【後半】

- ①第 2 回質問紙調査の実施と結果分析
- ②赤外線センサーによる館内動態調査の結果分析
- ③インタビュー/日記法/観察の併用による学習空間・情報利用行動調査の結果分析
- ④ID を共通記号化したうえでの図書貸出記録の分析
- ⑤各種調査の結果と学生の成績情報との連動分析

2013 年度

【前半】

- ①第 2 回質問紙調査の報告会の開催
- ②第 2 回質問紙調査の結果を基にした第 3 回質問紙調査の調査票の見直し
- ③2012 年度末に実施したフォトボイス調査、利用映像調査、インタビュー等の分析の継続
- ④第 2 回フォトボイス調査、利用映像調査、図書返却調査等の実施
- ⑤アイ・カメラを用いた学習空間・情報利用行動調査の継続実施と分析

【後半】

- ①第 3 回質問紙調査の実施
- ②第 3 回質問紙調査の結果の整理と分析
- ③過去 3 回の調査を踏まえた成果報告会の開催

2012 年度に関しては、【前半④】において計画された「アイ・カメラを用いた学習空間・情報利用行動調査の実施と分析（2. 6. 3 参照）」に追加して「画像検索を用いた図書館内での自己位置推定調査（2. 6. 4 参照）」を実施した。当初、2012 年度【前半⑤】と【後半③】において計画していた「インタビュー/日記法/観察の併用による学習空間・情報利

用行動調査」は、その実施内容を見直し、2012 年度末に「学生に対するフォーカス・グループ・インタビュー調査（2. 6. 5 参照）」、「定点カメラ映像を用いたアクティブ・ラーニング・スペース利用状況調査（2. 6. 6 参照）」「学生撮影写真および個人インタビューの併用によるフォトボイス調査（2. 6. 7 参照）」の 3 種の調査に発展的に拡大して実施した。

上記のような計画修正を経て、2013 年度 5 月末現在、本プロジェクト内では、以下の 9 調査が実施中である。

- 1) 2012 年度千葉大学学習状況・情報利用環境調査（第 2 回質問紙調査）
- 2) 赤外線センサーによる館内動態調査
- 3) アイ・カメラを用いた情報探索行動の推定調査
- 4) 画像検索を用いた図書館内での自己位置推定調査
- 5) 学生に対するフォーカス・グループ・インタビュー調査
- 6) 定点カメラ映像を用いたアクティブ・ラーニング・スペース利用状況調査
- 7) 学生撮影写真および個人インタビューの併用によるフォトボイス調査
- 8) ブックトラックを用いた図書利用状況調査
- 9) ID を共通記号化したうえでの各種調査の結果と学生成績情報の連動分析

本章では、上記の 9 調査について、本報告書の対象期間である 2012 年 4 月から 2013 年 5 月末までの活動内容を報告する。

2. 6. 1 2012 年度 千葉大学学習状況・情報利用環境調査（第 2 回質問紙調査）

1) 背景と目的

本調査は、アカデミック・リンクおよび千葉大学の学習環境を整備するために、千葉大学学部学生の日常的な学習環境・学習行動・生活時間・情報利用に関する基礎データを得ることを目的とするものである。そして、そのデータを用いて、千葉大学内および学生生活全般において、アカデミック・リンクのもつ意味や位置づけを相対的・継続的に検証に用いることを計画している。調査は、アカデミック・リンク・センター設置後、複数年にわたり、継続的に定点観測調査として実施する計画である。計画に沿って、2011 年度に第 1 回調査を実施し、2012 年度に第 2 回調査を実施した。

2) 方法と結果

(1) 2011 年度調査の検証と 2012 年度調査での変更

千葉大学学習状況・情報利用環境調査は、2011 年度に、ウェブによる質問紙調査として第 1 回調査を実施した（第 1 回調査の概要は、2011 年度の「評価報告書」に掲載）。2011 年度調査では、対象学生 12,000 名に対して回答者数が 304 名であったことから、回答者数が少なく、第 2 回調査時には実施方法、実施時期、告知方法などを再検討することが必要となっていた。2012 年度調査（第 2 回調査）の実施にあたっては、このことを検討し、実施方法等の見直しを行った。具体的には、次の変更を行った。

①調査方法の変更：2011 年度調査では（株）日経リサーチ社に委託して調査を行ったが、メールアドレスの登録などの回答者の手間を省くために、2012 年度調査では、放送大学が提供するウェブアンケートシステム REAS（リアルタイム評価支援システム）を用いることとした。

②実施期間の変更：2011 年度調査では、2011 年 12 月 5 日から、翌 2012 年 2 月 1 日に

かけて授業期間とあわせて調査を行ったが、2012年度調査では、2013年1月21日～3月10日に変更し、授業期間終了直前から春休みにかけて調査を行うことに変更した。

③回答者へのインセンティブの変更:2011年度調査では回答者から抽選50名に対して、1,000円の図書券を謝礼として用意することで、回答のインセンティブとしていた。2012年度調査では、回答者から抽選2名に対して、iPad miniを謝礼とすることに変更した。多数に少額のインセンティブから、少数に高額のインセンティブへの変更である。

④質問項目の見直し:調査の継続性、データの比較可能性を維持するために、調査項目は原則として2011年度と2012年度で同じものを用いることとした。例外的に、2011年度調査の分析過程で生じた不具合、学内施設の改修・新設などに応じた項目変更などに対応する質問項目の見直しを行った。また、2012年3月に附属図書館本館N棟・I棟の供用を開始したことから、新しい学習空間の利用を中心に、図書館の利用状況について尋ねる質問を新設した。

(2) 2012年度調査の実施

第2回調査は、2013年1月21日～3月10日24時までを実施期間とし、REASを用いて実施した。対象者は、千葉大学に在学する学部学生、12,000名である。質問項目は、学習・生活空間の利用に関する設問(15項目)、情報利用行動に関する設問(16項目)、千葉大学附属図書館の利用状況に関する設問(6項目)である。主な調査項目は下記のとおりである。

調査項目:

A) 学習・生活空間の利用に関する設問

- ・授業 … 出席頻度・出席のスタンス・授業内容・教科書の購入状況など
- ・学習環境 … 大学内外での学習場所・滞在時間など
- ・履修や成績 … 履修登録数、単位取得数、テストやレポート、成績の認識など
- ・大学生活 … サークル活動、アルバイトの有無、一般的な生活時間など

B) 情報利用行動に関する設問

- ・情報利用環境 … PCや電子デバイスの所有状況など
- ・情報リテラシー … 情報の信頼性を判断するときの基準、ITスキルなど
- ・情報の探索と利用 … a. 授業, b. 日常生活の各場面において、最近6か月以内に探索したことのある主題、利用した情報源、情報源選択にあたって重視した点(選択基準)、影響したもの／人、直面した困難など

C) 千葉大学附属図書館の利用状況

- ・附属図書館の利用状況 … 利用頻度、利用時間帯、利用目的など
- ・改修後の図書館本館について … 好ましい学習空間、施設・企画の認知度

なお、実施にあたっては、2011年度調査と同様に、学生を対象とする学内一斉メール(複数回)、チラシ、ポスターを通じた調査実施の告知等による広報活動を行った。学内一斉メールについては、附属図書館からは発信できない学内運用ルールが存在するため、教務課の助力を得て行った。

(3) 結果の概要

最終的な回答数は、1,058件、有効回答数は1,045件であった(有効回答は、回答者が

入力した学籍番号を基準に、千葉大学への在籍が確認できるかどうかを判断根拠とした)。結果は、『千葉大学学習状況・情報利用環境調査 2012 集計報告書』として整理している。

ここでは、2012 年度調査で新設した設問項目である、千葉大学附属図書館の利用状況について結果の一部を紹介する。まず、附属図書館の利用頻度は、「月に数日」が 33.4%で最も多く、次いで、「週に 1～2 日」(26.2%)、「週 3～5 日」(15.4%)となっていた。「ほとんど利用しない」とする回答は 9.8%であり、多くの学生に必要とされていることが確認できた。他方、2012 年 3 月に供用を開始した N 棟を含む、附属図書館本館に対する評価をみると、会話可能であるラーニング・コモンズ機能を有するエリア (N 棟) が自分が学習するのに最も好ましいと感じている割合が 39.1%、伝統的な静かな学習空間のエリア (K 棟・L 棟) が好ましいと感じている割合が 41.1%であった。新設された N 棟が学生に受け入れられ、伝統的な学習空間の K 棟・L 棟とともに学習の幅を広げていることが明らかになった。しかし、一方で、「ALSA-LS による学習相談」「パソコン・プロジェクタの貸出」「レファレンスカウンター」「オフィスアワー」「あかりんアワー」などの、N 棟の供用開始後に新しく始めた企画・サービスについては、回答者の半数前後が「知らない」と答えており、認知度に課題があることが示された。

3) 現状と課題

本調査については、2011 年度の実施状況と課題を踏まえたうえで 2012 年度調査を実施したところ、回答者数が増加し、一定の改善がみられた。本調査の結果は引き続き、計量的分析を進めるとともに、今後、学籍番号をはじめとする個人識別の可能な要素を全て暗号化したうえで、昨年度調査の結果を接合したパネル分析の検討、成績等の教務情報や、図書館利用状況に関する情報と連結させた分析を行う。これらのデータの分析を通じて、アカデミック・リンクおよび千葉大学における、学習環境整備のあり方への示唆を得ることが次の課題である。

2. 6. 2 赤外線センサーによる館内動態調査

1) 背景と目的

2012 年 3 月に増改築された附属図書館西千葉本館は、L 棟・I 棟・N 棟・K 棟の 4 棟から構成されている。L 棟・K 棟は図書・雑誌資料に近接した静寂学習空間、N 棟はテーマ書架(ブックツリー)に近接したアクティブ・ラーニング・スペースとなっている。利用者は、入館ゲート (N 棟 1 階) を通過後、利用目的に合わせて廊下で接続された 3 棟 (N, K, L 棟) を移動することになる。こうした建物構成を背景に、本調査では、時間帯ごとの各棟接続部の利用者の通行量や、移動動向の測定を目的としたデータ収集を行っている。

2) 方法と結果

自動計数型の赤外線センサーおよびカウンター (竹中電子工業株式会社製カウントアイ P8RS2) を、1) N 棟 1 階の正面玄関付近、2) N 棟 1 階の I 棟側入口、3) N 棟から K 棟への 1～3 階にある各階通路、4) K 棟から L 棟への 1～3 階にある各階通路、の合計 8 か所に設置した。N 棟が開館した 2012 年 4 月から作動を開始し、2013 年 5 月末現在も引き続きデータ収集を継続中である。

3) 現状と課題

本調査は、2012 年度【前半③】【後半②】において計画された「赤外線センサーによる

館内動態調査の実施と結果分析」部分に該当する。本調査に関しては、前述のとおり現在もデータ収集を継続している状況にあり、結果分析にまで至っていない。2012年4月から通算で1年分のデータ収集が完了したことから、今後は、時間帯やフロアごとの各棟接続部の通行量について、年間の分析を進める予定である。さらに、後述する他の調査結果と組み合わせたデータ分析も検討中である。

2. 6. 3 アイ・カメラを用いた情報探索行動の推定調査

1) 背景と目的

図書館内における利用者の「情報探索行動」のデータ収集と分析は、これまで、主に利用者観察や利用者への事後インタビューによって行われてきた。本研究では、こうした図書館内における「情報探索行動」のデータ収集と分析を、画像から自動認識する手法を検討した。

2) 方法

小型ウェアラブル・カメラ（図2-6-1）を用いて撮影した一人称視点（＝利用者視点）の館内画像を元に、探索者の情報探索行動を自動認識する方法を検討した。情報探索行動は、求める情報を得る行動プロセス全般を含むが¹⁾、本研究で認識する行動は「移動する」、「本を探す」、「本を読む」の3種に限定した（図2-6-2）。一人称視点カメラで撮影した画像群（6カテゴリ）を、上記の3種の行動に分けて機械学習し、一般物体認識の標準的な方法であるBag-of-Features（BoF）による画像表現とSupport Vector Machine（SVM）を用いた識別によって評価した。調査では、館内画像の特色にあわせて、1）行動を識別する手がかりとなる画像の回転不変性の除去、2）書棚・床などの空間配置を考慮する手法Spatial Pyramid Matching（SPM）の導入、3）局所特徴点の出現位置の偏りに対応する方法（グリッド・サンプリング）の導入、という3点を改良し、画像の識別精度が向上するか評価した。

図2-6-1 一人称視点カメラ



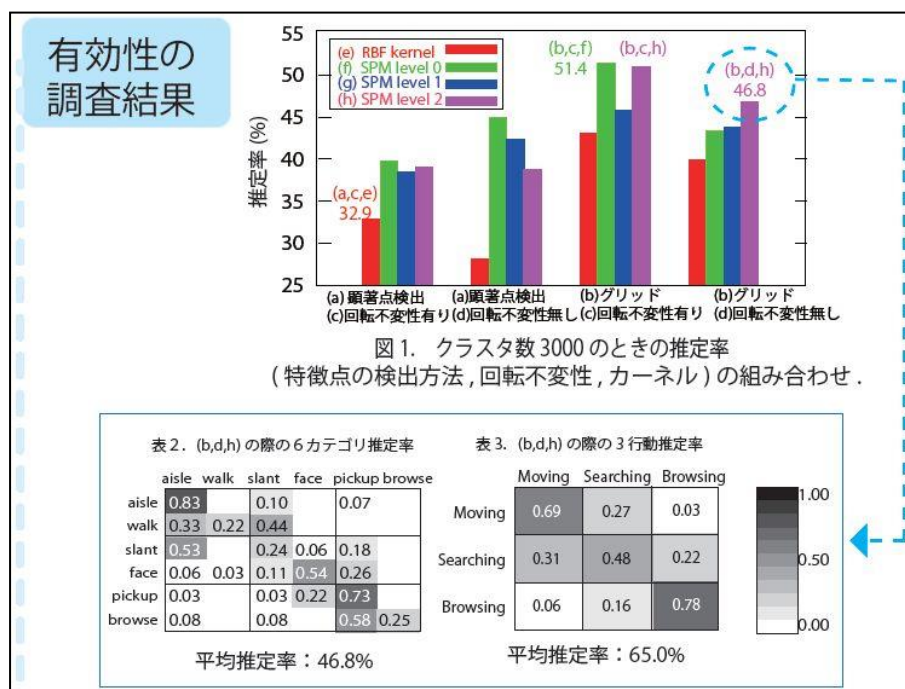
図 2-6-2 自動識別された「3つの行動」と画像例



3) 結果

BoF による画像表現と SVM による識別に、前述した3点の改良を組み合わせた結果、最終的に、分類率の向上が見られた。図 2-6-3 は、BoF クラスタ数 3000 のときの混同表の一例である。表 2 は改良無し、表 3 は3点の改良を適用した場合の結果である。本研究の成果は 2012 年 5 月 23 日に行われた情報処理学会において発表を行った²⁾。

図 2-6-3 「回転不変性の除去」「SPM」「グリッドサンプリング」を改良した結果



4) 現状と課題

本調査は、2012 年度【前半④】および 2013 年度【前半⑤】において計画された「アイ・カメラを用いた学習空間・情報利用行動調査の継続実施と分析」に相当する。2012 年度前半の調査結果を受けて、今後は行動推定の精度向上のために、人間の動作を捕捉する「慣性センサー」を用いて取得したデータも組み合わせた調査を実施予定である。

2. 6. 4 画像検索を用いた図書館内での自己位置推定調査

1) 背景と目的

図書館のような屋内環境では、利用者の滞在場所（自己位置）の推定を行う際、GPS を用いた位置情報の取得は不可能である。館内各所に小型の電子タグを設置して、利用者の自己位置を推定する方法もあるが、人的・経済的コストが大きい。本研究では、利用者行動調査の効率化を目的に、利用者が装着したウェアブルカメラの撮影画像から、利用者の自己位置を推定する手法を検討した。

2) 方法

本調査は「環境地図の作成」と「自己位置の推定」の2段階で構成されている。最初に、全方位カメラ（図2-6-4）で館内各所を撮影し、その撮影画像（図2-6-5）がもつ位置情報から、3次元点群で構成された環境地図を作成する。図2-6-6は、環境地図の作成のために今回用いた Structure from Motion (SfM) 手法の実行結果を示した図（＝図書館の棚を真上から見下ろした図）である。図中の赤い点はカメラの撮影位置を表している。

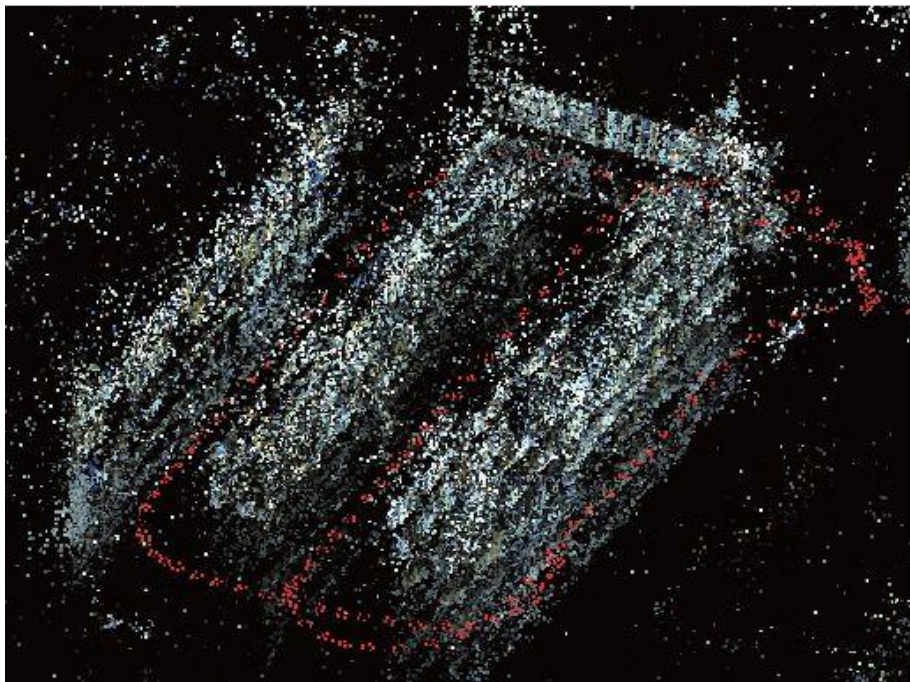
図2-6-4 環境地図撮影用の「全方位カメラ」



図 2-6-5 「全方位カメラ」で撮影された館内画像



図 2-6-6 環境地図作成のための SfM の実行結果（図書館の棚）



つぎに、自己位置の推定は、利用者が装着したウェアブルカメラの画像（クエリ画像）に似た画像を、環境地図の中から検索し、ヒットした画像の撮影位置＝利用者の位置、として推定した。画像間の類似度計算には、局所特徴点の対応点数によって計算する手法を用いた。こうした自己位置推定は特徴点の3次元配置を考えないため、本の移動や画質の違いなどによる特徴点の誤対応に対して頑健であり、最適化計算を伴う他の手法と比べて、安定した位置推定が行えると推測した。

3) 結果

館内で撮影した画像を元に手法を検証した結果、最適化計算を行う計算を伴う手法では、クエリ画像19枚中2枚しか撮影位置を求められないのに対して、提案手法を用いた場合は19枚全ての撮影位置を求めることができた。さらに、クエリ画像が時系列に沿って入力されると仮定し、自己位置の不自然なジャンプも抑制できた。本研究の成果は、2012年5月23日に行われた情報処理学会において発表済みである³⁾。

4) 現状と課題

本調査は2012年度に前述の「2.6.3 アイ・カメラを用いた学習空間・情報利用行動調査の実施と分析」に追加して新規に計画された調査であり、2013年度5月末現在も継続実施中である。現状の手法では、数万枚の館内画像を処理する必要があるため、今後は、より一層の処理の高速化に取り組む予定である。

2. 6. 5 学生に対するフォーカス・グループ・インタビュー調査

1) 背景と目的

2012年4月の図書館増改築により、協働学習が可能なアクティブ・ラーニング・スペース、「見る・見られる」ことを意識したプレゼンテーションスペースの新設など、従来、千葉大学附属図書館には存在しなかった新しい学習空間や機能が追加された。同時に、学習支援デスクや1210 あかりんアワー、レファレンス・デスクの見える化など、館内各所で大幅なサービスの刷新もなされた。こうした変化が、学生の図書館における学習行動や情報利用行動に与えた影響をより深く探るため、「改築の前後で、図書館の利用がどのように変化したか？」に焦点を当て、学生の現状認識を探るグループ・インタビュー調査を実施した。

2) 方法

増改築前と後、双方の図書館利用経験をもつ、2年生以上の学部学生を対象に、館内公募で調査参加者を集めた。最終的に学部生22名（男性13名、女性9名）が参加し、2013年2月に1～2時間程度のフォーカス・グループ・インタビューを計5回実施した。各グループは、毎回、属性が似通った学部生3～5名に図書館員1名と教員1名で参加する形で構成した。インタビューでは、①改築前の図書館を何のために／どのように利用していたか（過去の認識）、②改築後の図書館を何のために／どのように利用しているか（現状の認識）、③改築後の図書館をどのように感じているか（変化の認識）、について学生同士で自由に意見交換をしてもらった。

3) 結果

インタビューの結果は、2013年3月から、図書館員5名と教員3名により分析中である。この分析の途中経過を、2013年6月2日に行われた大学教育学会において発表した⁴⁾。こ

ここでは、大学教育学会で発表した分析結果について報告する。

まず、改築後の学習空間においては、「A. 個人での学習・活動（対話なし）」「B. グループでの学習・活動（対話あり）」として図2-6-7にあげたような学習行動や活動がみられた。特に改築後の図書館では「C. 個人学習⇔グループ学習」に示したとおり、はじめから「意図的に個人学習とグループ学習を行き来する学習スタイル（1人で勉強⇔みんなに質問）」と、はじめは個人学習のために来館したものの「偶然居合わせた仲間がつぎつぎに加わり、自然にグループ学習へ移行する学習スタイル（2→3→4人（増加）⇒みんな勉強）」の2つが認識されていることが分かった。

図2-6-7 増改築後の学習空間でみられた学習行動・活動

A. 個人での学習・活動 (対話なし)	B. グループでの学習・活動 (対話あり)	C. 個人学習⇔グループ学習
本を読む(紙・電子書籍) 本を借りる 調べる 執筆する(レポート・論文) ペン習字の練習 テーブ起こし インターネット 手帳に書込み そのほか(寝る、ぼんやりする等)	授業課題(グループワーク) 解答を見せ・教えあう 本を読みあう(読書会) プレゼンの練習・講評 将来について話す コンペティション(建築) プレスト インタビュー サークル企画 数式を書く グラフ作図	1人で勉強 ⇔ みんなに質問 例:「ある程度の基盤までは、1人で絶対勉強したい(中略)応用ってなってくる部分(中略)を理解するときに、私の頭ではどうも分からないとか、本をいっぱい広げただけよく分からないみたいときに(中略)友達に相談」する 2→3→4人…(増加) ⇒ みんなで勉強 例:「最初は(中略)2人で解答を作って見せ合ったりとかしてた、っていうのが、10人とか集まると「じゃあ、次のナンバー、どうやって答えつくった？」みたいな感じで。で、1人が言って、全員に質問して、みんなでわあわあ答えていく」

さらにこうした「学習行動・活動」や「学習スタイル」の形成を促した要因として、1) N棟のブックツリーをはじめとする「見せる本棚」の存在、2) 個人席とグループ学習席を近接させたN棟の空間設計、3) 可動式の机と椅子、4) 可動式のホワイトボード、の4点があげられていた。行動を誘発する直接の要因とはなっていないが、こうした行動をさらに刺激・促進する要因として、開放空間に身近な先輩(ALSA-LS)がいる「学習支援デスク」もあげられていた。

発表では、最後に、図書館の増改築によって生まれた、1) オープンな学習環境が学生の来館・学習機会を増加させている可能性、2) 「見る・見られる」をコンセプトに設計した学習空間が、学生の学習意欲を向上させている可能性、3) 個人や集団の相互作用を容易にする学習環境が、学生の「教え合う」行動を後押ししている可能性を指摘した。

4) 今後の予定と課題

本調査は2012年度【前半⑤】における、「インタビュー／日記法／観察の併用による学習空間・情報利用行動調査」を発展的に拡大した3調査のうちの1つであり、2013年度【前半③】の「インタビュー等の分析の継続」に該当する。今後は、2013年度後半にかけて、結果分析を引き続き行い、前述した量的調査(2. 6. 1 2012年度千葉大学学習状況・情報利用環境調査(第2回質問紙調査))の結果と合わせて、量と質、両側面からの分析を実施予定である。

また、今回のインタビューの分析結果からは、特にサービス面で、今後の改善に資する点も見いだせた。たとえば、前述した「学習支援デスク」以外の図書館員による人的サー

ビス（例：レファレンス・サービス・デスク）については未だ学生の認知度が低いことや、企画そのものへの評価は非常に高い「1210 あかりんアワー」等の情報発信サービスに関して、より効果的な広報が必要であるとの指摘が学生からなされている。今後は、調査結果から見いだせた「改善点」を、実際のサービス向上に反映していく必要がある。

2. 6. 6. 定点カメラ映像を用いたアクティブ・ラーニング・スペース利用状況調査

1) 背景と目的

N棟2階および3階は、「学生の自発的な協働学習を促す」ことを意図して、極めて自由度の高い空間設計と什器配置がなされている。その特徴は、1) 中央付近に仕切りや柱を持たない平面フロアであること、2) フロア全体が発話可能な学習空間であること、3) 「個人学習席」と「グループ学習席」を同一空間に近接させる形で設置していること、4) 形状の異なる「可動型」の机・椅子・ホワイトボードを多数実験的に配置していること、などがあげられる。本調査は、こうした学習空間における、学生の学習・情報利用行動を、1) 学生達の通常の学習行動を阻害せず、2) 可能なかぎり自然な状態で量的に「定点観測」することを目的に実施した。

2) 方法

本調査では、天井に設置されたマルチアイ防犯カメラ（以下定点カメラ）から、フロアを俯瞰した静止画像を一定の時間間隔で取得し、机・椅子・着席者の位置（座標）情報を計測しようと試みた。調査の実施にあたっては、まず、事前に定点カメラ画像の分析利用の是非について、研究倫理審査委員会にかわる組織として「情報化推進企画室図書館専門部会」の各委員に内容審議を依頼した。つぎに、専門部会の承認を受けて、附属図書館西千葉本館の「入館ゲート」前に、館内利用者に対する調査の告知文書（調査の目的・期間・方法・データの取扱等を説明した告知文書）を掲示した。データ収集はこれらの過程を経たうえで実施している。

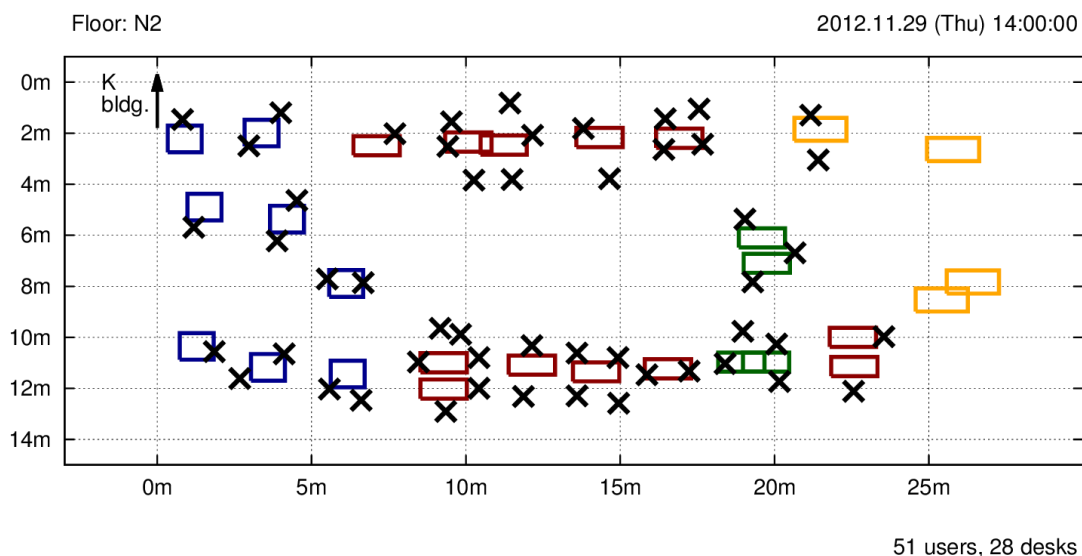
データの取得は、2012 年度後期授業期間、および、試験期間にあたる計6週間（2012年10月1日～2月13日）の図書館開館時間中に行った。具体的な分析項目は、1) 机・椅子の配置、2) 利用者の位置、3) 利用者の人数、4) 利用日時、の4点である。これらの情報は、取得した静止画像から目視とプログラム処理を組み合わせ、数量的に計測した。静止画像からは、個人を特定可能なデータは一切取得せず、分析作業は教員、センター職員、もしくはその監督下で作業に携わる者のみが実施した。

3) 結果

取得した数量データを元に、図2-6-8のようなプロット図を作成し、什器の移動状況・什器の形状・利用人数・利用時間等の関係を現在分析中である。現在、実施期間中の3分の1にあたるデータの分析が終了した。分析の途中経過からは、着席状況や机の利用状況を左右する要因として、1) 机の初期配置が影響する可能性（例：朝、最初に配置された状態から机はあまり動かない）、2) 机の形状に依存する可能性（例：長方形など「安定した形状」の机はあまり動かず、クローバ型や半円といった「不安定な形状」の机はよく動く）、3) 「利用時期」が影響する可能性（例：授業期間中は机が動かないが、試験期間中は机がよく動く）などの仮説が立てられている。今回の分析に用いた工学的な計算手法等、途中経過の一部分については、2013年5月に行われた「情報処理学会」において報

告済みである⁵⁾。

図 2-6-8 定点カメラ映像を用いたラーニング・スペース利用状況(プロット図)



4) 今後の予定と課題

本調査は、2012 年度後期に実施された調査の分析経過をふまえて、2013 年度前期（7 月頃）にも、再び同様な調査を実施予定である。特に、前述のとおり、2012 年度後期の調査結果から推測された 3 点の「仮説」を検証するため、什器類のランダム配置実験を実施予定である。

2. 6. 7 学生撮影写真および個人インタビューの併用によるフォトボイス調査

1) 背景と目的

本調査は、増改築後の図書館における学生の学習空間の利用実態、より具体的には、①学習空間の使い方、②資料の用い方、③学習のスタイルの詳細について、学生自身が撮影した学習風景の写真と、撮影後の個人インタビューを組み合わせることで、質的に把握することを目的としている。2012 年度は、2013 年度の本格実施に向けた「プレテスト」という位置づけで、少人数による調査を実施した。

2) 方法

調査対象として、現在、学生スタッフとして図書館に勤務している ALSA-GS の学生 5 名（学部学生 4 名と院生 1 名）に調査協力を依頼した。本調査は、1) デジタルカメラを貸与しての利用行動の撮影、2) 撮影した写真を元にした個人インタビューの 2 部構成で実施した。

学生には 2013 年 2 月末～2013 年 3 月末までカメラを貸与し、図書館内へ入館するたび

に、①実際に行った学習課題・活動、②学習時の机上の様子（用いた資料や機器など）、③PCの画面、④学習を一緒に行った人、⑤学習を行った場所の様子（机・椅子の配置・着席状況など）、⑥ホワイトボードの利用状況、⑦そのほかプレゼン資料の投影の様子など、いくつかの項目を撮影してもらった。

調査では、5名の学生を、A集団（入館後30分ごとに「今やっていること」を撮影する組）とB集団（学習場所が変わるたびに、指示された項目を撮影する組）に分けて実験的に撮影をさせた。その後、別日に各人1～2時間にわたる個人インタビューを行い、どこで、誰と、どのような学習を行っていたのかを詳細に聞き出した。

3) 結果

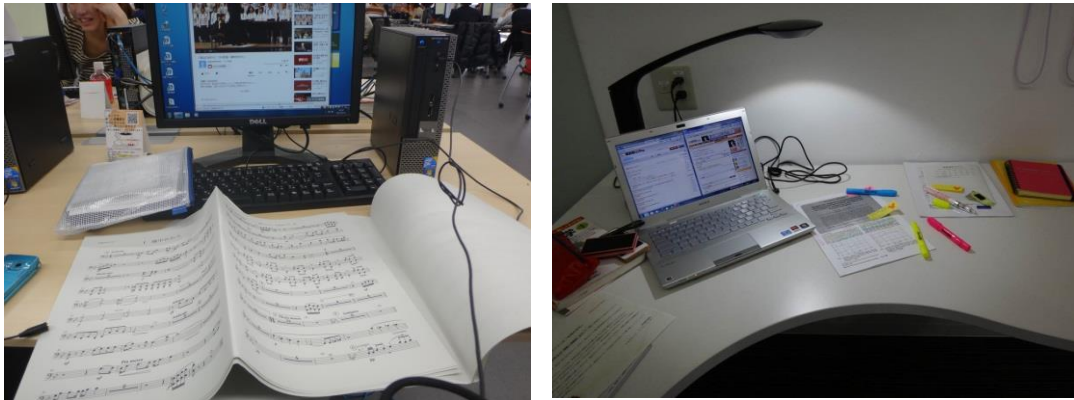
調査の結果、学習課題に関しては、授業と関連した提案型プレゼンテーション、調査系レポート、体験レポート（例：実際に観劇に言って感想を記す）など、多様な学習課題が行われていた。ほかにも「資格・語学・試験の勉強をする」、「教養書を読む」、「専門分野の雑誌と一般分野の雑誌を同時並行で読む」など図書館内で多様な学習を同時に行う傾向がみられた。ほかにも「趣味の楽譜読み」、「旅行の計画に関連した調べもの」など、学習とは直接関係のない活動も学習の合間に行われていた（図2-6-9）。

図2-6-9 多様な学習・活動



また、学習時、机上にPC・電子辞書・授業レジュメ・図書・ノート・問題集など、様々な情報機器と資料が同時に広げられる傾向があること、PC画面の画像から図書館が提供する有料データベースのほかに、インターネット上の英語辞書や、YouTube上で無料で視聴可能な音楽・映像資料など、有料・無料を問わず様々な電子リソースが組み合わせて用いられていることなどが明らかになった（図2-6-10）。

図 2-6-10 様々な電子リソースの活用



4) 今後の予定と課題

2012年度のプレテストの結果、A集団（入館後、30分ごとに撮影）とB集団（学習場所が変わるたびに指示項目を撮影）を比較した場合、前者の方が「学生自身は学習とみなさない」多彩な学習行動や活動を撮影可能であることが判明した。さらに、インタビューの結果から、学生の普段の学習行動や情報利用行動の全体像を探るには、大学図書館内だけではなく、学内外での学習行動についても見ていく必要があると考え、次年度以降は図書館の外にも撮影範囲を拡大することを計画中である。さらに、今回の調査では共同学習についての写真撮影の事例が少なく、この点に関して十分なデータが得られなかった。2012年度にプレテストを依頼した学生スタッフ（ALSA-GS）は個人学習を好むユーザ層であったことから、2013年度の本調査では、より一般的な学生の利用状況も補足するために、調査参加者は学内公募で募集することが望ましいとの結論に至っている。

2. 6. 8 ブックトラックを用いた図書利用状況調査

1) 背景と目的

N棟2階および3階は、主にグループでの学習や情報通信機器を活用した学習での利用を想定した空間であり、館内資料（図書）がこれらのエリアでどのように利用されたかのデータは、学生の資料の利用状況やラーニング・コモンズでの学習行動の分析において、必須の基礎データとなる。そこで本調査では、館内で利用された資料の返却先をN棟2階および3階に設置し、返却された館内資料を記録することで、館内資料がこれらのエリアでどのように利用されているかを明らかにする。

2) 方法

本調査では、館内利用した資料（図書）の返却先として、返却用ブックトラックをN棟2階の東西に1台ずつ、3階に1台を図2-6-11のように設置した。本調査の調査期間は、2013年1月22日から2月15日であり、この期間には、通常の開館時間（平日：9時～21時45分、土日祝日：10時30分～18時）に加え、試験期間としての延長開館（平日：8時45分～23時、土日祝日：10時30分～20時）と試験期間後の短縮開館（9時～16時45分）を含んでいる。延長開館の期間は2013年1月30日から2月13日まで、短縮開館は2月14日と15日であった。

図 2-6-1 1 返却用ブックトラック



返却された資料については、図 2-6-1 2 に示すように、図書館職員がバーコードリーダーで資料番号を読み取り、元の配架先へ返却している。資料番号の読み取り作業および返却作業は、平日は 9 時、12 時、17 時の時間帯で、土日祝日は 12 時、17 時の時間帯で行っている。最終的には、収集した資料番号をキーに、所蔵データベースおよび書誌データベースに問い合わせを行い、記録した時間帯と場所に加え、書誌事項、請求記号、配架先、貸出回数を結合した表を作成している。

図 2-6-1 2 資料番号の読み取り作業



3) 結果

返却された資料の総数は 1,155 点であり、重複を除いた資料の総数は 1,050 点であった。返却場所については、N 棟 2 階東側で 162 点、N 棟 2 階西側で 193 点、N 棟 3 階で 800 点であった（重複を含む）。資料の配架場所と返却場所の対応について表 2-6-1 3 に示す。

表 2-6-13 より、利用された資料の配架先は全館にわたっていることに加え、特に、K 棟および L 棟の 3 階に配架された資料が中心に利用されていることが確認できる。返却場所＝最終的に利用された場所と仮定した場合、N 棟 2 階に比べ、N 棟 3 階では 2.3 倍の数の資料が利用されていることがわかる。また、参考図書のように、大半が K 棟 2 階に配架されているものの、返却された 66 点のうち 91%が N 棟 3 階という、ほとんどの利用場所が階をまたいでいるという状況も確認している。全体として N 棟 3 階での返却が多いのは、N 棟 3 階に設置された 50 台の学生用端末との関連があり、パソコンと館内資料を併用した形式での学習が行われていることがその要因のひとつではないかと考える。

表 2-6-13 資料の配架場所と返却場所（対応表）

配架場所	返却場所		
	N棟2階東側	N棟2階西側	N棟3階
本館K棟2階	3	3	54
本館K棟3階	57	40	295
本館L棟2階	13	7	36
本館L棟3階	61	87	270
本館L棟4階	9	19	73
本館N棟2階	17	36	52
本館N棟3階	2	0	13
本館N棟4階	0	1	6
本館雑誌書庫	0	0	1

時間帯別では、9時に回収された資料が 564 点（内訳：N 棟 2 階東側 72 点、N 棟 2 階西側 84 点、N 棟 3 階 408 点）、12 時に回収された資料が 258 点（内訳：N 棟 2 階東側 54 点、N 棟 2 階西側 66 点、N 棟 3 階 138 点）、17 時に回収された資料が 333 点（内訳：N 棟 2 階東側 36 点、N 棟 2 階西側 43 点、N 棟 3 階 254 点）であった。9 時に回収した資料が最も多く、これは、前日の 17 時から閉館までに返却された資料が最も多いということを意味している。

最も利用された館内資料は社会科学分野の資料（432 点）であり、次いで自然科学分野の資料（359 点）であった。この 2 分野で全体の約 70%を占めている。また、貸出回数が「0」のものが 115 点（受入 1 年以内の図書と参考図書は除く）あり、貸出統計上では「貸出なし」とされる資料が、館内で利用されることも確認している。

4) 今後の予定と課題

本調査については 2013 年度も引き続き実施する。一方、今回の調査の結果を受け、N 棟 3 階で多くの館内資料が利用されている理由について、継続して分析を行う予定である。特に、フロアの性質上、学生用端末の利用との観点での分析は必須であると考え。また、

今回の調査では、各フロアの利用者数については考慮しておらず、フロアの利用者数と返却される館内資料の数には正の相関があることが想定されるため、例えば、入館統計や赤外線センサーによる館内動態調査の結果など、他の統計データを交えた分析についても行う必要があると考える。

2. 6. 9 IDを共通記号化したうえでの各種調査の結果と学生成績情報の連動分析

1) 背景と目的

本プロジェクトで実施中の調査のうち、主に、毎年度定点観測的に実施している「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」の内容と、学生の成績情報とを接合し、分析することにより、アカデミック・リンクの各種取組が学生の「学習」に及ぼした影響（アウトカム）の測定および経年変化の補足が可能になる。本調査ではこれを目的に、2011年度および2012年度に実施した「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」の成果と学生の成績情報との関連を、ID（学籍番号）を共通記号化したうえで連動分析することを試みた。

2) 方法

本調査の実施にあたっては、研究倫理審査委員会にかわるものとして情報化推進企画室図書館専門部会の委員に調査の概要を示し、実施・分析に問題点等がみられないか、検討を依頼した。図書館専門部会の承認を経て、教務課より学業成績データの譲渡を受けた。データ接合の手順は次のとおりである。1) まず学業成績データの学籍番号をプログラムにより暗号化し、2) 同一プログラムによって「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」の学籍番号も暗号化した。さらに、3) 両者の処理が完了した時点で1と2のデータの接合を実施した。その際、氏名などの個人を特定できる情報は削除している。1)～3)の処理プロセスは、それぞれ異なる3名が行い、学籍番号の暗号化に必要なプログラムの作成はまた別の1名が行った。

3) 結果

現在、2011年度および2012年度の「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」の結果と成績情報の連結作業を進めているところであり、結果の分析は今後実施予定である。ここで得られた結果は、個人情報取り扱いに十分な注意をしたうえで、1) 千葉大学学内の学習環境・施設・教育学習支援プログラムの改善提言、2) 学会での報告・論文文化による学術的貢献、3) 高等教育におけるパフォーマンス評価を実現する手法／指標の検討に利用する。

4) 今後の予定と課題

成績情報との連結分析は、当初予定より遅れている。2011年度および2012年度に実施した「千葉大学学習状況・情報利用環境調査」の結果分析と同時並行で、成績情報との連結および分析に可及的速やかに取り掛かる必要がある。

引用文献

- 1) 田村俊作. 情報探索と情報利用. 勁草書房, 282p. (2001)
- 2) 堀内麻由, 川本一彦, 岡本一志. 一人称視点カメラを用いた情報探索行動の推定. 情報処理学会研究報告. Vol. 2012-CVIM-182, No. 1, p. 1-7 (2012)
- 3) 風間光, 川本一彦, 岡本一志. 画像検索を用いた図書館内での自己位置推定. 情報処

理学会研究報告. Vol.2012-CVIM-182, No.27. p.1-8 (2012)

- 4) 竹内比呂也, 庄司 三千子, 丸茂 里江, 池尻 亮子, 竹内 茉莉子, 谷 奈穂, 國本 千裕, 岡本 一志, 白川 優治, 川本 一彦, 姉川雄大, 藤本茂雄. 図書館付設型ラーニング・コモンズの整備による学習行動の変容に関する探索的研究. 大学教育学会第35回大会, 東北大学 (2013-06-02)
- 5) 浅沼 仁, 川本 一彦, 岡本 一志, グラフマイニングのための空間配置のグラフ構造表現, 情報処理学会研究報告 - コンピュータビジョンとイメージメディア (CVIM), vol.2013-CVIM-187, no.32, pp.1-8, 2013年5月.

2. 7 「新しい図書館員」プロジェクト

「新しい図書館員」プロジェクトは、学習に関与する「新しい図書館員」概念を確立するとともに、彼らを中心に教員／図書館員／学生の協働を基礎とする個別的学習指導モデルを構築し、評価することを目的としている。具体的には、アクティブ・ラーニング・スペースにおける学習支援活動モデルの確立と、新たな情報リテラシースキル養成活動の展開を目指している。

2. 7. 1 情報リテラシースキル養成活動

情報リテラシースキル養成活動は、必要な情報を収集し使いこなす技術の獲得を支援する活動である。附属図書館では 1994 年頃から学生に対する情報リテラシー教育を行ってきたが、アカデミック・リンク・センター設立後も引き続きこれらの活動を行っている。2012 年度の開催回数と参加人数の実績は下表のとおりであった。(詳細は参考資料(19)を参照)

表 2-7-1 情報リテラシー教育の実績

	2012 年度前期		2012 年度後期		2013 年度 4-5 月	
	開催回数	参加人数	開催回数	参加人数	開催回数	参加人数
本館	79	3,652	30	263	35	2105
亥鼻分館	19	675	3	35	19	571
松戸分館	4	355	0	0	3	358
総計	102	4,682	33	298	57	3034

これらの情報リテラシー教育の開催方法や内容は多岐に渡り、館内ツアー、利用案内、各種データベース講習会などの図書館主催ガイダンス、教員からの申込による学部学科グループ別ガイダンス、普遍教育「情報処理」授業支援、図書館学関連授業支援などを実施している。

特に、レポート作成を支援するセミナー（2012 年度の名称「レポート作成セミナー」）は、教員がテーマ設定や構成などの考え方を教える講習会（名称「レポート作成編」）と、図書館員が情報収集ツールの利用法やデータ収集法について案内する講習会（名称「情報検索編」）の講義形式の内容に加え、ワークショップ形式で受講者参加型の内容を行っている。2012 年度 12 月と 1 月に開催されたこのレポート作成セミナーでは ALSA-LS の一部のメンバーが企画段階で加わり、セミナーの内容で分かりにくいところや具体的な改善策について意見を述べ、それをもとに教員と図書館員が内容の見直しを行った。さらに「レポート作成編」セミナーの講師は、教員、図書館員、ALSA-LS のいずれもが務めた。このような形でアカデミック・リンクのライティング・センター構想につながる教員／図書館員／学生の協働体制構築の基礎を築いた。

図2-7-1 レポート作成セミナー（ワークショップ）の様子



2. 7. 2 アクティブ・ラーニング・スペースにおける学習支援活動

2011年度までの、情報リテラシー教育、授業資料ナビゲータ、ALSA-LSの試行などの実績を基盤として、2012年4月からN棟アクティブ・ラーニング・スペースにおいて、新しい学習支援活動を開始した。

教員によるオフィスアワー@AL、大学院生（ALSA-LS）による学習支援デスク、図書館員によるレファレンスデスクの3つをN棟2階に設置し、実践することにより、データ収集と記録の文書化を図ることが主な活動内容である。

このうち、大学院生（ALSA-LS）による学習支援デスクの活動は、2-4「参加する学習」において報告しているため、ここではオフィスアワー@ALとレファレンスデスクの活動について報告する。

1) オフィスアワー@AL

教員が、学生から学業や大学生活全般について相談をうける「オフィスアワー」を、アクティブ・ラーニング・スペースにおいて実施するものである。2012年度前期は、アカデミック・リンク・センター教員により開始し、その後2012年度後期からは教職相談、学生相談の時間枠が追加された。時間割は以下のとおりである。

表 2-7-2 オフィスアワー@AL 時間割 (2013 年度前期)

	月	火	水	金
2 10:30-12:00	-	白川優治 (教育学)	藤本茂雄 (物理学)	川本一彦 (情報工学)
昼休み 12:00-12:50	学生相談室 カウンセラー (なんでも相談)	-	学生相談室 カウンセラー (なんでも相談) 土屋玲子 (教職相談)	学生相談室 カウンセラー (なんでも相談)
3 12:50-14:20	-	-	竹内比呂也 (図書館情報学)	-
4 14:30-16:00	國本千裕 (図書館情報学)	姉川雄大 (歴史学)	岡本一志 (工学・情報検索)	-

2) レファレンスデスク

2012 年度 4 月から、図書館員が資料や文献探しを支援するレファレンスサービスのためのデスクを N 棟 2 階のアクティブ・ラーニング・スペースに設置した。2012 年 12 月までは平日 12:00~13:30 と 14:30~16:00 に、2013 年 1 月からは、平日 13:00~16:00 の時間帯に、図書館員（課長を除く常勤職員）が 1 名ずつレファレンスデスクを担当する体制を組み、相談を受けている。レファレンスデスクで受けた相談については、レファレンス記録票により記録を残すこととした。

図 2-7-2 レファレンスデスクの様子



表 2-7-3 レファレンスデスク担当表 (2013 年度前期)

	月	火	水	木	金
13:00-14:30	佐野	丸茂	綾田	池尻	庄司
14:30-16:00	田川	竹内	谷	武内	千葉

千葉大学附属図書館では 2006 年からリエゾン・ライブラリアン・プロジェクトを開始し、各図書館員にあらかじめ 1～2 の担当分野を決めておき、該当の分野の教員との仲介役 (リエゾン・ライブラリアン) となるような試みを、授業資料ナビの作成で行ってきた。(参考 2011 年度報告書 p.55-56)

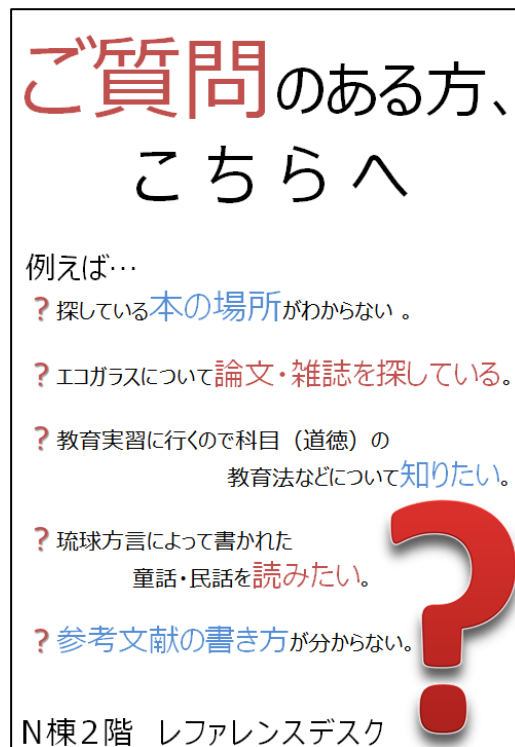
このリエゾン・ライブラリアン・プロジェクトの取組みを参考にして、レファレンスサービスについても図書館員の担当分野を決めることとした。担当分野の区分は学部・研究科とし、事項調査やデータベース等に関する高度な利用指導については、質問を受けた図書館員と当該分野を担当する図書館員が相談して回答することになった。レファレンスの担当分野は、原則として授業資料ナビと同じ担当分野に割り振ることとし、授業資料ナビ作成で培った各図書館員の基礎的資質を生かせるようにした。

表 2-7-4 レファレンスデスク分野担当表 (2013 年度前期の体制)

文学部・人社研	綾田・谷・佐野
法経学部・専門法務	庄司・丸茂
教育学部・教育学研究科	武内・竹内
工学部・工学研究科・融合科学研究科	池尻
理学部・理学研究科	田川・千葉
医学薬学府・看護学部・看護学研究科	亥鼻分館 (高野・野田)
園芸学部・園芸学研究科	松戸分館 (佐藤・下妻)

2012 年 8 月, 12 月, 2013 年 2 月には担当者で振り返り会を行い、レファレンスデスクにおける問題点や利用者対応についての情報共有を行った。(参考資料 (20) -1) ここで出された問題点については、改善策を講じた。具体的には、開設時間を 12:00～13:30 の枠を 13:00～14:30 へ変更すること、ポスターにレファレンスの具体的な事例を入れたり、開設時間中はネームプレートを設置したりするなどの広報の工夫、レファレンスデスクに設置する資料に担当者から要望があった外国語の利用案内などを加えた。

図 2-7-3 レファレンスデスク広報用ポスター



さらに、この振り返り会の中で担当の図書館員に対する研修を実施した。2012 年 12 月にはレファレンス演習を、2013 年の 2 月にはインタビューの基礎に関する研修を行った。後者については、担当者間で「どのように質問者のわからない点を引き出していけばいいのかインタビューの基礎を知りたい」という要望を受けて企画したものであり、アカデミック・リンク・センターの教員の協力を得て実施した。

図 2-7-4 レファレンスデスク担当者振り返り会の様子



2012 年度のレファレンス件数は 109 件（クイックレファレンス除く）、2013 年度 4 月～5 月は 30 件だった。利用者区分と相談内容については以下のとおりである。

表 2－7－5－1 利用者区分と相談内容の実績（2012 年度）

2012 年 度	利用者区分					相談内容（複数選択可）						
	学 生	教 職 員	学 外 者	不 明	合 計	文 献 所 在	料 探 索 法	文 献 ・ 資	事 項 調 査	利 用 案 内	そ の 他	合 計
4 月		1		2	3	2				1		3
5 月	7			13	20	7	7	2	7	2		25
6 月	8	1		10	19	11	5	1	4	2		23
7 月	5			11	16	6	10	1				17
8 月	3	1	2	2	8	3	6	2	1			12
9 月	1	1	1		3		2	1	1			4
10 月	7		1	3	11	3	7	2			2	14
11 月	8		1	1	10	3	5		2			10
12 月	6		1		7	3	4	2	2			11
1 月	2		1	3	6	4	2	1				7
2 月	3			1	4	1	2				1	4
3 月	2				2	1		1				2
合計	52	4	7	46	109	44	50	13	18	7		132

表 2－7－5－2 利用者区分と相談内容の実績（2013 年度 4 月～5 月）

2013 年 度	利用者区分					相談内容（複数選択可）						
	学 生	教 職 員	学 外 者	不 明	合 計	文 献 所 在	料 探 索 法	文 献 ・ 資	事 項 調 査	利 用 案 内	そ の 他	合 計
4 月	15		1	3	19	5	11		3	3		22
5 月	9	1		1	11	2	5	5				12
合計	24	1	1	4	30	7	16	5	3	3		34

相談内容については複合的な場合もあるので 1 件に対して複数を選択している場合がある。相談件数は前期のほうが多いが、後期にかけて徐々に、文献所在などの比較的基礎的な相談内容から、具体的な文献の探索方法などへ内容の比重がシフトしている。（グラフについては資料（20） - 2）

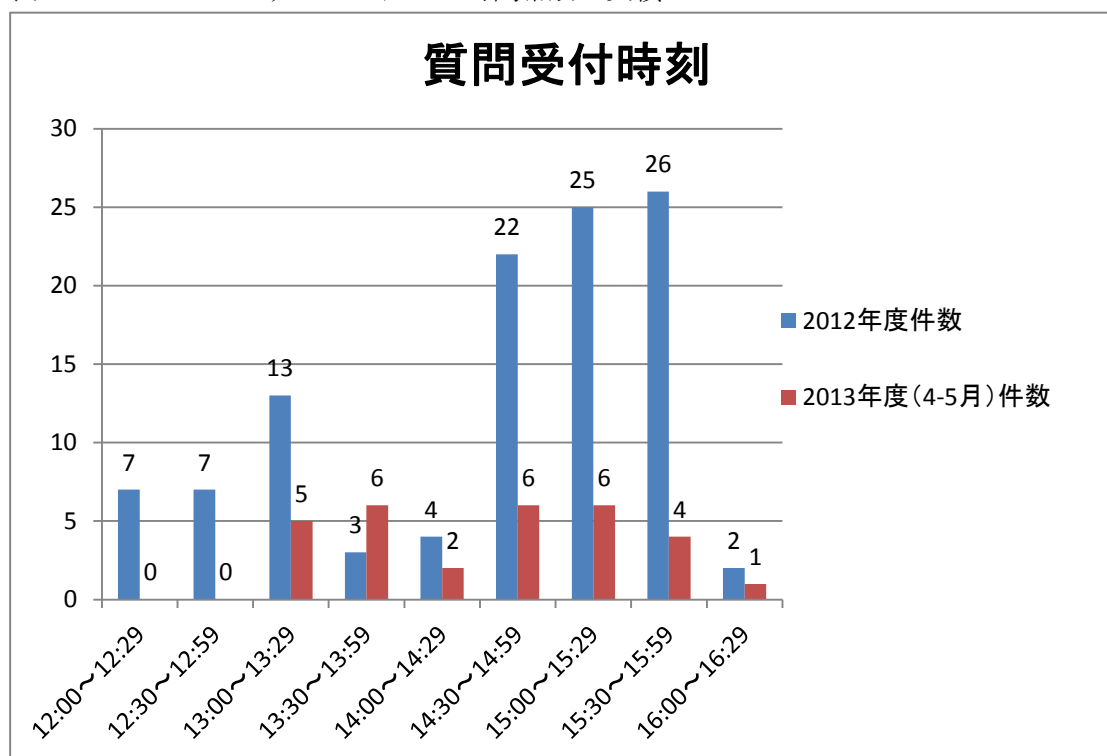
相談内容は 2012 年度当初は概ね専門的なものではなく、入門的、初歩的なものが多い

った。そのため、これまでの実績については、多くを担当者がその場で回答しており、各分野の担当者に相談したり、回答を依頼した事例は少なかった。

ただし、2013 年度になってから、質問内容が基本的な内容から、より個別の事例に関する調査が増えており、その場では回答ができずに後日メール等で回答をする場合もあり、徐々に質問の難易度が上がっている様子が見受けられる。また同じ質問者が繰り返しレファレンスデスクを利用するというケースも見られ、徐々に学生の間での利用が広がっていることが伺える。

さらに、同じ N 棟 2 階に ALSA-LS による分野別学習相談や教員によるオフィスアワーのデスクがあることによって、そちらを紹介したり一緒に回答を行ったりする事例が見られた。

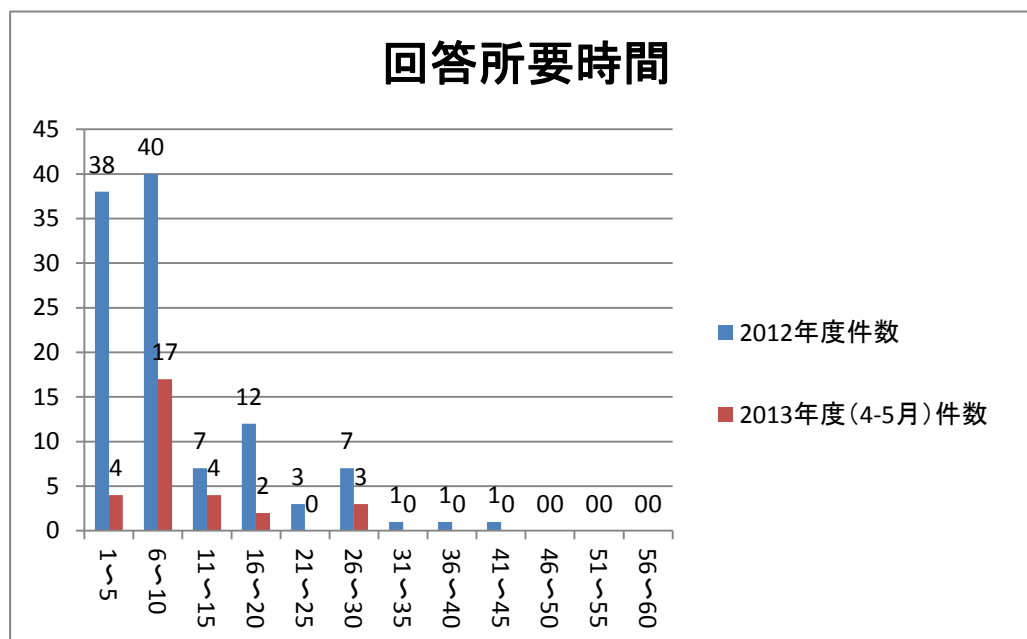
表 2-7-6 レファレンスデスク時間帯別の実績



時間帯別では、昼休みを含む 12:30~13:30 より 14:30~16:00 以降の相談件数が多かった。これを踏まえて、2013 年 1 月よりレファレンスデスクの開設時間を 12:00~13:30 から 13:00~14:30 へと変更した。

1 件当たりの相談時間は、表 2-7-7 のとおりであった。2012 年度は 10 分以下が全体の約 70% を占めており、1 件あたりの平均相談時間は 11.8 分である。2013 年度 4 月～5 月も 10 分以下の割合は変わらないが、1 件当たりの平均相談時間が 12.6 分と微増しており、2013 年度に入ってからの方が比較的難易度が高い質問が寄せられていることが伺える。

表 2-7-7 1件あたりのレファレンス相談時間



2. 7. 3 分館におけるアクティブ・ラーニング支援環境の整備

2012年7月に、亥鼻分館と松戸分館にもアクティブ・ラーニング支援環境の整備を実施した。(各分館の利用状況の詳細については資料(19)-2)

亥鼻分館では、従来からあったグループ学習室4室の机、椅子をキャスター付きのフレキシブルなものに更新した。グループ学習室3と4には以前から可動式間仕切りが設置されていたが、机・椅子を動かせるものにしたことによりさらに効果が高まり、5～6人程度の少人数でも、20人以上の多人数でも利用可能となった。

図 2-7-6 亥鼻分館アクティブ・ラーニング・スペースの様子

(グループ学習室1)



(グループ学習室3・4)



松戸分館では、従来の新着雑誌スペースを改装して、新たにアクティブ・ラーニング・スペースを設けた。入館ゲート脇に、ガラス製間仕切りのスペースを作り、本館と同様に他の学生からも学習の様子が見える空間とした。ここにもキャスター付きの机、椅子、ホワイトボードなどを整備し、ニーズに合わせて学生が自由に動かして使うことができるようにした。

図 2-7-7 松戸分館アクティブ・ラーニング・スペースの様子



2. 7. 4 ALSA-GS によるアカデミック・リンク及び附属図書館の各種業務支援

2012 年 9 月に本館でのアカデミック・リンク及び附属図書館の各種活動の支援を担当する SA (Student Assistant) である学生スタッフとして、ALSA-GS (Academic Link Student Assistant-General Support) を公募した。

よりよい学習環境の構築と学習支援の実施に学習者の立場から参加すること、および ALSA-GS 自身が大学における自分の学習を充実したものにすることを目的として、2012 年 11 月から 9 名で活動を開始した。2013 年 4 月には追加公募を行い、3 名を採用した。2013 年 5 月末時点の ALSA-GS の数は 11 名である。

1 名あたり週 2 回、原則として 2 人 1 組で業務を行うように業務体制を組んだ。勤務開始と終了には図書館員が立ち会い、その日の業務指示や、業務後の報告を受けている。業務日誌・メーリングリストをつかって教員・職員・ALSA-GS 間で情報共有を行っている。ALSA-GS の具体的な活動は以下の通りである。

1) 図書館業務の補助・支援

附属図書館が提供しているコンテンツの整理、配架、装備など図書館で現在行われている諸々の業務のサポートを行った。具体的には、返却された図書を書架へ返す作業や、図書を請求記号順に整理する作業、図書のバーコード貼りつけ作業などである。これらの活動の中で、ALSA-GS 自身から館内フロアマップの改善について要望があり、2013 年 5 月現在、有志のメンバーが、現状のマップの問題点を洗い出し、他の図書館のフロアマップ

などを参考にしながら、わかりやすいマップを目指して作成しているところである。

図 2-7-8 ALSA-GS による返本作業の様子



2) 各種ガイダンス・セミナー等学習支援企画の補助・支援

附属図書館等が主催している各種ガイダンスや館内利用案内等の業務のサポートを行い、ガイダンスの広報の補助、高校生の図書館見学ツアーの補助に携わった。

また例年4月には新入生向けの図書館内案内ツアー（名称「ライブラリーツアー」）を図書館主催で行っていたが、2013年4月のライブラリーツアーでは、ALSA-GSのうち希望した4名がガイド役をつとめ、1人あたり3～4回のツアーを行った。ライブラリーツアー実施にあたっては、事前に教員と職員が立ち合いのうえ、館内の案内経路やどの点に注意して案内をしたらよいかなどを確認し、何度かリハーサルを行った。

表 2-7-8 ライブラリーツアー担当表

ツアー開催時間	4月8日	4月9日	4月10日	4月11日	4月12日
10:30-11:00	ALSA-GS 2名	ALSA-GS 2名	ALSA-GS 2名	ALSA-GS 1名 図書館員 1名	図書館員 2名
14:30-16:00	ALSA-GS 2名	ALSA-GS 1名 図書館員 1名	ALSA-GS 1名 図書館員 1名	ALSA-GS 1名 図書館員 1名	ALSA-GS 1名 図書館員 1名

ライブラリーツアー当日は、それぞれの ALSA-GS が学生自身の視点で、どの場所が使いやすいかということや、自分自身が図書館のサービスを使った感想などを交えて新入生を案内した。

図 2-7-9 ALSA-GS によるライブラリーツアーの様子



2. 7. 5 今後の課題

1) レファレンスデスク

2012 年 8 月, 12 月, 2 月に, ファレンスデスクを担当する常勤図書館員による中間報告会を行い, これまでの活動の総括と研修を行った。この中で, レファレンスデスクの運用やレファレンススキルの向上について, 以下の課題を提案した。

- ・ 図書館員によるレファレンスデスクを利用者に伝えるため広報の改善
- ・ 資料までの館内誘導時や記録票記載時の運用手順の整理
- ・ 頻度の高い質問に対応するためのインフォメーションシートの作成
- ・ 相談者への対応方法, データベースごとの検索法, 事項調査の方法等に関する図書館員のスキルアップ研修の実施と館員間の情報共有

これらの課題についての解決策もこの報告会で検討し, すでにいくつかの具体的な改善を試みている。情報共有とスキルアップ研修の一つとして, 今後もレファレンス報告会を継続的に開催する予定である。

2) 図書館員による学生用図書の分野専任選書体制の試行

2012 年度から各図書館員が分野を専任して学生用図書を選書する体制の試行を開始し, 2013 年度もこの体制を継続することとした。

表 2-7-9 学生用図書選定分野担当表（2013 年 5 月時点での体制）

文学部・人社研	綾田・谷・佐野
法経学部・専門法務	庄司・丸茂
教育学部・教育学研究科	島副主査・武内・竹内
工学部・工学研究科・融合科学研究科	木下・池尻・伊勢
理学部・理学研究科	田川・千葉
医学薬学府・看護学部・看護学研究科	亥鼻分館（高野・野田）
園芸学部・園芸学研究科	杉田主査・松戸分館（佐藤・下妻）

学生用図書の選定分野は授業資料ナビゲータやレファレンスデスクの担当分野と同期させており、図書館員がシラバス調査等により担当分野の学生・教員の要求や授業の動向を把握した上で、資料選定や蔵書構築を行うことを目指している。また、一定金額までは図書館員に選定責任を与えることで、個々の職員のモチベーションや基礎的資質を高める試みを行っている。

3) ALSA-GS の活動の拡大

これまで ALSA-GS の業務内容としては、図書館業務の補助・支援が主であり、図書館員側が内容を決めていた。しかし、学生側も図書の返却作業等の図書館業務や、図書館が主催するイベント等を実際に体験して、それぞれ気が付いた点や改善点などを発見している。今後はそれらの学生の視点での発見を活かせるような活動の展開を行っていく予定である。これまでの週 2 回の決まった活動だけでなく、発見した課題の解決に向けて、展開していけるような体制をつくることが課題である。

2. 8 補遺

以上、プロジェクトごとに2013年5月末までの進捗状況をまとめたが、それ以降(2013年7月末まで)の活動の進展に関し、特に顕著なものについて記述する。

2. 8. 1 共同研究部門の設置

2013年7月にアカデミック・リンク・センターに「電子教材の開発および活用に関する共同研究部門」が設置された。これは、2011年4月に大日本印刷株式会社と千葉大学との間で締結された包括協定を基礎に、大日本印刷株式会社、丸善株式会社、および千葉大学の三者の合意によって、2年間の予定で設置されたものである。この共同研究部門の目的は、新たな教材の開発および教材の利用を促進するモデルの構築にあり、教員の教材利用の実態、支援ニーズの調査といった調査研究と並行して、個別教員の教材作成支援におけるコンサルティング、著作権処理支援といった実務的な活動を行う予定である。現在、工学部の教員を対象とした調査の準備を行っている。

2. 8. 2 授業資料ナビゲータ掲載資料の利用状況分析

授業資料ナビゲータ掲載資料については、RFIDを用いることによって、貸出のみならず、館内での利用状況についても把握することをめざしてきた。2012年度については、図書館旧館からのN棟への移設に伴う設置環境の変化への対応のみならず、UHF帯ICタグにおける使用電波の周波数帯変更への対応、システム調整のために、十分なデータを取得することができなかったため、これらの資料の利用状況については、館外貸出データを用いた把握に止まっていた。2013年度分については、ほぼ安定したシステム運用が可能となったので、取得されたデータをもとに利用状況分析を行う予定である。

2. 8. 3 アクティブ・ラーニングを推進する「新しい授業」の学内公募提案

昨年度の評価委員会での提案を受け、アクティブ・ラーニングの推進に向けた教員に対するインセンティブを提供するとともに、アカデミック・リンクの機能を学内に広く知らしめることを目的として、アカデミック・リンク・センターや学内の各部局が保有する多様な資源を活用しながらアクティブ・ラーニングを推進するような「新しい授業」の学内公募の実施を高等教育研究機構に対して提案した。この提案においては、新しい授業を実現するための財政的な支援をおこなうとともに、成果については報告会を行うなどして、グッドプラクティスとして学内で共有できるようにすることをめざしている。

3. 評価と将来計画

3. 1 評価

これまで述べてきたように、アカデミック・リンクは、2012 年 3 月のサービス開始以来、順調に活動を続けてきた。2012 年度の入館者数は、52 万人弱（延べ数）であった。試験期の入館者数は最大 5,000 名弱（延べ数）を記録した。また、入館者数は順調に推移しており、2013 年度に入ってから入館者数は対前年比で増加している。

アカデミック・リンク・センターの活動の全体的自己評価とプロジェクトごとの自己評価を資料として添付する。

3. 2 さらに発展に向けて

3. 2. 1 L 棟改修

L 棟については、2012 年度補正予算によって機能改善のための改修が認められた。N 棟と直結して回遊性を高めるとともに、利用者が声を出してよい学習空間を拡張し、同時に静寂な学習空間としての機能を高める。2013 年 10 月に工事に着工し、2014 年 5 月末竣工をめざす。それによって、これまで認識されていたような課題、すなわち、討議空間と静寂空間の境界が曖昧になりすぎている、学生用コンピュータ端末（シンクライアント）を静寂な学習空間にも設置してほしいという要望がある、L 棟の閲覧席が必ずしも静寂に学習するにふさわしいものではないといった課題を解消する。L 棟の改修によって施設面では一応の完成を見ることとなる。

3. 2. 2 大学学習資源利用モデル研究会

これまでもくり返し指摘してきたように、コンテンツ提供における最大の隘路は、電子化に係る権利処理である。一つ一つの著作物について利用の必要性が生じるたびに著作権者から許諾を得るという方法では、作業負担の点で困難が多い。また、LMS を含む e-learning の環境下で著作物を教育、学習に円滑に使えるようにすることは、必ずしも千葉大学だけの課題ではない。

著作権者と著作物の利用者である大学との間で何らかの合意を得て、一定の条件下において著作物を学習資源として自由に利用できるようにする等、包括的な枠組みの構築が必要である。このような環境の下で、教材開発やその共有化、電子化や POD 等の技術を活用したコンテンツ提供など実証的な実験に取り組む必要がある。このような問題意識の下に、千葉大学が呼びかける形で、国私立大学、大学出版会、大学生協、出版流通の関係者が集まり、2012 年にアカデミック・リンク・センター長を座長とする「大学学習資源利用モデル研究会」を発足させた。

この研究会は、大学ではアクティブ・ラーニングの推進や課題解決能力の涵養において電子的学習資源を利用すること、またそのために必要な環境を整備することは重要であること、継続的かつ安定的に教育、学習に資する著作物を生み出す環境が重要であること、現下の法制度あるいは利用に関する慣習では、情報通信技術を活用した新しい学習環境における著作物の利活用を想定しているとはいえず、実際に教材の電子化を行おうとしている教員に困惑をもたらし、著作物の利用を抑制するというマイナスの効果をも生んでいる

こと、および電子的学習資源の共有を進捗させ、また大学組織のコンプライアンスのために大学としての組織的な対応が必要であることを認識したうえで、一定の条件下での著作物の利用について許諾なしにこれを行えるようにするためのガイドラインの策定や、著作権管理の委託を受けた団体との意見交換を行っている。また、個人参加の研究会から機関が正式に参加するコンソーシアムへの展開可能性についての検討がなされている。

3. 2. 3 アカデミック・リンク・センターの強化

全体に関わる問題としては、絶対的な人的資源の不足がある。7つのプロジェクトを管理し、必要な業務を行なっていくために、アカデミック・リンク・センターの教員および附属図書館の正規職員の全員出動体制としているが、現有の人的資源では、現在実施している水準での活動を維持するのが限度であり、今後、規模と質を拡大しつつサービスを提供し続けることは困難である。

アカデミック・リンク・センターについては、アカデミック・リンクを推進するコアの組織として、体制の強化が必要である。

1) 予算の一般経費化

アカデミック・リンクのコンセプトを実現するための経費は運営費交付金特別経費（プロジェクト分）に依っている。現在のプロジェクトは 2011 年度からの 4 年間実施されるが、千葉大学としては、その終了を待たずに文部科学省に対して一般経費化を要求してきた。このことは、大学として、アカデミック・リンク・センターの成果を評価してプロジェクト期間に限定した時限組織ではなく、当分の間存続させるとい意思の表明である。これが実現すれば、組織として安定し、この予算で雇用されているスタッフの雇用の安定化につながる。同時に予算規模の拡大をめざし、人員の増強を図ることができるようになる。

2) 新たな専門職の創設

人員の増強は、1. 6において言及したように、「新しい図書館員」の創出というアカデミック・リンクの目標に沿って、新たな専門職の創出によって行なうこととする。今後のセンターの活動が、これまで教員が担ってきた研究開発から安定的なサービス運用へと移行することを前提に、高度なサービスを提供できる専門的実務家の配置を計画するとともに、それを実現すべく制度設計を行う。

3) 広報活動の強化

アカデミック・リンク・センターでは、ロゴマークを策定するとともに、建物名称、マスコットキャラクターの公募、コンセプトビデオ、コンセプトブック、利用案内（『千葉大学附属図書館本館利用案内』）、建物概要資料の作成、配布／公開に力を注いできた。学内掲示物については、ロゴマークを用いてデザインを統一し、アカデミック・リンクというブランドの確立に努めた。

このようなブランディングには成功したと考えるが、2013 年 1 月～3 月にかけて実施された『千葉大学学習状況・情報利用環境』調査の結果からは、アカデミック・リンクの個々の活動については必ずしも学生に広く認知されていない実態が浮かびあがっており、広報活動の強化が必要である。

参考資料

4. 参考資料

4. 1 組織

参考資料 (1)

千葉大学アカデミック・リンク・センター規程

平成 23 年 4 月 1 日
制定

(趣旨)

第 1 条 この規程は、千葉大学アカデミック・リンク・センター(以下「センター」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(目的)

第 2 条 センターは、学内共同教育研究施設として、電子情報環境下における能動的学習を支援するとともに、教育情報資源等の制作、活用等に関する研究開発、企画及び立案を行い、それらの成果を実施及び検証することを目的とする。

(組織)

第 3 条 センターに、次の部門を置く。

- 一 研究開発部門
- 二 アクティブ・ラーニング推進部門

(業務)

第 4 条 研究開発部門は、能動的学習及び教育情報資源等の連携に関する研究開発を行う。

2 アクティブ・ラーニング推進部門は、能動的学習の推進に資する業務を実施する。

(職員)

第 5 条 センターに、次の職員を置く。

- 一 センター長
- 二 教授，准教授，講師及び助教
- 三 その他の職員

2 前項第 2 号の職員については、兼務の教員をもって充てることができる。

(教員会議)

第 6 条 センターに、千葉大学教授会規程第 4 条の規定に基づき、センターの業務に関する重要事項を審議するため、教員会議を置く。

2 教員会議に関し必要な事項は、別に定める。

(センター長の選考等)

第7条 センター長の選考及び任期については、千葉大学センター長等選考規程の定めるところによる。

(センター長の職務)

第8条 センター長は、センターの業務を総括する。

(教員の選考)

第9条 教員の選考については、国立大学法人千葉大学における大学教員の選考に関する規程の定めるところによる。

(事務)

第10条 センターの事務は、学務部の協力を得て、附属図書館利用支援企画課において処理する。

(雑則)

第11条 この規程に定めるもののほか、センターに関し必要な事項は、教員会議の議を経てセンター長が別に定める。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成24年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

参考資料 (2)

千葉大学アカデミック・リンク・センター教員会議規程

平成 23 年 4 月 1 日
制定

(趣旨)

第 1 条 この規程は、千葉大学アカデミック・リンク・センター規程第 6 条第 2 項の規定に基づき、千葉大学アカデミック・リンク・センター教員会議(以下「教員会議」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(審議事項)

第 2 条 教員会議は、千葉大学アカデミック・リンク・センター(以下「センター」という。)の業務に関する重要事項を審議する。

(組織)

第 3 条 教員会議は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

- 一 センター長
- 二 センターの教員
- 三 学務部長
- 四 その他教員会議が必要と認めた者

(議長)

第 4 条 教員会議に議長を置き、センター長をもって充てる。

2 議長は、教員会議を主宰する。

3 議長に事故あるときは、議長があらかじめ教員会議の議を経て指名した教員が、その職務を代行する。

(議事)

第 5 条 教員会議は、構成員の 3 分の 2 以上が出席しなければ、議事を開き、議決することができない。

2 教員会議の議事は、出席した構成員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(構成員以外の出席)

第 6 条 議長は、必要と認めるときは、構成員以外の者を教員会議に出席させることができる。

(議事録)

第7条 教員会議の議事進行の過程及び決定事項は、議事録に記録する。

(専門委員会)

第8条 教員会議が必要と認めたときは、専門の事項を調査検討するため専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会に関し必要な事項は、教員会議の議を経てセンター長が別に定める。

(庶務)

第9条 教員会議の庶務は、学務部の協力を得て、附属図書館利用支援企画課において処理する。

(雑則)

第10条 この規程に定めるもののほか、教員会議の運営に関し必要な事項は、教員会議が別に定める。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成24年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成25年4月1日から施行する。

参考資料 (3)

千葉大学アカデミック・リンク・センター評価委員会規程

平成23年7月7日
制定

(設置)

第1条 国立大学法人千葉大学点検・評価規程第4条第1項に基づき、千葉大学アカデミック・リンク・センター（以下「センター」という。）の活動について第三者の立場から評価し、センターの活動の発展・充実に資するため、センターに評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(組織)

第2条 委員会は、4名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、センターの活動に関し識見を有する学外者のうちから、センター長が委嘱する。

(委員長及び副委員長)

第3条 委員会には、委員長及び副委員長を置く。

2 委員長及び副委員長は、委員の互選によるものとする。

3 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

(任期)

第4条 委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 委員の欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(会議の成立等)

第5条 委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開くことができない。

2 議決を要する事項については、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

3 委員会に出席することのできない委員は、書面をもって票決をなし、又は他の委員に票決を委任することができるものとし、この場合には出席したものとみなす。

(委員以外の出席)

第6条 委員長は、必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させ、意見を聞くことができる。

(庶務)

第7条 委員会の庶務は、附属図書館利用支援企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営及び評価の実施に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

1 この規程は、平成23年7月7日から施行し、平成23年4月1日から適用する。

2 この規程の施行日以降、最初の評価委員に係る任期は第4条第1項本文の規定にかかわらず、平成25年3月31日までとする。

附 則
この規程は、平成 24 年 4 月 1 日から施行する。

参考資料 (4)

千葉大学アカデミック・リンク・センター教員選考内規

(趣旨)

第1条 この内規は、国立大学法人千葉大学における大学教員の選考に関する規程第8条の規定に基づき、千葉大学アカデミック・リンク・センター(以下「センター」という。)の教員の選考に関し必要な事項を定める。

(選考手続)

第2条 センター長は、教員の選考を必要とするときは、センター教員選考委員会(以下「選考委員会」という。)を設けて教員候補者(以下「候補者」という。)の選考に当たらせるものとする。

(選考委員会)

第3条 選考委員会は、次の各号に掲げる者をもって組織する。

- 一 センター長
- 二 センターの教員
- 三 センター長が必要と認める関連する学部等の教授 若干名

2 選考委員会に委員長を置き、委員の互選により定める。

(候補者の募集)

第4条 選考委員会は、原則として候補者を公募するものとする。

2 選考委員会は、前項によるほか、関係部局等から広く候補者の推薦を受けることができる。

(候補者の選考)

第5条 選考委員会は、前条の応募者及び被推薦者の中から、候補者1名を選考するものとする。

(雑則)

第6条 この内規に定めるもののほか、この内規の実施に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この内規は、平成23年4月1日から施行する。

参考資料 (5)

千葉大学アカデミック・リンク・センター兼務教員選考申し合わせ

(趣旨)

第1条 この申し合わせは、千葉大学アカデミック・リンク・センター教員選考内規第6条の規定に基づき、千葉大学アカデミック・リンク・センター(以下「センター」という。)の兼務教員の選考に関し必要な事項を定める。

(選考手続)

第2条 センター長は、兼務教員の選考を必要とするときは、関連部局と協議のうえ選考を行うものとする。

(雑則)

第3条 この申し合わせに定めるもののほか、この申し合わせの実施に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この申し合わせは、平成23年4月1日から施行する。

参考資料 (6)

アカデミック・リンク・センター教員会議名簿

所属	氏名	職名
アカデミック・リンク・センター	竹内 比呂也	アカデミック・リンク・センター長 (文学部教授)
統合情報センター	川本 一彦	アカデミック・リンク・センター兼務教員 (准教授)
普遍教育センター	白川 優治	アカデミック・リンク・センター兼務教員 (准教授)
学務部	織田 雄一	学務部長
附属図書館	島 文子	附属図書館利用支援企画課長
附属図書館	杉田 茂樹	附属図書館学術コンテンツ課長

(センター特任教員)

アカデミック・リンク・センター	姉川 雄大	アカデミック・リンク・センター特任助教
アカデミック・リンク・センター	岡本 一志	アカデミック・リンク・センター特任助教
アカデミック・リンク・センター	國本 千裕	アカデミック・リンク・センター特任助教
アカデミック・リンク・センター	藤本 茂雄	アカデミック・リンク・センター特任助教
アカデミック・リンク・センター	長丁 光則	アカデミック・リンク・センター客員教授
アカデミック・リンク・センター	栃木 博子	アカデミック・リンク・センター客員研究員
アカデミック・リンク・センター	能登谷 泰見	アカデミック・リンク・センター外部機関共同研究員

アカデミック・リンク・センター評価委員 (平成 25 年度名簿)

所属	氏名
国際教養大学学長	鈴木 典比古
慶應義塾大学メディアセンター所長	田村 俊作
同志社大学社会学部教育文化学科教授	山田 礼子
東京大学情報学環准教授	山内 祐平

参考資料 (7)

千葉大学アカデミック・リンク・スチューデント・アシスタント実施要項

(目的)

第1 この要項は, 千葉大学スチューデント・アシスタント実施要項第8の規定に基づき, アカデミック・リンクにおける学習支援等の充実を図るために実施するアカデミック・リンク・スチューデント・アシスタントに関する必要な事項を定めることを目的とする。

(定義)

第2 この要項において「アカデミック・リンク・スチューデント・アシスタント」とは, アカデミック・リンク・センターが実施する活動において, 次に掲げる業務を行うために委嘱された学生をいう。

- (1) 授業等に係る学習相談業務
- (2) 教材作成等に係る技術支援業務
- (3) その他学生支援等に関する業務

(選考)

第3 アカデミック・リンク・スチューデント・アシスタントは, 担当業務内容に適した選考基準・選考方法を用いて選考する。選考基準及び方法は, アカデミック・リンク・センター長が別に定める。

(手当)

第4 アカデミック・リンク・スチューデント・アシスタントの手当は, 謝金(時間単価)によるものとし, 手当の額は, 特段の理由がない限り, 「千葉大学スチューデント・アシスタント実施要項」によって定められる謝金の基準額を適用する。

(雑則)

第5 この要項に定めるもののほか, アカデミック・リンク・スチューデント・アシスタントの実施に関し必要な事項は, アカデミック・リンク・センター長が別に定める。

附 則

この要項は, 平成24年 4月 1日から実施する。

参考資料 (8)

ALSA の選考基準及び方法

1. 趣旨

千葉大学アカデミック・リンク・ステューデント・アシスタント実施要項（第3項）に基づき、選考基準・選考方法を定める。

2. ALSA 担当業務

ALSA は、担当業務内容によって以下の a)～c)に分けられる。

- a)授業等に係る学習相談業務を行う（その他学習支援にかかわる業務を含む、以下、学習支援担当）。
- b)教材作成等に係る技術支援業務を行う（以下、技術支援担当）。
- c)その他学生支援に係る業務を行う（学生向けセミナー、展示の開催等を支援する業務を含む、以下、学生支援担当）。

3. 選考基準

(1)アカデミック・リンクにおける学習支援の意義を理解し、これに積極的ににかかわる意欲を持っていること。

(2)a)学習支援、b)技術支援、c)その他の学生支援の業務を担当するにあたり、以下のよう
にそれぞれ十分な能力を有すること。

- a)学習支援担当：ア) 学習相談の当該分野に関する十分な学力を有し、イ)相談業務を遂行するにあたり十分なコミュニケーション能力を有すること。
- b)技術支援担当：ア) 技術支援に関する十分な知識を有し、イ)技術支援相談業務を遂行するにあたり十分なコミュニケーション能力を有すること。
- c)学生支援担当：教員・図書職員と共同で企画・運営業務を遂行するにあたり十分な能力を有すること。

(3)当該学生の学習・研究活動及び授業等に支障が生じないこと。

4. 選考方法

アカデミック・リンク・センター長は、自らを含む ALSA 選考委員を指名し、ALSA 選考委員会（以下、委員会）を設置する。委員会において上記選考基準に沿って、推薦・公募の方法によってそれぞれ以下のように選考を行う。

(1)学内教員の推薦により選考する場合。

アカデミック・リンク・センター長の依頼に基づいて学内教員が候補者を推薦する場合には、当該教員は上記選考基準(1)～(3)について留意してアカデミック・リンク・センター長に対して推薦を行い、委員会において選考する。

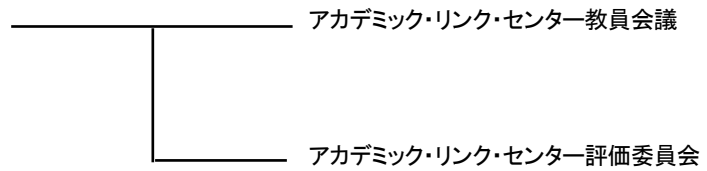
(2)公募により選考する場合。

公募により選考する場合、原則として上記選考基準(1), (2)-a-イ), (2)-c), (3)については面接によって、(2)-a-ア)については指導教員に照会の上、委員会において判断する。なお、委員会が必要と認めた場合には、(2)-a-ア)以外の項目についても指導教員等に照会することがある。

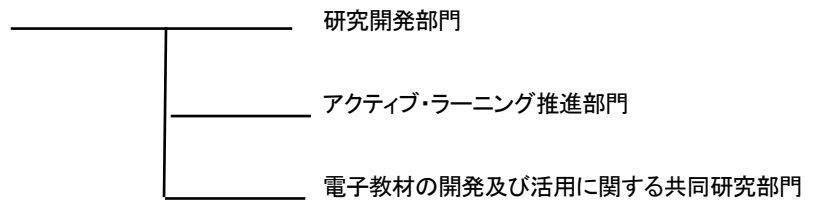
参考資料 (9)

アカデミック・リンク・センター組織図

アカデミック・リンク・センター長



アカデミック・リンク・センター長



プロジェクト担当

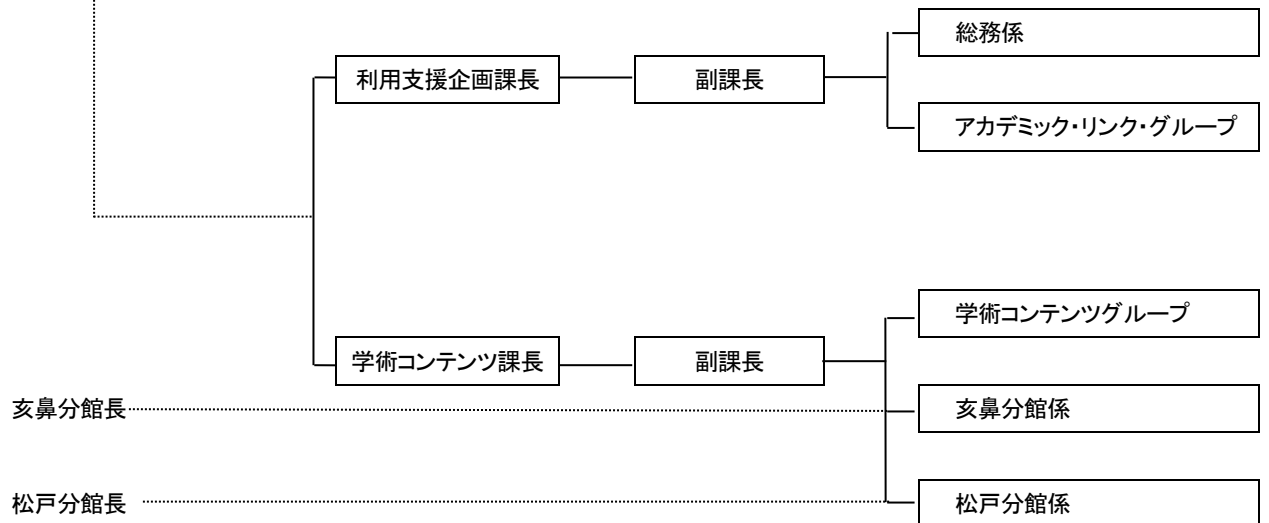
◎取りまとめ

コンテンツ・ラボ (全体として◎川本, 岡本)	1. レガシーコンテンツ作成	◎川本, 岡本, 丸茂, 佐野
	2. オンラインクラスルーム	◎川本, 岡本, 武内, 伊勢
	3. デジタルコースパック	◎川本, 岡本, (藤本), 田川
ティーチングハブ (全体として◎白川, 姉川, 國本)	4. 参加する学習	姉川, 國本, 千葉
	5. 教育力・学習力向上	國本, 姉川, 谷, 茂住, 上原
アクティブラーニングスペース	6. 情報利用行動定点観測	◎國本, 白川・川本, 庄司, 各分館職員
	7. 新しい図書館員	姉川(部会運営), 池尻, 竹内(茉)
組織運営	8. 基盤整備	竹内, 藤本, 武内, 伊勢
	9. 運営管理	竹内, 島, 木下, 綾田
	10. 広報	竹内, 竹内(茉), 木下
	11. 評価	竹内, 木下

事務組織図

アカデミック・リンク・センター長

(附属図書館長)



職員の配置

(2013. 4. 1 現在)

区 分	常勤職員	非常勤職員			計	時間外職員
		フルタイム	パート	派遣		
センター長(兼務教授)	1				1	
課 長	2				2	
副 課 長	2				2	
総務係	3	1	3		7	
アカデミック・リンク・グループ	5		3		8	
学術コンテンツグループ	5		12		17	3
亥鼻分館サービスグループ	2	1	5		8	2
松戸分館サービスグループ	2		2		4	1
合 計	22	2	25		49	6

4. 2 プロジェクトの活動計画

参考資料 (10) アカデミック・リンク (AL)活動年次計画 (ロードマップ) (平成 23 年度から 26 年度) (2013 年 3 月改訂)

機能	活動(予算)	目的	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
コンテンツ・ラボ	1. レガシー・コンテンツ再生プロジェクト (Legacy Revitalized Project) (公刊物の電子化)	・すでに刊行されているパッケージ型メディア (図書、ビデオなど) の電子的再生と学習における利活用のための提供環境を整備する。	【概要】 ・児童文学事典再生プロジェクトの編集作業 (新規) ・書籍の電子化と配信のための検討事項の洗い出しとモデルコースでの試行 ・次世代授業資料ナビFaLCopの仕様策定 【内容】 ①児童文学事典：編集委員会設置，執筆者確定，原稿依頼，権利処理 ②授業資料ナビおよび貸出上位の書籍の電子化：モデルコース（5つ程度）選定，権利処理，配信プラットフォーム検討（試験的に配信できる環境を整備する必要あり） ③次世代授業資料ナビ「FaLCop：Faculty-Library Collaboration Platform」の開発：電子配信やPODとの連携を念頭においた授業資料ナビのための仕様検討（配信プラットフォーム，PODシステム，OPACなどを統合的に管理でき，図書館員と教員の協調のもと運用できるシステムが必要）	【概要】 ・児童文学事典再生プロジェクトの編集作業と電子化（継続） ・普遍コア科目事典プロジェクト1の編集作業（新規） ・書籍の電子化と配信のためのプラットフォーム開発と試験運用 ・次世代授業資料ナビFaLCopの開発 【内容】 ①児童文学事典：原稿執筆，提出，校正，権利処理（本年度中に執筆と校正を完了したい） ②普遍コア事典プロジェクト：普遍コア科目で利用されている事典を中心に（「くらしと植物」，「心の科学の成立と発展1・2」など）を開始 ③授業資料ナビおよび貸出上位の書籍の電子化：モデルコースの追加（権利処理）および利用統計の収集（LMSでの管理） ④次世代授業資料ナビFaLCopの開発：電子書籍配信の本格的運用開始，PODシステムの稼働，LMSとの連携，旧授業資料ナビの刷新	【概要】 ・児童文学事典再生プロジェクトの授業利用の開始（継続） ・普遍コア科目事典プロジェクト1の電子化と授業利用（継続） ・普遍コア科目事典プロジェクト2の編集作業と電子化（新規） ・書籍の電子化と配信のためのプラットフォームの本格的運用と利用統計収集 ・次世代授業資料ナビFaLCopの運用 【内容】 ①児童文学事典：組版，配信，授業利用（電子化完了，授業での活用を開始） ②普遍コア事典プロジェクト：普遍コア科目で利用されている事典をさらに追加で開始 ③授業資料ナビおよび貸出上位の書籍の電子化：モデルコースの追加（権利処理）および利用統計の収集（LMSでの管理） ④次世代授業資料ナビFaLCopの運用：旧授業資料ナビからの移行，PODシステムとLMSとの連携，利用統計の収集	【概要】 ・児童文学事典再生プロジェクトの授業利用と評価（継続） ・普遍コア科目事典プロジェクト1の授業利用と評価（継続） ・普遍コア科目事典プロジェクト2の授業利用と評価（継続） ・書籍の電子化と配信のためのプラットフォームの運用とその評価 ・次世代授業資料ナビFaLCopの運用 【内容】 ①児童文学事典：授業利用と評価 ②普遍コア事典プロジェクト：授業利用と評価 ③授業資料ナビおよび貸出上位の書籍の電子化：モデルコースの追加（権利処理）および利用統計の収集（LMSでの管理）とその評価 ④次世代授業資料ナビFaLCopの運用（利用統計収集と分析）

機能	活動(予算)	目的	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
コンテンツ・ラボ	2. オンライン・クラスルームプロジェクト(Online Classroom Project)(授業の電子化)	・授業の録画配信を中心とするe-learning環境を整備し、実施する。	【概要】 ・コンテンツスタジオ設置 ・動画配信プラットフォームの整備 ・普遍教育センター遠隔授業の試行 【内容】 ①コンテンツスタジオで運用する動画配信設備の導入と試行運用 ②動画配信とLMSとの連携 ③コンテンツ編集室の整備 ④来年度から配信する授業の選定(理系2つ, 文系2つ程度) ⑤普遍教育センターの遠隔授業のオンライン・クラスルーム化(コンテンツスタジオ以外でのオンライン化への試行)	【概要】 ・コンテンツスタジオの運用 ・動画配信プラットフォームの運用 ・動画コンテンツの授業活用 【内容】 ・4授業(理系2つ, 文系2つ程度)をコンテンツスタジオにて撮影と配信, 検討事項の洗い出し ・授業以外での ・LMS経由での動画配信と視聴管理の実施	【概要】 ・コンテンツスタジオの運用 ・動画配信プラットフォームの運用 ・動画コンテンツの授業活用とその評価 【内容】 ①追加授業をコンテンツスタジオ(あるいは遠隔教室)にて撮影および配信(最終的には教養コア科目の30%のオンライン化が目標) ②ポッドキャスト, FD講習会など授業以外での動画の撮影と配信 ③LMS経由での動画配信と視聴管理の実施 ④利用統計の分析	【概要】 ・コンテンツスタジオの運用 ・動画配信プラットフォームの運用 ・動画コンテンツの授業活用とその評価 【内容】 ①追加授業をコンテンツスタジオ(あるいは遠隔教室)にて撮影および配信(累計教養コア科目の30%のオンライン化) ②ポッドキャスト, FD講習会など授業以外での動画の撮影と配信 ③LMS経由での動画配信と視聴管理の実施 ④利用統計の分析

機能	活動(予算)	目的	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
コンテンツ・ラボ	3. デジタルコースパック構築プロジェクト (Digitally Packaged Course Project) (主として非公開物の電子化)	・自作教材、著作物の一部など、これまで教室での配布にとどまっていた授業資料の電子的パッケージ化を実現し、提供環境を整備する。	【概要】 ・物理演習問題集の電子化プロジェクトの問題作成 (LMS向け) ・図書館学コースパックプロジェクトの検討 (POD向け) ・コア科目コースパックプロジェクトの検討 (POD向け) ・モデルコースの学内公募 (POD, LMS向けの両方) ・コースパック構築のための調査 ・図書館ポッドキャストの移行作業 ・教員に対する教材の電子化全般についてのコンサルテーション 【内容】 ①物理演習問題集：LMS向け問題作成，モデルコース選定 ②物理演習以外の図書館学，コア科目，情報処理，数学演習等への展開を検討 (LMS向け，POD向けのコースパックの開発) ③学内公募者へのインセンティブの検討 ④コースパックの課金の仕組みおよび権利処理の調査 (アメリカ，イギリスの例を中心に) ⑤図書館ポッドキャストの配信プラットフォームをUstreamに切り替え ⑥教員に対して、随時相談に応じることができる環境の整備	【概要】 ・物理演習問題集の電子化プロジェクトの授業利用 (LMS向け) ・図書館学コースパックプロジェクトのコンテンツ作成 (POD向け) ・コア科目コースパックプロジェクトのコンテンツ作成 (POD向け) ・モデルコースの試験運用 (昨年度分) と学内公募の継続 (POD, LMS向けの両方) ・図書館ポッドキャストの移行作業と運用開始 ・教員に対する教材の電子化全般についてのコンサルテーション 【内容】 ①物理演習問題集：LMS向け問題作成，演習授業での利用 ②物理演習以外の図書館学，コア科目，情報処理，数学演習等への展開 (LMS, PODを活用したコンテンツ作成) ③コースパックの課金の仕組み検討，LMSとの連結開発 ④新図書館ポッドキャストでのコンテンツ企画・作成・配信 ⑤教員に対する相談体制の試行	【概要】 ・物理演習問題集の電子化プロジェクトの授業利用とその評価 (LMS向け) ・図書館学コースパックプロジェクトの授業利用とその評価 (POD向け) ・コア科目コースパックプロジェクトの授業利用とその評価 (POD向け) ・モデルコースの授業利用とその評価 (昨年度分) と学内公募の継続 (POD, LMS向けの両方) ・図書館ポッドキャストの運用 ・教員に対する教材の電子化全般についてのコンサルテーション 【内容】 ①物理演習問題集：LMS向け問題作成，授業利用，コース追加，評価 ②図書館学，情報処理，数学演習等へのコースパックモデルへの展開と授業利用 ③新図書館ポッドキャストでのコンテンツ企画・作成・配信 ④教員に対する相談体制の試行・評価	・【概要】 ・物理演習問題集の電子化プロジェクトの授業利用とその評価 ・図書館学コースパックプロジェクトの授業利用とその評価 ・コア科目コースパックプロジェクトの授業利用とその評価 ・モデルコースの授業利用とその評価 (昨年度分) と学内公募の継続 ・図書館ポッドキャストの運用 ・教員に対する電子化全般についてのコンサルテーション 【内容】 ①物理演習問題集：授業利用，コース追加，評価 ②図書館学，情報処理，数学演習等へのコースパックモデルへの展開と授業利用 ③新図書館ポッドキャストでのコンテンツ企画・作成・配信 ④教員に対する相談体制の試行・評価

機能	活動(予算)	目的	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
ティ ー チ ン グ ・ ハ ブ	4.「参加する 学習」プロジェクト (Social Learning Project)	・ソーシャル・ラー ニングを実現 するため、アク ティブ・ラー ニング・ス ペースにお ける「学生 による学 習支援」を 支える学 生(SA)を 養成する。	【概要】 ・情報収集 ・SAの業務内容と研修の体系化 ・SAの募集と研修の実施 【内容】 23年度前半： ①SA制度を実施している国内先行大学への調査と情報収集 ②海外のSA、Social learningの情報収集 ③SAの担当内容の整理（Writing Centerでの相談、語学物化生地の学習相談、初歩の図書レファレンス、etc） 23年度後半： ①SA制度を実施している先行大学への調査と情報収集の継続 ②SAの担当内容の整理（Writing Centerでの相談、語学物化生地の学習相談、初歩の図書レファレンス、etc）の継続 ③SAのマニュアルと研修内容の具体化 ④SAの募集と第1期SA研修の実施 ⑤国内、海外の情報収集の継続	【概要】 ・SAの運営 ・SAミーティングを置き、課題と改善点を共有化し、運営とマニュアルに反映させる ・SAリーダーシステムとして教員・職員の役割を限定し、学生間で相互研修などを行うシステムを検討する 【内容】 24年度前半： ①第1期SAによるSA業務の実施 ②SAミーティングによるSAの担当領域・マニュアルと研修内容の改善 ③第2期SAの新規募集と研修の実施（SAの募集と研修は半期に1度を想定） ④国内、海外の情報収集の継続 24年度後半： ①第2期SAによるSA業務の実施 ②SAミーティングによるSAの担当領域・マニュアルと研修内容の改善 ③SAのリーダーシステムの検討（教員・職員とSAの役割分担の見直し） ④第3期SAの新規募集と研修の実施 ⑤国内、海外の情報収集の継続	【概要】 ・SAの運営 ・SAミーティングの運営 ・SAリーダーシステムの運営と見直し 【内容】 25年度前半： ①第3期SAによるSA業務の実施・SAリーダーシステムの導入 ②SAミーティングによるSAの担当領域・マニュアルと研修内容の改善 ③第4期SAの新規募集と研修の実施（教員・職員による研修からSAリーダーによる研修に移行） ④国内、海外の情報収集の継続 25年度後半： ①第4期SAによるSA業務の実施 ②SAミーティングによるSAの担当領域・マニュアルと研修内容の改善 ③SAのリーダーシステムの見直し（教員・職員とSAの役割分担の見直し） ④第5期SAの新規募集と研修の実施 ⑤国内、海外の情報収集の継続	【概要】 ・SAの運営のルーティン化 ・SAリーダーシステムの運営と見直しのルーティン化 【内容】 26年度前半： ①第5期SAによるSA業務の実施 ②SAミーティングによるSAの担当領域・マニュアルと研修内容の改善 ③第6期SAの新規募集と研修の実施 ④国内、海外の情報収集の継続 25年度後半： ①第6期SAによるSA業務の実施 ②SAミーティングによるSAの担当領域・マニュアルと研修内容の改善 ③SAのリーダーシステムの見直し（教員・職員とSAの役割分担の見直し） ④第7期SAの新規募集と研修の実施 ⑤国内、海外の情報収集の継続

機能	活動(予算)	目的	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
ティ ー チ ン グ ・ ハ ブ	5.「教育力」・ 「学習力」向上 プロジェクト (Faculty,Staff &Student Development Project)	・学生、教 職員による アカデミッ ク・リンク 機能につい ての理解と 活用を促 し、学習、 教育にかか るスキルの 向上を実現 する。	【概要】 ・教育/学習の情報化の研修機会の提供、ALCの活動成果の発信 ・ALC各プロジェクトのシンポジウム等の企画の全体調整 ・現在の「情報化月例セミナー」の発展的拡張 ・全学FD企画室との連携し、全学FDへの技術的貢献 ・普遍教育センターを中心とする各部局と連携し、部局FDへの技術的支援 【内容】 ・毎月1回のALC主催のセミナーの開催（「情報化月例セミナー」の発展的拡張） ・セミナーは学生対象、教職員対象を隔月で企画 ・ALC各プロジェクトのシンポジウム等の企画を調整し、年次計画の策定と運営 ・全学FD企画室・各部局と連携し、全学および各部局のFDのeラーニング化にむけた企画調整	【概要】 ・教育/学習の情報化の研修機会の提供、ALCの活動成果の発信 ・ALC各プロジェクトのシンポジウム等の企画の全体調整 ・現在の「情報化月例セミナー」の発展的拡張 ・全学FD企画室との連携し、全学FDへの技術的貢献 ・普遍教育センターを中心とする各部局と連携し、部局FDへの技術的支援 【内容】 ・毎月1回のALC主催のセミナーの継続 ・セミナーは学生対象、教職員対象を隔月で企画 ・ALC各プロジェクトのシンポジウム等の企画を調整し、年次計画の策定と運営 ・全学FD企画室・各部局と連携し、全学および各部局のFDのeラーニング化（コンテンツ・ラボ完成後）	【概要】 ・教育/学習の情報化の研修機会の提供、ALCの活動成果の発信 ・ALC各プロジェクトのシンポジウム等の企画の全体調整 ・現在の「情報化月例セミナー」の発展的拡張 ・全学FD企画室との連携し、全学FDへの技術的貢献 ・普遍教育センターを中心とする各部局と連携し、部局FDへの技術的支援 【内容】 ・毎月1回のALC主催のセミナーの継続 ・セミナーは学生対象、教職員対象を隔月で企画 ・ALC各プロジェクトのシンポジウム等の企画を調整し、年次計画の策定と運営 ・全学FD企画室・各部局と連携し、全学および各部局のFDのeラーニング化	【概要】 ・教育/学習の情報化の研修機会の提供、ALCの活動成果の発信 ・ALC各プロジェクトのシンポジウム等の企画の全体調整 ・現在の「情報化月例セミナー」の発展的拡張 ・全学FD企画室との連携し、全学FDへの技術的貢献 ・普遍教育センターを中心とする各部局と連携し、部局FDへの技術的支援 【内容】 ・毎月1回のALC主催のセミナーの継続 ・セミナーは学生対象、教職員対象を隔月で企画 ・ALC各プロジェクトのシンポジウム等の企画を調整し、年次計画の策定と運営 ・全学FD企画室・各部局と連携し、全学および各部局のFDのeラーニング化

機能	活動(予算)	目的	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
アクティブ・ラーニング・スペース	6. 情報利用 行動定点観測 プロジェクト (Student Behavior Observatory)	・千葉大学におけるアカデミック・リンクにおける活動計画の基礎となるデータを収集するとともに、アウトカム評価を実現する。	【概要】 ・調査の設計（ALC・図書館改修に伴い、全学の学習施設・ICT端末・図書（電子図書含む）の利用状況、リテラシー能力の自己評価、学習行動を把握する全学的調査を実施する。調査の設計は、各学生の教務情報と接合し、学習行動と学習成果の関係を分析できるように設計する。また、毎年度の定点観測の経年変化をパネルデータとして分析できるように設計する。国際比較も可能となるようにする） ・調査参加大学の募集（筑波、九州、東京女子、ICU、etcを候補とする） ・千葉大学での第1回調査実施 【内容】 23年度前半： ①調査計画の設計のための先行事例（ワシントン大学調査、JISC）の情報収集 ②調査票、調査計画の具体化 ③参加大学の募集 ④調査の実施のための学内調整 23年度後半： ①千葉大学内での第1回調査の実施 ②参加大学での実施のための調整・実施 ③調査結果の整理と分析 ④科研費での申請（萌芽？）	【概要】 ・第1回調査の分析と報告会の開催 ・調査参加大学での実施 ・千葉大学学内での第2回調査実施 ・調査の見直し 【内容】 24年度前半： ①第1回調査の報告会の開催（千葉大学の学内向け報告会と大学間比較を織り込んだ対外的報告会の2回） ②第1回調査の結果を基にした第2回調査の調査票の見直し 24年度後半： ①千葉大学第2回調査の実施 ②千葉大学第2回調査の結果の整理と分析 ※調査結果データは、①千葉大学内のデータ分析による学内の学習環境・施設・教育プログラムに対する改善提言、②千葉大学を含む複数の大学の比較結果による高等教育全体に対する学習環境等の改善のための提言、③学会での報告・論文文化による学術的貢献の3つの利用を考える	【概要】 ・第2回調査の分析と報告会の開催 ・調査参加大学での実施 ・千葉大学学内での第3回調査実施 ・調査の見直し 【内容】 25年度前半： ①第2回調査の報告会の開催（千葉大学の学内向け報告会と大学間比較を織り込んだ対外的報告会の2回） ②第2回調査の結果を基にした第3回調査の調査票の見直し 25年度後半： ①千葉大学第3回調査の実施 ②千葉大学第3回調査の結果の整理と分析 ③過去3回の調査を踏まえた大規模なシンポジウム（国際シンポジウム）を開催。調査データの基づいた学生の学習環境と学習行動と学習成果についての提言（2年か3年の1度くらいのペースで国際シンポジウムを開催）	【概要】 ・第3回調査の分析と報告 ・調査参加大学での実施 ・千葉大学学内での第3回調査実施 ・調査の見直し 【内容】 26年度前半： ①第3回調査の報告会の開催（千葉大学の学内向け報告会と大学間比較を織り込んだ対外的報告会の2回） ②第3回調査の結果を基にした第3回調査の調査票の見直し 26年度後半： ①千葉大学第4回調査の実施 ②千葉大学第4回調査の結果の整理と分析 ※データの蓄積と変化に意味があるので、ALCの設置期間終了後も調査を継続できる体制と資金の方策をできるだけ早期から検討する。

機能	活動(予算)	目的	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
アクティブラーニング・スペース	7.「新しい図書館員」プロジェクト ("Librarians connected to Learning" Project)	・学習に関与する「新しい図書館員」概念を確立するとともに、彼らを中心に教員／図書館員／学生の協働を基礎とする個別的学習指導モデルを構築し、評価する。	【概要】 ・多様なリテラシー能力を持つ学生に対応できるように、従来の講習会型を中心とする情報リテラシー教育を改革。 ・「新しい図書館員」を中心に、教員／図書館員／学生の協働を基礎とする個別的学習指導モデルを構築し、評価。 【内容】 ・オフィスアワー@AL、利用支援デスク（図書館員と学生）のようなスタイルでの学習支援体制（writin centerを含む）構築についての先行事例の評価 ・学習支援を評価するための指標や評価方法の検討 ・剽窃防止ソフトの試験的導入と評価 ・学生の学習空間利用の様態についての把握と評価についての検討 ※亥鼻、松戸キャンパスにおけるアクティブラーニング支援計画の策定	【概要】 ・アクティブラーニングスペースでの学習支援活動を展開しながら、モデルを検討。 【内容】 ・オフィスアワー@ALの試行（教員との協力体制の確立、教員に対するインセンティブの提供） ・利用支援デスク（図書館員と学生）における学習支援体制（writin centerを含む）の試行 ・上記の活動の評価のために必要なデータの収集、学習支援活動のドキュメンテーション方法の確立 ・剽窃防止ソフトの運用、評価 ・学生の学習空間利用の実態についての予備的調査の実施 ※亥鼻、松戸キャンパスにおけるアクティブラーニング支援計画の策定	【概要】 ・アクティブラーニングスペースでの学習支援活動を展開しながら、複数のモデルを構築し、評価。 【内容】 ・オフィスアワー@ALの試行の拡大（協力教員の量的拡大、教員に対するインセンティブの提供） ・利用支援デスク（図書館員と学生）における学習支援体制（writin centerを含む）の量的拡大 ・上記の活動の評価のために必要なデータの収集、学習支援活動のドキュメンテーションの実施とそれに基づく評価の実施 ・剽窃防止ソフトの運用、評価 ・学生の学習空間利用の実態についての調査・評価 ※亥鼻、松戸キャンパスにおけるアクティブラーニングの試行	【概要】 ・アクティブラーニングスペースでの学習支援活動を踏まえ、モデルを確立。 【内容】 ・オフィスアワー@ALの評価（教員との協力体制の確立、教員に対するインセンティブ） ・利用支援デスク（図書館員と学生）における学習支援体制（writin centerを含む）の運用 ・上記の活動の評価のために必要なデータの収集、学習支援活動のドキュメンテーションに基づくモデルの評価 ・剽窃防止ソフトの運用、評価 ・学生の学習空間利用の実態についての評価に基づく空間の改善計画策定 ・活動継続のための方策の策定

機能	活動(予算)	目的	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
A L 基 盤 整 備 ・ 管 理 ・ 運 営 ・ 広 報	8. 基盤整備	・プロジェクト運用のために必要な基盤を整備する。	【概要】 ・LMSとの連携（学生部と連携、上記コンテンツラボの活動参照） ・円滑なコンテンツの利用をサポートする認証システムの適用（総合メディア基盤センターとの連携） ・コンテンツ制作室におけるコンテンツ作成支援 【内容】 ・現在運用しているMoodleの機能付加に関し、必要なモジュールを開発・実装する。 ・電子的コンテンツ利用に必要な認証システムの導入について検討する。 ・コンテンツ制作室における学生、教員のコンテンツ作成支援活動を企画立案する。	【概要】 ・LMSとの連携（学生部と連携、上記コンテンツラボの活動参照） ・円滑なコンテンツの利用をサポートする認証システムの適用（総合メディア基盤センターとの連携） ・コンテンツ制作室におけるコンテンツ作成支援 【内容】 ・現在運用しているMoodleの機能付加に関し、必要なモジュールを実装し、実証実験を行う。 ・認証システムと連携したコンテンツ提供の実証実験を実施し、利用状況等について評価する。 ・コンテンツ制作室で教員・学生支援の随時実施を試行する。並行して、2ヶ月に1回程度の講習会を開催する。	【概要】 ・LMSとの連携（学生部と連携、上記コンテンツラボの活動参照） ・円滑なコンテンツの利用をサポートする認証システムの適用（総合メディア基盤センターとの連携） ・コンテンツ制作室におけるコンテンツ作成支援 【内容】 ・現在運用しているMoodleの機能付加に関する前年度の実験を踏まえ、必要なモジュールの改善を行う。 ・認証システムと連携したコンテンツ提供の実証実験を踏まえ、必要なシステム改善を行う。 ・コンテンツ制作室で教員・学生支援の随時実施を試行する。並行して、2ヶ月に1回程度の講習会を開催する。	【概要】 ・LMSとの連携（学生部と連携、上記コンテンツラボの活動参照） ・円滑なコンテンツの利用をサポートする認証システムの適用（総合メディア基盤センターとの連携） ・コンテンツ制作室におけるコンテンツ作成支援 【内容】 ・現在運用しているMoodleの機能付加に関するモジュールを配布可能な形に整備する。 ・認証システムと連携したコンテンツ提供の定常化を実現する。 ・コンテンツ制作室で教員・学生支援の随時実施を試行する。並行して、2ヶ月に1回程度の講習会を開催する。
	9. 運営管理	・アカデミック・リンクの効率的な運用を実現する。	各機能および図書館内の設備等を共通で運営する管理運営体制を企画する。 管理用モジュールやWebサイトの構築を行う。	前年度の企画に基づき、管理運用体制を確立し、管理ソフト等を試行する。	前年度の活動を踏まえ、スタッフ、利用者の意見に基づき、修正・改善を行う。	前年度の活動を踏まえ、教員、学部等の意見を元に関係部局等との調整を行い、継続してサービスを提供できる体制を確立する。

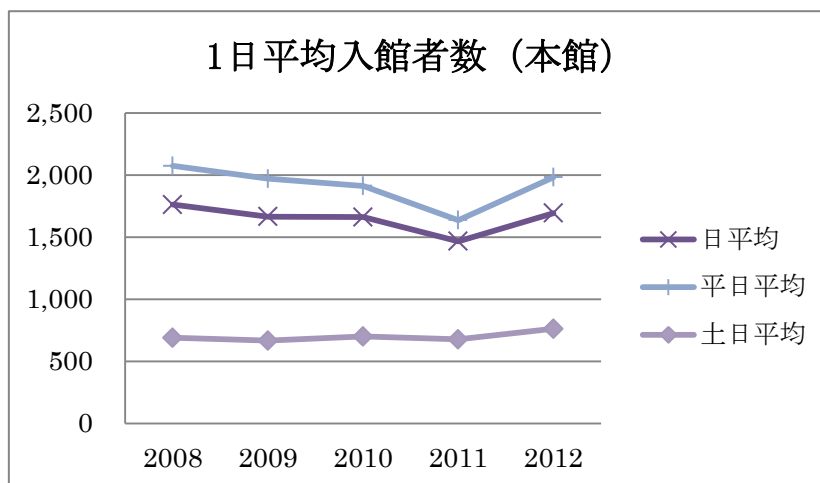
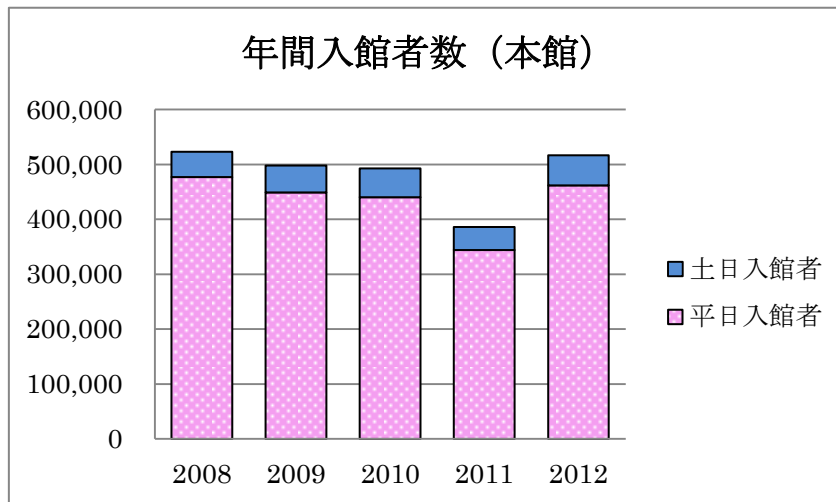
機能	活動(予算)	目的	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
A L 基 盤 整 備 ・ 管 理 ・ 運 営 ・ 広 報	10. 広報	・学内外でのアカデミック・リンクについての認知度を高める。	・ブランディング戦略を策定する。 ・アカデミック・リンクの活動について学内での周知を図るため、Webサイトを立ち上げ、定期的に情報提供を行う。 ・全国的にみても先進的な取り組みであることから、コミュニティ・ウィキを立ち上げ関心を持つ全国の大学関係者との意見交換のための仕組みを設置・維持する。 ・各プロジェクトの進行と連携する形でセミナーやシンポジウムを開催する。 ・アカデミック・リンク設置記念として国際シンポジウムを開催する。	・ブランディング戦略に基づく広報活動を実施する。 ・アカデミック・リンクの活動について学内での周知を図るため、Webサイトを立ち上げ、定期的に情報提供を行う。 ・コミュニティ・ウィキを介して関心を共有する全国の大学関係者との意見交換のための仕組みを設置・維持する。 ・各プロジェクトの進行と連携する形でセミナーやシンポジウムを開催する。	・ブランディング戦略に基づく広報活動を継続する。 ・アカデミック・リンクの活動について学内での理解をさらに深めるため、webサイトを立ち上げ、定期的に情報提供を行う。 ・コミュニティ・ウィキを介して関心を共有する全国の大学関係者との意見交換を行う。 ・各プロジェクトの進行と連携する形でセミナーやシンポジウムを開催する。	・ブランディング戦略に基づく広報活動を継続する。 ・アカデミック・リンクの活動についてWebサイトから定期的に情報提供を行う。 ・コミュニティ・ウィキを介して関心を共有する全国の大学関係者との意見交換を行う。 ・各プロジェクトの進行と連携する形でセミナーを開催する。 ・著名な有識者を招へいし、アカデミック・リンクの活動全体に対してのレビューを実施するとともに、その結果についてシンポジウムを開催する（外部評価と連携）。
	11. 評価	・アカデミック・リンク活動全体の評価を実施する。	・評価実施に向けた規程類の整備	外部評価委員会の設置と外部評価の実施（国内3名、国外3名）	外部評価の実施（委員 国内3名、国外3名）	外部評価の実施（委員 国内3名、国外3名）

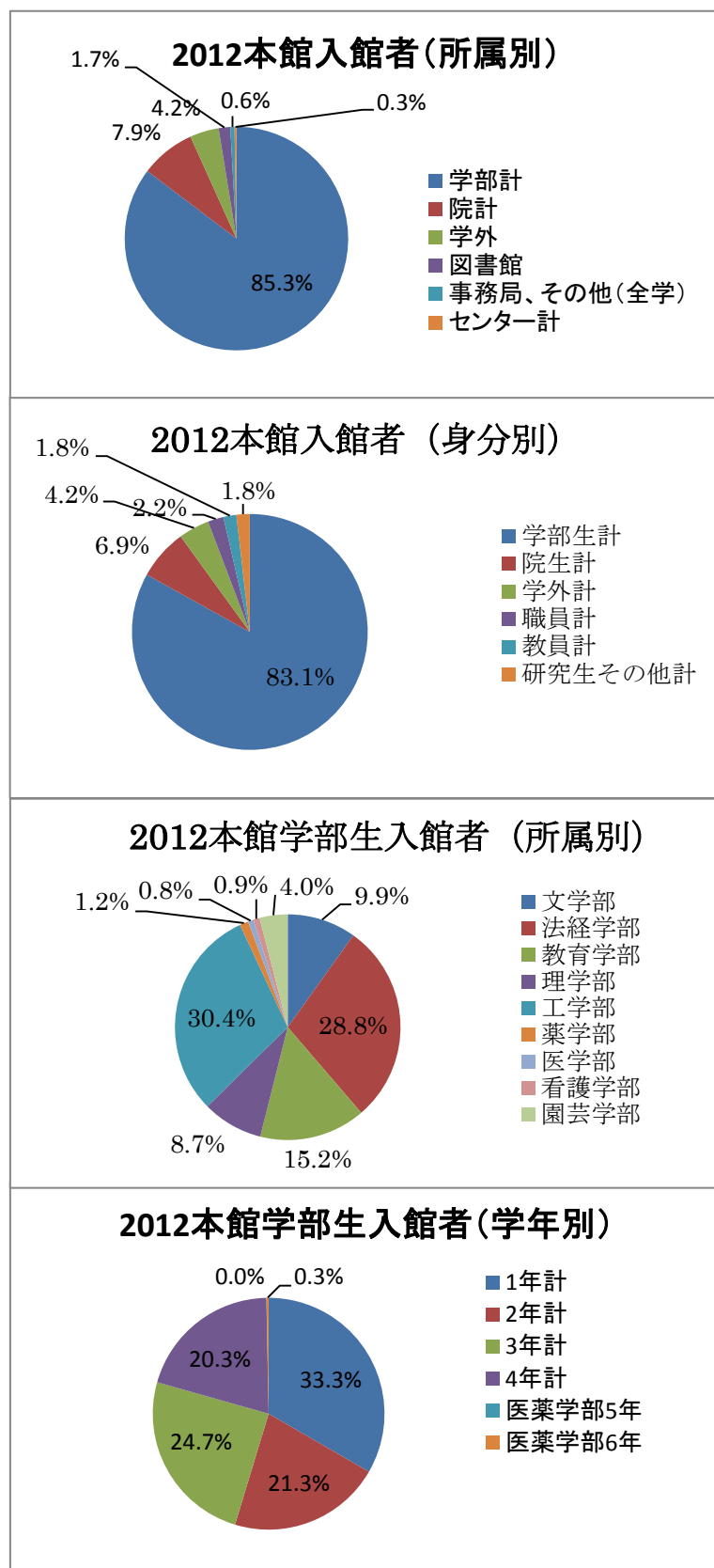
4. 3 諸統計

参考資料 (11) -1 千葉大学附属図書館本館入館者数

年間入館者数(延)						
年度	総入館者数	日平均	平日入館者	平日平均	土日入館者	土日平均
2008	523,515	1,763	477,297	2,075	46,218	690
2009	498,290	1,667	448,936	1,971	49,354	667
2010	493,732	1,662	440,386	1,914	52,466	700
2011	385,940	1,467	343,991	1,638	41,949	677
2012	516,825	1,695	462,006	1,983	54,819	761

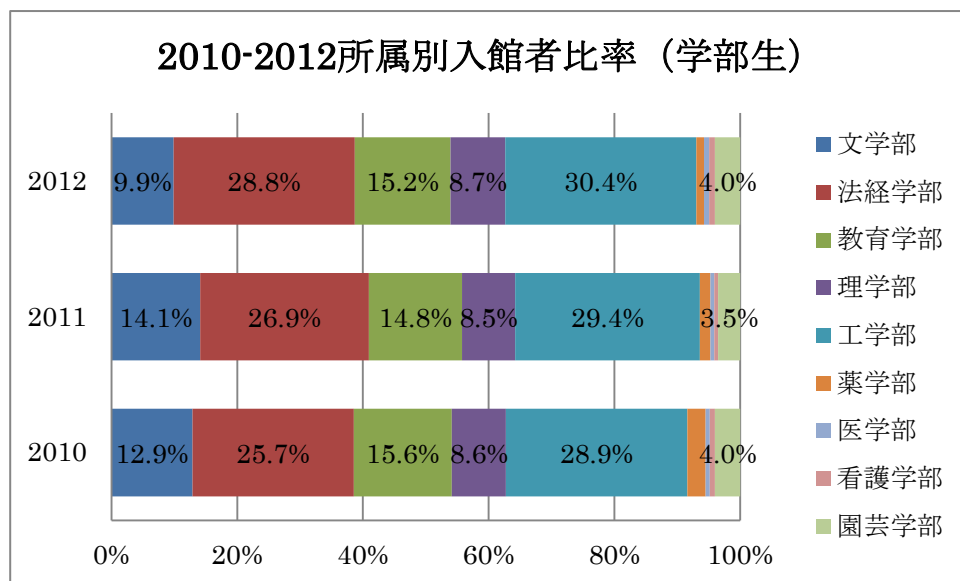
*2008-2011 は赤外線カウンターにより採取





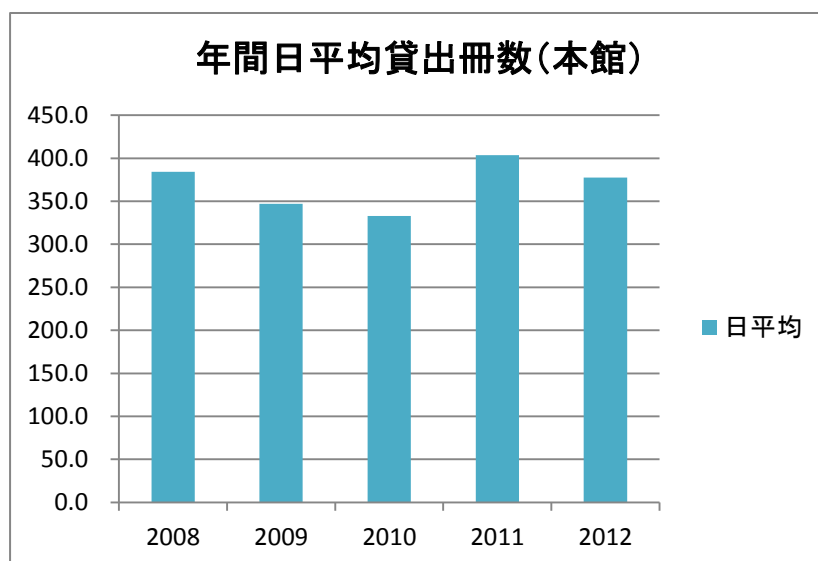
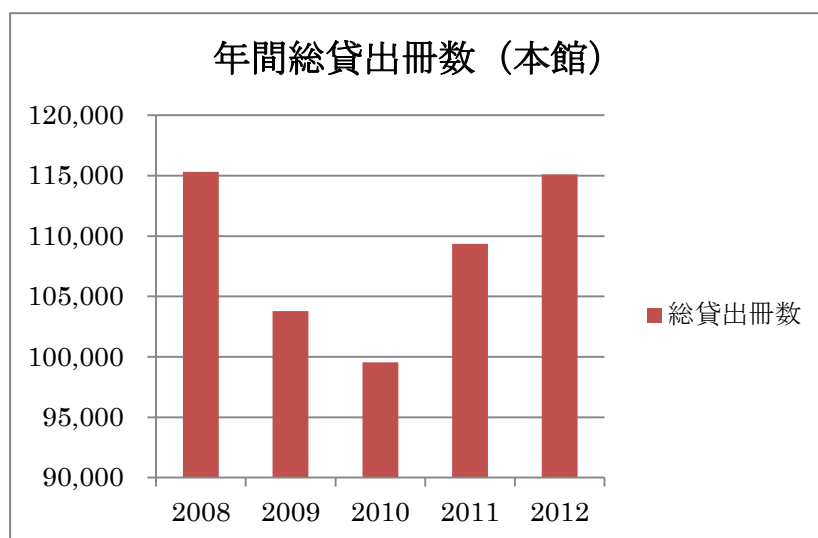
本館所属別入館者比率(学部生)

所属	2010	2011	2012
文学部	12.9%	14.1%	9.9%
法経学部	25.7%	26.9%	28.8%
教育学部	15.6%	14.8%	15.2%
理学部	8.6%	8.5%	8.7%
工学部	28.9%	29.4%	30.4%
薬学部	2.9%	1.7%	1.2%
医学部	0.7%	0.6%	0.8%
看護学部	0.8%	0.6%	0.9%
園芸学部	4.0%	3.5%	4.0%
計	100.0%	100.0%	100.0%

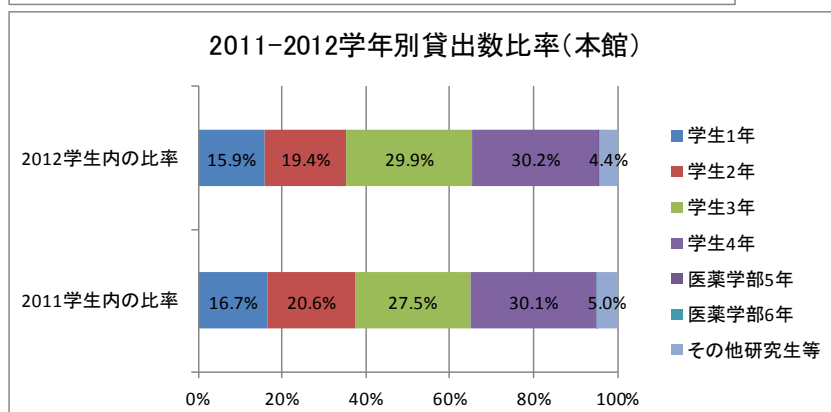
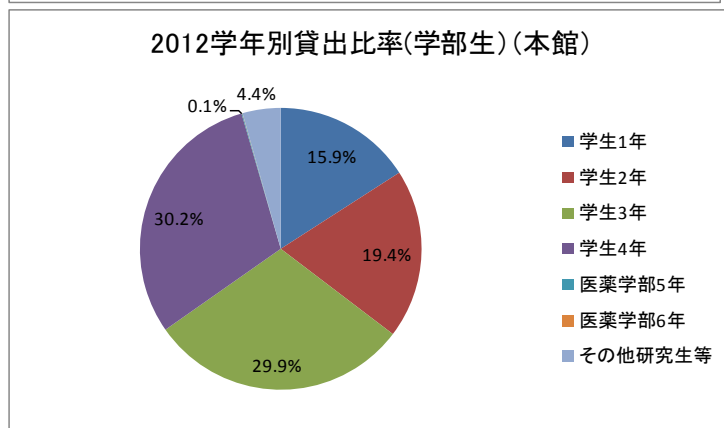
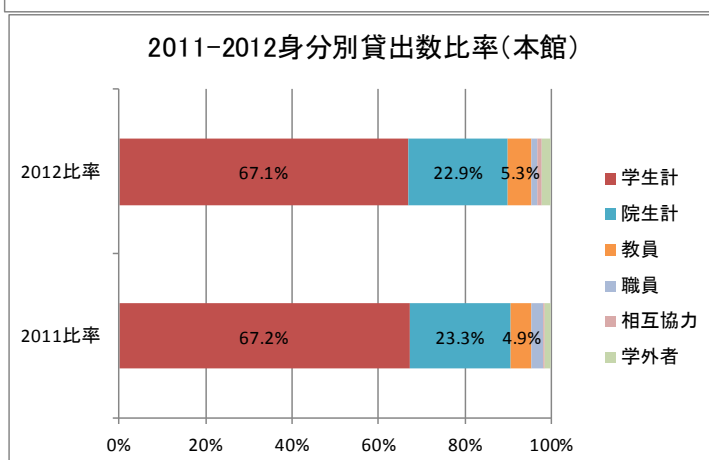
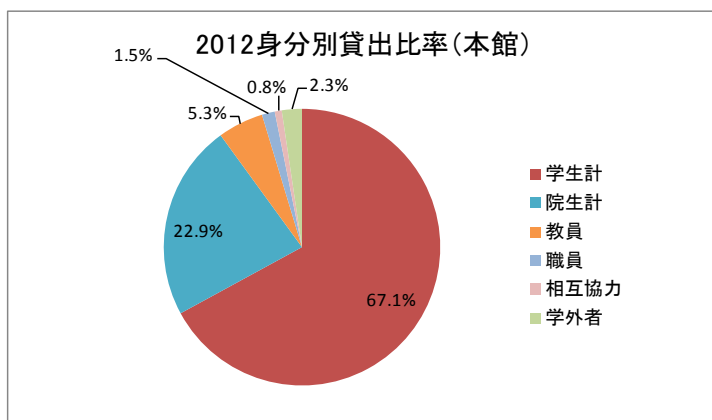


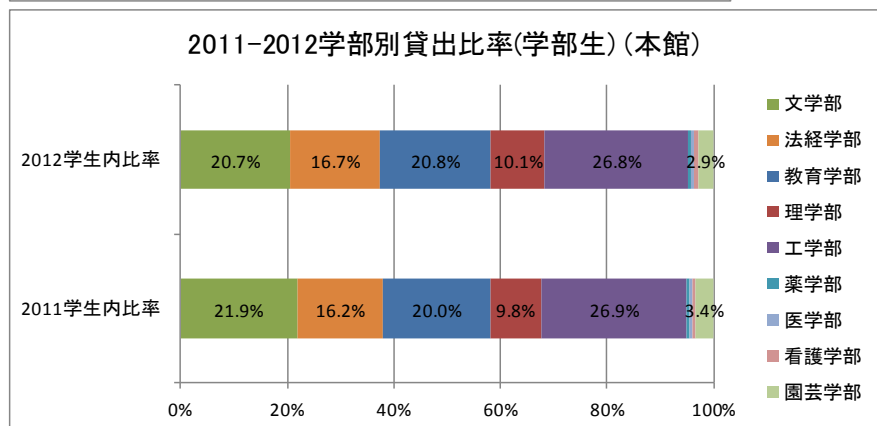
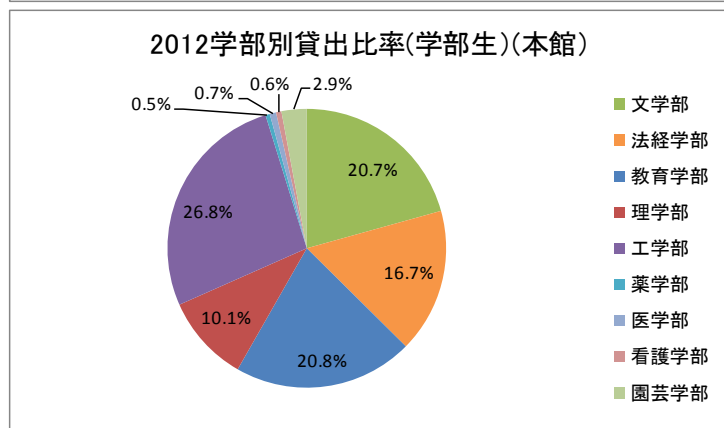
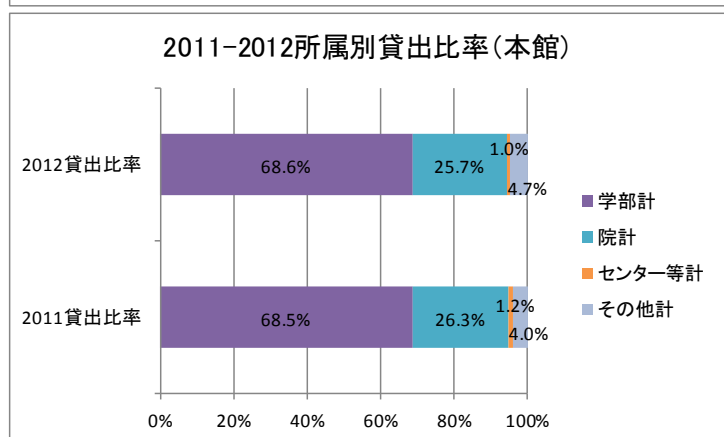
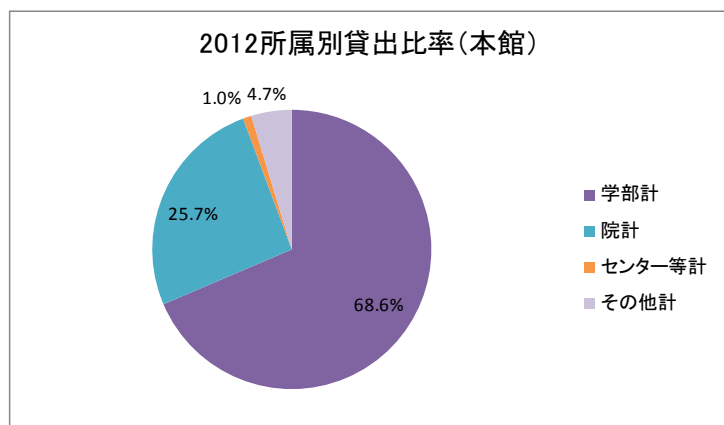
参考資料 (12) -1 千葉大学附属図書館本館貸出冊数

年度	総貸出冊数	開館日数	日平均	総入館者数	日平均
2008	115,310	300	384.4	523,515	1,745.1
2009	103,780	299	347.1	498,290	1,666.5
2010	99,557	299	333.0	493,732	1,651.3
2011	109,364	271	403.6	385,941	1,424.1
2012	115,121	305	377.4	516,825	1,694.5



参考資料 (12) -2





参考資料 (13) -1 館内貸出機器利用状況

2012身分別館内貸出機器(本館)

身分	タブレットPC			ノートPC			電子辞書				プロジェクター	総計
	Android	Macintosh	計	Windows	Macintosh	計	英語	フランス語 &ドイツ語	中国語& 朝鮮語	計		
学生1年	22	201	223	785	479	1,264	30	28	1	59	9	1,555
学生2年	13	75	88	149	215	364	11	29		40	17	509
学生3年	5	135	140	343	244	587	21	3	1	25	11	763
学生4年	2	48	50	169	101	270	13			13	4	337
医薬学部5年				1		1	1			1		2
医薬学部6年		4	4	3	2	5						9
聴講生		4	4	10	20	30						34
研究生等		2	2	5	2	7	4		1	5		14
院修士	6	11	17	36	49	85	11	5	2	18	7	127
院博士				1		1					2	3
教員				1	1	2					6	8
職員				1		1					11	12
総計	48	480	528	1,504	1,113	2,617	91	65	5	161	67	3,373

2012所屬別館内貸出機器(本館)

所属	タブレットPC			ノートPC			電子辞書				プロジェクター	総計
	Android	Macintosh	計	Windows	Macintosh	計	英語	フランス語 &ドイツ語	中国語& 朝鮮語	計		
文学部	2	8	10	104	27	131	11	4	1	16	3	160
法経学部	12	152	164	521	307	828	8	47	1	56	18	1,066
教育学部	2	46	48	218	144	362	26	6		32	15	457
理学部		13	13	39	25	64	4	2		6		83
工学部	19	236	255	273	444	717	23			23	8	1,003
薬学部				12	8	20	1			1		21
医学部		5	5	12	5	17	1			1		23
看護学部				6		6	2		1	3		9
園芸学部	7	9	16	279	102	381	4	1		5	1	403
院 医学研究院											1	1
院 園芸学研究科				1	2	3						3
院 教育学研究科	1	4	5	16	31	47					2	54
院 工学研究科	5	6	11	6	6	12	1			1	5	29
院 人文社会科学研究科				13	3	16	5	5		10		26
院 専門法務研究科											1	1
院 融合科学研究科				2		2	4			4	1	7
院 理学研究科		1	1		8	8	1		2	3		12
事務局, その他					1	1						1
図書館				2		2					10	12
知的財産本部											2	2
総計	48	480	528	1,504	1,113	2,617	91	65	5	161	67	3,373

参考資料 (13) -2 施設利用状況

2012身分別施設利用状況(本館)

身分別	グループ学習室	マイクロ室	研究個室	視聴覚ブース	情報検索ブース	総計
学生1年	163			26	3	192
学生2年	60			7	2	69
学生3年	77	1	2	52	9	141
学生4年	69	12	1	23	6	111
研究生等		1	2		1	4
聴講生					1	1
院修士	51	8	333	7	5	404
院博士	4	8	142	1	6	161
教員	47	20	214	1	29	311
職員	17	9	7	1	2	36
学外者		2	2	42	94	140
総計	488	61	703	160	158	1,570

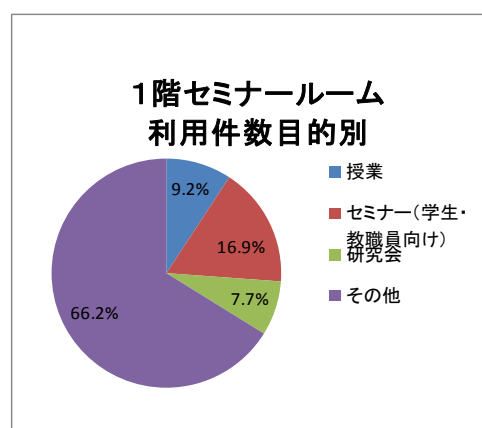
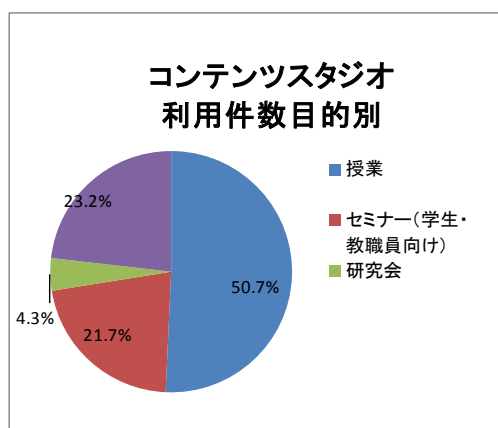
2012所属別施設利用状況(本館)

所属別	グループ学習室	マイクロ室	研究個室	視聴覚ブース	情報検索ブース	総計
文学部	40	13	3	27	11	94
法経学部	114	6		20	4	144
教育学部	59	2		15	7	83
理学部	40		1	30	1	72
工学部	123	1	3	9	1	137
医学部	3			2		5
看護学部				1		1
園芸学部	3			3		6
院 医学研究院	1		2		2	5
院 園芸学研究科			8	1		9
院 看護学研究科	1		8	1		10
院 教育学研究科	26		116	2		144
院 工学研究科	20	3	67	1	1	92
院 人文社会科学部	14	25	104	2	5	150
院 専門法務研究科	2		24			26
院 薬学研究院			1		11	12
院 融合科学研究科	2		75	2	2	81
院 理学研究科	16		92		1	109
事務局, その他(全)	4		190	1	15	210
図書館	20	11	8	3	30	72
学外			1	40	67	108
総計	488	61	703	160	158	1,570

参考資料 (14) -1 I棟教育支援施設利用状況

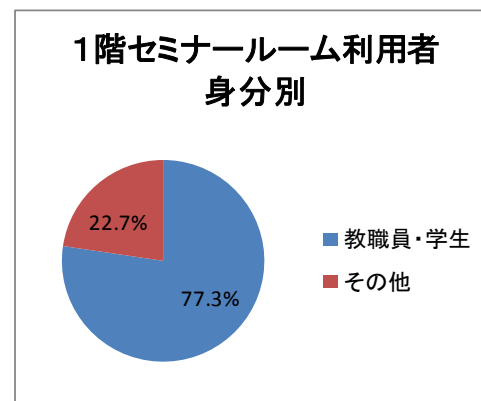
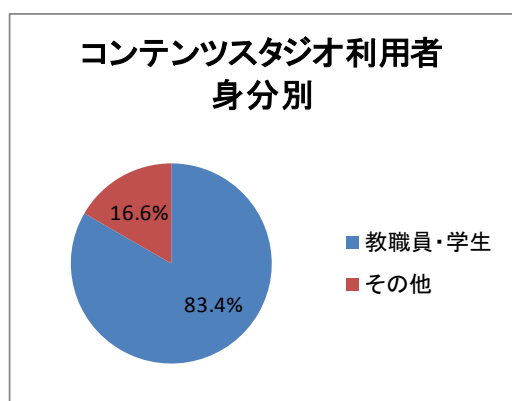
2012施設・目的別利用人数

施設/目的	授業	セミナー(学生・教職員向け)	研究会	その他	合計
コンテンツスタジオ	35	15	3	16	69
1階セミナールーム	6	11	5	43	65



2012施設・身分別利用人数

施設/身分	教職員・学生	その他	合計
コンテンツスタジオ	2,388	477	2,865
1階セミナールーム	908	266	1,174

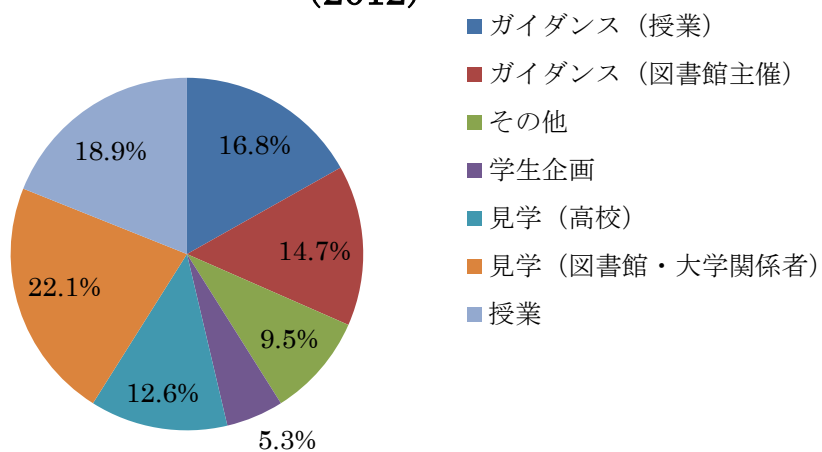


参考資料 (14) -2 プレゼンテーションスペース利用状況

プレゼンテーションスペース利用件数

目的	利用件数
ガイダンス(授業)	16
ガイダンス(図書館主催)	14
その他	9
学生企画	5
見学(高校)	12
見学(図書館・大学関係者)	21
授業	18

プレゼンテーションスペースの利用件数
(2012)



参考資料 (14) -3

展示コーナー利用状況

年度	展示場所	授業関連作品展	サークル関連作品展	サークル活動紹介
2012年度	N棟1階東ブックツリー	4	2	1
2012年度	N棟3階東ブックツリー	1		3
2013年度	N棟1階東ブックツリー	2	2	
2013年度	N棟3階東ブックツリー	1	2	

N棟1階東ブックツリー

	開始日	終了日	申込者	企画名	使用スペース	展示内容等
1	2012/4/9	2012/5/8	ボランティア活動支援センター	ボランティア活動支援センターの活動紹介	西面	ポスター9枚、ビブス1枚
2	2012/7/13	2012/7/20	「写真創作実習」工学部画像科学科・情報画像学科	PASSION 写真創作実習作品展	南、東面	「写真創作実習」で撮影した写真
3	2012/7/24	2012/8/7	書道サークルぼくじる九思会	(書道作品展)	西、南、東面	古典の臨書を中心とした作品
4	2012/11/6	2012/11/30	文学部史学科教員	中東革命の光景ーエジプト民衆デモ写真展	南、東面	エジプトで撮影した革命関連の写真や収集したポスターなどの資料の展示
5	2013/1/7	2013/2/1	Gear Second	針のない時計台～時を刻むのはわたしたち	南、東面	学祭で行った参加型イベントの写真展示
6	2013/2/26	2013/2/28	工学部建築学科	建築学科卒業設計展示	南、東面	平成24年度卒業設計履修生による学科外展示
7	2013/3/13	2013/2/28	千葉大学自然科学系研究科アソシエーション	千葉大学自然科学系研究科アソシエーション 若手研究支援プログラム発表会	南、東面	若手研究支援プログラムのポスター発表
8	2013/3/25	2013/5/1	WiCan 展示をつくるプロジェクト	内沼晋太郎×WiCan「アカデミック・リンク～私が学びたかったこと」展	南、東面	3階ブックツリーで開催される展示の広報を兼ねた展示
9	2013/5/3	2013/5/29	書道サークルぼくじる九思会	(書道作品展)	南、東面	書道作品の展示
10	2013/6/3	2013/6/14	写真部	新人展	南、東面	新入生の写真中心の展示
11	2013/7/19	2013/7/26	写真創作実習	写真創作実習展示会	南、東面	画像科学科、情報画像学科の写真創作実習の授業で制作した写真の展示

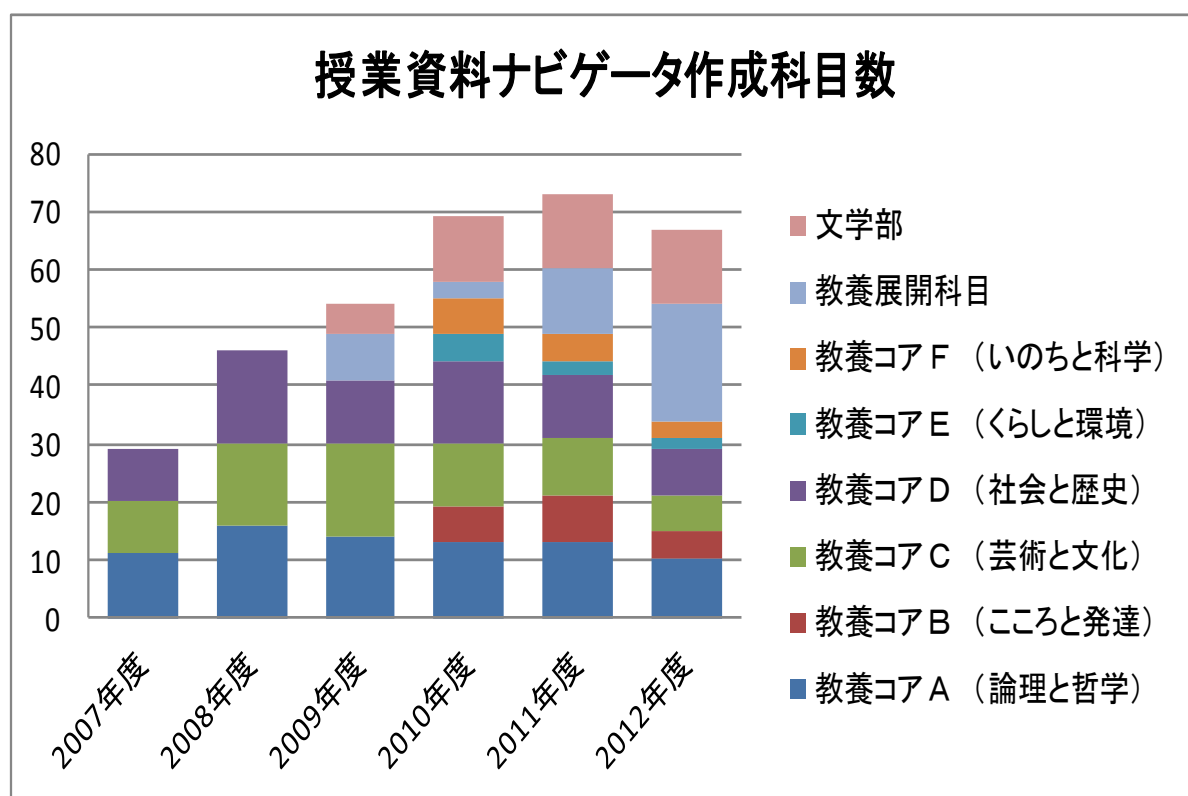
N棟3階東ブックツリー

	開始日	終了日	申込者	企画名	使用スペース	展示内容等
1	2012/4/23	2012/5/23	ふれあいの環(CISG、ノートイク会、CareerPort、ボランティア支援センター学生スタッフ、学生相談ピア・カウンセラー)	ふれあいの環5団体の活動紹介	南、西、北面	プログラム、パンフレット、冊子等
2	2012/7/9	2012/8/8	環境ISO学生委員会、CISG	(学生団体活動紹介企画)	南、西面	ポスター、冊子、図書
3	2013/1/15	2013/2/8	環境ISO学生委員会	(学生団体活動紹介企画)	南、西面	環境関連書物的の貸し出し増進イベント
4	2013/1/21	2013/2/1	千葉大学写真部	写真展	東	「はじまり」をテーマとした写真の展示
5	2013/4/9	2013/4/30	WiCan 展示をつくるプロジェクト	内沼晋太郎×WiCan「アカデミック・リンク～私が学びたかったこと」展	北、南、東面	千葉大学周辺の方に聞いた「学びたかったこと」に答えるおすすめの本を展示
6	2013/5/7	2013/5/31	ちば読。	(読書活動推進企画)	南、東面	読書サークル「ちば読。」が読書会やブックセンターの棚づくりで選んだ本を紹介する企画
7	2013/7/3	2013/7/29	書道サークルぼくじる九思会	新人展	南、東面	書道作品の展示

参考資料（15）授業資料ナビゲータ作成状況

授業資料ナビゲータ作成科目数

	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	合計
教養コアA（論理と哲学）	11	16	14	13	13	10	77
教養コアB（こころと発達）	0	0		6	8	5	19
教養コアC（芸術と文化）	9	14	16	11	10	6	66
教養コアD（社会と歴史）	9	16	11	14	11	8	69
教養コアE（くらしと環境）				5	2	2	9
教養コアF（いのちと科学）				6	5	3	14
教養展開科目			8	3	11	20	42
文学部			5	11	13	13	42
合計	29	46	54	69	73	67	338



参考資料 (16) -1 アカデミック・リンク・セミナー実施状況

2012 年度 アカデミック・リンク・セミナー開催状況

回次	日時	主題	報告者	参加者数
第 1 回	2012 年 5 月 29 日	アカデミック・リンク・センター 2012 年度に向けて : 2011 年度プロジェクトの成果と課題	竹内比呂也・川本一彦・白川優治・姉川雄大・ 岡本一志・國本千裕・藤本茂雄 (アカデミック・リンク・センター教員)	25
第 2 回	2012 年 8 月 2 日	新しい電子教科書, 新しい電子教材	遠藤昌克氏(ネイチャー・ジャパン株式会社) 盛田宏久氏(大日本印刷株式会社)	27
第 3 回	2012 年 9 月 4 日	北米の大学教育における教員と図書館員の連携(仮)	Dr.Heidi Julien (米国アラバマ大学図書館情報学大学院長)	13
番外※1	2012 年 11 月 21 日	「千葉大学アカデミック・リンクは進化する」 : 新しい学習環境の創造と課題	竹内比呂也・岡本一志・藤本茂雄・姉川雄大・國本千裕(ア カデミック・リンク・センター教員)	168
第 4 回※2	2012 年 12 月 3 日	ラーニング・コモンズ再考	山田礼子(同志社大学社会学部教授) 小山憲司(日本大学文理学部准教授) 野末俊比古(青山学院大学教育人間科学部准教授)	100
第 5 回	2013 年 2 月 28 日	デジタル・メディアによる大学の変容または消滅	土屋俊(大学評価・学位授与機構)	30

※1 第 14 回図書館総合展フォーラムとして実施

※2 国立大学図書館協会と共催

2013 年度 アカデミック・リンク・セミナー開催状況 (予定含む)

回次	日時	主題	報告者	参加者数
第 1 回	2013 年 6 月 4 日	アカデミック・リンクはどこまで進んだか : 2012 年度の活動報告と 2013 年度の課題	千葉大学附属図書館教職員	52
第 2 回	2013 年 8 月 5 日	ライティング・センターは学生の何を変えるのか : 早稲田大学ライティング・センターの取り組みから	佐渡島紗織 (早稲田大学国際コミュニケーション研究科教授)	-

2012 年 5 月 29 日/千葉大学附属図書館 I 棟 1 階コンテンツスタジオ

2012 年度アカデミック・リンク・セミナー(第 1 回)

「アカデミック・リンク・センター2012 年度に向けて :

2011 年度プロジェクトの成果と課題」参加者アンケート集計結果

当日参加者数 : 25 名

アンケート提出数 : 24 件

千葉大学アカデミック・リンク・センターでは、「生涯学び続ける基礎的な能力」「知識活用能力」を持つ『考える学生』を育成することを目的とし、デジタル時代における大学の学習教育環境の改革に取り組んでいきます。今後の活動のために、本日のセミナーに参加されたご意見・ご感想をお寄せください。

1. 本日のセミナーで、よくわかったこと、新しい発見などがあればお書きください。

- ・ L 棟での遊びが学習者の増加でいなくなった。
- ・ 学生の方が新しい使い方を開発している。
- ・ SA の活用、図書館内の設備。著作権への取り組み。
- ・ 授業資料ナビ作成について、教員との協力体制。
- ・ アカデミック・リンク・センターにどのようなコンテンツがあり、どのような実践がされているのか、体系的にわかり、ためになりました。
- ・ 11 年度総括と今後についての概略がよく理解できました。
- ・ 電子化された資料について一番関心がありました。
- ・ ラーニングコモンズ環境と e-learning 環境をうまく結びつけるための場として、図書館を選んだというストーリーが良くわかった。
- ・ 図書館の先進的な取り組みの筆頭にあがる理由がいくつかわかった。作り上げようとする熱気が大きな刺激になった。
- ・ 静かな部屋ではキーボードをたたく音はうるさい。
- ・ 空間と人的支援とコンテンツの新たな仕掛けが利用する学生達が柔軟に対応して学ぶ環境を構成していることが素晴らしいなと感じました。
- ・ コンテンツ制作における、許諾のむずかしさ。(電子化はもっと進んでいると思っていた。)
- ・ Moodle の概要。
- ・ 著作権がらみの話がやはり困難であるということ。
- ・ コンテンツといえど、紙媒体と同じで許諾の問題が大きいということが分かりました。コンテンツに関する部分に関しては、まだこちらの聞く準備が整っていなかったのでやや消化不良ではありますが、人的支援の部分に関しては、具体的なイメージが持てて良かったです。
- ・ 見学会から通して参加させて頂きましたが、院生のアドバイザー(ALSA)の活動状況について大変参考になったことと、教員と連携したパスファインダーの作成、POD のお話など、LC について知らなかった新しい取り組みは大変参考になりました。
- ・ アカデミック・リンクの理念。
- ・ 学習支援について。
- ・ 偶然このセミナーに参加したが、学生に対してアンケートなどが行われていることを知り、積極的に次回は取り組みたいと思った。

- ・「学習状況・情報利用環境調査」における調査の結果が意外な事実だと私は思いました。
- ・ALSA の試行でわかったことは、なるほどと思いました。(実際の学生の利用状況など)
- ・「ALSA による学習相談」の試行が参考になり課題が1つ見えてきたように思います。学習支援を実践している状況の継続的な経過説明をして下さい。
- ・学習環境を新たに構築するための要素としてコンテンツとその提供の重要性が新たに理解できた。
- ・大学の一番の基本である“授業”に図書館がとても大きなサポートになる事を、本日の見学、セミナーで実感することができました。
- ・ALC のコンセプトを実現するために具体的なプロジェクトが同時進行し、それぞれがむすびについていることがよくわかった。特に見学ツアーにも参加させていただき、空間とサービスが正にリンクしている様子がわかりました。

2. 本日のセミナーで、よくわからなかったこと、疑問に残ったことがあればお書きください。

- ・具体的に SA はどのような成長があったのか。(成績? 人間的成長?)
- ・レポートセミナーと ALSA のレポートの違いは?
- ・Moodle についてなじみがないので知らなかったが、今回のセミナーで知ることができました。
- ・困難だった事。(他部署との連携、協力について)
- ・11 年度は始動した年だったためと思いますが、学生状況アンケートの標本数の少なさはデータの正確性という点で疑問でした。
- ・新「授業資料ナビシステム」運用の具体的な作業、姿などがよくわからなかった。
- ・学生に個人のメールアドレスを外部業者に登録させることは、学生個人情報の外部への提供と同じと思えます。(メールアドレス程度は個人情報に相当しないというのが定説ですが。)
- ・レガシーコンテンツ作成にあたり、承諾の取れなかった資料について紙の資料としてどの様に教材としていくのか、そのあたりを詳しく聞いてみたかったと思います。
- ・学生調査、有効回答 304→2.8%??? 学習時間 授業 3H+自習 1H=4H??? 図書館の利用状況の詳細を知りたい。
- ・コンテンツ作成の具体的なところ
- ・Moodle に関して、具体的にご説明いただく前に、何度も言葉がでてきましたのでややわかりにくかったです。最終的には大体理解できました。
- ・Moodle というシステムについてあまり理解できませんでした。
- ・ALSA の院生が取り組みについてどう考えているか。
- ・上にある調査における学習環境で思うことで、私も園芸ですが、自習室の拡張などは実現される方向で進んでいるのか?
- ・ALSA の事前事後の研修のしくみをどのようにやっているかを聞けなかった(途中退出したので。)
- ・ALSA のサポート(学習支援)ですが、これから需要が増えた時の対策や、大学全体の初年次教育の中での位置づけについて知りたかったです。

3. 今後もアカデミック・リンクではセミナーやシンポジウムを企画していきます。そこで、取り上げてほしいテーマや講師があれば、お書きください。

- ・職員に向けてのアカデミック・リンクを知るイベント（見学会）があったら良いかも、と思いました。職場を抜け出して参加するのはためらう人も多そうなので、学内の研修の一環としても良いかもしれないなあという感想を持ちました。
- ・著作権セミナー等があると嬉しいです。
- ・Moodle と実空間の具体的な連携の事例報告。
- ・作成した授業コンテンツの持続、発展的な利用について。
- ・専門書出版社の団体（人文会、法経会、工学書協会、自然科学書協会など）の代表を招いて、専門書の電子データの提供、活用について、また許諾についてどう考えるか。アカデミック・リンク・センターの目標にどのような協力参加を考えるか。
- ・タッチパッドが一般的ですが、音の小さいキーボード。
- ・オープンしてから2か月のアカデミック・リンク・センターですが、今の所、大きな問題もなく運営できているようですが、今後の検討、改善点などもでてきましたら教えて頂きたいなと思いました。
- ・学習支援以外のサポート（キャリアサポート等）について。
- ・ALSA で活動する院生の話が聞きたい。
- ・N棟のどこかが会場となるようなシンポジウムがあれば面白そうですね。
- ・アカデミック・リンクの運用組織構築のための取り組み・課題。
- ・現在すすめられているプロジェクトを通して、学生の“学力”がいかに上がっていったのか、実証するようなデータ発表があれば、と存じます。
- ・セミナー形式ではなく、ワークショップ形式で千葉大さんの取り組みと一緒に関われる場があると良いのでは？と思いました。→リポジトリの時のように実務ベースで。

4. 本日のセミナーの内容について等, その他, 自由にご意見をお書きください。

- ・「見られる」スペースでのセミナーは緊張感があった。この「緊張」は利用者にはどのようにとらえられているのか。
- ・「見る」「見られる」事での活性化について、本学でも視認性を高めることで刺激になると考え、開けた図書館づくりを目指しているのでは、大変参考になりました。
- ・大変勉強になりました。ありがとうございます。
- ・人的支援の取り組み、コンテンツ構築の将来像など大変参考になりました。
- ・「許諾システムの望ましい姿」について具体的な提案をいただきたいと思います。
- ・研究者、スタッフのモチベーションが高く、メール、接遇、進行もすばらしかった。新しい日本の教育スタイルの最良のモデルを創っているほこりが感じられた。
- ・施設の案内も竹内先生にして頂き、非常にコンセプトの通った素晴らしい施設だと思いました。コンテンツの作成についても、強い意志を感じました。ご案内ありがとうございました。
- ・見学会がとてもよかったです。(百聞は一見にしかず!) 取り組みが形にあらわれていると感じました。
- ・見学会に参加させていただき、現在本学で検討しているラーニングコモンズの内容(特に人的支援)のヒントを沢山いただきました。参考にさせていただきます。ありがとうございました。
- ・授業資料ナビや各種プロジェクトに感銘を受けました。本日はありがとうございました。
- ・本日は見学会に参加させていただき大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・学生が一万を超える人数いるのにアンケートの回答数 315 は少な過ぎると思う。もっと回答数を増やすために改善する必要があると思う。
- ・大変興味深いお話をありがとうございました。
- ・千葉大学さんの学習環境をより良くするためにできることを全て実践しておられることに敬意を表します。同時に大変だろうな・・・と。特にコンテンツについて大学間連携などの可能性が図れると良いのでは?と思いました。

5. 次の(1), (2)について, 該当するものに○をつけてください。

(1) a. 学外から参加 19名 b. 学内からの参加 4名 無回答 1名

(2) a. 学生 3名 b. 教員 1名 c. 大学職員(図書館職員を除く) 2名 d. 図書館職員 6名

e. 出版関係 0名 f. その他 10名 無回答 2名

6. セミナーを何で知りましたか?(複数回答あり)

a. Web(アカデミック・リンク・センター) 2名 b. Web(図書館) 0名 c. Web(千葉大学) 2名

d. 図書館内電子掲示 0名 e. ポスター 3名 f. センターからのメール 13名

g. Facebook・Twitter 1名 h. その他 3名(図書館通の方からのご案内, 職場での紹介)

無回答 1名

千葉大学 アカデミック・リンク・センターでは, セミナーの開催や関連する情報を提供しています。これらの情報を希望される方は, お名前・ご所属・メールアドレスをご記入ください。(既に登録されている方は引き続きお届けしますので, 空欄で結構です)

お名前:()

ご所属:()

電 子 メ ー ル ア ド レ ス : ☐ 申 込 時 に 申 請 し た も の ☐ そ れ 以 外
()

ご協力ありがとうございました。

※10名が新規に継続的な情報提供を希望

参考資料 (17) 1210 あかりんアワー実施状況

1210 あかりんアワー 開催企画一覧(実施期間 2012.4.10～2013.5.31 全 81 回)						登壇者属性				
回次	開催日	企画名	講師※敬称略	所属等	参加人数※	教員	役員	職員	学生	その他B)
1	4月10日(火)	予告編－アカデミック・リンクから始まるいくつかのおもしろいことについて－	國本千裕	ALC	7	1				
2	4月11日(水)	どんな授業こんな授業－普遍教育の教養展開科目紹介－第1回	白川優治	普遍教育センター/ALC	20	1				
3	4月13日(金)	どんな授業こんな授業－普遍教育の教養展開科目紹介－第2回「授業の紹介」	白川優治	普遍教育センター/ALC	11	1				
			姉川雄大	ALC		1				
			柴佳世乃	文学部		1				
4	4月16日(月)	千葉大人(ちばだいびと)の意外な一面を発見する 第1回「マリシヤ・カルテットによる弦楽四重奏」	嶋津格	理事	70		1			
			田島正樹	文学部		1				
			馬渡美穂	工学系事務センター				1		
			山崎連	理学部4年					1	
5	4月17日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第1回	山本恵司	理事	34		1			
6	4月18日(水)	学生向け moodle 講習会 第1回	藤本茂雄	ALC	9	1				
7	4月19日(木)	ALSA カフェ 第1回「大学4年間の中で「今」すべきこと」	藤田早紀	人文社会科学研究院院生	12				1	
8	4月20日(金)	ALSA カフェ 第2回「教育学部以外で、教員免許を取るかどうか迷っている人へのアドバイス」	中川貴裕	理学研究院院生	4				1	
9	4月24日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第2回	川本一彦	工学研究科/ALC	23	1				

10	4月25日(水)	就活に役立つ新聞の読み方	國本千裕	ALC	10	1				
11	4月26日(木)	ALSA カフェ 第3回「研究のための留学」	安藤加奈	自然科学研究科 院生	7				1	
12	4月27日(金)	学生向け moodle 講習会 第2回	藤本茂雄	ALC	6	1				
13	5月8日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第3回「中国の秘密結社」	山田賢	文学部	65	1				
14	5月11日(金)	ブックトーク 働くオトナが学生に薦める1冊の本 第1回	織田雄一	学生部	16			1		
			藤原李奈	学長企画戦略室				1		
			谷奈穂	附属図書館				1		
15	5月14日(月)	5月特別企画「金環日食をめぐって」	花輪知幸	先進科学センタ ー	51	1				
16	5月15日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第4回「思いを形にする:ソーラーデカス ロン」	鈴木弘樹	工学研究科	10	1				
17	5月17日(木)	千葉大人の意外な一面を発見する 第2回「シャーロック・ホームズ」	若林明雄	文学部	65	1				
18	5月22日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第5回 「東日本大震災に公民館はどう対応したか」	長澤成次	理事	30		1			
19	5月25日(金)	竹内比呂也センター長が語る「国際機関で働くために大 切な3つのこと:ユネスコでの経験から」	竹内比呂也	文学部/附属図 書館/ALC	36	1				
20	5月29日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第6回「描かれた武士と合戦―「平治物 語絵巻」の世界から―」	池田忍	普遍教育センタ ー/文学部	40	1				
21	6月1日(金)	キャンパスマスタープラン 2012 のめざすもの	上野武	キャンパス整備 企画室/工学部 建築学科	32	1				
22	6月5日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第7回「衛星データの価値を高める」	樋口篤志	環境リモートセン シング研究セン ター	23	1				
23	6月8日(金)	ALSA カフェ 第4回「レポートの書き方・理系編」	高橋慧	融合科学研究科 院生	15				1	

24	6月12日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第8回「好きなことに打ち込む楽しさと難しさ」	伊藤智義	工学研究科	50	1				
-	6月15日(金)	千葉大生の主張→流会	—	—	—					
25	6月19日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第9回「スポーツを見る目-バイオメカニクスの視点」	吉岡伸彦	教育学部	40	1				
26	6月22日(金)	ブックトーク 働くオトナが学生に薦める1冊の本 第2回	明慶綾香	学術国際部	10			1		
			山本康平	企画総務部総務課				1		
			江波戸登弥子	附属図書館				1		
27	6月26日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第10回「研究が国境を越える時」	舟島なをみ	看護学研究科	18	1				
28	6月29日(金)	千葉大人の意外な一面を発見する 第3回「水無月によせて-雅楽への招待」	安孫子英智	附属図書館	45			1		
29	7月3日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第11回「群論:シンメトリーの数学」	北詰正顕	理学研究科	50	1				
30	7月6日(金)	学生部企画「東日本大震災復興のボランティアについて」	立石公史	環境健康フィールド科学センター	14	1				
			馬目亮太	企画総務部総務課広報係				1		
31	7月10日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第12回「熱帯野菜で水質浄化？」	高垣美智子	園芸学部	25	1				
32	7月13日(金)	千葉大人の意外な一面を発見する 第4回「能の謡(うたい)「巴ともえ」-義仲の最期と巴御前を謡う-謡曲」	大見晃代	教育学部総務係	16			1		
33	7月17日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第13回「アレルギーは治せるか」	徳久剛史	理事	33		1			
34	7月20日(金)	企画総務部総務課「やよいの鐘について」	馬目亮太	企画総務部総務課広報係	25			1		
35	7月24日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第14回「理論刑法学から学際研究へ」	石井徹哉	法経学部	30	1				
36	7月27日(金)	ブックトーク 働くオトナが学生に薦める1冊の本 第3回	山口陽	財務部経理課	25			1		
			坂本菜摘	企画総務部職員				1		

				課職員係							
			有賀昭彦	理学部学務係							
37	7月31日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第15回「社長の言葉は宝の山-中堅企業の調査から」	清水馨	法経学部	45	1				1	
38	10月2日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第16回「言葉は変わる-私たちの中にある言葉の歴史-」	石井正人	文学部	41	1					
39	10月5日(金)	アカデミック・リンク活用術	竹内比呂也	文学部/附属図書館/ALC	12	1					
40	10月9日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第17回「表現し合い育ちあう-生活綴り方教育-」	片岡洋子	教育学部	40	1					
41	10月12日(金)	千葉大人の意外な一面を発見する 第5回「国際線の機内(キャビン)では-元国際線客室乗務員チーフパーサは語る-」	佐々木八重子	学生総合支援センター	38				1		
42	10月16日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第18回「何をしたいと群れるのか?アンチ絆のマルチエージェント研究」	荒井幸代	工学研究科	24	1					
43	10月19日(金)	職員課企画「海外へ行く人の健康管理」	潤間励子	総合安全衛生管理機構(教員)	16	1					
			吉田智子	総合安全衛生管理機構(看護師)					1		
44	10月23日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第19回「『夜爪を切ると親の死に目に会えなくなる』といわれるのはなぜ?」-身近な俗信から考える民俗学的世界-	和田健	国際教育センター	27	1					
45	10月26日(金)	ブックトーク 働くオトナが学生に薦める1冊の本 第4回	杉浦真人	企画総務部人事課	20				1		
			上原貴之	財務部財務課					1		
			千原正臣	文学部・法経学部事務部					1		
46	10月30日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第20回「ウォルト・ディズニーARL所蔵	小林裕幸	融合科学研究科	37	1					

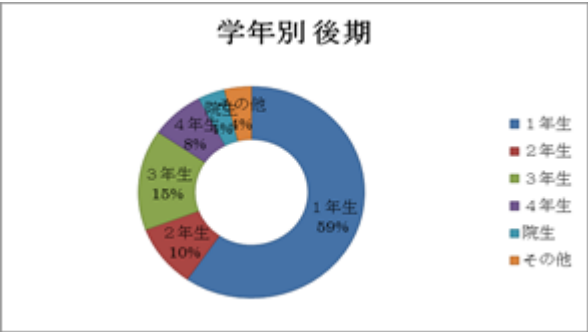
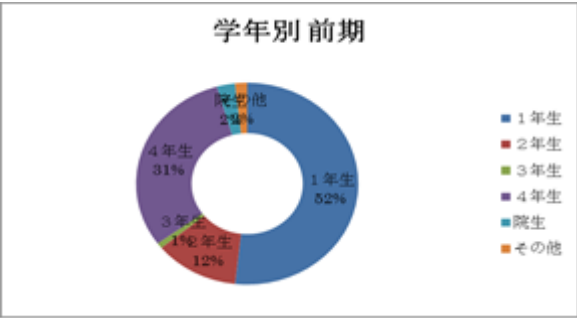
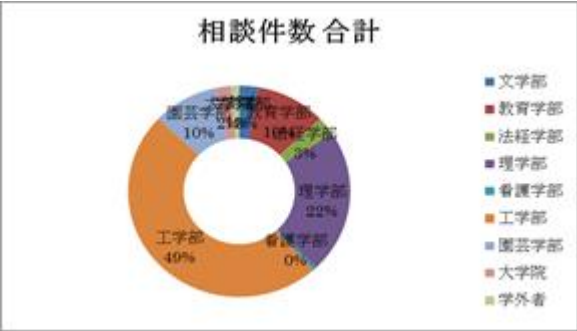
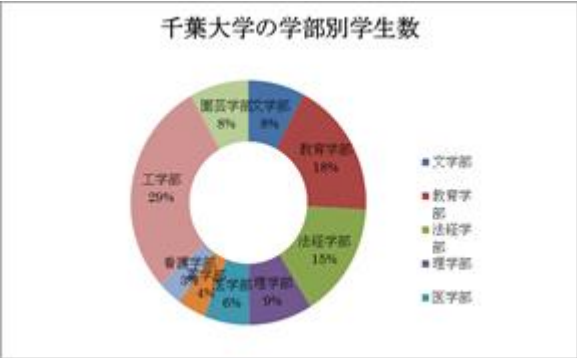
		の千葉大学コレクション」								
47	11月6日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第21回「企業出身音声研究者が語る「音の不思議」と「愉快的な人生の方法」-千葉大生よ、群れない勇気を持つとうじゃないか-」	黒岩眞吾	工学部	20	1				
48	11月9日(金)	千葉大人の意外な一面を発見する 第6回「広がる“みなみまち”の世界-小児科病棟から生まれた絵本-」	鈴木常子	産学連携課	26			1		
			山田円香	産学連携課				1		
			伊藤香奈	千葉大学大学院 修了生,画家						1
49	11月13日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第22回「新しいオペラをつくる-歴史資料との格闘-」	渡部成哉	教育学部	25	1				
50	11月16日(金)	職員課企画「大学職員の魅力」	永見慶子	企画総務部企画 政策課	16			1		
			高木俊亨	財務部財務課資 産管理係				1		
			郡司拓美	医学部大学院学 務係				1		
51	11月20日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第23回「いま注目の植物工場・養液栽培って？」	篠原温	園芸学研究科	15	1				
52	11月27日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第24回「エジプト民衆革命をめぐって-歴史と現在の対話-」	栗田禎子	文学部	30	1				
53	11月30日(金)	ブックトーク 働くオトナが学生に薦める1冊の本 第5回	郡司拓美	医学部大学院学 務係	23			1		
			牧原滋	施設環境部建築 環境課建築計画 係				1		
			杉村晃江	学生部教務課教 務係				1		

54	12月4日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第25回「図書館を科学する」	竹内比呂也	文学部/附属図書館/ALC	13	1				
55	12月7日(金)	千葉大人の意外な一面を発見する 第7回「未知の世界を体感せよ！-サラリーマン卒業生が語る読書の愉しみ-」	来栖良樹	監事	20		1			
56	12月11日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第26回「探究事始-ヨーロッパ経済をみる-」	古内博行	法経学部	13	1				
57	12月14日(金)	ブックトーク 働くオトナが学生に薦める1冊の本 第6回	永見慶子	企画総務部企画政策課	19			1		
			中里貴司	学術国際部研究推進課				1		
			内藤麻衣子	工学系事務センター-経営・研究支援室経営係				1		
58	12月18日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第27回「植物化石の内部を見てみよう-健康・転換点・つながり・度胸の大切さ-」	松本みどり	理学研究科	15	1				
59	12月21日(金)	職員課企画「冬場の感染症予防について」	潤間励子	総合安全衛生管理機構	12	1				
60	1月8日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第28回「謹賀新年 風土記1300年-いにしえびとの土地へのまなざし-」	兼岡理恵	文学部	22	1				
61	1月11日(金)	千葉大人の意外な一面を発見する 第8回「タイでの生活-都市に暮らす, 地域に暮らす-」	吉田雅巳	人文社会科学研究所	30	1				
62	1月15日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第29回「テキスト, あの御しがたい欲望が紡ぐもの」	石田靖夫	法経学部	15	1				
63	1月22日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第30回「フィールドに出かけよう-モンゴルから環境を考える-」	児玉香菜子	文学部	12	1				
64	1月25日(金)	ブックトーク 働くオトナが学生に薦める1冊の本 第7回	阿由葉努	学術国際部情報企画課	13			1		

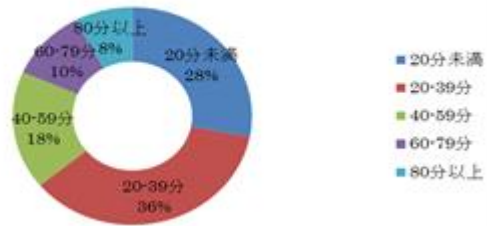
			高尾喜代志	学生部留学生課				1		
			坂井史男	園芸学部学務係				1		
65	1月29日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第31回「音を紡ぐ時に読む本」	山本純ノ介	教育学部	26	1				
66	2月1日(金)	ブックトーク学生編	池田謙輔	法経学部1年	20				1	
			河村省梧	理学部3年					1	
			高階英樹	法経学部2年					1	
67	4月9日(火)	アカデミック・リンクウィーク特別企画 skipwise プログラムでグローバル人材になろう！	渡邊誠	副学長	83	1				
68	4月10日(水)	アカデミック・リンクウィーク特別企画 弦楽四重奏 ハイドンのサワリ etc.	嶋津格	理事	50		1			
			田島正樹	文学部		1				
			馬渡美穂	工学系事務センター				1		
			山崎連	理学研究科1年					1	
69	4月11日(木)	アカデミック・リンクウィーク特別企画 つくること, つくりかえること	神野真吾	教育学部	31	1				
70	4月16日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第32回「色を学び, そして色をあやつる 一次世代ディスプレイやスマートウィンドウ開発に向けて」	小林範久	融合科学研究科	52	1				
71	4月19日(金)	学生健診に行こう！	潤間励子	総合安全衛生管理機構	2	1				
72	4月23日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第33回「イメージの歴史を学ぶ-イタリア美術の魅力-」	上村清雄	普遍教育センター	30	1				
73	4月26日(金)	外国に暮らす 第1回「ワシントン D.C.に暮らす」	織田雄一	学務部	40			1		
74	5月7日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第34回「原子力発電抜きでどのようにやっていくか」	倉阪秀史	人文社会科学部研究科	32	1				
75	5月10日(金)	学生相談室を知っていますか？	櫻庭智子	学生相談室	3			1		
			大川浩明	学生相談室				1		
76	5月14日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第35回「チーム実践能力を評価する」	酒井郁子	看護学研究科	14	1				
77	5月17日(金)	外国に暮らす 第2回「パリに暮らす」	池田輝司	理事	50		1			

78	5 月 21 日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第 36 回 「合成生物学への招待 - DIY バイオロジから細胞を創るまで？」	梅野太輔	工学研究科	19	1					
79	5 月 24 日(金)	ブックトーク 働くオトナが学生に薦める 1 冊の本 第 8 回	菊地一雅	企画総務部渉外 企画課	15			1			
			郡司拓美	学務部学生支援 課				1			
			神山朗範	亥鼻地区事務部				1			
80	5 月 28 日(火)	教員が研究の楽しさを語る 第 37 回 「生物多様性を調べる・保全する」	上原浩一	園芸学研究科	21	1					
81	5 月 31 日(金)	ALSA カフェ 第 5 回 「はじめてレポートを書くひとのために」	久保田さゆり	人文社会科学研 究科	43				1		
※参加人数は当日撮影した写真から判断した概数です。					参加者総計	2147	56	7	40	10	1
また、開催場所が出入り自由な空間となっているため、参加人数は一定ではありません。					登壇者総計	114					

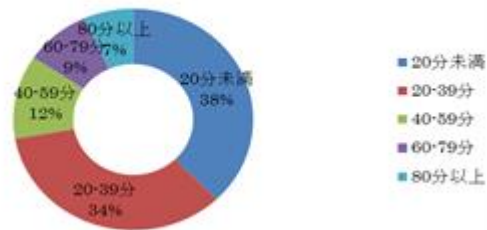
参考資料(18)－1 分野別学習相談における 2012 年度の学部別・学年別・相談時間別傾向



相談時間 前期



相談時間 後期



2012 年度前期 ALSA 中間振り返り会(意見まとめ)

2012 年 6 月 28 日, 7 月 3 日

- 1) 配布資料に基づいて, 事務連絡を行った。
- 2) これまで 2 カ月間, 学習相談を担当するなかでの成功例・失敗例, 改善点等について意見交換を行った。

【2 名体制 (分野の組み合わせ) に関して】

- ・同じ数学でも「専門が違う」者同士が組んだ場合, 互いに補いえるのでよい
- ・専門が被っていても, 協力して一緒に考えて質問に回答できるので, 困ることはない
- ・(物理と数学の 2 名が組んでいる場合)「大学院入試」で両方について勉強が必要な学生が「両方一度に聞けるので便利」ということでリピータになった
- ・1 年生であればたいいの質問には対応できるが, 工業数学の院試など難易度の高い問題は, どの組み合わせでも答えにくい。数学は院試の問題に関する質問を多く受けるが, すぐに答えられないこともある
- ・AL・ALSA の趣旨としては, 自分で考えることができるようになること。そう考えると, 答えを教える方が楽ではあるが, 院試の問題でそれは無意味で, 答えそのものは教えない, 答えの出し方の方向性を教えるのがよいのでは。調べ方は分かるので, 専門分野をすべてそろえるという必要はないのでは。
- ・化学でも専門が異なると対応が難しい。一緒に考えるのも限界があり, 考えを伝えられてもそれが合っているかどうかは不安。物理寄りの質問もあり, 化学&物理の組み合わせがあってもよい
- ・化学の中でも異なる専門同士の組み合わせがよいかも。教科書のこのあたり, くらいは分かるが学科が違くと教科書が違うこともある

【時間割・体制について】

- ・コマ割りが授業時間とずれている (休憩時間分をつめている)。院生も授業や TA の時間があるため, 入れないコマも多くなり, また早めに退席させてほしい場合がある。
- ・授業時間半ばの時間帯で勤務交代するコマ割りにしてはどうか?
- ・数学は質問に時間がかかる場合もある (後からの相談者には待ってもらったこともある)。80 分ほどかかったり, オーバーする場合も多い。授業のコマ割りにあっている方がよい。
- ・文系は相談数が少ないので, 人気のある理系分野のコマを増やしてはどうか
- ・相談者に 1 年生が多い。6 限以降もコマを入れてみては。ALSA も実験のある日もあり助かる
- ・授業の合間だと次の授業の時間が気になるので, 放課後にコマがあると利用者が助かるかも
- ・4～5 限の合間に駆け込みで質問に来る人も多い
- ・友達同士で来る人もいる。放課後だと待ち合わせして来やすいかも

【困ったこと】

- ・物理化学 (= 自分があまり深く勉強していない特定の分野や専門外) を聞かれると非常に困る

- ・教育学部の「物理基礎実験」を取ったものの、高校では物理を一切履修していないという学生の場合に、「高校1年レベルの基礎の基礎」から教えないといけないため時間がかかる。単位さえとればよいという感じで相談者の意識も低いことが多い
- ・「単位をとればよい」という程度の説明を求められているのか、「理解できるように」教えてほしいと言われているのか（メモより）
- ・時間が13時までとなっている場合、その時間までにくればよいと思っているのか、担当時間が終わる「間際」になって来てしまう学生もいる
- ・東京大学の院試を解いてほしいという依頼が来たときは、とても難しいと思った
- ・工学部と理学部では同じ数学で、あまりにも数学教育（求められる「厳密さ」）が違うので戸惑った（例：数学の方は記号法も厳密に用いるが、工学系の数学はそうでもない）
- ・参考図書を探しに行ったものの、本が無かった（メモより）
- ・実験で「薬品を使う理由」が説明しにくい（メモより）

【困ったときの解決法で、他の人にも勧めたいこと】

- ・数学でも自分の「専門外」の質問が来て困ったときに、MLに質問を投げたら、ALSAの他の担当者からすぐに回答が寄せられて助かった

【混雑状況に関して】

- ・木曜の午前は訪問者が少ない。普遍教育の授業が総じて午前中だから、授業に行っているのではないかと思っている
- ・午後は訪問者が多い。来たら既に待っていて、終わると後ろで「空くのを待っている」人もいる
- ・木3-4限が多い。金曜午前は少ない
- ・火曜午前は少ない
- ・お昼は少ない。人の出入りは多い

【一人当たりの「回答」にかかる時間について】

- ・決めた時間どおりに解き終わらず、次もおいで、ということになることがある
- ・物理では、実験やレポートに関する質問は説明に時間がかかる。実験・レポート・試験問題のどれがくるかによって、相談時間と労力が変わってくる

【よかったこと、うまくいったこと、うれしかったこと】

- ・単純なケアレスミスを指摘したり、問題解答の指針がうまく伝わったこと（メモより）
- ・リピータがついたことはうれしかった。数学の場合、授業では宿題が出される（解法は各自やってくるようにと言われて解説がないことも）も詳しく解法は教えてくれない。なので、授業で「出しっ放し」の問題をじっくり解説してくれたことがありがたかったのだと思う。それがリピータがついた理由では
- ・大学院入試の問題はとにかく難しいので、教えるというより「3人（担当者2人＋相談者1人）で取り組む」かたちになっているが、それでもリピータがついた（※「一緒に考えてくれる人」というニーズも存在する）
- ・他の大学と比べて、千葉大学の学生は「次回までにこれをやってきてね」と頼むとまじめにやってきてくれるような気がする）
- ・リピータが来て下さった。園芸学部1年生で歴史学の教養科目のレポートの書き方について。新自由主義に関してだったが、相談に乗っているうちにALSA担当者それぞれの考え方がど

うしても出てきてしまった。レポートの形式的な書き方や文献の探し方ではなく、相談者自身の論点が定まっていなかったり、どう考えてよいか分からないという場合の質問は対応が難しい

- ・エッセイの書き方を教えてほしいと言われたことがある。ALSAは大枠と論点の見つけ方を教えるだけで、何が論点かを考えること自体は本人の勉強なので、質問者自身に考えさせるべきところは考えさせるべき。選択肢を示すにしても、文系はどれが選択肢なのかということ自体が流動的な分野。逆に語学とかの方が答えやすい

→ 「語学」も教えられる内容として書けばいいのでは

- ・文系学習相談でリピータが出たとのことだが、2回目の相談内容は？

→ 1回目の質問は、レポートを書いたことがないとのこと、レポートの書き方についての質問。2回目は連休をはさんで3週間後に、別の新しい話題（新自由主義について）。最後に勉強するが自分で考えるということが本人にとって新しかったようだ。1回あたりの相談時間は30分くらい。

- ・他の分野ではリピータはありますか？

→ リピータは2件、来る人が決まっているかも

- ・質問のあった次の日に自分で解いてみて分からないとことで再び来た人がいた。数学は2コマ続きの時間があるとよいのかも。同じ人でなくても。1つの問題に80分かかるのではなく、微積の後で線形代数、のように複数の問題もまとめて持って来る
- ・時計があるとよい。自分が対応できる時間が何時までか明示できる。ぎりぎりに来る人も多い。80分教え続けること自体は苦痛ではない

【その他】

- ・メモを書いて相談者に渡すことはありますか？
- ・数学はホワイトボードに書いて、相談者が書き写すことが多い。ホワイトボードが小さい。2つ欲しい
- ・参考文献をリストアップして渡したり、レポートの構成が分からない方にレポートのフォーマットをその場でWORDで作成して渡したり、レポートに何を書いてよいか分からない人にはアイデアの出し方の樹形図を書いて渡したりした
- ・コピーが取れるとよい。現在は遠い

【ネームプレート】

- ・作るなら大々的に、ホームページに載せるなど。色は時間割と合わせた方がよい
- ・名前が出ること、写真が出ることについてはどうか？→ 名前が出ることはOK。写真はその必要があればよいが、必要がないのであれば恥ずかしい
- ・専門を書くことによって質問を限定してしまわないか？
- ・分野以外のプラスアルファ要素は、時間割にも載せた方がよい
- ・語学は需要があるのではないか。第二外国語など勉強法に悩むのでは
- ・相談室にプレゼンについての質問もあるので、語学などのプラスアルファ要素も含めていただけるとよい。
- ・文系学習相談の事例の自分の考え方に誘導してしまうところに共感した。論点や考え方は相手に決めてほしいところだが、人によって線引きできるところは異なる。選択肢を出してみて、どうしてそう思ったかを聞きながら相談に乗ることもある。逆に、選択肢の中で

相談者が決めてしまうこともあるので注意が必要（学生相談員）

- ・相談に乗る時間がない場合は、あらかじめ言う。時間はこちらでコントロールしなければいっつでもいつまでも相談できると思われてしまうことがある。
- ・相談室には語学（TOEIC）に関する質問もある。文法については誰、会話については誰、と内容によって相談対応者を振り分けることもある。
- ・教える方にも教えられる方にも意味があるが、どこまで教えるか教わるのがよいかは難しい。経済についての質問もある。数学も関連する。マンツーマンで家庭教師状態で教えることもある
- ・内容によっては相談対応者の2人のうち1人が手持ち無沙汰になることもある（学生相談員）

2012 年度後期 ALSA・LS 中間振り返り会記録

2012 年 12 月 6 日 16 : 10～17 : 10

I. 連絡事項（略）

II. ディスカッション

1. 一回で回答できなかった場合について

- ・（数学）数学が月火になく、水木金と連続しているが、ばらけた配置の方がいいのでは。後日解答や別の担当者にまわす場合で、しかし回答を急ぐ相談者がいる場合、同じ科目がばらけていた方が早く対応できる。
- ・（数学・化学）より専門の近い担当者のコマを相談者に紹介するとともに、その担当者に ML で対応を依頼している。勤務予定時間外でも可能であれば、駆けつけて対応した例もあった。

※勤務予定時間外であっても、そういう依頼によって学習相談に対応したという場合には、その旨報告して勤務時間につけてください（姉川）。

- ・（化学）質問を受付け、次回に回答する準備をしたが、質問者が来なかったことがある。
- ・（数学）数学でも同様のケース。解決したものと信じたいが。

2. 曜日、時間について

- ・（数学）木曜 6 限はスペースに利用者はいるが質問は少ない。金曜 5 限と水曜 6 限で比べれば、6 限が多い。
- ・（化学）水曜 6 限は化学の質問が多く、一人あたりにかかる時間も長い。

※曜日と分野によってどの時間に多いかが異なるようであれば、どの時間に重点を置くということも単純にわからないので、しばらく様子見（姉川）。

3. 分野と質問の難易度について

- ・（物理）分野混合のコマを増やしてもよいかも。同じ分野の質問者が 2 人同時に来ることは稀れ。結果、その分野のコマ数も増えて、対応の可能性は増える。
- ・（化学等）（分野あたり一人しかいないことになっても）対応に問題はない。
- ・（数学・化学）同じ分野内でも、その中の専門分野が異なると、混合コマであるのと同じように感じる。
- ・（数学・化学）1, 2 年生や特にその分野を専門としない学部の学生であれば、同じ分野内の誰でも対応できる。一方、3 年生以上は専門分野が異なると対応が難しい。特に院試。授業での課題も院試レベルのものになる。

4. 質問受け付けについて

- ・ (数学) あらかじめ Web やメールで質問を受け付けられないか? 高度なものでも回答の準備ができるし、コマに質問者が集中して待たせることが無くなる。分野によっては困難だが、メールでも質問ができる分野もある。ただし、予約という形だとその場に来た相談者を断るということもできないが。
- ・ (化学) その方が資料探しに時間がかからないなど、やりやすくなる面もある。ただ全体の印象として、多くの質問は勉強しても分からなくて相談に来たというより、「明日テスト」など前日になってあわてて来て、答えだけを求めようとすることもあり、それでは学生の自律的学習における ALSA の意味がなくなる。事前にメールで質問を受付けて回答を用意するというのを宣伝すると、LS に代わりに課題を解いてもらえるように捉えられ安易に使われる可能性もあるのではないか。
- ・ (数学) レポートの問題を丸投げされた場合に、答えてしまっただけでは授業を担当する先生の意図にも反することになる。ALSA-LS は学習支援をして、学生はやりかたを教わったらそのあと自分で勉強して理解するので、前日にあわててきて間に合うものではない。答えではなく勉強の仕方を教えるということ、もう一度強くアピールしたらいいのでは。
※すぐに答えられず、試行錯誤したり、資料を探して集めなくてはならない場合、その姿を見せてしまってもいい。そうすれば、そういつでも安易に答えが出てくるわけではないということを知る機会になる。メールで受けるかどうかについては、引き続き検討 (姉川)。
- ・ (文系) (そのほか質問を受けて困った事例は?) 後輩が質問に来て学習相談から進路相談に及んだ。
※厳密に学習相談でなくても、進学など学習とも関連しているともいえるので、できる範囲で答えていい (姉川)。

5. 利用者について

- ・ (化学) 学習相談かと思ったら卒業研究のアンケート調査に来た学生もいる。
※館内でのアンケート調査は許可が必要なはず。確認が必要かもしれない (千葉)。
- ・ (化学) 携帯で大音量で音楽を流していた学生がいた。
※迷惑行為ではないかと思うことがあれば、目に余ると思えば自分で注意しても構わないが、図書館員へ知らせてください (姉川)。

6. その他

- ・ (数学) ネームプレートを作成して掲示する件については?
※Web 掲載・図書館内での掲示等検討します (姉川)。机上用のネームプレートは用意されているので使用してください (千葉)。
- ・ (文系) ALSA-LS 備付図書のブックトラックは控室に収納しなくてよかったのですか?
※後期より負担軽減のためデスク横に時間外も置いておくことになりました (姉川)。
※その他、気づいたことなどありましたら日誌等にお書いてください (姉川)。

7. 欠席者より

- ・ 図書館にグループで見学にこられた方へ、ALSA のことを説明する機会があった。英語で説明することもありましたので、スクリプトなどがあると助かる。

2012 年度後期 ALSA-LS 事後振り返り会 記録

(1 回目) 2013 年 2 月 13 日 11:00~12:00 (2 回目) 2 月 14 日 13:00~14:00

I. 連絡事項・報告事項 (略)

II. ディスカッション (★は提案)

1. 相談で対応に困った事例

- ・ (数学) 答えを教えないギリギリのところで止めるのが難しかった。
- ・ (数学) 明日が試験なのに全然分からないとのことで泣きつかれたことがあった。
- ・ (数学) 明日がレポートの提出日とのことでまとめてどっさり持って来られた。
- ・ (数学) 「相談記録票」を書き忘れることがある。
→ (姉川) 記入する時間がない場合もあると思うが、記録票は分析のためできるだけ具体的に書いてもらいたい。そのための工夫を考えてほしい。
- ・ (数学) 質問者の名前を尋ねることは個人情報保護上よくないだろうか? 「君」「あなた」では呼びにくい。また、複数回訪れる質問者についてカルテを作成すると次回の対応に生かせる。★
→ (姉川) 名前を尋ねること自体は問題ない。カルテを作成した場合、質問者の情報を共有する方法やそれをどう使うかが課題となるので、具体的な方法を考えておいてください。
- ・ (数学) 「日誌」は書かないといけないか?
→ (姉川) 特に何もなくても記入して下さい。
- ・ (文系) レポートの書き方が人によって異なり、対応した ALSA-LS よって違う回答をしたケースがある。分野内ですり合せた方がよいのでは? ★
→ (化学) ALSA-LS 間で統一しても、いずれ教授間の違いに遭遇することになるので、統一するよりは、違いがあることを説明しては? ★化学に関してはすり合せる必要性は感じない。ただ、示す参考書に違いがあったりするだろう。

2. コマの設定

- ・ (物理) デスクに 2 人いても一方に質問者が集中することがあった。
- ・ (文系) 2 人いる時ではなく 1 人の時に質問が多いように思う。
- ・ (数学) 試験前の金曜は 3 人いてもフル稼働だった。
- ・ (数学) 木曜は数学の質問者は少ない。数学科の質問室が開設されているためだと思う。
- ・ (数学) 特に時間がかかる質問者がいる。21 時頃までかかったこともあるようだ。
- ・ (化学) 化学で特にキャパオーバーだったことはない。
- ・ (数学) 質問者が集中した時は、早めに問題を解いてもらうなど切り上げて対処した。
- ・ (数学) 学期初めは物理への質問が多く、試験前は数学への質問が多い。
- ・ (数学) 数学と物理の混合コマは相互に補完しあえ相性が良い。
- ・ (化学) 試験前の時期のコマ数を増やしてはどうか? ★
→ (姉川) 可能であるが、ALSA-LS メンバーのスケジュール次第になる。スケジュールは変更せず、1 コマに入る人数を増やす方法が検討できる。
- ・ (数学) 統計に関する質問 (経済・工学分野) が多かったが、数学ではうまく答えられない。統計を専門とする ALSA-LS を採用してはどうか? ★

→ (白川) 統計は分野によって方法論が異なる。社会学で統計を理解できる院生を採用できるとよいだろう。

→ 数学研究科で行っている学習相談には1名統計専攻の院生がいる。

- ・ (数学) 統計に関する質問を受けたことはない。すぐに答えられない質問に対応できるため、メールではなく、事前に質問を受付ける用紙を用意してはどうか? ★

3. リーダー制の導入

- ・ (化学) コマごとに組んでいるので、リーダー制は機能しにくいのではないかと。学習相談デスクの業務中は全体作業がない。リーダー制を機能させるためには、密に連絡・連携する必要があるが、余計な仕事が増えることにもなる。

→ (姉川) リーダーを置くことにより、一体性が生まれるとともに質の平準化につながるかもしれない。一方、そこまでの必要もないかもしれない。検討しながら試行したい。

4. 広報

- ・ (文系) 新入生ガイダンス時に ALSA-LS 紹介の時間をとってもらえないか? ★

(文系) 4年生でも ALSA や文献の探し方などをまだ知らない学生もいるようだ。

→ (千葉) 新入生ガイダンスに新たに時間枠をとるのは難しいと思われる。5月以降に ALSA-LS で独自イベントを企画した方がよいと思う。なお、全学部の新入生ガイダンスにおいて図書館紹介冊子を配布するとともに、図書館員が5~10分程度説明している。学習相談デスクについてもその中で紹介される。また、普遍教育の必須科目の中でも1~2コマ図書館員がレクチャーしている。

→ (姉川) 企画案があったら、メールで提出してください。案作成時間は勤務時間に含まれるので申告すること。

- ・ (数学) 普遍教育の休講を連絡用の掲示板にポスターを掲示したり、教育用端末のスクリーンセーバーに ALSA-LS の宣伝が表示されるなどできないか? ★

→ (姉川) 今のところ、できる宣伝活動はやっているが、今後のアプローチを ALSA-LS 以外の学習支援デスク担当者と連携して、広報を検討したい。

2013 年度前期 ALSA-LS 中間振り返り会 議事録

(1回目) 2013 年 6 月 11 日 12:50~14:20 (2回目) 6 月 13 日 14:30~16:00

I. 連絡事項・報告事項 (省略)

II. ディスカッション (★の提案は実行。☆の提案は引続き検討)

(1回目)

1-1. 相談時間について

- ・ (物理) なんとなく分からない、授業で出てきた概念が分からない、という質問の対応は時間がかかる。ある点を理解すると次の不明点が出てくるという形で周辺のことについても説明の必要が出てくることになり、1時間以上かかったケースがあった。この質問者は本を持参。レポートの問題など個別の問題の質問はすぐに終わる。
- ・ (化学) この辺の概念が全く分からない、というような人には、教科書の最初から30ページくらい一気に説明しないといけないことがあった。レポートの範囲だけ全く分からない、なんとかしてくれというケース。最初の段階でつまづいていて、1つ分かったら次の段階を教える。90分使った。

- ・（物理）こういう質問をする人はコマの最初から狙って来ていることが多く、時間内に終わらせたが、終わり頃には着地点を探しながらコントロールした。
- ・（化学）ある程度の理解まで落とし込みたかったときに、時間を少しオーバーした。具体的な質問は 30〜40 分程度だったが単位取得の不安の対応に 1 時間以上かかったことがある。有機化学を暗記でやろうとしていた学生に、それでは理解ができず単位も取れないこと、そうではない学習の必要性を説明。このような考え方の切り替えが必要な話には時間がかかるが、一度で説明しないと意味が無い。

1-2. 相談の種類・内容と対処法について

- ・（物理）時間内に着地点が探せるようコントロールしているが、「単位をとれそうにない、どうしましょう」など不安からくる質問が一番難しい。また、何が分からないか言っていない、質問者のレベルがつかめない質問は難しい。
- ・（化学）そういうのはきつい、背負いきれない。とはいえ、テストがだめだった、どうしましょう、というのを見捨てられない。こういうときはどうすればいいのか？
- ・（物理・化学）一問解いてみよう、というときもある。何が分からないかを言わない、レベルが分からない時にどうするか。学習法の質問の時には、本のここが分からない、というのではなく、何も持参しないことがある。
- ・（数学）自分は話さず相談者に考えてもらう時間が長い。あまり教えない。だからそこは悩まない。「がんばりましょう」と言って終わる。
- ・（化学）授業に出てノートを真面目にとっているのに「分からない」という相談者はどうしたら？ 泣きついてきて、追い返しようにない人がいる。教科書の読み方から始めたりしている。
- ・（化学）講義 1 回分が B5 半分に薄い字で書いてあるノートを持ってきて「分かりません」という相談には、怒ったことがある。分かるようにノートを取ってから来るようにと。
- ・（文系）「卒業論文は何のために書くのですか？」という質問があった。やる気がないようで研究テーマに関する文献を探してもいなかった。動機づけに 30 分ほど時間をかけ、その後 1 時間ほど一緒に文献を探すことをして、ようやく卒業論文に動き出す様子だった。1 度にはすべて教えられないので、「また分からなくなったら来てください」と、段階的に教えられるように誘導した。（その後、質問に来ていない）
→（姉川）やる気がないのに何故 ALSA デスクに来たのか？ →（文系）他の学生が相談しているのを見て来たようだ。

1-3. 相談人数について

- ・（数学）昨年度は 1 人の人が 30 回くらい院試の質問に来た。
- ・（物理）毎週相談にくる人がいたら、そのコマがすべてその人で埋まってしまう。
- ・（化学）さばけなかったこと、並んだことは 2 回あった。待ってもらっていたら帰ってしまった。月 5 限が最も多い。
- ・（化学・物理）待たせているときには、早く切り上げることになる。そういうときでも、互いに気を使うので、相談者に不快感を抱かせるということはない。一人対応していて後から来た場合でも、同じ質問ならまとめて対応できる。
- ・（数学）数学科の相談室は部屋が広くホワイトボードがたくさんあって、ホワイトボードで相談者に個々に考えさせながら、並列でみられる。ALSA のホワイトボードは後ろにあ

って使いにくい。

→（白川）N棟の利用者用のホワイトボードを活用することができる。

- ・（化学）化学は計算させながらというのは少なく、概念の説明をしなければならない質問や、教科書を一緒に読んで読み方を教えるケースが多い。こういうときは一対一で対応した方がいい。
 - ・（化学）木5限の物理は固定客がついている
 - ・（数学）数学でも固定客になりそうな人がいるが、自分でできるようになってほしいので、あまり来てほしくない。自分がちゃんと教えられていないのではないかと思う。
 - ・（姉川）東北大学の例では予約方式で時間を30分までとして学習相談を行っている。
 - ・（化学）予約による相談は別室で対応することはできるか？ ☆
 - ・（白川）予約制を導入すると事前に質問内容を知りたいという数学の要望に対応できる。
 - ・（千葉）予約制にすると、単純に質問に答えるだけではなく、学習過程とその達成を管理する責任が生じないか。→（文系）相談時間の長さを調節することで利用者層をコントロールすることできると思う。相談時間が短ければ、家庭教師的に使われることはないかも。☆
 - ・（姉川）現在は、ALSAの人員・現在の体制で対応可能な相談件数を超えている状況なので対策が必要。とりはぐれ防止のために、さしあたって前期後半は新採用者による増強を予定している。増強が必要なコマを把握したい。
- （千葉）待ち状況を日誌に書いてほしい ★

1-4. 専門領域・混合コマについて

- ・（白川）混合コマを設定にしたことによる影響は考えられるか？
（化学）利用者にとっては相談できる時間的チャンスが広がっているのでよい
- ・（化学）手が足りない時に化学の質問者に数学担当者に対応してもらったことがあった。偏微分の部分なので、数学担当者に対応してもらってよかった。物理も化学も現象を数学で記述するため、その部分への対応は数学担当者も（の方が）適することもある。
- ・（数学）物理の質問が数学にきたことがあった。分からない用語は相談者に説明してもらったうえで、こちらで論理的に説明できれば相談者も納得する。前提の言葉・概念が多すぎると困難なので、高度なレベルになると無理だが。
- ・（化学）高分子に関する質問で、化学だけど数学的・物理的アプローチもできるとよかったというケースがあった。数学・物理担当者に話を伺いながらできる混合コマならもっとよかったのに、というケース。
- ・（化学）混合だと分野間の交流の機会になって楽しい、ということも。

1-5. その他

- ・（白川）専門領域への要望はあるか →（化学）有機化学。実験が多いので忙しいかも。
（物理）工学部の物理。機械工学・電子工学など。（数学）統計の相談需要があるが数学的統計ではなく、心理学や経済学など文系的統計ではないか。
- ・（化学）ALSAリーダーに指名され、これは先生方との中間的なとりまとめという認識でいたが、特にその後何も降りてこない。どうなったのか。→（姉川）・・・。
- ・（化学）情報共有のため、ALSA-LSでファイル使用できるしくみがあるとよい（wikiでも何でもいいので、webでhtmlで読めるもののようなイメージ、共有してアクセスでき

る掲示板のような)。☆

- ・ (文系)「文系」とひとくくりにするのではなく専門領域を併記してはどうか? → (千葉) ネームプレートを大きくしそこに記載することを考えている ★

(2回目)

2-1. 相談時間・相談の種類・内容・対処法について

- ・ (数学) 相談時間が長引くケースとしては、1人の人がたくさん質問するケース、問題が難しいケースがある。1人の人がたくさん質問するケースは、試験勉強で分からない問題をためて定期的に来ている。
- ・ (数学) 昨年に比べて相談件数が多い。特に月5~6限・水5~6限。
- ・ (数学) 質問者自身が何を聞きに来ているか分からないケースは対応が難しい。具体的に問題をきいてくれるのが分かりやすい。他の質問者がいて待っている時にそういう状態になると困る。
- ・ (数学) 待ってもらう間にワラバン紙を渡して書いてもらおうとよいかも。病院の間診票のように。書いている間に質問者が質問が把握できていないことを自覚したり、頭の中を整理してくれる可能性がある。待たせている間にこちらで質問を把握できれば、一人に考えさせながら簡単な質問に先に答えたり、同様の質問ならまとめて対応するなど複数の質問者に並行的に対応できる可能性もある。 ★
- ・ (数学) テスト前・レポート中は同じ質問が集中し、立て続けに3回同じ質問が来ることがある。歩いていると呼び止められることもあり、その場で対応することも(この場合、記録漏れになることが多い)。
- ・ (数学) 待っている間に帰ってしまう人がいる可能性はあるが、気づくのは難しい。
- ・ (物理) 複数人に同時対応した時に椅子が足りないケースがあった → (姉川) N棟で空いている椅子があれば使用してよい。混雑時は難しいかもしれないが、レファレンスデスクの椅子も空いていれば使ってよい。
- ・ (数学) 多い時は5~6件来る。6限より5限が多い。6限は、5限が終わってすぐ来なければこない。ラスト30分の駆け込みもない。
- ・ (数学) リピータがいる。1日3回も来た場合は、アンケートは毎回出してもらう必要があるか? → (姉川) 毎回アンケートに書く内容が変わるということもないと思うので、前回と違うことがあれば書いていただく程度でよい。
- ・ (数学) アンケートは相談対応者に直接手渡ししてもらっているが、匿名性が失われ書きにくいこともあると思うので、アンケートボックスなど提出場所を用意してはどうか? ☆
- ・ (姉川) リピータがいると他の相談者が相談しにくい状況があるか? → (数学) ちょっと分からない。
- ・ (数学) 質問者に教科書・ノートを持参してきてほしい。授業でどういう風に習ったかを知りたい。その方が、質問者が納得するように教えられる ☆
- ・ (数学) 持って来るケースの方が多いが、ノートは持ってきて教科書は持っていないし、どんな教科書が答えられないケースもある。
- ・ (数学) ノートも持ってこなく、スマホで分からない問題だけ写メで写してくるケースも。

- ・ (数学) 院試はたまにすごく難しい問題が来る。その話とは別だが、院試は8月下旬にあるが、ALSA 学習相談デスクはその前に実施期間が終わってしまうがよいのか? → (姉川) ALSA 学習相談デスクはもともとは1~3年生、卒論準備くらいまでを想定していて、院試は想定していなかったもので、8月の実施は想定外。☆
- ・ (数学) 院試の過去問を解いていて分からなかったら質問に来る。過去問に答えがないから答えを確認に来るようだ。
- ・ (数学) 院試の問題は解くのに時間がかかる。1問解くのに30分で早い方。他大学など見たことがないタイプの問題は解きにくい。
- ・ (物理) 東大の院試の質問が多い。他のALSAに聞くなど総動員で対応する。
- ・ (千葉) 院試の質問に時間がかかり、1年生に対応できないのは困るのでは? → (姉川) 院試の問題でも大学で学んでいく上で必要な学習相談であるともいえるので、判断が難しい。
- ・ (数学) 院試の問題は難しいというよりは時間がかかる。実際の試験では1問あたり1時間かかる。選択式なので、院生であるALSAがすべて解けるわけではない。

2-2. 専門領域・混合コマについて

- ・ (物理) 統計力学・熱力学について受けた質問のうちの1問が化学系の問題だったので、化学との混合コマで助かった。
- ・ (数学) 物理数学など、数学のコマに物理の質問が来て困ったケースがあった。物理担当者が隣にいてアドバイスしてもらえると助かると思った。物理の中で起こった数学の問題(問題の背景は物理だが微分方程式を使用する問題等)など、混合コマだと対応しやすい。
- ・ (数学) 物理や化学の人が見ると当たり前のことが起こっているのかもしれないが、数学担当者から見ると、物理の教科書は式変形が雑すぎて、知識がないと質問者と一緒に教科書を見ても分からないことがある。
- ・ (数学) 物理のコマに誘導しようとしても、「明日テストなんです」等と言われる。
- ・ (数学) 昨日化学の相談対応を横で聞いていたが、数学では使わないような式変形を使うので、追うことは難しい。化学の質問は化学が受けた方がよいと思う。→ (姉川) 化学の質問の数学部分を数学担当者が対応してくれて助かったという話もあるようだが → (数学) 質問者が何を知りたいかによる。答えまで行く計算過程さえ分かればよいというケースと、なんでそういう式変形になるか知りたいというケースで、どちらの知識がどれだけ必要になるかで違う。
- ・ (数学) 文系の人が統計ができるとすごく助かる。統計の質問がたまに来るが難しい。経済学部が質問に来る統計は、数学で扱う統計とは異なる。
- ・ (数学) 質が異なるというのではなく、文系の統計は3段飛ばしくらいで話が進んでいて、説明は端折って結果だけを示されていて、式を見るだけでは分からない。
- ・ (数学) 統計は文系の必修科目であるのですか? → (文系) 行動科学科の授業があつて分からないまま単位を取りました。
- ・ (数学) 統計の授業を受けていても分からないことなのか、気になる。クラスのどれくらいが分からないのか、どれくらいのレベルの問題を持ってくるのか分からない。
- ・ (千葉) 昨年統計の問題が出ていたので初歩的な統計の本を図書館の蔵書として購入したが、質問に対応できる内容・レベルの本が分からないので、購入推薦図書があれば教

えてほしい ★

- ・ (数学) 1度かなり高度な統計の質問が来て、物理担当者と一緒に考えたが分からなかった。ネットで調べたが分かっていないと解説できないような問題で対応が難しかった。
- ・ (数学) 質問の文脈が分らないと、対応が難しい。力加減ができない。
- ・ (数学) 経済学部で統計を教えている先生に聞きに行きにくい環境なのだろうか？
- ・ (姉川) 対応できなかった質問の回し先が分かればいいが、難しい課題。統計の問題については検討を継続 ☆
- ・ (数学) 数学研究科の統計専門の院生が、経済学部の統計に対応できるかは分らない。
- ・ (物理) 院試が得意な人がいるとよい。

2-3. その他

- ・ (数学) N棟でサークル活動している人や、ホワイトボードで間仕切りに使って個室化して利用している人がいる。就職ガイダンスに使用している人たちもいる。→ (姉川) ALSAの業務に支障が出たり気になるケースがあれば、日誌に記入してほしい ☆
- ・ (数学) 2階の環境が騒がしいため、勉強をする人は4階へ行っていて、2階の学習相談デスクに質問が来にくいケースがあるのではないかと気になる。
- ・ (文系) ALSA デスクでは「レポートの質問について答える」となっているが、レポートというだけでは範囲が広すぎて聞きにくいのでは。レポートの書き方は本を読めばある程度分かるし、レポートの完成度を高くしたい・評価を高くしたい等の段階・意欲にならないと、質問に来ないのでは。またその場合、質問者にとって相談者がどういう専門の人か分らないと聞きにくいと思う。
- ・ (数学) ネームプレートに特に得意だった授業名を書くとよいのでは
- ・ → (千葉・姉川) 各分野ごとに記入項目を検討し、各リーダーがまとめる。またネームプレートで専門分野を大きく書くことで対応することを考える。レポートセミナーを段階・レベル別に分けるという意見も出ている。★
- ・ (数学) 相談記録に記入する相談内容の分類の「学習法」「試験勉強」に当てはまらないものがある。「個別問題解説」の項目を設けてほしい ★
- ・ (文系) ネームプレートを貼り出してあるボードを、ALSA デスクの後ろではなく前に貼り出してほしい → (姉川) ALSA デスクで相談している様子が見えなくなるという問題もあるので、継続検討。時間割表の大きいポスターを階段の近くなどに貼り出すなども検討する ☆

平成 24 年度前期 千葉大学附属図書館 西千葉本館 ガイダンス実施状況

図書館主催ガイダンス

* 参加人数はのべ人数

メニュー	内容	日程	回数	参加人数	会場	参加対象
ライブラリーツアー	館内案内, 利用案内	4/9(月)~13(金)10:00, 14:00	10	96	図書館	来館者
PsycINFO 利用講習会	【PsycINFO】講義形式で(専任講師による)	4/23(月)16:30-17:00	1	10	N 棟1階プレゼンテーションスペース	学部生・院生・教職員
Lexis.com 利用講習会	【Lexis.com】講義形式で(専任講師による)	5/1(火)16:30-17:30	1	11	N 棟1階プレゼンテーションスペース	学部生・院生・教職員
SciFinder 利用講習会	【SciFinder】講義形式で(専任講師による)	6/13(水)13:00-14:00	1	26	N 棟1階プレゼンテーションスペース	学部生・院生・教職員
SciVerse Scopus 利用講習会	【SciVerse Scopus】講義形式で(専任講師による) 基礎編	6/28(木)14:30-16:00	1	38	N 棟1階プレゼンテーションスペース	学部生・院生・教職員
	【SciVerse Scopus】講義形式で(専任講師による) 応用編	6/28(木)16:10-17:40	1	9	N 棟1階プレゼンテーションスペース	学部生・院生・教職員
クイックガイダンス MyLibrary 利用講習会	「本や論文を探す・読む: MyLibrary を使えば 文献申込にもこんなに便利」	7/11(水)16:30-17:00	1	10	N 棟1階プレゼンテーションスペース	学部生・院生・教職員
クイックガイダンス EndNote Web 利用講習会	【EndNote Web】講義形式で(専任講師による)	7/18(水)14:30-15:00	1	15	N 棟1階プレゼンテーションスペース	学部生・院生・教職員
クイックガイダンス 新聞データベース利用講習会	「新聞記事を探す・読む: CD-ROM, オンライン版を使えばこんなにスマート」	7/25(水)16:30-17:00	1	16	N 棟1階プレゼンテーションスペース	学部生・院生・教職員
合計			18	231		

学部学科・グループ別講習会(申込制)

学部(学科)など	内容	日程	回数	参加人数	会場	備考
専門法務研究科	文献検索の演習(OPAC,WebcatPlus,CiNii), 図書館およびアカデミック・リンク・センターの見学	4/18(水)12:50-14:20	1	45	総合校舎 A 号館 3 階情報 自習室→図書館	大学院 1・2 年(法情報検 索演習)
文学部(行動科学科)	PsycINFO 利用講習会	4/23(月)14:30-16:00	1	20	文学部 102 教室	学部 3 年生(心理学研究 法)
教育学部	図書館サービス案内+館内ツアー, 蔵 書検索	4/25(水)10:40-11:40	1	15	N 棟1階プレゼンテーションス ペース, 館内	学部 1 年生他(新入生セ ミナー・長研生ゼミ)
新規渡日留学生	図書館案内	4/25(水)13:20-14:20	1	6	N 棟1階プレゼンテーションス ペース, 館内	国際教育センター
理学部(数学・情報数理学科)	図書館サービス案内+館内ツアー	4/26(木)9:00-10:10	1	45	N 棟1階プレゼンテーションス ペース, 館内	学部 1 年生(スタートアッ プセミナー)
文学部(国際言語文化学科)	図書館サービス案内+館内ツアー(本や雑誌 を探しに行く)	4/26(木)10:30-12:00	1	40	N 棟1階プレゼンテーションス ペース, 館内	学部 1 年生(国際言語文 化学入門 a)
法経学部(経済学科)	図書館サービス案内+館内ツアー, 蔵書 検索	5/1(火)14:30-16:00	1	13	N 棟1階プレゼンテーションス ペース, 館内	学部 1 年生(基礎ゼミナ ール)
法経学部(経済学科)	図書館サービス案内+館内ツアー, 蔵書 検索	5/1(火)14:30-16:00	1	15	N 棟1階プレゼンテーションス ペース, 館内	学部 1 年生(基礎ゼミナ ール)
園芸学部(緑地環境学科)	館内案内→情報処理授業支援と同等の 内容	5/2(水)14:30-16:00	1	74	図書館→総合校舎 A 号館 3 階自習室	学部 1 年生(緑地環境学 セミナー)
	情報処理授業支援と同等の内容+Scopus	5/2(水)16:00-17:40	1	74	総合校舎 A 号館 3 階自習 室	学部 1 年生(緑地環境学 セミナー)

教育学部	図書館サービス案内+館内ツアー	5/7(月)13:00-14:10	1	19	N棟1階プレゼンテーションスペース, 館内	学部1年生(新入生セミナー)
教育学部	図書館サービス案内+館内ツアー, 蔵書検索, 日本語文献検索実習	5/9(水)10:30-12:00	1	11	N棟4階グループ学習室1	学部1年生(新入生セミナー)
文学部(国際言語文化学科)	データベース実習(CiNii, Scopus, 電子ブック, 電子ジャーナル), プレゼンテーションの説明	5/10(木)10:30-12:00	1	10	メディア基盤センター電算実習室2	学部1年生(国際言語文化学科入門a)
	プレゼンテーション実習・発表	5/17(木)10:30-12:00	1	10		
文学部(行動科学科)	図書館サービス案内+館内ツアー, 蔵書検索, CiNii など	5/17(木)12:50-14:20	1	4	N棟1階プレゼンテーションスペース, 館内	学部1年生(行動科学科入門)
工学部(ナノサイエンス学科)	情報処理授業支援と同等の内容+Scopus	6/1(金)16:10-17:40	1	39	自然科学系総合研究棟2階教育用端末室	学部1年生(ナノ・分子物性概論)
法経学部(経済学科)	図書館サービス案内 + 館内ツアー, 蔵書検索(OPAC・WebcatPlus など)+Scopus 実演	6/5(火)14:30-16:00	1	15	N棟1階プレゼンテーションスペース, 館内	学部1年生(基礎ゼミナール)
法経学部(経済学科)	図書館サービス案内 + 館内ツアー, 蔵書検索(OPAC・WebcatPlus など)実習	6/6(水)10:30-12:00	1	15	N棟1階プレゼンテーションスペース, 館内	学部1年生(基礎ゼミナール)
文学部(行動科学科)	図書館サービス案内+館内ツアー, 蔵書検索, CiNii, Scopus 実習	6/7(木)9:00-10:20	1	5	N棟4階グループ学習室1	学部1年生(行動科学入門)
文学部(国際言語文化学科)	PowerPoint を使ったプレゼンテーション演習	6/28(木)10:30-12:00	1	5	N棟4階グループ学習室1	学部1年生(国際言語文化学入門)
教育学部	図書館サービス案内 + 館内ツアー, 蔵書検索実習とデータベース紹介(CiNii, Scopus, PubMed)	7/4(水)14:30-16:00	1	16	N棟1階プレゼンテーションスペース, 館内	学部1年生(新入生セミナー)

教育学部	レポートの書き方の授業のうち30分程度で レポート作成に役立つデータベースを紹介	7/5(木)10:30-12:00	1	40	教育学部1号館 1317 教室	学部1年生(新入生セミナー(教育学))
文学部(史学科)	蔵書検索(OPAC, WebcatPlus)+CiNii, 館内オリエンテーリング(本や雑誌を探しに行く)	7/19(木)10:30-12:00	1	37	N棟1階プレゼンテーションスペース, 館内	学部1年生(歴史学入門a)
法経学部(総合政策学科)	館内ツアー, OPAC, WebcatPlus, CiNii, 新聞記事	7/24(火)13:30-14:10	1	11	N棟1階プレゼンテーションスペース, 館内	学部1年生(基礎ゼミナール)
合計			24	584		

情報リテラシー科目授業支援

学部(学科)	内容	日程	回数	参加人数	会場	備考
教育学部	情報処理授業支援	4/27, 5/11(金)10:30-12:00	2	180	情報処理演習室 4F	
工学部(デザイン学科)	情報処理授業支援	5/9, 5/16(水)8:50-10:20	2	140	情報処理演習室 5F	
理学部(化学科)	情報処理授業支援	5/14, 5/21(月)14:30-16:00	2	88	情報処理演習室 4F	
工学部(画像科学科)	情報処理授業支援	5/15, 5/22(火)10:30-12:00	2	100	情報処理演習室 5F	
理学部(物理学科)	情報処理授業支援	5/16(水)14:30-16:00	1	40	情報処理演習室 5F	
教育学部	情報処理授業支援	5/18, 5/25(金)10:30-12:00	2	160	情報処理演習室 5F	
教育学部	情報処理授業支援	5/18, 5/25(金)14:30-16:00	2	200	情報処理演習室 4F	
工学部(建築学科)	情報処理授業支援	5/21, 5/28(月)8:50-10:20	2	154	情報処理演習室 5F	
看護学部	情報処理授業支援	5/22(火)16:10-17:40	1	95	情報処理演習室 5F	
教育学部	情報処理授業支援	5/23(水)12:50-14:20	1	70	情報処理演習室 4F	
文学部(史学科・国際言語文化学科)	情報処理授業支援	5/24, 5/31(木)8:50-10:20	2	160	情報処理演習室 5F	
文学部(日本語学科)+教育学	情報処理授業支援	5/24(木)12:50-14:20	1	80	情報処理演習室 5F	

部(数学, 理科)						
理学部(地球科学科)	情報処理授業支援	5/25(金)16:10-17:40	1	50	情報処理演習室 5F	
園芸学部(園芸学科・応用生命科学科)	情報処理授業支援	5/30(木)8:50-10:20	1	55	園芸学部キャンパス E 棟 1F 学生ホール	
園芸学部(園芸学科・応用生命科学科)	情報処理授業支援	5/30(木)10:30-12:00	1	55	園芸学部キャンパス E 棟 1F 学生ホール	
園芸学部(食料資源経済学科)	情報処理授業支援	5/30(木)12:50-14:20	1	40	園芸学部キャンパス E 棟 1F 学生ホール	
工学部(都市環境システム, メディカル)	情報処理授業支援	6/4, 6/11(月)16:10-17:40	2	200	情報処理演習室 4F	
法経学部(法学科)	情報処理授業支援	6/6(水)16:10-17:40	1	105	情報処理演習室 5F	
法経学部(経済学科)	情報処理授業支援	6/8(水)8:50-10:20	1	105	情報処理演習室 5F	
教育学部	情報処理授業支援	6/8, 6/15(水) 14:30-16:00	2	192	情報処理演習室 5F	
工学部(情報画像学科)	情報処理授業支援	6/19, 6/26(火)10:30-12:00	2	170	情報処理演習室 4F	
理学部(生物学科)	情報処理授業支援	7/5(木)16:10-17:40	1	50	情報処理演習室 5F	
薬学部	情報処理授業支援	7/9(月)14:30-16:00	1	88	情報処理演習室 5F	
文学部(行動科学科)	情報処理授業支援	7/11(水)12:50-14:20	1	80	情報処理演習室 5F	
法経学部(法学科・総合政策学科)	情報処理授業支援	7/18(水)16:10-17:40	1	100	情報処理演習室 4F	
法経学部(経済学科)	情報処理授業支援	7/20(金)8:50-10:20	1	80	情報処理演習室 4F	
合計			37	2,837		

平成 24 年度後期 千葉大学附属図書館 西千葉本館 ガイダンス実施状況

図書館主催ガイダンス

メニュー	内容	日程	回数	参加人数	会場	参加対象
SciVerse Scopus 利用講習会	【SciVerse Scopus】講義形式で(専任講師による)	11/12(月) 13:30-14:00(講義編)	1	13	プレゼンテーション スペース	学部生・ 院生・教 職員
SciVerse Scopus 利用講習会	【SciVerse Scopus】実習形式で(専任講師による)	11/12(月) 14:30-15:50(実習編)	1	4	総合校舎 A 号館 5 階演習室	学部生・ 院生・教 職員
レポート作成セミナー(講習 会)	評価されるレポートの書き方・情報収集のテク ニック	12/11(火) 16:10-16:40 (レポート作成編) 12/11(火) 16:50-17:20 (情報検索編) 12/12(水) 13:10-13:40 (レポート作成編) 12/12(水) 13:50-14:20 (情報検索編) 12/13(木) 10:30-11:00 (レポート作成編) 12/13(木) 11:10-11:40 (情報検索編) 1/15(火) 16:10-16:40 (レポート作成編) 1/15(火) 16:50-17:20 (情報検索編) 1/16(水) 14:30-15:00 (レポート作成編)	12	5 5 1 1 3 2 7 2 14	プレゼンテーション スペース	1~3年生

		1/16(水) 15:10-15:40 (情報検索編) 1/17(木) 13:10-13:40 (レポート作成編) 1/17(木) 13:50-14:20 (情報検索編)		10 10 9		
レポート作成セミナー(ワークショップ)	アイデアのまとめ方・構成の作り方・文章の書き方等の進め方。実習形式	12/12(水) 14:30-16:00 12/14(金) 14:30-16:00 1/17(金) 14:30-16:00	3	0 1 6	I棟1階セミナー室 (まなび)	1～3年生
夜間ガイダンス	情報収集のコツ・テクニック	2/13(水) 18:00-19:00	1	13	プレゼンテーション スペース	学部生・ 院生・教 職員
合計			18	106		

学部学科・グループ別講習会(申込制)

学部学科	内容	日程	回数	参加人数	会場	備考
J-PAC 生	図書館ツアー	10/2(火)13:30-14:00(英語) 14:00-14:30(英語) 14:30-15:00(日本語)	3	48	プレゼンテーション スペース 館内	
教育学部幼稚園教員養成課程	図書館ツアー 授業ガイダンス	11/8(木)9:00-10:20 11/22(木)9:00-10:20	2	40	館内	新入生セ ミナー
J-PAC 生	蔵書検索, 日本語論文検索, ジャパンナレ ジ, ヨミダス, 聞蔵Ⅱ, 統計検索, 電子政府の総 合窓口	10/25(木)12:50-14:20	1	15	総合メディア基盤 センター電算実習 室1	特別研究 (文系)Ⅰ
合計			6	103		

その他

	内容	日程	回数	参加人数		備考
教養展開科目「文献との対話」	文献を見つける(1)	11/9(金) 10:30-12:00	6	9		文学部教
	文献を見つける(2)	11/16(金) 10:30-12:00		9		授竹内比
	文献を見つける(3)	1/8(火) 10:30-12:00		9		呂也先生
	文献を見つける(4)	1/11(金) 10:30-12:00		9		開講科目
	文献を見つける(5)	1/25(金) 10:30-12:00		9		の一部を
	文献を見つける(6)	2/1(金) 10:30-12:00		9		担当
合計			6	54		

平成 24 年度前期 千葉大学附属図書館 亥鼻分館 ガイダンス実施状況

図書館主催ガイダンス

メニュー	内容	日程	回数	参加人数	会場	参加対象
SciFinder 利用講習会	SciFinder 実習	6/13(水) 16:10-17:40	1	13	ライブラリーホール	
EndNote Web 講習会	EndNote Web 実習	7/18(水) 17:00-18:05	1	11	ライブラリーホール	
合計			2	24		

学部学科・グループ別講習会(申込制)

学部学科	内容	日程	回数	参加人数	会場	備考
研修医	利用案内, e リソース実習	4/5(木) 9:30-11:00	1	15	ライブラリーホール	
医学部 4 年	文献検索	4/5(木) 16:40-17:40	1	44	総合教育研究棟 IT 室	「臨床チュートリアル」
薬学部 1 年	利用案内	4/6(金) 11:00-11:10	1	90	薬学部 120 周年記念 講堂	
看護学部 1 年 / 3 年次編入生	利用案内, 館内ツアー	4/11(水) 10:30-11:30	1	52	ライブラリーホール	
看護院修士 / 博士	利用案内, e リソース実習, 館内ツアー	4/12(木) 15:10-17:20	1	48	ライブラリーホール	
医学院修士 / 博士	利用案内, 文献入手法	4/18(水) 17:15-17:35	1	160	薬学部 120 周年記念 講堂	「医学薬学研究序説・生命倫理学特論」
連合大学院博士課程	文献検索実習	4/20(金) 15:00-15:50	1	2	グループ閲覧室	
薬学部 4 年 / 薬学研究院 1 年	利用案内, 文献検索, 館内ツアー	4/26(水) 14:00-15:00	1	43	ライブラリーホール	

医学部 1 年	利用案内, e リソース紹介, 館内ツアー	5/2(水) 9:00-10:00 5/2(水) 10:00-11:00 5/2(水) 11:00-12:00	3	75	ライブラリーホール	「導入 PBL チュートリアル」
看護学教育指導者研修生	利用案内, 文献検索実習, 館内ツアー	5/14(月) 14:30-16:00	1	22	ライブラリーホール	
国公立大学病院副看護部長研修生	利用案内, 館内ツアー	6/12(火) 16:30-17:30	1	25	ライブラリーホール	
附属病院看護部	文献入手法, 文献検索実習	6/21(木) 17:00-18:30 6/28(木) 17:00-18:30	2	24	ライブラリーホール	
認定看護師教育課程研修生	利用案内, 文献検索, 館内ツアー	7/2(月) 13:00-15:00	1	25	ライブラリーホール	
認定看護師教育課程研修生	文献入手法, 文献検索実習	7/9(月) 12:50-17:35	1	26	ライブラリーホール	
合計			17	651		

平成 24 年度後期 千葉大学附属図書館 亥鼻分館 ガイダンス実施状況

学部学科・グループ別講習会(申込制)

学部学科	内容	日程	回数	参加人数	会場	備考
看護院修士 / 博士	文献検索演習, 文献管理基礎	10/9(火) 9:00-10:30	1	15	ライブラリーホール	「Advanced Nursing Research」
看護院(成人看護学)	EndNoteWeb による文献管理	10/9(火) 16:30-17:45	1	6	ライブラリーホール	
看護院修士 1 年	文献検索演習	10/13(土) 10:30-12:00	1	14	ライブラリーホール	「情報活用論」
合計			3	35		

平成 24 年度前期 千葉大学附属図書館 松戸分館 ガイダンス実施状況

図書館主催ガイダンス

メニュー	内容	日程	回数	参加人数	会場	参加対象
EndNoteWeb 講習会	ユサコ担当者による EndNoteWeb の実習付利用説明	7 月 24 日 12:50-13:50	1	15	E 棟学生ホール	大学院生, 教員
合計			1	15		

学部学科・グループ別講習会(申込制)

学部学科	内容	日程	回数	参加人数	会場	備考
園芸学部新入生	新入生ガイダンス(図書館利用紹介)	4 月 6 日 9:00-10:00	1	240	E 棟合同講義室	
園芸学科, 応用生命化学科	図書館ガイダンス(図書館利用法と館内ツアー)	5 月 9 日 8:50-12:00	2	100	E 棟学生ホール	
合計			3	340		

参考資料 (19) -2 各分館アクティブラーニングスペース利用状況

亥鼻分館 アクティブラーニングスペース利用状況

平成 24 年

利用目的	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
授業	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ゼミ	0	0	0	0	0	0	2	0	0
勉強会	45	3	42	65	40	77	43	34	12
学生団体活動(サークル活動等)	1	0	0	0	0	0	0	0	0
ガイダンス	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	3	0	0	1	0	2	1	3	2

平成 25 年

利用目的	4 月	5 月
授業	0	2
ゼミ	0	0
勉強会	18	61
学生団体活動(サークル活動等)	0	0
ガイダンス	0	0
その他	0	0

松戸分館アクティブ・ラーニング・スペース利用状況

平成 24 年

利用目的	7 月		8 月		9 月		10 月		11 月		12 月		1 月		2 月		3 月	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
授業																		
ゼミ			1	7			6	64	4	48	3	36	4	48	1	12		
勉強会																		
学生団体活動(サークル活動等)																		
ガイダンス																		
その他											2	9			1	5		

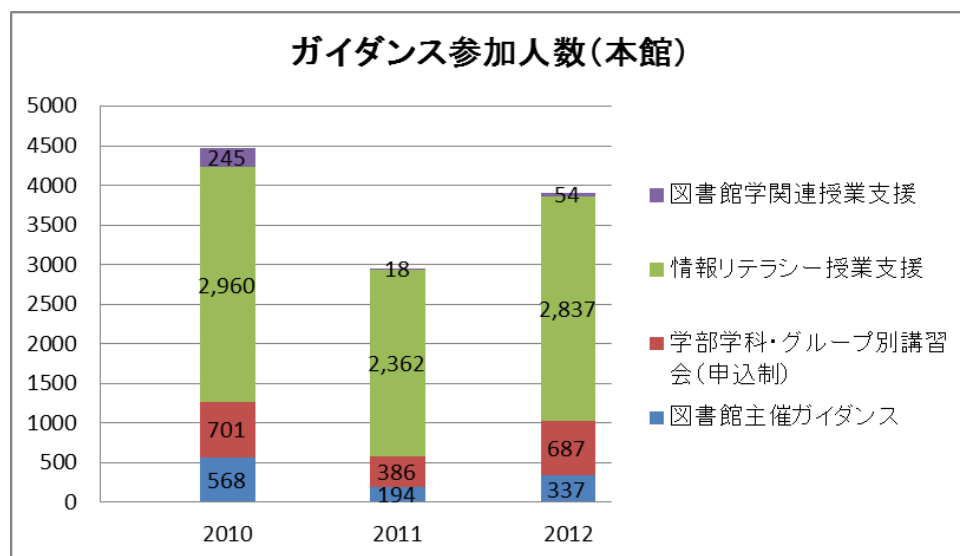
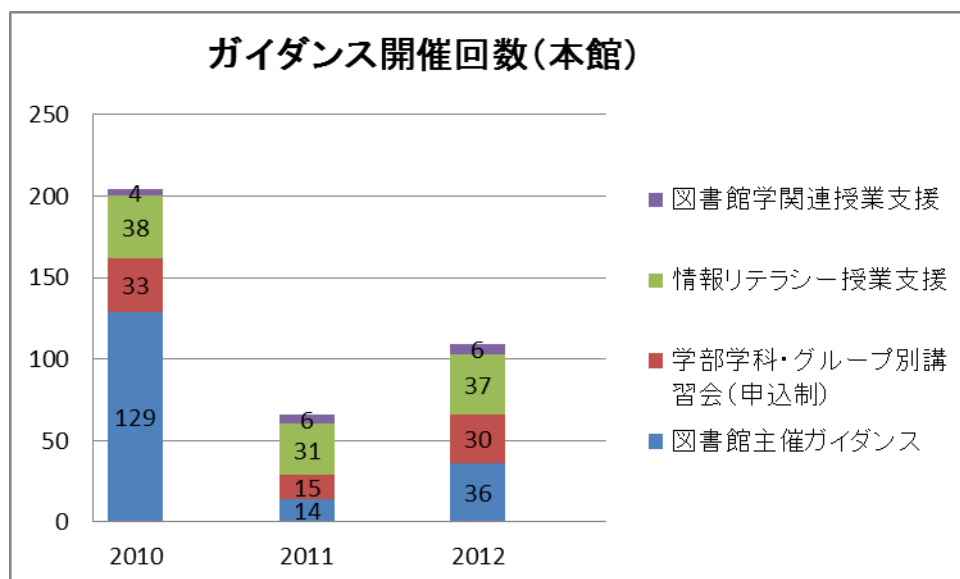
平成 25 年

利用目的	4 月		5 月	
	件数	人数	件数	人数
授業				
ゼミ				
勉強会				
学生団体活動(サークル活動等)				
ガイダンス				
その他				

参考資料 (19) -3 ガイダンス実施状況 (本館)

	2010		2011		2012	
	開催回数	参加人数	開催回数	参加人数	開催回数	参加人数
図書館主催ガイダンス	129	568	14	194	36	337
学部学科・グループ別講習会 (申込制)	33	701	15	386	30	687
情報リテラシー授業支援	38	2,960	31	2,362	37	2,837
図書館学関連授業支援	4	245	6	18	6	54
ガイダンス 年度合計	204	4,474	66	2,960	109	3,915

図書館見学案内 (高校生、中学生、PTA)	23	995	4	130	27	1006
-----------------------	----	-----	---	-----	----	------



第1回 レファレンスデスク中間報告会 報告 (2012年8月7日)

1. レファレンスデスクの運用について

<問題点>3ヶ月半で57件のレファレンス実績(単純な場所の案内等は除く)。何をしているところか利用者に知られていない。1階総合カウンターの方が質問・相談が多いが、場所や時間(①12:00-13:30, ②14:30-16:00)はこれで良いのか。質問者を書架に案内したい時にPCなどはどうするか。レファレンス事例の類型化はできるか。記録方法はこれでよいのか。

<改善点・意見など>

- ・(広報) どんな質問・相談ができるのか、具体的に書いて示す。
- ・(場所) 1階総合カウンターで2階のデスクを紹介してもらうようにする。階段を上ってくる人と目が合うと質問されることがあるので、2階での場所は現状が良い。
- ・(時間) 入館者・1階カウンターでの質問者ともに午前より午後の方が多い。観察続行。
- ・(長期休暇中) 8月20日～9月28日は、②14:30-16:00のみの1回にする。
- ・(デスクを離れる時) ALSA が在席の時はPCを見ていてくれるよう声をかけ、いない時は片付ける。
- ・(記録) 相談者の所属・学年を極力聞く。もう少し事例が増えれば類型化ができる。時間帯による質問数や質の違いに意識して引き続き観察し、次回で報告する。

2. 担当者のスキルアップについて

<問題点>どのようにスキルアップするか。相談者への対応に一定の基準があった方がよいのでは。どういう情報があればより良くなるか。

<改善点・意見など>

- ・(研修) 基本的な接し方等の勉強会。デスクにいる時間を利用して、レファレンス事例やデータベースなどの勉強をする。
- ・(情報共有) レファレンス事例のファイルに、対応者以外の人の意見を書き込めるようにする。その他調べたことの共有。
- ・(インフォメーションシート) OPAC の見方を説明するシートが急いで欲しい。請求記号ラベルを絵で説明できるもの。各データベースのFAQ。館内案内図も資料の場所に○をつけて渡すのでデスクに設置してほしい。

3. 「デスクに担当分野を表示する」という提案について

これまで質問は専門的なものではなく初歩的で大雑把であった。分野が表示されることで、相談者はそれ以外の質問を躊躇するかもしれない。また、分野を表示するならもっと勉強してからにしたい。当面は表示せずに質問を受け、内容によっては担当者を紹介する。

第2回 レファレンスデスク中間報告会 報告（2012年12月17日）

1. レファレンスデスクの運用について

<問題点>

何をしているところか利用者に知られていない。開設時間（①12:00-13:30, ②14:30-16:00）についても現状のままで良いのか。席を立ってもよいのか、立つとしたらPCをどうしたらよいか。冬休み、春休みの開設時間をどうするか。

<改善点・意見など>

- ・(広報) 分野別学習相談やオフィスアワーとの違いを示す資料を作ってはどうか。
- ・(時間) ①12:00-13:30 より②14:30-16:00の方がN棟2階の利用者が多く、質問も②の時間帯の方が多く受けている。

	10月	11月	12月（～14日）	合計
①12:00-13:30	5	5	2	12
②14:30-16:00	18	12	9	39

→①12:00-13:30を13:00-14:30とする。変更時期は後日決定する。

- ・(長期休業中)冬休みについては、年内12月26日まで通常通り開設する。春休みについては、短縮開館中（2月14日～）は②14:30-16:00のみの1回にする。
- ・(デスクを離れる時) ALSAが在席の時はPCを見ていてくれるよう声をかけ、いない時はケーブルを外し、電源は入れたままで引出にしまい、施錠する。

2. 担当者のスキルアップについて

<問題点>研修等は必要か。どういう情報があればより良くなるか。

<改善点・意見など>

- ・(研修) 研修は必要である。データベース、紙のレファレンス資料等の勉強がしたい。インタビュー法を学びたい

→インタビュー法については、國本先生に講師をお願いできないか。

- ・(必要な情報) 英語で書かれた館内案内図、キャンパスマップ、館内および関係部署の連絡先一覧がほしい。

→提案された資料を置くこととする。

レファレンスデスク最終報告会覚書

1. 来年度の開設時間について

<意見など>

・もっと遅い時間の方が利用しやすいという学生の意見もあるので、例えば 14:00-17:00 のような遅い時間に移すのはどうか。

→今の開設時間であれば、人がいるという印象になるよう変えないほうが良いのでは。

<結論>

現状のままで変更しない。

2. 担当者の研修について

<意見など>

・データベース、EndNote Web などのツールの使い方が知りたい。

・大学のカリキュラムについて知りたい。学生はどうやって勉強しているのか。ゼミをやっているのはどの学部か、レポートの書き方などを学んでいるのかなど。

<結論>

来年度も挙げられた意見を参考に研修を行っていく。

3. レファレンスツールの見直しについて

<意見など>

・来年度選書 WG の担当で、その担当分野のツールを見直すのがよいのではないか。

<結論>

来年度の選書 WG において担当分野の参考図書について、通常の選書の方法で選定を行う。

4. レファレンスデスクの広報について

・ネームプレートを出してはどうか。

→図書館職員であることが分かるようにする必要がある。

・適当な時期に 1 週間程度遅い時間に開設してみてもどうか。

→ガイダンスとの連携などが必要。レファレンスデスク単独で延長しても効果はないと思う。

・「レファレンスデスク」だけでは学生は何を聞いてよいのか分からないので、具体的に聞いてよいことや簡単なレベルの事例を掲示するのはどうか。

<結論>

質問の事例を掲示する。ネームプレートは竹内・池尻で試作してみる。

5. その他

・総合カウンター担当者からレファレンスデスクに人がいるか分からない。

→デスク開始前と終了後には引き続きカウンターに声をかけるようにする。カウンターで利用者をレファレンスデスクに紹介してよいか迷う場合は、電話をかける方法もある。

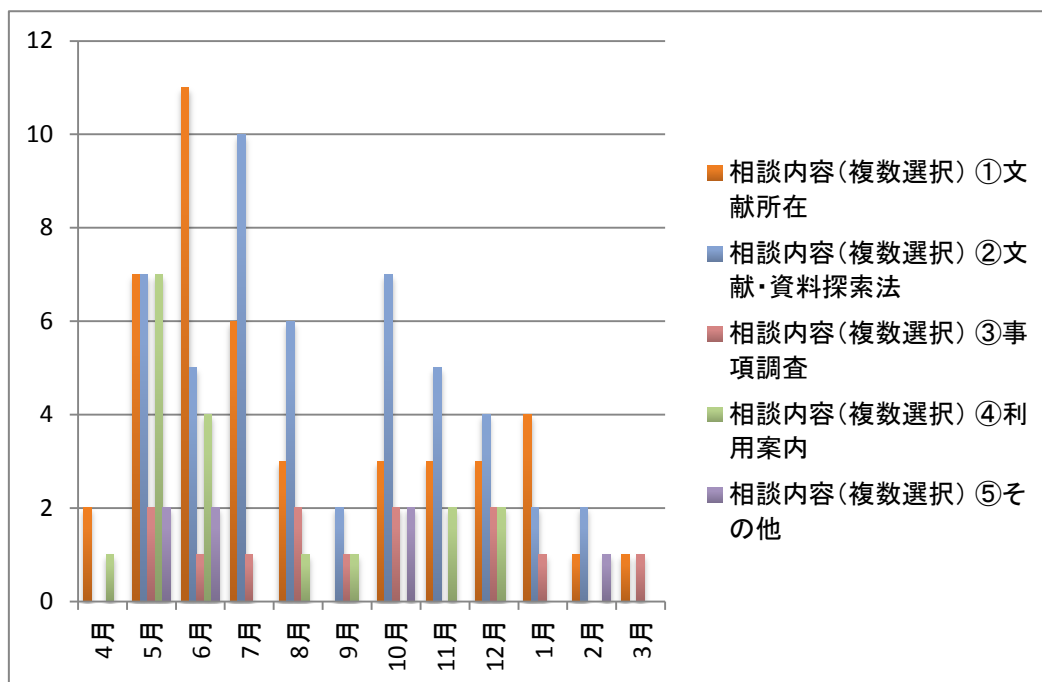
- ・NDL リサーチ・ナビを図書館ウェブサイトからリンクしてほしい。
→対応する。

報告会終了後、國本先生によるレファレンスインタビューについての講義を行っていただいた。

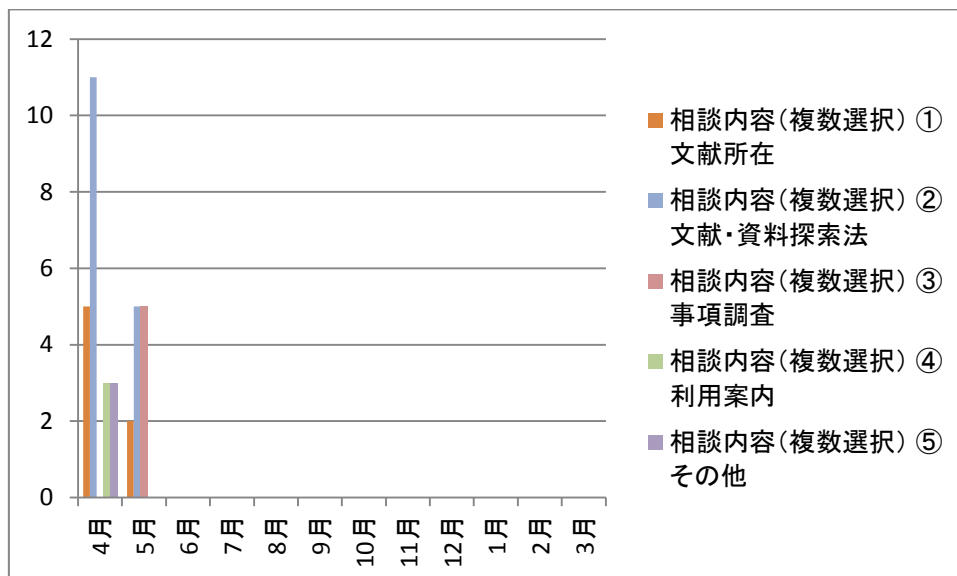
以上

参考資料（20）-2 レファレンスデスク相談内容

2012 年度 レファレンスデスク相談内容



2013 年度 レファレンスデスク相談内容



学術論文

1	浅沼仁，川本一彦，岡本一志，グラフマイニングのための空間配置のグラフ構造表現，情報処理学会研究報告，Vol.2013-CVIM-187，No.32，pp1-8，2013.
2	平野勇太，川本一彦，岡本一志，オーバーセグメンテーションに基づく屋内画像の領域分類，情報処理学会研究報告，Vol.2013-CVIM-187，No.32，pp1-8，2013.
3	風間光，川本一彦，岡本一志，画像検索を用いた図書館内での自己位置推定，情報処理学会研究報告，Vol.2012-CVIM-182，No.27，pp1-8，2012.
4	堀内麻由，川本一彦，岡本一志，一人称視点カメラを用いた情報探索行動の推定，情報処理学会研究報告，Vol.2012-CVIM-182，No.1，pp1-8，2012.
5	岡本一志，風間光，川本一彦，図書館内での自己位置推定のためのファジィコードブック型画像探索法，第28回ファジィシステムシンポジウム 講演論文集，vol.28，pp.444-447，2012.

学会発表

1	竹内比呂也，姉川雄大，白川優治，國本千裕，川本一彦，岡本一志，米田奈穂，庄司三千子，谷奈穂「大学図書館でのSAによる学習相談の試行的実践—千葉大学アカデミック・リンクの事例報告」大学教育学会第34回大会	2012年5月26-27日	
2	Hiroya Takeuchi, Kazuhiko Kawamoto, Yuji Shirakawa, Yudai Anegawa, Chihiro Kunimoto, Kazushi Okamoto, Shigeo Fujimoto. "Academic Link: a new library concept to promote students' active learning." Poster presented at 33 rd Conference of International Association of Scientific and Technological University Libraries, held at Nanyang Technological University, Singapore	2012年6月4-7日	
3	Kazuhiko Kawamoto, Vision-based Activity Recognition of Individuals and Group in Libraries, International Seminar on Scientific Issues and Trends, Oct. 2012	2012年10月	招待講演
4	川本一彦，風間光，堀内麻由，岡本一志「図書館内における画像センシング」，平成24年度第1回動体計測研究会	2012年	
5	竹内比呂也，庄司三千子，丸茂里江，池尻亮子，竹内茉莉子，谷奈穂，國本千裕，岡本一志，白川優治，川本一彦．「図書館付設型ラーニング・ commonsの整備による学習行動の変容に関する探索的研究」．大学教育学会第35回大会，東北大学	2013年6月2日	
6	堀内麻由，川本一彦，岡本一志，「一人称視点カメラと加速度センサの併用による情報探索行動の推定，第16回画像の認識・理解シンポジウム講演論文集」，pp.1-2，2013.		

講演

1	白川 優治 「千葉大学アカデミック・リンクの取組み－教育・学習支援を担う“ティーチング・ハブ”を中心に」鹿児島県大学図書館協議会	2011年12月16日
2	川本一彦 「千葉大学アカデミック・リンクのめざすところ」全国大学生生活協同組合連合会全国書籍政策セミナー	2012年2月4日
3	竹内比呂也「アカデミック・リンクは何をめざしているか」情報メディア学会第11回研究大会記念講演	2012年7月7日
4	竹内比呂也「大学図書館員の新たな役割」平成24年度大学図書館職員長期研修	2012年7月10日
5	竹内比呂也「アカデミック・リンク：図書館機能を基礎とした新しい学習環境の構築に向けて」丸善学術情報ソリューションセミナー	2012年7月20日（東京）， 9月7日（大阪）
6	竹内比呂也「学習を支える大学図書館：学習環境改革としての『アカデミック・リンク』」第32回日本大学図書館業務研修会	2012年8月1日
7	竹内比呂也「アカデミック・リンクという試み：大学図書館と図書館員のこれから」第55回北海道地区大学図書館職員研究集会	2012年8月17日
8	竹内比呂也「新しい学習環境を創造する：千葉大学アカデミック・リンクの取り組み」キャリア形成支援活動セミナー（大学生協）	2012年9月10日
9	竹内比呂也「大学を取り巻く状況と大学図書館の役割」平成24年度大学図書館職員短期研修	2012年10月2日
10	竹内比呂也「アカデミック・リンクの取り組みと直面する諸問題」科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会（第54回）	2012年10月19日
11	竹内比呂也「アカデミック・リンクの取り組み：千葉大学における新しい学習環境の構築」兵庫県大学図書館協議会講演会	2012年10月23日
12	竹内比呂也「高等教育に改革をもたらす新たな学習環境の構築：千葉大学アカデミック・リンクの試み」平成24年度全国図書館大会島根大会第2分科会基調講演	2012年10月26日
13	竹内比呂也「アカデミック・リンクという新しい学習環境」千葉大学体感フェア	2012年11月3日
14	竹内比呂也「考える学生の創造：大学にとっての図書館とは」図書館総合展フォーラム「触発する図書館」	2012年11月20日
15	竹内比呂也「千葉大学アカデミック・リンクの取り組みと直面する諸課題」三田図書館・情報学会月例会	2013年1月26日
16	竹内比呂也「千葉大学アカデミック・リンクの取り組み」大学マネジメント研究会maneken共創考房in仙台	2013年3月2日
17	竹内比呂也 「図書館を学習環境としてとらえなおす：千葉大学アカデミック・リンクの取り組み」	2013年6月10日
18	竹内比呂也 「千葉大学アカデミック・リンクはどこまできたか：図書館機能をベースに」	2013年6月27日
19	岡本一志 「アカデミック・リンクはどこまで進んだか」 New Education Expo 2013（東京・大阪会場）	2013年6月
20	岡本一志 「千葉大学アカデミック・リンク：新しい学習環境の創造と課題」 大学NUA 第40回研究会	2013年6月
21	竹内比呂也 「大学図書館職員の新たな役割」 平成25年度大学図書館職員長期研修	2013年7月9日
22	白川 優治 「千葉大学アカデミック・リンク・センターの運営について」 大学行政管理学会 ファシリティマネジメント研究会・学事研究会	2013年7月13日
23	竹内比呂也 「アカデミック・リンク・センター設置の背景と大学における学びの空間」 「学びの空間が大学を変える」セミナー	2013年7月30日

参考資料 (22) 2012 アカデミック・リンク見学状況

	受入件数	人数
視察、取材、団体見学	100	1,024
高校生見学（入試課との連携による見学ツアー）	27	1,006
個人見学(総合カウンター受付)		2,370
計		4,400

5. 追加資料

追加資料 (1) 授業資料ナビゲータ資料の蔵書回転率

蔵書回転率

貸出総数(冊)	開架図書冊数(冊)	回転率
附属図書館本館 2012年度授業ナビゲータ	附属図書館本館 2012年度授業ナビゲータ	
393	896	0.44
附属図書館本館 2012年度	附属図書館本館 開架図書冊数	
115,121	490,195	0.23
亥鼻分館 2012年貸出総数	亥鼻分館 開架図書冊数	
14,780	157,054	0.09
松戸分館 2012年貸出総数	松戸分館 開架図書冊数	
6,463	51,191	0.13

追加資料 (2) Moodle 作成率

	前期	後期	通期	合計	Moodle作成数	Moodle作成率
普遍教育センター				1,340	216	16.1%

学部	前期	後期	通期	合計	Moodle作成数	Moodle作成率
文学部				587	40	6.8%
教育学部	259	253	195	707	47	6.6%
法経学部				312	57	18.3%
理学部				428	25	5.8%
医学部				37	6	16.2%
薬学部				92	3	3.3%
看護学部				84	23	27.4%
工学部	339	327	76	742	98	13.2%
園芸学部				240	29	12.1%
合計				3,229	328	10.2%

大学院	前期	後期	通期	合計	Moodle作成数	Moodle作成率
教育学研究科				611	3	0.5%
理学研究科				546	1	0.2%
看護学研究科				158	3	1.9%
工学研究科	163	172	45	380	16	4.2%
園芸学研究科				189	5	2.6%
融合科学研究科	90	91	25	206	13	6.3%
人文社会科学研究科				762	13	1.7%
医学・薬学研究院	29	8	2	39	0	0.0%
専門法務研究科				81	14	17.3%
合計				2,972	68	2.3%

全合計				7,541	612	8.1%
-----	--	--	--	-------	-----	------

追加資料 (3) オフィスアワー@アカデミックリンク 担当者アンケート
オフィスアワー@アカデミック・リンク担当者アンケート

問1 オフィスアワー担当中にどのくらい質問、問い合わせがありましたでしょうか。

1. 毎回複数回あった。	0	
2. 毎回1件はあった。	0	
3. 1か月に1件はあった。	0	
4. 全期間で数件あった。(回)	1	(4回)
5. 全期間を通じて1件もなかった。	3	

問2 オフィスアワー担当中に受けた質問、問い合わせについて、覚えているものの内容とそれにどのように対応したか、記載してください。

教職科目の履修の仕方ーおおまかな知識を伝え、細かいことは教育の担当を紹介した。
 教員採用試験への不安一話を聞いた。

問3 オフィスアワーについて、気づいたこと、改善したほうがよいと思うこと等について自由に記載してください。

学生さん用ブースからもう少し離れた位置がよい。

コミュニケーションエリアで学生を指導している先生をたまに見かけます。
 こういった方々にオフィスアワーに来て頂けるまたはデスクの活用をして頂けると良いかと思います。

オフィスアワーは必要であるが、今のやり方がよいかどうかは検討が必要。

オフィスアワーが何をやる場所なのか学生に十分な周知がされていない。
 アカデミック・リンクにとって「実施することに意味がある」のは確かだが、学生にとって「いるだけ」では意味がない。せめて広報はもっとよいのでは。

問4 オフィスアワーを今後も続けていきたいと思いますか。

1. 思う	2	
2. 思わない		
3. 分からない	1	記述あり「現状維持のままの継続は疑問」
[4. 必要であるが、検討が必要]※回答者の追加項目	1	

学生相談室担当時間にきた質問

- ①5/8・水 12:40~12:50 法経 B3 男 修学：ゼミの要約が進まない
- ②5/10・金 12:25~12:28 不明 B1 女 修学：英語のこと
- ③5/24・金 12:06~12:07 不明 不明 女(2人組)・案内：コピー機どこですか？
- ④5/24・金 12:10~12:45 園 B1 男 対人関係：大学での交友関係のことなど
- ⑤5/27・月 12:05~12:50 園 B1 男 就職・進路：カウンセラーについて(④の方が再来)
- ⑥7/22・月 12:15~12:18 教 不明 女 案内：ALSA・オフィスアワー紹介

学生相談室からの意見

ALSAのスタッフ紹介のような、オフィスアワーの教(職)員がどのような相談に乗れるのか？といった、紹介コーナー(ALSAのような)があるといいようにも思います。その他、学生相談の場合は、相談しにくいようにも思うので、(場所の)工夫があるといいようにも思いました(でも、今の形でも大丈夫です)

千葉大学 アカデミック・リンク・センター
評価委員会報告書

平成26年2月

編集発行： 千葉大学アカデミック・リンク・センター
〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33
Tel:043-290-2243 Fax:043-290-2255
<http://alc.chiba-u.jp>